

稿本『櫛紅葉』 釈文と解題

武井和人

《凡例》

- 一、小論では、武井蔵・稿本『櫛紅葉』（三田葆光〔一八二五〜一九〇七〕家集、三田侷筆、黒川真道校正）を底本とした釈文を掲出した。
- 一、釈文作成に際しては、底本の姿を極力保存するように努めたが、以下の処理を施した。
- 一、底本は、もともと原稿用紙に墨筆にて書かれてゐた歌稿を、歌題ごとに切り取り小紙片とし、それを部類しつつ貼り付る、といふ体裁になつてゐる。そこで、切り取られた紙片ごとの区切りを『 』で示した。
- 一、朱書の部分は、へ〜で囲つて、これを示した。
- 一、朱書で抹消されてゐる文字には——、墨書で抹消されてゐる文字には——を引いて、これを示した。
- 一、底本には、墨筆・朱筆で上書された修訂がある。それを、「A↓B」の如く示した。もともとの本文がA、上書された本文がBの謂である。
- 一、底本には、貼紙で訂正されてゐる箇所がある。それは、（貼紙）と傍記することによってこれを示した。
- 一、補入記号等を使つてなされた補入は、≪ ≫ を以て示し、（補入）と傍記した。
- 一、底本（第一冊のみ）には鼈頭に貼紙がまま見られる。歌頭に■を付し、これを示した。
- 一、小論の筆者による注記は、詞書・歌の末尾に、*を冠してこれを記述した。
- 一、面移りを、『一才・』三ウ の如く示した。ただし、面末尾が紙片となつてゐない場合は、『一四才 の如く、『 』を以て示した。
- 一、歌頭に通番号を付した。なほ、抹消された歌にも番号を付してある。また、歌番号を以て当該歌を示す場合は、【 一】で囲んだ。
- 一、底本の書写様態が文字だけでは再現しにくいと思はれる箇所については、図版もあはせて掲出した。
- 一、礎稿の点検において、山本貴恵さんの助力を得た。記して学恩に謝する次第である。

【第一冊・春】

〈六百四十五首〉

〈読了真道〉

櫛紅葉 春

一「前表紙

三田葆光集

黒川真道編

「前表紙見返し

櫛紅葉 〈巻一〉

(一行空白)

春歌 〈附新年〉

〔平 葆光〕

新年

一 うら／＼とのほる朝日のさしはへて今日あら玉の年は来にけり』

新年

二 いひふ「れり」し松の千年のことの葉もまたあたらしき年は来にけり』

明治五年の元日拜賀の内に参りて

三 わか袖をそさふもうれしひさかたの雲のうへ吹く春のはつかせ』

明治八年一月四日水戸四位殿の小梅の邸にて

四 霜けふる空をかすみにははせて小梅のさとははるめきにけり』一才

明治十一年一月一日雨ふりけるに

五 あら玉の年のはしめに降る雨は「世」うるふへきしるしなりけり』

明治十九年一月一日よめる去年より太政官をはしめ

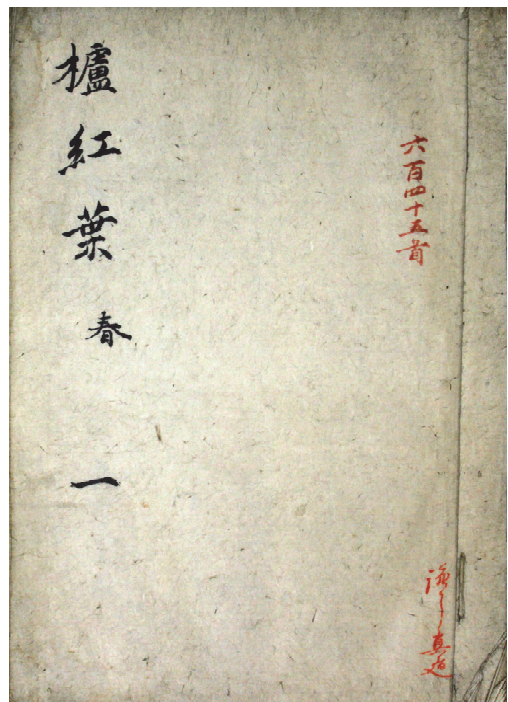
つかさ／＼を改められたりければ

六 もゝしきや古きつかさも名をかへてまたあたらしき年たちにけり』

明治二十年六十三になりける年の初に

七 なか／＼に老果てもせずわかゝらぬ六十あまりそ世のはしたなる

八 新室をふるき軒端にたて添へて住み初めぬへきとしは来にけり』



第一冊【前表紙】

*前表紙ハ黒川真道筆。朱ニ色アリ。本文ニオイテモ同断。

七十になりける年のはしめに

九 齡のみ世にまれなりといはるゝもたけき「言葉は^(貼紙)ことゝ」は思はれぬかな』

江戸川街に移り住みける年のはしめに^(挿入)《明治》廿七年 *朱書ニテ「明治廿七年」ヲ詞書冒頭ニ移スベキ指示アリ(次掲図版参照)



一〇 江戸川の名をむつましみ住むやとにむすふもうれし千世の若水』一ウ

《明治三十年》七十三になりける年のはしめに^(挿入)《明治三十年》

一一 老か身につもる齡を人とはゝ七たひとりのとしとこたへ^(む)』 *詞書冒頭「明治三十年」ハ真道筆

ああとしのはしめに

一二 春^(挿入)たちて霞^(挿入)を曳^(挿入)れはあめゆち^(挿入)はまたむかしにも變りまりけり』 *龍頭、朱ニテ「春」部「リ」重「トアリ

《あるとしの》一月十三日とし初めてのとかに雨のふりければ

一三 ふる雨も人のこゝろにかなへてや年のはしめを春めかすら^(む)』

一四 あら玉の年たちしより十日あまりをりはへてふる今日の雨かな』

迎新

一五 門ことに新らしき年やむかふらしなよしのかしら尻くめのなわ

一六 すはまには蓬かしまやつくらまし今日来る年のあるしまうけに

一七 かたのことあるしまうけも調ひてまつのかとにそ年は来にける』二才

都鄙迎年

一八 いくよりあたらしき年のくるとてかみやこも鄙も今日迎^(む)ふら^(む)』

貴賤迎年

一九 門松のたかきみしかきへたてなく今日あたらしき年は来にけり

二〇 馬くるまいるも入らぬも身のほとにたてたる門に年は来にけり』

元旦試筆

二一 一夜あけて今朝とる筆のあし手かきたゝ難波津のすさひはかりに』

新年晴

二二 呉竹のひとよあくればあたらたまの年たつそらもみとりなりけり

二三 あたらしき年たつそらはふる年の雪氣のくものこらさりけり』

(三行分空白)「二二ウ

新年朝

二四 おきいつるたか朝かほも嬉しけに見ゆるは年のはしめなりけり
二五 若水に千とせの影をうつしつゝもちひかゝみにむかふ今朝かな(是マテ/□)』

新年雪

二六 あら玉のとしの初雪降りにけるまたきにはるのはなど見るまで
二七 あたらしき年のはしめにしら雪のふりたるもまた珍「し↓ら」[き↓し]「き↓し」^(貼紙)きかな』

新年霽

二八 草も木も花咲くゆきをあたらしき年のはしめのさかえみそ見る
二九 めつらしく降りつむ雪をさかなにて年のはしめの(うたげ)葉(む)を(む)やせ』

新年霽

三〇 ふりはへて年のはしめに来る人も雪見るともとなりけるかな』

新年望山

三一 ひましらむ小簾の外山の横雲も去年にわかるゝあけほのゝそら』三才

新年海

三二 伊勢の海きよきなきさにあら玉の年をも一つひろひけるかな
三三 ゆたかなる年のはつ荷の舟なへてよりくる海のにきはしきかな』

新年鶴

三四 あまとふやたつかねたかし鶯はまた巢こもれるとしのはしめに』

新年鶴

三五 あまとふやたつか音高しりくひすはまた巢籠れる年のはしめは』 *籠頭、朱ニテ「重復」トアリ

新年鶴

三六 一夜明けて今年幾つになりぬとも知らてや千代をたつは経ぬら』^(む)

新年鶴

三七 をりはへていとゝのとけしあら玉の年のはしめの「の↓あ」したつ^(ツ)の聲』

(二行分空白)三ウ

新年見鶴

三八 あら玉の年のたつむらいつよりも今日の羽ふきの長閑なるかな』

新年鷄

三九 神代をまかけるとな「か↓く」「?↓か」(貼紙) 十夜あくの年のはしめのには鳥のよみ(元の句をおしあけたのあかつまじり) * 龍頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

新年鶯

四〇 昨日までをしみし年もくれ竹のひとよあくれはうくひすのこゑ

四一 宮人かみかとをかみのあさまたき春のさきおふうくひすのこゑ

四二 うくひすの耳なからしき初聲に(と)しもこゝろもあらたまりつゝ

四三 あたらしき年をむかへしうれしさを(い)かたはらわせし初(む)もうくひすの聲』

新年待鶯

四四 いまもなほむかしなからに待れけり年のはしめのうくひすの聲

四五 くれ竹のひとよあくれはあつさ弓やかてまたるゝうくひすの聲』

新年待鶯

四六 巢佈のひとよあくれはうくひすのまよなきをたに待れけるかな』 四才 * 龍頭、朱ニテ「前ト同意の〇三哥」トアリ

新年待鶯

四七 うくひす「を↓も」ふるすをいてよ呉竹の世はあたらしき年たちにけり』

鶯入新年語

四八 あら玉のとしのことほきいひさしてまつうくひすの初音をぞ聞』

鶯入新年語

四九 ことのはの花咲くやとのうくひすも今年の歌やよみはしむらん(む)

五〇 千世いはふやとの軒端にうくひすも年のはしめの歌やよむらん(む)

新年松

五一 あら玉の年たつ門を見わたせはみやこおほ路も千世のまつはら』

新年松

五二 色かへぬ松そなか〜めつらしきふるきものなき年のはしめは』

新年松

五三 庭松は降りたるそよきものみなはあたらしきなる年のはしめも

五四 とり〜に千年の色の見ゆるかな子の日の小松かとのわかまつ』 四ウ

新年松

五五 どり（ハ）に千年のいろの見ゆるかな千の由の小松門のわかまや *鼈頭、朱ニテ「重復」トアリ

五六 またひとつ年をくはへて枝さしも去年にまされ「る（ハ）」にはのひめ松

五七 老松もわかかへりたることちして年たつけふは珍らしきかな

新年梅

五八 あら玉の年たつやかてさく梅におほかたの世もはるめきにけり

新年梅

五九 春ならぬとしのはしめを春にしてにほふや梅のころなるら（ハ）」

新年梅

六〇 たちかへるむかしの春のころちして今年にはやく梅さきにけり

新年梅

六一 松竹にいろ香を添へてあたらしきとしの立枝のうめさきにけり

六二 玉たれの小瓶のうめは咲きにけりよろつ代祝ふとしのはしめに』五才

卑（ハ）梅（ハ）（新年梅） *鼈頭、朱ニテ「新年梅」トアリ。ソノ上ヨリコノ行全体ニ原稿用紙ガ貼ラレ、左ノ歌ガ墨筆ニテ書カル（次掲図版参照）

六三 松たてし門をや春とおもふらん垣根のうめはさきそめにけり *鼈頭、朱ニテ「△」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ（次掲図版参照）

六四 あたらしき年たつやかてさく梅を春のものともおもひけるかな



新年衣

六五 から衣かへすくもうれしきはあたらしき年の来たるなりけり

新年衣

六六 かあまもかへすくもうれしきは新しき年の来たるなりけり *鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

新年酒

六七 のとかなる年のはしめとなりけり一日二日はさけみつきせん（ハ）」

新年言志

六八 あたらしき年のはしめはなかく古きてふりも珍らしきかな

新年詠志

六九 あたらしき年のはしめはなかに古き手ぶりの珍らしきかな *龍頭、朱ニテ「重」トアリ

年内立春

七〇 さもこそはひまゆく駒のはやからめ年も暮あへす春は来にけり』五ウ *龍頭、朱ニテ「春入」トアリ、ソノ上カラ朱ニテ抹消サル
やよひに閏月ありける年の内に春立ける日へよめる

七一 あまりさへありてくれゆく年の内にあかぬ名残の春は来にけり』
立春

七二 のとかなる人のこゝろにたつ春をむかふるものと思ひけるかな

箱館にて立春への日よめる

七三 はこたてのうちまの浪もしつかにて春たちまちにかすみたな引』
内 立町

お水 *「おなし」ニ七六番歌の傍注「内澗」ヨリ朱ニテ線アリ、「立町」ヨリコノ行ニ真横ニ朱ニテ線アリ

七四 このくにのやませとのみも思ひけり千里もおなし春のはつかせ』
山背 ヤマセ

箱館の方言に東風を山背風といふ

立春の日小出繁ゆの新室にて

七五 まきはしらほめてつくれる新室に春さへ今日はたちにけるかな』

或年の春のはしめに

七六 春たちてかすみを見ればあめつちはまた昔にもかはらさりけり』六才

雪中春来

七七 降りしきり積るとすれと白雪のしたとけてこそ春は来にけれ

七八 さえやらて友まつ雪はふりはへて来る春をさへむかへゆらしも

七九 わらはへかつくれる庭の雪の山消えあへぬまにはるは来にけり』

雪中春来

八〇 わらはへかゆくれぬ庭の雪のやま消えあへぬ間に春は来にけり』 *龍頭、朱ニテ「重」トアリ

都立春

八一 大比叡や小比叡かすみて峯も尾も平らのみやこはるたちにけり』

静岡にて立春風へをよめる

八二 萬世の聲うちよするするか路やなみしつをかのはるのはつかせ』

（二行分空白）六ウ

社頭立春

八三 さきそむるなみ木の梅の宮はしら花のはるさへ今日たちにけり
八四 みたらしの氷もとけて咲く花のかゝみのみやはるは来にけり

貴賤迎春

八五 うくひすを籠にかふ殿もやふになく聲まつやとも春は来にけり

若水

八六 くみいれてやなきをりさす花かめに氷もむすふけさのわかみつ
八七 玉もひにくみてさゝくる若水にかみ代のこともおもほゆるかな
八八 たかやともいまか若水くむならしあけかたはやきくるま井の音
八九 くみなれし古井の水も名をかへて若くなりぬる今日にもあるかな
九〇 ふる年の夢のなこりをさめか井にむすひかへたる今朝のわか水

若水

九一 あかつきの老の寐覺にわか水を人よりさきにくみてけるかな』七才 *龍頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ
（むそをかじき *朱ニ抹消）

若水に明星の影のうつりけるを（見て）

九二 われまもれ今年の星かおき出てゝくむわかみつにかかけのうつるは

待春

九三 みと^{（り）}子のむつきたつより佐保姫のかすみの衣はるぞ「待るゝ^{（貼紙）}またる」ゝ

待春

九四 いとゝしく春まちとほになりにけり年立かへるこゝろすさひに

春色新

九五 佐保姫のみとりのころもめつらしく今日たち「添^{（貼紙）}そ」むる春かすみかな

初春風

九六 うすかすみたなひく山に聲たてゝわらふかことき春のはつかせ

初春風

九七 花の香もとく吹きいれよ玉すたれゆらきそめぬる春のはつかせ』七ウ

初春鶴

九八 長閑さをなにととへんほのくとかすめる春のあしたつゝの聲』

初春待花

九九 はる風に柳のかみをけつりはなかけてまたるゝいへさくらかな』

初春待花

一〇〇 春風はやなぎのかみをけつり花かけてまたるゝいへさくらかな』

春生人意中

一〇一 春はまつ人のこゝろにたつか弓やかてかすみもたなひきにけり』

風光日々新

一〇二 梅は笑みやなぎはまゆをひらきつゝ春の色添ふきのふ今日かな』

(一行分空白) 八才

早春霞

一〇三 佐保姫のはるの衣のそら色もまたうすかすみそめわけにして』

早春山

一〇四 あさみとりかすむを見ればしたもえの若草山もはるめきにけり

一〇五 春もまた浅みとりなる春日野のわかくさやまはかすみそめけり』

早春鶯 *コノ行末尾ニ貼紙、「是マテ」ト墨書サル

一〇六 姫小松ひくまの野邊にうくひすの初音をさへもきゝてけるかな』

早春鶯

一〇七 姫小松ひくまの野邊にうくひすのはつねをまへも聞てけるかな』

(二行分空白) 八ウ

(一行分空白)

早春梅

一〇八 さくやこの花の春とそなりにけるそよこの「?」花』をはつはなに^(貼紙)して』

早春梅

一〇九 さくやこの花の春とそなりにけるそよこの花をはつはなに^(貼紙)して』

一一〇 春たちていく日もあらねはこの朝けこち吹く風に梅か香そする

一一一 春たちてひと日ふつ日とおもふ間に三つ四つ梅の花咲きにけり』

* 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

* 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

* 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

(以下空白) 一九才

(数行分空白)

福壽草のかた

一一二 ふりし世の名（補入）《を》こそしらね春されはまつさき草の花とそいはまし』

福壽草のかた

一一三 春されはまつさきくさの名におひて千世のはしめの花とこそなれ』

福壽草のかた

一一四 はちうゑの梅に添へてもめつるかな雪の中「なる（貼紙）より」さきくさのはな』

(二行分空白) 一九ウ

氷 解

一一五 うちむかふ硯の海のこほりさへ今朝とけそめて春は来にけり

一一六 山川のこほりも今やとけぬらしかけひの水のおとのまされる

一一七 もえいつるやなきの糸の烟より木かけのみつもこほりとくら（む）』

一一八 諏訪の海の氷もとけていまはたゝかすみのみこそ立わたりけれ』

氷 解

一一九 あたらしき年をや春と思ふら（む）むすふ間もなくとくるこほりは』

(二行分空白)

子 日

一二〇 引きて見る子の日の小松もろともにつえつくまでも老よとそ思へ（む）』

(二行分空白) 一〇才

霞

一二一 うくひすはなき（補入）《も》啼すもほのくとかす「？↓む」は春のたてるなりけり』

霞

一二二 をとめ子かかくまゆすみの心地して遠山の端はかすみそめけり』

霞

一二三 おほつかなかすみは春のなになれは一夜に去年と立「隔（貼紙）へ」たつら（む）』

霞初簞

一二四 春もまた浅間の山のうちかすみけふりはかりそたちそめにける(に) (そ) *朱書傍記「に」「そ」、朱ニテ抹消

一二五 しのゝめのあけはなれゆく山際にむらさき立やかすみなるら(む)

一二六 炭かまのけふりはきえて小野の山かすみそ今朝は立そめにける

(二行分空白)「一〇ウ

霞先春

一二七 佐保姫のはるのころもはみどり子のむつきよりこそ立初にけれ

一二八 春おそきむつきなからもしかすかにかすみは立も遅れさりけり

一二九 朝な／＼山の端遠くなりゆくはちかつくはるのかすみなるら(む)

霞先春

一三〇 春おそきむつきなからもしかすかにかすみはたちもおくれさりけり

一三一 朝な／＼山の端とほくなりぬるはちかつく春のかすみなるら(む)

霞中月

一三二 ものふかく見ゆる影かな春の花の月はかすみをきぬかさにして』

朝霞

一三三 あさいして明くるもおそき閨の戸は霞さへたにとちてけるかな

一三四 ありあけの月かけ霞む朝ほらけのとけしといふも愚かなりけり

一三五 野に山にあそふ心もうきたつは春のあしたのかすみなりけり』一一才

朝霞

一三六 秋の夜の月にかこちし山の端もにけたるはるのあさかすみかな』

夕霞

一三七 ふく風もあるかなきかかけらふのゆふへの空はかすみこめつ』

夕霞

一三八 吹く風もあかなきかかけらふのゆふへの空はかすみこめつ』

夕霞

一三九 墨染のゆふへの空は三井てらのかねのひゞきもうちかすみつ』

一四〇 咲く花をやしなふ春の空ならしかすみながらに今日もくるは』

(四行分空白)「一一ウ

山霞

一四一 あま雲もいゆきはかゝる富士の根をつゝむははるの霞なりけり』

山叢

一四二 たまくしけあくろ箱根のふたこ山まき繪と見ゆる横かすみかな』

山叢

一四三 玉くしけあくろ箱根のふたこ山まき繪と見ゆるよこかすみかな』

遠山霞

一四四 ほの／＼とたてる霞や佐保姫のとほやますりのころもなるら(む)』

一四五 おしなへて峯もたひらに見ゆ(な)るは遠山の端のかすみなりけり』

遠山叢

一四六 甲斐かねもち(ふたかむ)の山もむさし野のゆかりの色に立かすみかな』

谷霞

一四七 雪とけしのちもかすみにとちられて聲なほむせふ谷のしたみつ』 一二才

都霞

一四八 白河のせきをやはるのこえつら(む)吾妻のみやこかすみたなひく』

一四九 ひかし山峯もたひらに見ゆはかり西のみやこにたつかすみかな

一五〇 加茂川の大橋たにも見えぬまでみやこは今朝もかすみわたれる

一五一 八重かすみたちこめにけり九重の御垣のうち外へたてなきまで

一五二 浅みとりやなきのいともうちはへて花のみやこはかすみ棚ひく

一五三 八千またにならふ(ち)いかのひまもなくたてる都の春かすみかな』

都叢

一五四 ふるさとのよし野の山やいかなら(む)都は今朝そかすみそめたる』

名所霞

一五五 わか草のつまもこもれる春日野に八重垣つくるはるかすみかな

一五六 すみの江のあらゝ松原かすますはおもひ少女のかけも見ましを』

(一行分空白) 一一一ウ

名所叢

* 籠頭、朱ニテ「重」トアリ

* 籠頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ。朱書傍記「たかね」、朱ニテ抹消

一五七 住の江のあら、松原かすまはおもひをとめのかけも見てまし』 * 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

野霞

一五八 をとめ子かしめ野の若菜つむそ「？」^(て)のむらさき野にもたつ霞かな』

野霞

一五九 をとめ子かしめ野の若菜つむ袖のむらさき野にもたつ霞かな』 * 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

(以下空白) 一三才

(一行分空白)

海上霞

一六〇 ゆふなきの沖はかすみにとちられてとわたる船の帆力^(ちから)もなし』

海上霞

一六一 は^(る)水とけさはかすみの八重たゝみ敷けるかことき浪の上かな』

海上霞

一六二 はあゝとけさは霞の小重たゝみしけるかことき波のうへかな』 * 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

海辺霞

一六三 あつさ弓はるのいそへによる浪の棚ひく見れはかすみなりけり

一六四 磯菜つみ貝ひろふ子もうらくにたなひきつるゝはるかすみかな』

海辺霞

一六五 たちかへる神代の春もおもほえてかすみわたれる天のはしたて』 一三ウ

河霞

一六六 飛鳥川かはる瀨瀬もはるはたゝかすみのことなりにけるかな

一六七 野山に「野^(船)も」越えてこゝろのうきたつは大かかの邊のかすみなりけり

一六八 大井川つき「かけ^(船)にか」けたる橋の名もかすみへ〜わたれ^(補)へる^(船)「おきの^(船)おほろ」夜のそら』 * 「」ハ詰メヨノ意ナラム

漕上霞

一六九 飛鳥川かはる瀨瀬もはるはたゝかすみのことなりにけるかな』 * 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

漕上霞

一七〇 大井川舟にかけたあはしの名もかすみわたれるおほろ夜のそら』 * 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

水郷霞

鶯 遅

一八三 長閑なる春をこころのうくひすは年のはや音(ね)もいそかさりけり』

鶯 遅

一八四 のとかなる春をこころのうくひすは年の初音(はつね)もいそかさりけり *鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

一八五 春は来ぬ氷もとけぬいまよりはななかりそたにのうくひす

一八六 昨日(あ)今日(け)ゆなかも春になりぬとはしる(む)ものを藪(やぶ)のうくひす

一八七 鶯はまたくれ竹(たけ)のよこもりてよそにはこゑをきかせさる(む)ら

鶯 遅

一八八 いちはやき年のはしめをうくひすの怠りとのみおもひけるかな』

中島歌子發會(か)《(か)に》鶯告春へといふことを

一八九 ことの葉の花さくやとを尋ね来て春はこゝそとうくひすのなく』

雨中鶯

一九〇 うくひすの涙のつらゝとけぬらし聲のうちよりはるさめの降る』 一五ウ

雨中鶯

一九一 春雨にのこりのゆきもとけぬら(む)鳴く音を流すたにのうくひす

一九二 はるさめは今かはる(む)ら(む)ほの〜と日かけ匂ひてうくひすの鳴』

雨後鶯

一九三 そほぬれし雨ははれゆく夕はえに羽根つく『の(つ)ひる』ひてうくひすの鳴』

雪中鶯

一九四 ふしなれしまかきの竹の雪をれに寐くら迷ひてうく『す(貼紙)ひ』すの啼く

一九五 くれ竹のふしみの里の雪もよに寐くらたつねてうくひすのなく』

雪中鶯

一九六 みとりの子のむつきたつとや雪消えぬたに懐にうくひすのなく』

(三行分空白) 一六才

朝 鶯

一九七 朝日かけさすかにをしきまくらたに思ひはなるゝうくひすの聲』

朝 鶯

一九八 朝日さす軒のつらゝのしたゝりに所をかへてうくひすのなく』

毎朝聞鶯

一九九 朝な／＼きくもめつらしわらはへか文よむ窓のうくひすのこゑ』

夕鶯

二〇〇 夕月夜をくらの山に入るまでもうめつのはうくひすの啼く』

夕鶯

二〇一 夕月夜をくらの山にゐるまでも梅津のまどはうくひすのなく * 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

二〇二 こゝかしこ梅見てかへる夕暮にわか柴の戸はうくひすのなく』

夕鶯

二〇三 梅か香にあくかれいてし鶯は日のくるゝをも知らてなくらん』一六ウ

曙鶯

二〇四 なくかはつまた夜を残すあけほのに寐くらはなるゝうくひすの聲』

曙鶯

二〇五 なくかはつまた夜を残すあけほのに寐くらはなるゝ鶯の上』 * 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

二〇六 うくひすの聲はふもとに聞えけり山きはすこししらみゆくころ』

曙鶯

二〇七 山きはのすこししらめるあけほ「ハ↓の」ふもとの里はうくひすの啼く』

谷鶯

二〇八 かくれすむ人やこゑする友ならん古巢はなれぬたにのうくひす』

鶯出谷

二〇九 初聲もまたかたなりのうくひすは谷ふところをいつかいてけ』

(二行分空白)「一七才

鶯呼客

二一〇 うくひすの聲を花にてしはの戸もどはるゝ春になりけるかな』

鶯呼客

二一一 うくひすの聲を花にて柴の戸もどはるゝはあになりけるかな * 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

二一二 うくひすの聲しる友のあるしせん垣根のわか菜あつものにして』

庭 鶯』

*コノ紙片、原稿用紙左端ナリ。下ニ「十七」トアリ。numberingナルベシ。次掲図版参照。



一一三 籠の内に啼くを友とやおもふらん(マセ)なれてとひ来る庭のうぐひす *「ん」ニ朱ニヨル訂正ナシ

一一四 しはしこそたゝすまれけれ梅にほふはひりの庭のうぐひすの聲』

野亭鶯

一一五 今日もまたひとりやきか(む)ん里遠き野中のやとのうぐひすのこゑ』

野外鶯

一一六 かすみしくこの野司に芝居してきくものとけきうぐひすのこゑ

一一七 ほの／＼とかすみ匂へるかた岡のあしたの原にうぐひすのなく』 一七ウ

名所鶯

一一八 呉竹のふしみの里を朝ゆけはねくらなからにうぐひすのなく

一一九 今朝の朝けきくもめつらしうぐひすのすたちの岡の春のはつ聲』

隣家鶯

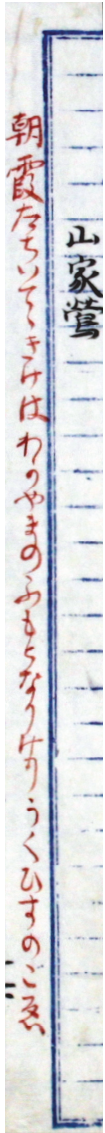
一二〇 呉竹のふしおもしろきうぐひすのね「?」(貼紙)したく』も垣をへたてたるかな』

隣家鶯

一二一 巢竹のふしおもしろきうぐひすのねくらも垣をへたてけるかな』 *籠頭、朱ニテ「重」トアリ

山家鶯

一二二 <朝霞たちいてゝきけはわかやまのふもととなりけりうぐひすのこゑ』 *コノ歌、罫線左欄外ニ朱ニテ書カル(次掲図版参照)



園 鶯

一二三 御園生のもゝ木の梅にうぐひすももゝよろこひの音をや啼(む)られ』

花間鶯

二二四 ものいはぬ花にも聲のあるはかり木のまたちうきうくひすの啼
二二五 木つたひてなくうくひすの聲きけは花もものいふ心地こそすれ』一八才

(三行分空白)

竹 鶯

二二六 おのつから笛の音にさへかよひけり竹のさえたのうくひすの聲
二二七 わかやとの竹をねくらの鶯はおきふしことにおそろしきかな

竹 鶯

二二八 竹の實をはむとりの音はしらねともよに長閑けきは鶯のこゑ』

竹 鶯

二二九 くれ竹のこの君の名も春はたゞゆつらまほしきうくひすのこゑ

竹 鶯

二三〇 小ゆしかとまたれし森の果竹にそよゆりくひす今朝そなくなむ』
(一行分空白) 一八ウ

* 鼈頭、朱ニテ「宮内省ノ内ニ入」トアリ、↓【七三〇】

竹間鶯

二三一 うくひすの聲の光り木にほひはなよ竹のかくや姫にもおとらさらまし』

* 鼈頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

竹間鶯

二三二 おのつから節おもしろくきこゆなり竹より巢たつうくひすの聲』

竹間鶯

二三三 よこもりて啼くうくひすを竹とりのおきなは籠にや買むとすらむ』

松間鶯

二三四 十かへりの花もや咲くとたつぬらむ老木のまつにうくひすの啼
二三五 わかみとり色添ふ本庭の松か枝にいまひとしほのうくひすのこゑ』

松間鶯

二三六 十かへりの花もやまくと尋ぬらむ老木のまゆにうくひすのなく
二三七 わかみとりいぢそ本庭の松か枝にいまひとしほのうくひすの聲 * 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ
二三八 咲く花にあきもやすらむ三吉野のたま松か枝にうくひすのなく』一九才

* 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

* 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

一九才

舟中聞鶯

二三九 大井河うかへる舟のいとたけにこゑをあはするはるのうくひす
二四〇 すみた川舟のやかたのちりさへもうこくはかりのうくひすの聲』

舟中聞鶯

二四一 このねぬる朝妻舟にきこゆなりきしのやなきのうくひすのこゑ』

舟中聞鶯

二四二 このねぬる朝妻船にきこゆなりきしのやなきのうくひすのこゑ』

春情在鶯

二四三 梅やなきなにはあれともうくひすの聲こそ春のにほひなりけれ』

(三行分空白) 一九ウ

若菜

二四四 かすみたつ野邊の小松菜うくひす菜つみつゝゆくは都ひとかも』

《二月》^(補入) 七日人に若菜つかはすとて

二四五 とりはやすほとはなけれと君かためこゝろの根芹今日そつけつる』

若菜少

二四六 しようめのまほるはかりもなかりけり春また浅き野邊の若菜は』

若菜知時

二四七 いつよりかしたもえそめて村消の雪間のわかなめにはたつら^(む)

二四八 つみに来む人のためにやおのれまつ春をしめ野の若菜なるら^(む)

二四九 飛火野の野守もいまたしらぬ間にもゆるは春のわか菜なりけり』

菘菜知時

二五〇 少女子か袖ふりはへて行く野邊のわか菜もをりを違へさりけり』

(一行分空白) 二〇オ

雪中若菜

二五一 ふる雪のあさ澤^{へはしもまはれ}多くの若菜ゆゑつむとはすれとたまらさりけり *鼈頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

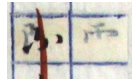
二五二 ふりはへてうれしきものははつ若菜ゆきの中を摘^(補入)《め》^(補入)るなりけり』

雪中菘菜

二五三 ふりはへてうれしきものは初若菜ゆきの中野をつめるなりけり』

* 龍頭、朱ニテ「重」トアリ

* 「ふ」字横、雨冠ノ途中マデデ書キサシ、貼紙ス



* 「ふ」字下、「下」マデデ書キサシ、貼紙ス

雪中若菜

二五四 白妙もみどりの袖もふりはへてゆき間のわか菜今日やつむら^(む)ん

二五五 雪ふかき野澤のわか菜つむ人は鶴の毛ころもきてそ見えける』

野若菜

二五六 すみのえのおとひ少女やうちわたす遠里小野にわか菜つむら^(む)ん

二五七 里とほく若菜つみにと来て見れば野守かやとのかき根なりけり』

野若菜

二五八 里とほく若菜つみにと来て見れば野もりかやとの垣根なりけり』二〇ウ * 龍頭、朱ニテ「重」トアリ

水邊若菜

二五九 おりたちてつむや野澤の深根芹かと田のあせはひとにゆつりて』

水邊若菜

二六〇 はつわかなつみて洗ふもたよりよきこの川そひに今日は尋ね^(む)ん』

水邊若菜

二六一 雪解とも見えぬ野川のうはにこりたれみな上にわか菜つむら^(む)ん

二六二 おりたちてつむや野澤の深根芹かと田のくちは人にゆつりて』

水邊若菜

二六三 鶴の居る千世のみどりの小松川わかなつむへきところなりけり』

澤若菜

二六四 うなる子かあそひかてらに摘むものは浅澤多くの若菜なりけり

二六五 千代つまむ野澤の若菜おりたちてあさるか人もつるはきにして』

(一行分空白)「一一一才

浦若菜

二六六 ^(本)浦若菜 ^(君か代の) 水かゆへすかひある春のうら若菜としをつむさへ嬉しかりけり』

* 朱書傍記「君」右傍「本」、朱ニテ抹消サル
* 龍頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

(以下空白)「二二ウ

春雪

二六七 うくひすの羽根白妙に降るゆきを梅のはなかとおもひけるかな

二六八 春の田もまたなからぬ若草のはつかはかりにつもるあわゆき』

春雪

* 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

二六九 うくひすの羽根白妙に降る雪をもめのはなかとおもひけるかな

* 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

二七〇 春の日もまた長からぬわか草のはつかにのみもつもるゆきかな

* 鼈頭、朱ニテ「〇」アリ

二七一 かきくらし降るとはすれと下とくる雪や春しるこ』^(む)ろなるら』^(む)

春雪

二七二 うくひすの啼く音に春そ知られける羽根白妙にゆきは降れれと

二七三 春の田もまた長からぬわか草のはつかにつもる今朝のあわゆき』

* 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

春雪

二七四 子の日野に引て植つるひめ松のふる葉につもるはるのあわゆき』

(一行分空白)「二二オ

(三行分空白)

《明治》^(輸入)十九年一月三十日雪いみしう降けるに上野にて

二七五 風に散る花の上野をしのはすのをかへのゆきに今日は見るかな』

遠山残雪

二七六 春かすみ繪にもおよはぬいろとりに白きをのこすゆきのとほ山』

遠嶺残雪

二七七 かすみたち木の芽もけふる山の端にいつまで雪の消え残るら』^(む)

二七八 かりかねの飛ひ消えて行く山の端に残れるゆきや花と見ゆら』^(む)

二七九 咲きそむる花「のひか」雲かのうたかひもとけぬやをちのみねのしら雪

二八〇 比叡の山みやこの富士の名もしるく鹿の子またらに雪そ残れる』

(一行分空白)「二二ウ

野残雪

二八一 消えのよをちかた野邊のしら雪を梅の花かとおもひけるかな

* 鼈頭、朱ニテ「春雪に類似」トアリ。↓【二六七】(?)

二八二 はつわかなつみけむ人のあとになほ友まつ雪も見ゆる野邊かな
二八三 小松ひき若菜もつみし春日野にとま(そ)つゆき(そ)なほのこりける』

雪消山色静

二八四 いたゞきに見し白雪も消えはてゞもとのみとりのくろやみの山』
(以下空白)「一三三才」 * 鼈頭貼紙、二枚アリ

餘寒

二八五 梅か香もとまらぬ袖に風さえてゆきのはな散るきさらきのそらゆ * 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ
二八六 かすむかとおもひの外にさえかへり雪氣にのみもなれる空かな * 歌末、貼紙断片アリ、文面不明(次掲図版参照)



餘寒風

二八七 梅か香もとまらぬ袖にかせさえてゆきの花散るきさらきのそら』

餘寒風

二八八 さく花もさこそはおそき年ならめうたてもさゆる春のやまかせ』

餘寒風

二八九 いかにせん梅のにほひも惜けれとおくれはさむきま(貼紙)「め↓と」のゆふ風

二月餘寒

二九〇 きさらきの袖さえかへり降る雪を梅の散るかとおもひけるかな』
(二行分空白)「一三三才」

梅始開

二九一 またれつる軒端の梅のさきしより野にも山にも行くこゝろかな
二九二 あまりあるのちの色香もたのもしく咲き初にけりやとの梅か枝』

梅纒開

二九三 少女子かつゞましけにも多むはかりうすくれなゐの梅咲にけり』
待 梅

二九四 こちふけとにほひおこせぬ梅の花今年のはるやものわすれせし
二九五 さてもなほつれなき梅の花やなに春のころも知らずかほして』

梅知春

二九六 梅のほないまは春邊と咲きにけり雪は降れともしもはおけとも
二九七 ひらき見るこよみの春にたかはぬはひもとく梅の花にさりける』二四才

梅花盛

二九八 梅の花さかりなるらしにほ鳥のかつしか野邊にひとのむれ来る』

梅花盛

二九九 梅の花さかりなるらしにほとりのかつしか野邊に人のむれ来る』

梅始薫

三〇〇 いちはやきみやひころそせられるまた誰か袖も觸ぬ梅か香』

梅薫袖

三〇一 ゆきすりの袖こそかをれ梅の花見てかへり来る人やあるら^(む)ん
三〇二 難波女かつりの袖もかをりけり浦わのうめやさかりなるら^(む)ん
三〇三 ふみこのむ友とやわれを思ふらん袖をはなれぬまとのうめか香

三〇四 おのつから家つとこそなりにけれをらても袖にかをる梅か香

三〇五 いまはとてわかるゝ袖を木のもとに引とゝめけりそのゝ梅か香』

梅薫袖

三〇六 おのつから家つとこそなりにけれを^(て)られも袖にかをる梅か香』二四ウ

梅薫袖

三〇七 わか袖にわかころさへひかれけりあかぬ別れのやとりの梅か香』

梅薫袖

三〇八 木のもとを立はなれてそしられける袖にとまれるうめのかをりは』

梅薫袖

三〇九 木のもとをたちはれてもそ知られける袖にとまれぬ梅の薫りは』

梅薫袖

三一〇 月夜よしうめか香ふかしくひすも一聲うたへはなのねくらに

月前梅

『^(の)花さけりい』 *鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

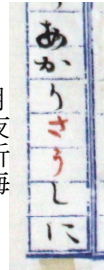
月前梅

『^(の)花さけりい』 *鼈頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

三一一 なか／＼にやみの夜ならば梅の花しるくも色の見ゆへきものを
三一二 廣からぬ賤かかち内のうめそのもお「？」^(く)「ゆかしきは月夜なりけり」

冊前梅

三二三 梅のはな墨繪に似たるかけそさすおほる月夜のあかりへさうしに』二五才 *「さう」、補入ニ非ズ、次掲図版参照



月夜折梅

三二四 まかひつる月さへ袖に移りけり手折「？」^(れ)「るうめのにほひのみかは」

梅風

三二五 朝戸出に梅か香おくる春かせはわれをむかへに来たるなりけり
三二六 咲きぬとてにほひをこちにおこするはいつくの梅の心なるら^(む)』

梅風

三二七 朝戸出に梅か香おくるはあかせはわれをむかへに来たるなりけり』 *龍頭、朱ニテ「重」トアリ

梅風

三二八 少女子かまく手にゆらく玉すたれそよと吹き来る風のうめか香』

梅風

三二九 かつしかのさとわの梅やさきぬらん大河の邊のかせのかをれる』

風前梅

三三〇 手まくらのひまなくにほふ梅か香にねやの風戸もさゝれさりけり』二五ウ

梅花風靜

三三一 松風もかすみにむせふ谷の戸にところせきまでにはほうめか香

三三二 こゝろから梅やにほひをちらすら^(む)誘ふはかりの風は吹かねと

三三三 梅か香もかつさそひくる春風をやなきにのみとおもひけるかな』

梅花薫風

三三四 さき咲かぬかたこそなけれ北東風のかはる南もうめか香そする』

梅薫風

三三五 まき味かぬ方をなけれ北東風のかはるみなも梅か香そする』 *龍頭、朱ニテ「重」トアリ

依風知梅

三二六 そよと吹く風のたよりも嬉しきはまた見ぬ梅のにほひなりけり

三二七 朝戸あけの軒の春風かをるなりちかとなりやうめの咲きけり(む)

(三行分空白)「一二六才

朝梅

三二八 あけぬからたる氷のとくるおともせし軒端の梅は今朝咲にけり

朝梅

三二九 あけぬからたる氷のとくる音もせしのき端のうめは今朝咲にけり

* 龍頭、朱ニテ「重」トアリ

夕梅

三三〇 見るまゝに星のはやしとなりにけり夕暗たとるそのうめか「香↓枝」(貼紙)

夕梅

三三一 夕かすみたなひきかくす梅の花おほろつく夜になしはて見ぬ(む)

曙梅

三三二 ひましらむしのゝ簾のしのゝめに寢屋までかをるのきの梅か香

梅花夜薫

三三三 さく梅の木のもとよりもうれしきは夜半の枕にかをるなりけり

三三四 朧夜のかすみをるうめか香はつきかけよりもさやかなりけり』二六ウ

雪中梅

三三五 しら雪の散りのまかひにかくれてもありとやこゝに匂ふ梅か香

雪中梅

三三六 ともし火にかへて文よむ雪の中にはなもひもとくまどの梅か枝

雪中尋梅

三三七 梅か香もかつかまじる北東風にむかふ吹雪もいとほさりけり

公園梅

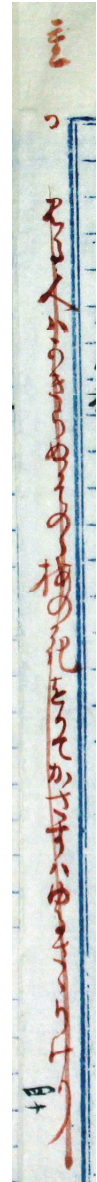
三三八 見る人はかきらぬ園のうめの花をりてかさすはゆるさゝりけり

公園梅

三三九 見ぬ人小かまゆめその梅の花をりてかます小ゆめさゝりけり

* コノ歌、野線欄外ニ書カル、左下ニ「四十」ト墨書アリ

* 籠頭、朱ニテ「重」トアリ、ソノ下ニ朱ニテ「〇」アリ。次掲図版参照



庭梅

三四〇 めつらしきうゑ木もあれとひととの梅こそ庭の花にはありけれ

三四一 昨日今日梅のはつ花咲きそめて見なれしにはもめつらしきかな

三四二 香をとめて人や来つら^{（む）}らほかにまた見どころもなき庭の梅か枝』二七才

里梅

三四三 吹きわたる河風ふかくかをるなり梅津のさとはさきにけらしも』

遠村梅

三四四 梅にほふをちのひとむらその名こそまひをしてたに聞まほしけれ』

山家梅

三四五 松の門竹のあみ戸のひまもりておくゆかしくもにほふうめか香』

浦梅

三四六 難波女か塩やきよぬもかをななりうらわの梅やさかりなるらん』

盆栽梅

三四七 あたらしき人のたくみも見ゆるかな古木の梅をはちうゑにして』

簾外梅

三四八 梅つほの花さきぬらし玉すたれひまもるかせも香ににほ^{（つ）}ひつ』

簾外梅

三四九 梅壺のはなまきぬらし玉たれのすしのかせも香ににほ^{（ひ）}ひけり』二七ウ * 籠頭、朱ニテ「重」トアリ

簾外梅

三五〇 梅つほの花味きぬらしまたたれのひまもる風も香ににほ^{（ひ）}ひけり』 * 籠頭、朱ニテ「重」トアリ

尋梅

三五一 大かたの人にはうとくな^{（り）}りにけり梅咲くやとを今日もたつねて

三五二 梅にほふ垣根のみちのしもくつれわれより先にたれかたつねし』

尋梅

三五三 梅にほふ垣根のみちの霜くつれわれよりまきはたれかたつねし』

* 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

尋梅

三五四 あしかきの間近きさとの梅の花なにはおきてもまつたつねてし』

依梅待人

三五五 山さとの梅さくころはいとしくうとしと人をおもひけるかな』

(二行分空白)「二八才

梅花留人

三五六 いまはとてわかるゝ袖を木の本にとむるは梅のにほひなりけり

* 鼈頭、墨ニテ「重」トアリ

三五七 人ならはいましはしともいひつへくわかるゝ袖にすかる梅か香』

梅花聚人

三五八 いちしろく梅の立枝や見えつら^(む)んをちかた人もたつね来にけり

三五九 梅の花さけるかき根にたちよればおほかたしれる人の逢ひけり』

折梅贈人

三六〇 うときをはうらみつゝなほ梅の花折て見するはたれならなくに』

梅香移柳

三六一 春風にふかれゝてうめか香もやなきになひくこゝろなるら^(む)し』

梅紅白

三六二 日かけにも月にもまかふ梅の花よるひる見れとあかぬいろかな』二八ウ

柿本の《^(補)社^(補)の》≡ 神前に薫る雪と名つきたる梅の枝を折りて手 * 鼈頭、朱ニテ「〇」アリ

向奉りて

三六三 それそとは神も見そなへ久方のあまさるゆきのかをるうめか枝』

聖廟の梅を見^(む)ずへはへりて * 鼈頭、朱ニテ「〇」アリ

三六四 くれなるに匂ふいかきの梅か枝にこゝろつくしの昔をそ思ふ』

二月二十五日天満宮奉納《^(補)の歌》≡ 五首 梅

三六五 梅か枝をしらゆふはなにとりなしてぬさとそ今日は奉つりて^(む)ん

三六六 雪の色をうはふなき名やいとふら^(む)んくれなる深くにほふ梅か枝

三六七 咲きそむる木末の梅のかをらすはたゝ春の夜のほしとこそ見め

三六八 いにしへをしのふる袖の色にいて、くれなゐにほふ宿の梅か枝
三六九 八重かすみおほふとすれと梅の花きよき色香はかくれさりけり』

梅の歌よみける中に

三七〇 春ふかくにほへる八重の梅の花おくれて咲くもめつらしきかな』二九才

梅の歌の中に

三七一 春ふかくにほへる見れば八重の梅のおそく咲くも珍らしきかな』
*龍頭、朱ニテ「重」トアリ

(以下空白)二一九ウ

柳

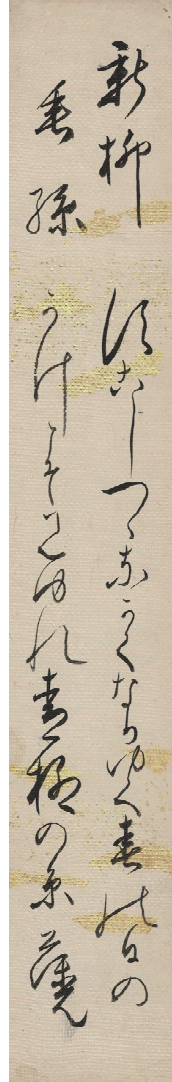
三七二 ふくまゝになひくを見れば青柳と風とはおもふとちにやなるらん』
(む)

柳

三七三 青柳のみとりのいろにましらすは梅もさくらもはえなからまし』

新柳垂糸

三七四 すこしつゝなかくなり行く春の日のかけこそ見ゆれ小青柳のいと』



*架蔵短冊

風前柳

三七五 さまゝにすかたをかへて春風のこゝろを取はやなきなりけり *龍頭、朱ニテ「宮内省ノ内ニ入」トアリ、↓【七三二】

三七六 あらそはぬやなきか枝の春風はそよともおとのきこえさりけり』

風前柳

三七七 あゆそはぬ柳かたはに吹く風はそよともおとのきこえさりけり』
*龍頭、朱ニテ「重」トアリ

柳糸風靜

三七八 まゆこもるやなきの糸のよりゝにかよひ来にけり春のはつ風』三〇才

雨中柳

三七九 花くもりいまは雨にそなりにけるつゝみのやなき東風に靡きて

三八〇 朝露のしたりやなきと見し^(本本)ほとにいと乱れてはるさめそふる』
*龍頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」

雨中柳

三八一 朝「かすみゆゆゆのし」たり柳と見まはにいとのみたれてはるまめそふむ

* 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

霞問柳

三八二 「狭^(紙)↓佐」保姫のかすみのそてのほころひをつくらふ^(米)廉はやなきなりけり

三八三 すみた川つゝみの末のひとかすみふかき所ややなきなるら^(む)」

柳辨春

三八四 佐保姫のかすみのころもはるたつとやなきの糸や操いたすら^(む)」

* 歌末ニ貼紙アリ、墨ニテ「是まで拵^(む)」以下欠損」／(廿三)トアリ

柳辨春

三八五 佐保姫のかすみのころもはるたつと柳のいとやくりいたすら^(む)」三〇ウ

* 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

朝柳

三八六 あさかすみ八重たなひくと思ひしは柳のましるところなりけり

三八七 鹿^(瓦)やくS戸の里の朝けふりなひきはてぬややなきなるら^(む)」

朝柳

三八八 朝かすみ八重たなひくと思ひしはやなきの交^(む)とま^(む)なりけり

* 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

朝柳

三八九 うかれ女の寐みたれ髪やけつるら^(む)江口のやなき朝かせそ吹く

河柳

三九〇 すみた川花にうゆ^(か)せしとも舟のむやひはきしのやなきなりけり

水邊柳

三九一 あをやきのいとのはつれと見ゆるかな春風わたるきしのさゝ浪

三九二 おともせて流るゝ水やあをやきの糸よりつたふしつくなるら^(む)」三二才

水邊柳

三九三 春風にけつるやなきのかみた河うつらふみつもみとりなりけり

垂柳臨水

三九四 小魚うく野川の水にかけうかふやなきや釣のいとゝ見ゆら^(む)」 * 鼈頭、朱ニテ「〇」アリ

三九五 かけうつす岸のやなきのかつら河水もみとりにかへるはるかな

垂柳臨水

* 朱書傍記「臨」、朱ニテ抹消、次掲図版参照



三九六 わかゆつる玉島川に来て見れば岸のやなきもいとをたれけり

三九七 神田川よろつ世かけしはしのもとにむかしの陰をうつ（す）あを柳』

門 柳

三九八 トシノリ来る人もなきやとなれといとたるトシノリ柳はかとのちりはらふ（む）ら（む）』

加藤千浪（か）の會始に門柳春久といふことを

*龍頭、朱ニテ「○」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

三九九 春ことにひろ（り）こゆ（り）ゆくもにくからず慣れて久しき門のあをやき』三一ウ

隣家柳

四〇〇 わか門のしるしとさへもなりにけり隣のやなきひと知られて

四〇一 わかかたになひく隣のあを柳はひろこりたるもにくからぬかな』

隣家柳

四〇二 わかかたになひく隣のあを柳はひろこりたるもにくからぬかな』

行路柳

*龍頭、朱ニテ「重」トアリ

四〇三 道の邊の清水もいまやぬるむらん（む）やなきかえたのなひく煙に』

（以下空白）三三二才

春 草

四〇四 たれならん名も埋もれしふる塚にあはれ今年もはるのわかくさ』

夕 春 草

四〇五 夕月夜ほのめく野邊のわかす（む）きまねくはかりはいつか成ら（む）ら』

野 春 草

四〇六 すみれつむ手に折り添ふる柴（柴）の（塵）もゆかりのむ（さ）し（さ）の（さ）はら

四〇七 わか草のみとりのむしろしく野邊に赤裳すそ引き行くはたか妻

四〇八 とる筆に似たるつくしも多かれとかきつくされぬ野邊のわか草』

岸 若 草

四〇九 船寄せてかちよりゆかむ若草のふみこ（ろ）よきはるのかはきし』

庭 春 草

四一〇 咲く花の八重垣つくる庭のおもにうらわか草のつまも見えけり』
(一行分空白)「三三ウ

*龍頭貼紙ニ墨ニテ「名所霞ノと同趣ノ如何」トアリ、↓【二五五】

垣根春草

四一一 野山にもゆとはすれと若草のつまめくいろはかき根なりけり』

閑居春草

四一二 世の人にふまれぬ宿のわか草はよそよりはやくきたちにけり』

閑居春草

四一三 世の人にふまれぬ宿のわか草はよそよりはやくきたちにけり』

(以下空白)「三三三オ

*龍頭、朱ニテ「重」トアリ

蕨

四一四 ゆひさして導ひく里のうなぬ子か手にさへ似たる初わらひかな』

山路早蕨

四一五 さくら咲く山のふもとののはつわらひ花見てかへる人や折るら^(む)』

四一六 みやこ人今日やとはましみちすからをる早蕨をやまつとにして』

樵路蕨

四一七 山人もつま木にかへてこの頃はもゆるわらひや折りすさ^(ふ)む』

谷 蕨

四一八 たつね来て折る人もなき谷陰に手をひろけたるはつわらひかな』

(以下空白)「三三三ウ

春 月

四一九 かけくらすすたれ一重はまきたれとなほ八重霞む春の夜のつき』

春月朧々

四二〇 うすくもりみなみ吹く夜の月影は霞まぬなからおほるなりけり』

霞中春月

四二一 いてぬともいとも見えす更にけり月はかすみの中そらにして』

花落^(落)春月

四二二 八重にほふ花のみやこの月かけはこゝの^(へ)重にさへかすみこめつ』

浦春月

四二三 大かたの浪かせあらきところとも見ぬめの浦にかすむ夜のつき』

浦春冊

四二四 ほの／＼とかすめる月の影見ればあかしの浦は名のみなりけり』三四才

水郷春月

四二五 すみた川花にくらしてやなき島かけふむみちはつきになりにけり

四二六 水無瀬川ありてゆく瀬も見えぬまてかすみわたれる春の夜の月

四二七 さき咲かぬ花をとひ来るすみた川ありやなしやにかすむ夜の月

四二八 月霞む宇治川つゝみうたひつれ木の芽つむ子やいまかへるらし（重）

水郷春月

四二九 冊（む）かすむ宇治川つゝみうたひつれ木の芽つむ子や今かへるらん（重）

幽栖春月

四三〇 青柳のみとりにとさすかとなれや春ものふかくすめるつきかけ』

梅間春月

四三一 おもかけと花にかすめて梅そのゝおくゆかしくもすめる月かな

四三二 うくひすの木つたひくらす梅かえにさしかはりても登る月かな

四三三 かすみかは梅のほひにつゝまれて木の間はなれぬ春の夜の月』三四ウ

松間春月

四三四 深みとり松のけふりもたち添ひてひとしほかすむ春の夜のつき』

春曙

四三五 春に寐てたれかわかれを惜むらん（む）わかつま（補欠）（の）（の）杜のはるのあけほの』

春曙

四三六 玉たれの小簾のひまより見つるかなまくらの山の春のあけほの』

春曙

四三七 半蔀の小簾まささしてつく／＼となかむる春のあけほのゝそら』

春曙霞

四三八 秋きりよたちまさりてそ身にはしむかす「？↓ゆ（め）」る春のあけほのゝ空』

江上春曙

四三九 おほろけに見てやは過（む）難波江のあしのかり寐のはるのあけほの
四四〇 雪きえぬ比良の高嶺もかすみけりまのゝ入江のはるのあけほの』三五才

春雨

四四一 春雨はふらはふらなむ梅は散りさくらはいままたさきそめぬ間に
四四二 降るまゝに寒さもゆるふ春雨ははれたるよりもとけかりけり』

春雨

四四三 つれ／＼にひとりすかかく琴の緒もゆるふはかりの春雨のそら』

朝春雨

四四四 起きもせず寐もせぬ春の朝とこに雨きくはかりのとけきはなし』

朝春雨

四四五 さらてたに起き憂き春の朝床にまた寐もよほすあめのおとかな』

夜春雨

四四六 いか（む）にせん明日の花見のあらましをかたらふ夜半に春雨の降る』

江春雨

四四七 うす墨にかけあし手のこ（ち）づして難波江かすむ春さめのそら』三五ウ

旅春雨

四四八 ふるさとの花やいかにとおもひ寐の草のまくらに春さめそ降る』

幽栖春雨

四四九 ~~まよもすむ草のいほりは春雨のおとたにもにまきれさりけり~~ *鼈頭、朱ニテ「宮内省ノ内ニ入」トアリ、↓【七三二】
四五〇 世の中のはなはよそなる柴の戸をかすみにとちて春さめ（の）降る *鼈頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

四五一 かくて世をふるとも人はしらしかしかすみこめたるのきの春雨』

幽栖春雨

四五二 世の中の花はよそなる柴の戸をかすみにとちてはあまめの降る』 *鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

(三行分空白)

歸鴈知春

四五三 津の國の難波のはるのかりかねはつのくむ蘆（や）を見てかへるら（む） *鼈頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

四五四 かすみたつそらにや春を知りつらん花よりさきにかへる鴈か音』三六才

雲外歸鴈

四五五 いまはとてこし路に鴈のかへる山たちわかれ行くよこ雲のそら

四五六 こゝろなき雲たに峯を横きりて越え行くかりをとめれとすられ

四五七 から艦押す聲もはるかになりぬなり雲のみ路に鴈は行くらし』

夕歸鴈 *当歌題、一字上ゲ

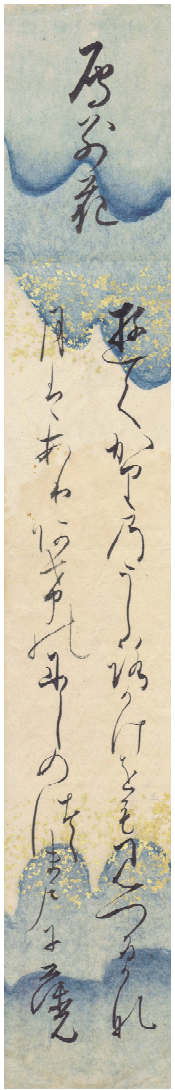
四五八 月まちて歸れ鴈か音そのまたにかけ見まほしきゆふくれのそら』

夕歸鴈

四五九 人ならば月まちてともいひてましゆふへの空にかへるかりかね』

暁歸鴈

四六〇 行く鴈のうしろ影をも見つるかな月はありあけの西のつま戸に』



*架藏短冊

暁歸鴈

四六一 ゆく鴈のうしろ影をも見つるかな月はありあけのにしつ妻戸に』

暁歸鴈

四六二 月影もはなの木すゑにありあけのつれなく見えてかへる鴈か音』三六ウ

海邊歸鴈

四六三 から舟の出る港にこゑするほとこよにかへる鴈にやなるられ』

浦歸鴈

四六四 かすみたつ春の浦わに蟹の子かわかめかりかねいまかへるらし』

春鴈別花

四六五 さくら花常世のくにもしさかはまたいつくへか鴈は行くられ』

鴈別花

四六六 櫻花とよよのくはくはくは味かほまたいつくへかかりは行くられ』

*籠頭、朱ニテ「重」トアリ

霞中春駒

四六七 長閑なるはるの月毛のこまならしかすみの中にかかけの見ゆるは』

澤邊春駒

四六八 里の子かあさは根芹つむ野邊にともそはえしてあそふ春こま

四六九 もえいつるあし毛もあれは澤みつにかけさへ見ゆる春のわか駒』三七才

牧春駒

四七〇 霧原のみまきにたてるあら駒もはるはかすみにたなひ(かれ)けり』

岡雉子

四七一 ゆくりなくきゝす立けり山つはきほろゝと落つる岡こえのみち』

野雉

四七二 若草のふみこゝろよき野を行けは足もとよりもたつきゝすかな』

朝雲雀

四七三 朝日影のほるひはりはやまはたの麥生のとこやいまはなるら(む)』

夕雲雀

四七四 春の日もやゝ入あやのそらにまたをちかへりても舞ふ雲雀かな』

野雲雀

四七五 すゝ菜さき胡蝶飛ひかふ春の野に舞ひあかりても啼く雲雀かな』三七ウ

櫻

四七六 ことくにの人にさくらの花見せてほこる御代ともなりにけるかな

四七七 見「れ↓へれ」はまつうちもゑまれて世の中にうれしきものは櫻なりけり』

待花

四七八 あら玉の年たつなへに春まちてはるたつやかてはなそまたるゝ

四七九 老のあしやしなひおかむこの春も花咲くころはちかつきにけり』

待花

四八〇 いっしかとつゝみの櫻またれけり川そひやなきみとりそふころ

四八一 梅か香「?↓」の「?↓」のころうとくくなりしよりひたすらまは櫻なりけり』

待花

四八二 さくら花あすは咲きなんとはかりに暮し煩ふ今日にもあるかな
四八三 咲きてのち花よわするなには櫻またするほどのこゝろなかさを
四八四 あくかるゝ花よ春しるこゝろあらは笑顔たにせよ物いはすとも』三八才

漸待花

四八五 うくひすよ梅よとわけしこゝろをもあつめてまつは櫻なりけり』

漸待花

四八六 ~~あくひすよ梅よとわけし心をもあつめてまわはさくらなりけり~~ * 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ
四八七 山さくらおもへは去年のこの比もかくこそ花のさくを ~~■~~ (ま) ちしか * ■、一字墨ニテ抹消、次掲図版参照

雨中待花

四八八 ふるまゝに色つくみれはまつほとは花にうれしきはる雨の空』

花遅

四八九 さくら花いつまで枝にこもるらん柳(む)のまゆはとくそひらけし』

花有遅速

四九〇 見てあそふ人のためにもよかれとや遅れさきたち花はさくら(む)』 * 鼈頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ
(三行分空白) 三八ウ

花初開

四九一 つれなげにまたせておきて今更にあわたゝしくもさく櫻小かな * 鼈頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

花始開

四九二 少女子にはしめてあへるこゝちしてゑみかはさるゝはつ櫻かな』

花半開

四九三 こゝかしこつほみもまじるほとをこそ花見るところの盛りといはまし』

花開待友

四九四 ふたつみつほころひそめて見る人を胡蝶(こ)に似たる庭さくらかな』

(以下空白) 三九才

(半面空白) 三九ウ

(数行分空白)

花盛

四九五 濃きうすきいろはかはれとすきたるも及はぬ花もなきさかりかな』

盛花

四九六 濃きうすき色は匂へどすきたるも及はぬは本のなまきさかりかな』 *龍頭、朱ニテ「重」トアリ

花の盛に（よめる）

四九七 さき咲かぬかたしなければこの頃は散らぬ櫻にちるころかな

四九八 このころは行くも歸るも野山にて問ふもかたるも櫻なりけり』四〇才

尋花

四九九 今日もまたうかれけり咲く花にころの駒をつなきかねつ』

尋見花

五〇〇 山めぐりたつねあたれる木の本に花とゝもにもゑみかはしつ』

遠尋花

五〇一 いくくまでまよひか行かん心あてのさくらは雲に^(そ)隠れして

五〇二 花みむのころいられにすきゆけはうしろになりぬ峯のしら雲』

暁尋花

五〇三 春の夜のやみをはなるゝ横雲はたつぬるみねのさくらなりけり

五〇四 さしくしのあかつき深く尋ね来て月もありあけの花を見しかな』

（三行分空白）四〇ウ

見花

五〇五 ひたすらに世をうきものと思ひしは花見ぬ時のころなりけり』

雨後見花

五〇六 ぬれてます色をし見れば櫻はな一むらさめもにくからぬかな

五〇七 露のみか花のにほひもこほるゝはひとむら雨のなこりなりけり』

老後見花

五〇八 なからへてことしも花を見つるかなすみた川原の古きつゝみに』

老若見花

五〇九 をりかさしかくせる老のかたはらにゑみほころへるちこ櫻かな』

馬上見花

五一〇 道の辺のさくらか枝をむちにして鞍馬のさくらかりくらして(む)』

花雲

五一一 世の中のうきもわすれてみな人のよろこぶ雲はさくらなりけり』四一才

花似雪

五二二 忘れてはけさも雲かと思ひけり吾すむやまにさけるさくらを

五二三 すみた川なかきつゝみの花さかり雪ゆをわけゆく心地こそすれ』

花似雪

五二四 ゆくまに近まきりして山の端の雲はさくらになりけるかな』

翫花

五二五 玉たれの小瓶にさへそさしてみる野山のさくら家つとにして』

折花

五二六 ぬす人のたつたの山のさくら花いつひとえたは折りとられけ(む)』

折花

五二七 さばかりは風のよそにまかせしと手折るも花を惜むなりけり』

(三行分空白) 四一ウ

(半面余空白)

月前花 *「花」字、初二朱筆ニテ線ヲ引キ「梅」トスルモ抹消、次掲図版参照



五二八 さくら花墨繪に似たあかけそますおほる月夜のあかり(き)しは

* 釐頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

改行シテ朱ニテ「梅ニアリ／重」トアリ、↓【三二三】

五二九 咲きつゝく花の雲間をもる月はゆきはれし夜のこゝちこそすれ

五二〇 えたたわに咲く花見れば大雪のつもりてはれしつく夜なりけり』四二才 * 釐頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

冊前花

五二一 枝在わにさくら花見れば木ゆきのつもれてはれし(り)つ(き)よなりけり * 釐頭、朱ニテ「重」トアリ

五二二 いひしらすうれしきものはさくら花月夜にあへるさかりなりけり』

舟前花

五三三 小ひ知らずうれしきものはさくら花月夜に逢へるさかりなりけり *鼈頭 朱ニテ「重」トアリ

五二四 枝たわにさく花見れば木ゆきのつもりてはれしつき夜なりけり *鼈頭 朱ニテ「重」トアリ

風前花

五二五 ふきはらふ風のなさけにたちかくす霞のおくのはなを見しかな』

花隨風

五二六 ふきさそふ風にまかすころこそあたらさくらの怨みなりけれ』

花發風雨 *鼈頭 朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

五二七 いとしくみしかきものゝはしきるは七日もまたぬ花のあめ風

五二八 いかはかり花にはものをおもへとかゆふへの嵐あかつきのあめ』四二ウ

雨中花

五二九 見てかへる人にやあるら^(む)雨しのく車のほろにはなの散れるは

五三〇 春雨にぬれたるはなは手弱女か湯あみていてしすかたなりけり』

雨中花

五三一 しつかなる雨もなか／＼にくからず散るへくも見えぬ花の盛は

五三二 このころの空のくせなる花くもりそれかと見れば春さめの降る』

雨後花

五三三 むらさめはあとなく晴し山の端にのこれる雪はさくらなりけり』

朝花

五三四 人しけき花のさかりは朝つゆのひるまゝたてそ見るへかりける』

朝花

五三五 くれなるのちりもかゝらて朝露のほひこほるゝ花さくらかな』

夕花

五三六 青柳のいとよりほそき三日月を花のくも間に見いてつるかな』四三才

夜花

五三七 寐屋の戸を夜半^(あ)に^(あ)あけても見つるかな花に嵐のもしも吹くかと

五三八 高殿の火かけや小簾をもれつら^(む)しくも見ゆるには櫻かな』

夜花

五三九 松の火にてらしてよるも見つるかな千世もと思ふ花のさかりを（中書） *鼈頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

暁花

五四〇 さくら花まことの雪と見るはかりあかつき寒きはるのやまかせ
五四一 春の夜のやみをはなるゝ横雲はまくらのやまのさくらなりけり
五四二 つく／＼となかめられけりあかつきの月と花とのきぬ／＼の空』

曙花

五四三 くれなゐのうす花色にあけほのゝ空さへにほふやまさくらかな
五四四 よくくものやみをはなるゝ曙ににほひいてたるやまさくらかな
五四五 さく花の雲もみやをそはなれける山きはすこししらみ行くころ
（一行分空白）四二ウ

山花盛

五四六 山ひめの春のよそほひとゝのひてさくら重ねになりけるかな』

山花盛

五四七 山姫の春のよそほひとゝのひてさくらかさねになりけるかな』 *鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

暮山花

五四八 春ふかき山さくら戸にすみそめの夕ははなもさひしかりけり
五四九 山さくら「しつかにつちや（貼紙）しつかに」いさや見（む）入相のかねに人はちりゆく
五五〇 山からすねくらにまよふ夕暮の木すゑはなへてはなのしらゆき』

暮山花

五五一 駒とめてなほかへりみる山の端に夕あるくもはさくらなりけり』

暮山花

五五二 山ま（む）く（む）あし（む）わか（む）かにい（む）まや見（む）入相のかねに人はちりゆく *鼈頭、朱ニテ「重」トアリ
五五三 「住み初（貼紙）すみそ」は咲くとはなしにやま寺のゆふへは花も淋しかりけり *「に」字存疑、左傍ニ朱ニテ「に」

*鼈頭、墨ニテ「同趣同前」トアリ、↓【五四八】

五五四 山からす（む）寐（む）くらに迷（む）ふゆふ（む）れの木末はなへてはなのしらゆき』 四四才 *鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

暮山花

五五五 山まくらとあしつかにいさや見ん入相のかねに人は散り行く』

* 龍頭、朱ニテ「重」トアリ

遠望山花

五五六 咲きつゝく遠山さくらむかしより雲と見るめはかはらさりけり』

深山花

五五七 春ふかくたつね入らずは蝶鳥も知らぬ深山のはなを見ましや

五五八 思ひ入る深山のおくもさくら花さき散るころはしつこゝろなし』

深山花

五五九 人の世のたねとも見えさくら花おく山すみのかみやうゑげん

五六〇 たつね来て今甲こそ見つれ蝶鳥もしらぬ深山のはなのさかりを』

深山花

五六一 おく山の岩もとさくらおほかたの世の雨かせはしらてさくらん

五六二 おく山の岩根のさくらこの花のあまひのみにはあらしと思ふ』四四ウ

深山花

五六三 呼子鳥「呼子よよふ」聲きゝてうくひすも知らぬ深山のはなを見しかな』

山中見花

五六四 山鳥の尾の上の花にくらすぢはなかくしともおもはさりけり

五六五 あし引の山ふところにたつね来て風にしられぬ花を見るかな』

山中見花

五六六 山鳥の尾の上の花にくらす田はなかくしともおもはさりけり』

* 龍頭、朱ニテ「重」トアリ

吉田定顯か深川の家の會に岡花《とといふこと》を

五六七 春のいろにとみか岡邊のさくら花いつよぢかくは匂ひそめけん』

磯花

五六八 こよろきの磯山さくら玉たれの小かめにさゝむひとえたもかな』

(一行分空白) 四五才

春江花月夜

五六九 花いかたうかへてや見ん大井川いり江にかすむはるの夜のつき

五七〇 春ふかくおもひ入江の月はなをこよひそ三つの船あそひせん』

春江花月夜

五七一 はないかた浮へてや見ん木井川いり江にかすむはるの夜のつき
*龍頭、朱ニテ「重」トアリ

瀧辺花

五七二 瀧つ瀬の岩にくたけてちる見てもころもとなき山さくらかな
*龍頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

水邊花

五七三 山さくらかけのうつろふ(池)水はやつはなかたのかゝみなりけり

水邊花

五七四 山さくらかけをうつせる池水はやつはなかたのかゝみなりけり
*龍頭、朱ニテ「重」トアリ

花映水

五七五 流れ行く水はあとへはかへらねとうつるはおなしさくらなりけり

五七六 むすひあくる水にも影のうつらふを散り来る花と思ひけるかな』四五ウ

花所々

五七七 このころのやとをいつくと人とはゝ野山の花をさしてこたへ(む)

五七八 今日もまた見のこすかたの多きかな思はぬ花のなかやとりして

花所々

五七九 上のまのやとをいつくと人とはゝ野山の花をさしてこたへ(む)
*龍頭、朱ニテ「重」トアリ

花所々

五八〇 吉野よく見んとおもへは春かすみ立田のやまもさかりと云なり

故郷花

五八一 いとまありてかさしゝ春の宮人もたえていく世の志賀のはな園

故郷花

五八二 いとまありてかさしゝ春の宮人も絶えて幾世の志賀のはな園
*龍頭、朱ニテ「重」トアリ

(一行分空白) 四六才

閑居花

五八三 花をとふ人のためには世をそむくわか柴の戸もさゝれさりけり

閑居花

五八四 花をとふ人のためには世をそむくわか柴の戸もさゝれさりけり
*龍頭、朱ニテ「重」トアリ

山家花

五八五 今日もまた都の人にさそはれてわかすむ山のはなを見るかな』

山家花

五八六 しら雲に戸させるやとよそは見^(む)わかつむ山の花のさかりを

五八七 けふもまたみやこの人にさそはれてわかすむ山の花を見るかな』

松間花

五八八 みどりそふ松にましりてひとしほの匂ひはえある山さくらかな』

(二行分空白) 四六ウ

花下樵夫

五八九 手にもてる斧を杖にもつく／＼と尾の上のさくら仰きてや見る』

花下忘歸

五九〇 もろともに来し人はみなかへりけりあからめもせず花を見^(補入)間に *鼈頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

五九一 かへるさをうなかつ友にすてられて心やすくもはなを見るかな』

花下忘歸

五九二 かへるさをうなかつ友にすてられて心やすくもはなを見るかな』 *鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

花漸稀

五九三 くれてゆく春の日數もさく花もかそふはかりになりけるかな

五九四 見し花の雲はうすぐそなりにける藤やまふきにいろをゆつりて』

(三行分空白) 四七オ

(五行分空白)

花春友

五九五 花をのみ春はしたしき友にしてよそにはうとくなりけけるかな

五九六 なか／＼に春はしたしき友^(たち)かまもといとまなき花さかりかな』

對花思昔

五九七 おもひ出るむかしの春にかはらぬは花見て遊ぶこゝろなりけり

五九八 男山むかし^(さ)か^(さ)し^(さ)く^(さ)らはなともにおい木となりけるかな』

(二行分空白) 四七ウ

*鼈頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

社頭花

五九九 つゝみうち笛吹きあそふ廣前に笑みさかえても見ゆるはなかな』

出雲國須賀神社奉納に須賀櫻といふことを題にす

六〇〇 咲く花の雲の八重垣つくれるは須賀のやしらのさくらなりけり』

駿河國にありける時浅間の社の花を見て

六〇一 ふるさとをしのふか岡の面影もこゝろにうかふやまさくらかな』

石見國なる柿本神社奉納に 山花へといふことを

六〇二 石見のやたかつの山のさくら花くもかとはかりあふきてそ見る』

柿本神社奉納に 花似雲へといふことを

六〇三 よし野山さくらを雲と見るのみそむかしも今もかはらさりけり』

〔荷田契沖／本居平田の〕 四大人贈位の時花満山へといふことを

* 麓頭 朱ニテ「△」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」、サラニ「○」アリ、次掲図版参照



六〇四 さきつゝく山また山のさくら花おなしいろにもほふはるかな』 四八才

(五行分空白)

〔明治〕二十五年四月二十日近衛翠山公の花の宴に花有喜色 * 麓頭、朱ニテ「△」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

といふことを

六〇五 さもこそは花もうれしと思ふらめ年にまれなるひとも待ちえて

六〇六 よろこひの雲のたつかとおもひしはこの御園生の櫻なりけり』

(四行分空白) 四八ウ

(六行分空白)

花のもとに女ゆたてり

六〇七 木のもとに多まひかはせる面影はさくらにたちも遅れさりけり

六〇八 市女笠つほをるきぬの袖せはみはなのふゝきやはらひかぬらん

六〇九 たをやめか引く裳の裾のぬひものと見ゆはかりにも散さくらかな』

花のもとに女たてり

六一〇 市女笠つほをまきぬの袖せはみはなのふゝきやはらひかぬらん

* 麓頭、朱ニテ「重」トアリ

(一行分空白)「四九才

花のもとに帯(帯)いるかた

六一一 蝶(蝶)鳥のまき繪の弓を手にとりてはなの木かけにたつひとやたれ』

盲人花の下にたてるかた

六一二 目に見ぬもよしや吉野の山さくらはなうつはかり匂ふさかりは』

隅田川のかたかける繪に

六一三 花くもり今ははるら(む)三圍のとり居のかさ木日かけさすなり』

(以下空白)「四九ウ

(半面空白)「五〇才

(二行分空白)

深川なる或人の家にて

六一四 春の色にとみかをかへ(む)のさくら花いくよりかは匂ひそめけれ』

〈向嶋〉長命寺にてよみける中に

六一五 木のもとにことしもやとをかりそめの花の主となり(む)にけるかな

六一六 すみた川つゝみの櫻見るひとをみてくらす日もおもしろきかな



*架蔵短冊

詞書「花のさかりに／長命寺に／やとりて」

六一七 百年の後はわかなきからをたにう(め)ゆま(く)ほしきはなのかけかな *鼈頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

六一八 すみた川見わたす富士と筑波根のあひたの空はさくらなりけり

六一九 すみた川花にこゝろののりて行く小船はきしをはなれさりけり

六二〇 かけうかふすみた河原の花見ふね木す(を)多にさ(を)準をさしてこそゆけ

六二一 たちかへりふたゝひ見はやすみた川花の木の間に月は出にけり』

(一行分空白)「五〇ウ

隅田川長命寺にてよめあ中

六二二 木のもとによしもやとをかりそめの花の主となり(む)にけるかな *鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

六二三 すみた川つゝみのまくら見る人を見てくらす田も面しあきかな *鼈頭、朱ニテ「重」トアリ
六二四 もとせのちはわかなきからをたに埋めまほしき花の陰かな *鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

廿十年向嶋にやとりにはす

六二五 やとめてよそに行かれぬ木の本は花もなか／＼絆しなりけり
六二六 春風のかすみふきとくこす多より袖にこほるゝ花のあさつゆ』

花さかりに隅田川原にあそひて

六二七 酔しれし人をたすくる人もまたよるほひて行くはなのかけかな』
(ひとゝせ) 事しけきにほたされて花見にまからさりける時

六二八 咲き散るを人つてにのみきよてたはしつ心なきはなさくらかな』

(一行分空白) 五一才

十年事しけきにほたされて花見にも得行かす

六二九 さき散るを人つてにのみ聞くたにもしつよあなき花さくらかな』 *鼈頭、朱ニテ「重」トアリ
(以下空白) 五一才

落花

六三〇 さくら花散り行くす多のはても見んわれをも誘へはるのやま風』

落花

六三一 手まくらの夢の胡蝶(蝶)のさまみえてさむるうつゝに散さくらかな』

落花

六三二 はら／＼と散る花見れは我身さへさそはれぬへき心ちこそすれ

六三三 まくら花ちりゆく末のはても見ん我をもさそへはるのやまかせ』 *鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

月前落花

六三四 山風にかすみは晴れてつき影のくもるははなの散るにそありける』

落花隨風

六三五 さくら花ちるをは風にまかせけり柳かえたにさかぬものゆゑ』

(二行分空白) 五一才

雨中落花

六三六 風ましり雨の降る日はあめましり雪降るはかり散るさくらかな』

雨中落花

六三七 嵐ましり雨のふる由はあめましり雪ふるはかりちるさくらかな * 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ
六三八 ふる雨にちり来る花のあらし山みのも小かさもさくらなりけり

雨中落花

六三九 ふる雨に散り来る花のあらし山みのも小かさもさくらなりけり * 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

朝落花

六四〇 ありあけの月のかけふむこちして木の本白くちるさくらかな

夕落花

六四一 夕月夜さすかとはかり木のもとにむら／＼しろくちるさくらかな

六四二 くれおそき夕日を峯にのこしおきてつれなくも散る「山↓や」ま櫻かな

(二行分空白)「五二ウ

河落花

六四三 すみた川浪のしら魚くむさて「?↓に」ふたひら三ひらちるさくらかな

河落花

六四四 すみた川浪のしら魚くむさてはふたひら三ひら散るさくらかな * 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

河落花

六四五 櫻花ちりてなかるゝあくたかはあなやとはかりなけるゝかな

水邊落花

六四六 さくら花散りか「ら↓か」すは影うつすみつのかゝみはくもらさらまし

飛花浮水

六四七 大井川わかゆさはしる水の上に散るかあらしのやまさくらはな

名所落花

六四八 雲とのみ見えけるものを吉野山ゆきとなりても散るさくらかな

(一行分空白)「五三オ

名所落花

六四九 葉とのみ見えけるものを吉野山ゆきとなりても散るさくらかな * 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

樹陰落花

(七行分空白)

六五〇 櫻花散りかゝりけりたちならふやなきかえたに咲くと見るまで』
*龍頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

落花入簾

六五一 ちる花を小簾の内まで吹いるゝをりふゆかせもにくからぬかな』

(以下空白)「五三ウ」

野遊

六五二 長閑なる春のひわりこうちひらき野邊のかすみも汲てけるかな』

野遊

六五三 うら／＼とあそぶ糸にもうちましり日もかけろふの小野に暮しつ

六五四 夢ならぬ胡蝶に身をかへつへく我をわすれてあそぶ野邊かな』

野遊

六五五 夢ならぬ胡蝶とともにまよかしこわれをわすれて遊ぶ野邊かな』

遊糸

六五六 はゝ子草よめ菜も見ゆる春の野にうちましりてもあそぶ糸かな』

(四行分空白)「五四オ」

春日遅

六五七 桃の咲く野かひの牛のあゆみよりおそきは春の日かけなりけり

六五八 咲く花に酔へる彌生のそらなれば日もくるゝをや忘れたるらし

六五九 山の端もにけて夕日やいれさらんかすめる空のくれんもせぬ』

春日會友

六六〇 うちつれて花にあそはれあらしをまつかたはれ今日の圓居に』

曲水

六六一 言の葉の花のほひもとり添へて玉のさかつきたかなかすらら』

(一行分空白)

六六二 もろともに面かはりせて三千年の桃のはなさ■はるにあはなれ』

*■、次掲図版参照



紙雛

六六三 十分にけるそのかみ難いくとせもかはらぬ花のすかたなるら(む)』 五四ウ

桃花

六六四 いつの間に千とせを三たひかさねけ(む)わきへの毛桃花咲にけり

六六五 なまめくは櫻のみかはかくはかりもこのこひある花もありけり』

燕

六六六 春雨にうる(ほ)■ふひちをくひもちて古巢つくらふつはくらめかな *■、次掲図版参照



六六七 玉たれの小簾吹き入るゝはる風につはさみたれて飛ふ燕かな』

燕

六六八 春雨にうるほふひちをくひもちて古巢つくらふつはくらめかな』 *龍頭、朱ニテ「重」トアリ

(二行分空白)

故郷薫〈莖〉

六六九 石すゑのあとのみのこる古里に咲くはむかしのつほすみれかも』 五五才

蛙

六七〇 今はとて花にわかるゝゆふくれの山したみつにかはつなくなり』

雨中蛙

六七一 風ましり雨さへ降りて散る花のあわたつみつにかはつなくなり』

雨中蛙

六七二 ほろ／＼とふり出にけり雨を乞ふかはつの歌もしるしありけに

六七三 種子おろし苗代小田に降る雨をよるこはしけに鳴くかはつかな』

雨後蛙

六七四 ~~ふも雨もゆふへは晴れて散る花のあわたつ水にかはつなくなり~~ *龍頭、朱ニテ「雨中蛙ト類似」トアリ、↓【六七二】

六七五 大かたは雨よふものとおもひしもはれての後も鳴くかはつかな』

朝蛙

六七六 ありあけのひかり(を)拵さまる朝月夜なこり惜けになくかはつかな』

(二行分空白) 五五ウ

夕 蛙

六七七 夕月夜さすや田ことのこゑ／＼にいひあはせてやかはつ鳴ら(む)
六七八 山の端に日かけ(は)おちて夕月夜うかへるみつにかはつなくなり』

夕 蛙

六七九 さくら散る「?↓ふ」もとの小田の夕闇にそゝろさひしくかはつ鳴なり』

苗代蛙

六八〇 せき入るゝ苗代水やまさる(む)ら(む)垣根の小田にかはつなくなり』

苗代蛙

六八一 すきかへす苗代小田のたまり水はやくもすみて鳴くかはつかな』

旅宿蛙

六八二 旅やかた湯あみも果てし夕暮のはし居うれしくかはつ啼くなり』

(二行分空白) 五六オ

躑 躑 *「躑」字ノ次、足篇ヲ書キカクルモ止メ、一字分空白トナス

六八三 賤の女かはこすつま木に折り添へて夕日を荷なふ丹つゝしの花

山間躑躅

六八四 春もやゝすゑの松山なみこゆと見ゆはかりなるしらつゝしかな』

庭躑躅

六八五 たをやめか赤裳すそ引く庭の面にゆきをあさむく白つゝしかな』

庭躑躅

六八六 春ふかき庭の柴折戸をりはへてこのころさくはつゝしなりけり

躑躅夾路

六八七 手弱女(か)赤裳すそ引くみちも狭にかきかゝりけり丹躑躅のはな』

六八八 妻木をる山のかけ路の白つゝしゆきをわけゆくこゝちこそすれ』

(一行分空白) 五六ウ

燕子花

六八九 さきぬるか田中のやとの垣内はたなはしろ水にかけをうつして』

池燕子花



*■、次掲図版参照

六九〇 かきつはた咲きにけるかな春ふかき池のおもても起すはかりに』

藤

六九一 よそに見てかへる人こそなかりけれ立寄る池のふちなみのはな』

夕 藤

* 鼈頭、朱ニテ「春」トシ、朱ニテ抹消セリ

六九二 藤浪のはなの下かけはなるれはまたななき日はくれのこりけり』

池上藤

* 鼈頭、朱ニテ「春」トシ、朱ニテ抹消セリ

六九三 むらさきの目ゆひの袖のうつるかと思ゆるや池の藤なみのはな』

社頭藤

六九四 千早振紙もゆるしのいろ見えていかきを越ゆるふちなみのはな』

(一行分空白)「五七オ

池山吹

六九五 峯^(岸)たかくたゝめる池のいはかきに八重やまふきの花咲きにけり

六九六 御園生のいけのやまふき咲きにけりをられぬ水に影をうつして』

(以下空白)「五七ウ

(四行分空白)

椿

六九七 くれたけのはやしにまじるたまつはき千代に八千代^(を)重ねてや咲』

〔明治〕二十四年花雨吟社發會へに「庭上」^(貼紙)「花↓椿」へといふことを

六九八 うたよみ^(ひせせ)のむれてはひりの庭も狭に咲くは言葉のたま椿かも』

* 鼈頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

山家椿

六九九 きゝす啼く片山里のかき根みちほろゝとおつるたまつはきかな』

(三行分空白)「五八オ

(半面空白)「五八ウ

暮 春

七〇〇 さくら散り春たけなはになりしよりねたくも空の長閑なるかな』

暮 春

七〇一 櫻^(り)ちりはるたけなはになりしよりねたくも空ののどかなるかな』

暮春月

七〇二 さくらちるかすみうすれて行く春のむなしき空にのこる月かけ』

暮春册

七〇三 ものうけに月もおそくそ出にける花ちるやまのはるのくれかた

七〇四 散り果てしさくらかえたに消えのこるかけすさましき有明の月』

暮春鶯

七〇五 鶯の啼くにし止まるはるならはわかなみたをもかさましものを』

暮春鶯

七〇六 おのか音にむかへし春の暮行くを送るとならしうくひすのなく』五九才

暮春鶯

七〇七 春ふかみ野山の花も沙^(さ)沫^(た)すきてねひまさゆ^(り)行くうくひすのこゑ』

暮春鶯

七〇八 春ふかみ野山の花もまたすきてねひまさゆ^(り)行くうくひすのこゑ』

暮春鶯

七〇九 さくら花やよまたすまし比しもそねひとよのへありくひすの聲』

暮春蛙

七一〇 散る花もすきかへさるゝ小山田に雨よふかはつこゑしきるなり』

山家暮春

七一一 散りつもる花のしらゆきかつ消えてなつをとなりのちかき山里』

留春不駐

七一二 鳥は啼きかすみはみちをへたつれと^(くれ)春^(れ)は止らさりけり』五九ウ

(一行分空白)

(三行分空白)

三月盡

七二三 花鳥にあかてくれゆくうらみさへ今日をかきりとなれる春かな』

(以下空白)一六〇才

春 暁

* 龍頭、墨ニテ「重」トアリ

* 龍頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

七二四 うくひすのよひおこさは暁のはるのねむりはいかてさめまし』

吉野山春 *朱ニテ、「春吉野山」トセヨトノ指示アリ

七二五 さくら花よそにも咲くと思ひしはよし野よく見ぬむかしなりけり』

春海

七二六 與謝の海や浦しまの子のいにしへもかすみにうかふあまの釣舟』

春海 *詞書、一字上げハ、本文ノママ

七二七 伊勢の海やにはよくはれし春の日は櫻鯛つるふねそつとへる

七二八 かすみたつ春のうなはら見てそ思ふ浦しまの子かむかし語りを

七二九 はまくりかふきいつといふ高殿も見ゆやとそ思ふ春のうなはら

七二〇 吹く風のなきたる海もはるなれやおきにはなみの花そ咲きける』

春眺望

七二一 のとかなる春の野山はなか／＼に見えぬかすみの奥そゆかしき』

(一行分空白)「六〇ウ

春興

七二二 かすみかはこゝろも空にうきたつは春の野山のあそひなりけり』

松色春久

七二三 春ことにわかみとり添ふ松やさは老せずなから千代を(む)経ぬら

七二四 わかみとりそひゆく見れば老松も春はむかしにかはらさりけり』

春旅

七二五 たひころもたちもかへらし春はたゝ花のよし野をふる里にして

七二六 こてふ飛ふ春の花野をゆく旅は裳すそもかろくおほえけるかな』

春旅

七二七 花にあかぬ春の旅路はみちのくの躑躅のをかや(と)まりなるらん

七二八 春の夜のみしききゆめをむすひけりうらわか草を枕にはして』

春社頭

七二九 あそひのむ人の集ふやはなるとき花もてまつるやしるならまし』六一才

(半面空白)「六一ウ

(一行分空白)

明治十六年徳大寺宮内卿より 御内命のよしをもて(マ) 補補心おほせことをかうふりければ

短尺にしたゝめ奉り兼上たる三十首の中春五首

竹 鶯

七三〇 いつしかとまたれし窓の呉竹にそよやうくひす今朝そなくなる

*↓【一三〇】

風前柳

七三一 さま／＼にすかたをかへて春風のこゝろをとるは柳なりけり

*↓【三七五】

幽栖春雨

七三二 心すむ草のいほりは春雨のおとたにもをまきれさりけり

*↓【四四九】

山 花

七三三 ゆくまゝにちかまさりして山の端の雲は櫻になりけるかな

*↓【五一四】

折 花

七三四 さはかりは風のこゝろにまかせしと手折るも花を惜むなりけり』六二才

*↓【五一七】

(半面空白) 六二ウ

【第二冊・夏】

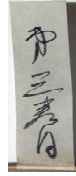
〈三百八十八首〉

〈読了真道〉

櫛紅葉 夏

二 前表紙

*前表紙料紙ト見返シ料紙ノ間、前表紙裏天部ニ貼紙アリ、次掲画像参照



*「第三卷」ト読ムベキカ

三田葆光集

黒川真道編

「前表紙見返し」

櫛紅葉 〈巻 二〉

(一行空白)

夏歌

(一行空白)

首夏

七三五 あまのはら霞も霧もへたてなくはるゝあしたになつは来にけり

七三六 いつしかと花の香うすき夏ころも風まつはかりなりにけるかな

七三七 夕顔の花にまかへるしろたへのすゝしのそてもなつかしきかな

首夏雨

七三八 ぬきかへてまたほどもなき夏ころも雨にぬらせる袖のつめたさ

七三九 こゝろして雨はなふりそ夏来てもまた散り残るはなもこそあれ』

(一行空白)「一才

*籠頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

蒲東雨

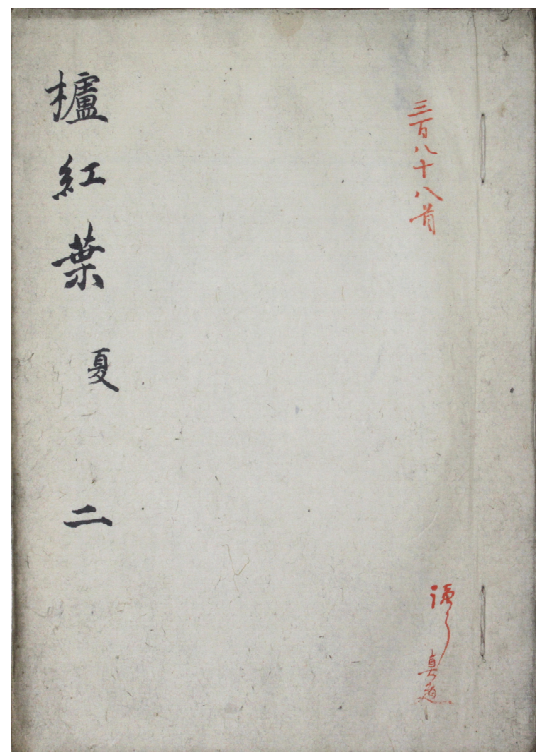
七四〇 水枝さす木々のわか葉のみとりさへしたゝるはかりそゝく雨かな』

山家首夏

七四一 散りのこる花もやあ「るん^{貼紙}ひると」問ふ人をまつやまさとに夏は来にけり

七四二 花散りし吉野の里はふゆよりも夏のはしめやさひしからまし』

*「と」字ノミ貼紙



第二冊【前表紙】

首夏螢

七四三 夏の来て庭にまかするやり水のおもておこしに飛ふほたるかな』

竹亭夏来

七四四 今年おひの竹の葉風もかをりつゝのき端すゝしき夏は来にけり』

餘花

七四五 おくれしは木（おぼ）かたものゝはえなきを櫻はなほもめつらしきかな』
(二行分空白)一ウ

餘花

七四六 散る時は散れはこそとも思ひしをありても花はめてたかりけり』

* 鼈頭、朱ニテ「○」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ
* 鼈頭、朱ニテ「宮内省ノ内ニ入」トアリ、↓【二〇六二】

七四七 おくるゝもよしや吉野の春すきてまきたつ山に咲けるさくらは』

山餘花

七四八 世の中の花にさかりをあらそはぬこゝろたか嶺の遅さくらかな』

山中餘花

七四九 ほとゝきすはつ音尋ぬる山みちにおもひもかけぬ花を見しかな』

山家餘花

七五〇 山里の老木のさくら咲きにけり花のミやこのはるにおくれて』

山家餘花

七五一 山里の老木のさくら咲きにけりはなのみやまのはは（に）おくれて』
* 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

河邊餘花

七五二 吉野なるなつみの川はさくら花はるにおくれし名にこそありけれ』二才

残花

七五三 いかにしてむす「ふ（む）ひ」とむら（む）木かたは實になる中に花のさくらは』

尋残花

七五四 うくひすの老たる聲をしるへにて深山に残るはなやたつね（む）』

七五五 玉くしけ箱根の山のおそさくら湯あみかてらにたつねてや見（む）』

谷残花

七五六 谷ふかみおよひかねてや山風もさそひのこせるさくらなるら(む)』

峯残花

七五七 谷陰のひともとさくら世の春におくれてひとに見はやされけり

七五八 春おそき北いはくらのなか谷ははなもなつまでさきのこりけり

七五九 ゆくみつの流れてはやく谷川のこゝろにも似ぬおそさくらかな』

(二行分空白)「一二ウ

聿残花

七六〇 散りのこる花たにあらはもろこしの吉野のやまの奥もたつね(む)』

七六一 しるへするまほろしもかな散り残る花のありかを尋ね行くへく』

河辺残花

七六二 わたしもりはや舟寄せよ角田川はるにおくれしはなをたつね(む)』

残 鶯

七六三 花は根にかへる木かけをしたひ来て忘れかたみのうくひすの聲(む)

七六四 惜めともとまらぬ春をかことにや聲のかきりをうくひすのなく』

山残鶯

七六五 ほとよきす初音たゆぬる深山路に思ひもかけぬうくひすの土表

七六六 根にかへる花の名残やをしむらん山さくら戸にうくひすのなく』

(二行分空白)「三才

新 樹

七六七 水鳥のかもの青葉となりぬるはたゝすのもゆ(り)の木すゑなりけり』

新 樹

七六八 雨もよし風もなか／＼にくからす花におとらぬ木々のわか葉は』

新 樹

七六九 花に酔ふはるのねむりも覺む(は)ゆかり青葉すゝしき夏木たちかな』

新樹風

七七〇 夏山の木々のわか葉をふくときは風さへいろのみとりなるかな』

雨中新樹

* 麓頭、墨ニテ「山残花とノ同意如何」トアリ、↓【七四九】

* 麓頭、朱ニテ〇、ソノ上ニ朱ニテ✓

七七一 ふる雨のそくみつえのみとりさへ流るゝはかり見ゆる色かな *鼈頭、朱ニテ「✓」、ソノ上ニ朱ニテ「一」アリ
七七二 このころの卯の花くたしふる雨に木々のみどりの色まさりけり (和木はゆ)

(三行分空白)「三ウ

雨中新樹

七七三 降る雨にぬるゝみづ枝のみどりさへ流るゝはかり燃ゆる色かな *鼈頭、朱ニテ「✓」、ソノ上ニ朱ニテ「一」、続ケテ、朱ニテ「重」トアリ
七七四 木のまの卯の花くたし降る雨に木々のみどり色まさりけり *鼈頭、朱ニテ「重」トアリ、続ケテ、朱ニテ「○」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

雨中新樹 *コノ詞書、朱ニテ抹消セズ

七七五 しくれにも似たる雨かなふるまゝに若葉のみもち色にいてつゝ

新樹露

七七六 夏山の木かけを行けはわか葉より袖にこほるゝつゆのつめたさ

山新樹

七七七 うすく濃く若葉いろとるたゆた山夏はあをちのにしきなりけり (つ)

山新樹

七七八 見し春の雲もかすみも名残なくあを葉のやまとなりにけるかな

(一行分空白)「四オ

林新樹

七七九 木々の名は夏たちてこそ知られけれ若葉しけるる里のをはやし

庭新樹

七八〇 むすふ實の數たにいまは見えぬまで青葉しける庭のうめか枝

七八一 庭もせにみどりあらそふ木々の中に花をあさむくわかかゆてかな (つ)

庭新樹

七八二 春ふかくにほひし庭のわかかへてそれも青葉になりにはけるかな *鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

庭新樹

七八三 くれなるに匂ひし庭のわかかへてそれも青葉になりにはかるな

庭新樹

七八四 庭中の木々は深くもしけりけりあすはの神のしめはふるまで

郷純「道」↓「造ぬしの歌會」(補入)「當座」(補入)「庭新樹」といふことを

*詞書、右掲図版参照



七八五 はてもなくしける若葉の庭見れば市のなかもおもはさりけり』四ウ

山家新樹

七八六 年ふりてうつほになれる山里のしひのわか葉もめつらしきかな』

山家新樹

七八七 年ふりてうつほになれる山里のしひのわか葉もめつらしきかな』

社頭新樹

七八八 大まへにおものもりてもさくへく葉廣になれる玉かしはかな』

社頭新樹

七八九 木前におものもりてもさくへく葉廣になれるたまかしはかな』

飛鳥山(中)にす

〔花をみせての新樹を見て〕 *詞書、次掲図版参照



七九〇 飛鳥のあすかの山の花散りてわか葉はかせもなつかしきかな』

(二行分空白) 五才

若楓

七九一 咲く花におもひかへての若葉にもまたあくかるゝひとさかりかな』

(以下空白) 五ウ

(九行分空白)

卯花

七九二 富士の嶺のすそ野に咲ける卯の花を時しめぬ雪と思ひけるかな』

*鼈頭、朱ニテ「重」トアリ、↓【八〇一】

夕卯花

七九三 卯の花のさきつゝきたる夕暮のまかきはゆきのやまと見えけり』六才

(一行分空白)

垣卯花

七九四 夕月夜にはかにかけのかくさは卯の花かきの絶え間なりけり

七九五 卯の花のさきつゝきたる垣根(ち)みちのころ暗の夜はなかりけり

七九六 かけもらぬ青葉の山の下みちも卯のはなかきはつく夜なりけり

七九七 ほとゝきす尋ぬる人の立寄るは卯のはな咲けるかき根なりけり』

行路卯花

七九八 卯の花の雪をわけつゝ大原女かくる木をはこふ小野のやまみち』

卯花藏路

七九九 わずれては冬かと思ふ卯の花の雪ふみわくる小野のほそみち』

卯花藏水

八〇〇 流れゆく水こそ見えねたま川のきし打つなみは卯のはなにして』

(一行分空白)六ウ

野卯花

八〇一 富士の嶺のすそのに咲けるうの花を時しらぬ雪と思ひけるかな』

谷卯花

八〇二 かしきはき雪にはこえし谷はさま卯の花にこそみちはたえけれ』

山家卯花

八〇三 卯の花のつゝらをりとそなりにける八重山吹の散りしかき根は』

灌佛

八〇四 神祭る卯月来ぬとててらくの釋迦ほとけさへ御そきしぬらん』^(む)

新 竹

八〇五 千尋あるかけとなるへい生さきもまつたのもしきやとのわか竹』^(花也)

八〇六 かゝまりて年ふる庭の松よりもたちこえてけりのきのわかたけ』

新 竹

八〇七 たかうなにほらんと思ひし竹の子ははや若竹になりけるかな』七才^(む)

新 竹

八〇八 竹の子はかはの衣をぬきかへてすゝしきかけとなりけるかな

八〇九 千ひちあわかけとなあへまきおひさまもまつたのもしき宿の若竹』

新 竹

八一〇 たちのひて見あくるはかりなりぬれとなほいわけなき庭の若竹

八一 一 早苗とる賤かかきねのたけの子はひと夜ふた夜にふし立にけり』

* 籠頭、朱ニテ「重」トアリ

* 籠頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

水原史郎か根岸の里鶯横町の新宅の會に新竹風へといふことを

八二二 うくひすのなきし垣根の若竹は葉かせのこゑはなつかしきかな』

田邊龍子の會はしめに庭若竹へといふことを

八二三 おもしろきふしきへ見ゆる若竹に庭のをしへのほどそ知らるゝ』

(四行分空白)「七ウ

(半面空白)「八オ

郭公

八二四 かくはしき花立花のおひかせにもよほされてや啼くほとゝきす』

待郭公

八二五 春すきてまたるゝものはうくひすのそのかひこてふ初ほとゝきす

八二六 ほとゝきすまつころにもかゝりけり花より後の峯のしらくも』

待郭公

八二七 ほとゝきすまつ心にもかゝりけり花よりのものみねのしらくも』

連夜待郭公

八二八 一聲はまけてももらせほとゝきす待夜かさぬるころくらへに』

家々待郭公

八一九 ほとゝきすまたぬ宿こそなかりけれななく里や數多なるらむ』

(三行分空白)「八ウ

年々待郭公

八二〇 ほとゝきす思へは去年のこのころもまつに寐ぬ夜の數そ重ねし

八二一 まちわたる年の三とせもすきにけり今年も鳴かぬ山ほとゝきす』

尋郭公

八二二 ほとゝきすもしもやなくとうくひすの古巢のあたり尋けるかな』

尋聞郭公

八二三 尋ね入る山ほとゝきすひとこゑはわかたために鳴く心地こそすれ』

未聞郭公

八二四 うつたへに鳴すはさてもありぬへし人わきしけるほとゝきすかな』

*龍頭、朱ニテ「重」トアリ

未聞郭公

八二五 もつたへになかすはきてもありぬへし人わきしけるほととぎすかな』

* 籠頭、朱ニテ「重」トアリ

郭公未聞

八二六 もつたへに啼かすはきてもありぬへし人分しけるほととぎすかな』

* 籠頭、朱ニテ「重」トアリ

未聞郭公

八二七 おもひ出る去年の初音にくらへても今年は遅きほととぎすかな』

初聞郭公

八二八 あけはまつたれに語ら（む）ほととぎす待ちつけにける夜半の一聲』

人傳郭公

八二九 人つてにきくもうれしきほととぎすまつたのみになる心地して』

* 籠頭、朱ニテ「✓」、ソノ上ニ朱ニテ「ニ」アリ

人傳郭公

八三〇 人傳もまつそうれしきほととぎす待つにたよりを得し心地して』

* 籠頭、朱ニテ「✓」、ソノ上ニ朱ニテ「ニ」アリ、ソノ下ニ朱ニテ「重」トアリ

八三一 さらにぬたにまたるゝものを郭公今日もきゝつとひとはいふなり』

郭公一聲

八三二 ほととぎすなけのなさけの一聲もうはのそらにはいかて聞へき』

郭公十聲

八三三 ほととぎすなけのなまけの十聲もうはの空にはいかてきくへき』

九ウ

杜鵑十聲

八三四 山彦のこたへなりともほととぎすいまひと聲を聞かせてしかな』

郭公十時（聲）

八三五 ほととぎすわれのみきゝし一聲はそらことゝいふ人もありけり』

雨後郭公

八三六 小やかたに空（む）よりしてほととぎすむら雨は空に啼くゆん』

* 籠頭、朱ニテ「夕立ノ哥ニ同ノ趣向アリノ省ク」トアリ、↓【九九五】

朝郭公

八三七 このあさけ櫛笥のおくしとりもあへす出てこそ聞け初ほととぎす』

深更郭公

八三八 あふ坂の山ほととぎすそら音にはあらしかと思ふ夜半のひと聲』

深東郭公

八三九 あふ坂の山ほととぎすそら音にはあらしかと思ふ夜半のひと聲』一〇才 *龍頭、朱ニテ「重」トアリ

深東郭公

八四〇 をりしもあれ啼きてそすくる郭公夜ふかく出るいもかかとへを』

暁郭公

八四一 あたし山しきみか原のほととぎすあかつきおきの人やきくらん^(む)』 *龍頭、朱ニテ「宮内省入」トアリ↓【一〇六三】

〈イキ〉 暁郭公 *詞書、次掲画像参照



八四二 あたし山しきみか原のほととぎすあかつきおきの人やきくらん^(む)』 *龍頭、朱ニテ「重」トアリ

八四三 さしくしのあかつきかけて少女子かかつらき山に啼ほととぎす』

暁郭公

八四四 まし櫛のあかつきかけて少女子かかつらき山に啼くほととぎす』 *龍頭、朱ニテ「重」トアリ

暁郭公

八四五 まし櫛のあかつきかけて少女子かかつらき山に啼くほととぎす』 *龍頭、朱ニテ「重」トアリ

(二行分空白)「一〇ウ

禁中郭公

八四六 瀧口かとのあまうしの聲ふけてくもゐに名のるほととぎすかな』

禁庭郭公

八四七 立ならふさくらは散りて^(た)花のかをるみはしに啼くほととぎす』

市郭公

八四八 折にあふものをうるまのいちはやく名のりても行く郭公かな』

名所郭公

八四九 立花の小島かさきのほととぎすむかしをしのふ音をや啼くらん^(む)』

杜間郭公

八五〇 待乳山こえてや来つるゆふかけて吾妻のもりに啼くほととぎす』

(二行分空白)「一一才

早苗

八五一 わかなへを老ぬ間にとてとりいそく田歌にもなほふしはありけり』

早苗

八五二 筑波嶺（補心）しつくの田ぬにころも手をひたち少女かさなへとるなり』

夕早苗

八五三 さをとめか昔の小笠をゆふ月の田ことうつるかけかとそ見し』

牡丹

八五四 さくらこそ雲とも見ゆれたくひなき色ふかみ草なにとたとへ（む）

八五五 花くはしさくらのめてもわするまてはる深み草さきにほひつ』

牡丹

八五六 おほかたの花にさかりをあらそはて春深みくさいまかさくら（む）

（三行分空白）一一ウ

牡丹

八五七 花といふ花の大きみすかたともいふへきはなかいふかみくさ

八五八 いひ知らすあてなる花か深み草めてたしなとは世のつねにして

八五九 ありとあり咲きとさくなる花の中にひとりぬけ出しいる深み草』

牡丹

八六〇 さくらには増さるさかりの日数たになほあきたらぬ廿日草かな

八六一 風吹かとは「か（補心）り」やうをも垂れてまし散らまくをしき花の大君

八六二 花くはしさくらのめてもわするは春ふかみ草味きてなりけり』

芍薬を見ておもふことあり *鼈頭、朱ニテ「時節夏の題／カ」トアリ

八六三 もろこしの花の王（に）も立こえていまさかりなるえひすくさかな』

箱館（ころ）にありける比栗本大綱か前栽の芍薬を見て

八六四 君か代のめくみの露にみちのくのえひす草さへはな咲きにけり』

（一行分空白）一一才

薔薇

八六五 おはしまにふきくる風にかをるなりみはしの薔薇花さきぬらし』

*鼈頭、朱ニテ「夏の題カ」トアリ

きりひ

八六六 おはしまに吹き来る風もかをるなりみはしのきりひ花咲ぬらし』

* 籠頭、朱ニテ「重」トアリ

薔「薔」(貼紙ニテ抹消)「薔 * 詞書、次掲図版参照



八六七 夏の来て咲けるさうひは見し春のはなにもまさる色香なりけり

八六八 なつかしき妹か垣根の花うはら折りてにほひをそてにうつさぬ^(む)

八六九 立寄りてひと枝折らん花うはらよし葉かくれにはりはありとも』

(一行分空白)

五月五日

八七〇 軒端には「吹」^(貼紙)「葺」きもふかすもあやめ草今日こそ見ゆれ妹かかつらに

(二行分空白)「一二ウ

夜盧橘

八七一 なにとなく心ときめきせられけり閨のつま戸にかをるたちはな

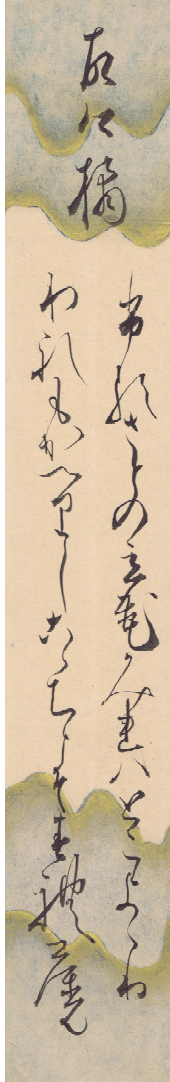
八七二 夢に見しむかしの人の袖の香をうつゝにのこす夜半のたちはな

八七三 なつかしきむかしの人を見し夢のさむるうつゝにかをるたち花

八七四 さみたれに花立花の「香」^(貼紙)「か」をる夜はむかしかたりもなつかしきかな』

故郷橘

八七五 ふるさとの橘見れはとこよよりわれもかへりしこゝちこそすれ』



* 架蔵短冊

故郷橘

八七六 ふあまの立花見れば常世よりわれもかへりしこゝちこそすれ』

* 籠頭、朱ニテ「重」トアリ

故郷橘

八七七 たちはなはむかしの香にそ匂ひける五月雨降りし里ののきはに』

(一行分空白) 一三才

棟

八七八 春すきし藤のゆかりのいろ見えて夏にあふちのめつらしきかな』

山家櫓 (棟) * 龍頭、朱ニテ「文字ヲ一定スベシ」トアリ

八七九 むらさきのひととあふち山里になにのゆかりのありて咲ら(む)』

紫陽花

八八〇 夕立のなごりの空にたつにしのいろにそにほふ(あ)ちさゐのはな

八八一 むらさきもあけもみとりもとりよるひ八重かさなれる紫陽の花

八八二 いくいろに咲き重ぬら(む)あちさゐは百千の花をひとふさにして』

(以下空白) 一三ウ

五月雨久

八八三 けふもふりけふも降りぬといひく〜て幾日になりぬ五月雨の空』

梅雨久

八八四 今曲もふりけふも降りぬといひく〜て幾曲になりぬ五月雨の空』

五月雨久

八八五 はれま待て掘ら(む)とおもひしたけの子は竹になりけり五月雨の空』

山家梅雨

八八六 さみされの雫とともにほろ〜と柿のはな散るやまもとのには』

閑居梅雨

八八七 さみたれにかこつもあやな降らすとて誰か音つれ(む)ん宿ならなくに』

梅雨欲晴

八八八 梅雨の雲うすれ行くやまの端にかさ著なからもつきは出にけり』

(一行分空白) 一四才

五月雨晴

八八九 さみたれの雲うすれゆく山の庵にたえていく夜の月を見るら(む)』

八九〇 なごりなく晴にけるかな五月雨しあめは昨日のそらとしもなく

八九一 五月雨の雲はれにけり大そらにもまかきもあをみわたりて』

* 龍頭、朱ニテ「重」トアリ

梅雨晴

八九二 五月雨の晴たる空にめつらしくかさきぬつきのかけを見るかな』

五月雨晴

八九三 五月雨にぬれとほりたる蓑笠をかけ干すのきにさす日かけかな』

水鶏

八九四 柴の戸は我こそたゞけ宿かりて水鶏のまゝのきかまほしき』

* 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

水鶏

八九五 草の戸はわれこそたゞけやとかりて水鶏の聲を聞かまほしさに』

(二行分空白) 一四ウ

月下水鶏

八九六 法の師のおすにはあらて月のさす門をたゞくはくひななりけり』

夕水鶏

八九七 宿ちかく水鶏なくなりなつの中もいまはほと暮んとすらん』

* 鼈頭、朱ニテ「宮内省入」トアリ、↓【一〇六四】

夕水鶏

八九八 暮ぬとてかりのこしたる里川のまこまくれにくひななくなり』

深夜水鶏

八九九 よひなからあくるも惜しき天の戸を更けて水鶏のなと叩くらん』

〔明治〕「田家水鶏」二十一年」六月十六日木村正辞ぬしの事にて田家水鶏(といふことを)

九〇〇 水鶏なくこゑを聞ゆる夕月夜入谷の小田のいなはかくれに

九〇一 ひるも来て水鶏そたゞく人はみな早苗とりにと出しふせやを

九〇二 筑波嶺のこの面かの面に聞ゆるはすそわの田居の水鶏なるらし』

閑居水鶏

九〇三 草の戸をたゞく水鶏の音つれはおとせぬよりもさひしかりけり』一五才

静岡にて北安東村なる野中の一つ家にすみけるをり(水鶏をきゝて)

九〇四 わかやとはとさせる門もなきものをいつくをたゞく水鶏なるらん』

九〇五 わくらはに人のたゞくも水鶏かときゞすこしたる草のいほかな』

(以下空白) 一五ウ

(半面空白) 一六才

(一行分空白)

夏 月

九〇六 夏の夜の月まちいてしほともなくしらみもゆくかひむかしの山』

夏月涼

九〇七 月影もさしくる池のおはしまによるはなつとそおほえさりけり

九〇八 秋ならぬ扇もやかておかるゝはすゝしきなつ(き)のつ夜なりけり』

菓冊涼

九〇九 月影はいつはあれともゆふすゝみ待いてしはかり嬉しきはなし

九一〇 まとかなるあふきおほゆる月影のいつれはやかて風のすゝしき』

夕夏月

九一一 湯あみしてあつさを流す夕暮に見るつきかけそうれしかりける』

河夏月

九一二 吹わたる風には夏もなかかはのかは瀬すゝしき夜半のつきかな』 一六ウ

川菓冊

九一三 五月雨にうは濁りせるかはみつもすむ月かけはくもらさりけり

九一四 うしと見しやみの夜川の箭火にさしかはりたるつきのかけかな』

池上夏月

九一五 にこりなき池のはちすの露の上にやとるも涼しなつの夜のつき』

池邊夏月

九一六 せきいるゝ水のおもてもおこすまててる影涼しなつの夜のつき

九一七 船よするみきはの宿のおはしまに待いてし月のかけのすゝしさ』

田家夏月

九一八 かりて干す麥の秋風うちそよきひかりすゝしきなつの夜のつき』

竹間夏月

九一九 笛にせぬ青葉の竹のふしの間もあなみしか夜のつきのかけかな』 一七才

夏夜惜月

九二〇 山の端に入るをも秋はをしみてきなにくかこた^(む)なつの夜の月』
(四行分空白)

瞿麥露

九二一 なたしこのふりわけ髪を誰かあけて誰か結ひけ^(む)露のしらたま』
朝常粟(瞿麥)

九二二 あけわたる夜川の岸に見ゆるかな瀬「ふ↓に」ふすあゆのどこなつの花』

水邊瞿麥

九二三 くみあくる筒井の本に咲きにけりふりわけ髪をあてしこのはな』
(二行分空白) 一七ウ

瞿麥勝衆花

九二四 百草の花にこゝろをうつつしてもなほ撫し子そとこなつかし^(き)』

夏草滋

九二五 狩人もしかのなつ毛のむかはきにわけなつむらしすゝき高かや

九二六 小鹿伏すなつ野のくさは狩人か^(司)巾はつも見えすしけりけるかな』

路夏草

九二七 夏草は手綱ゆるして行くこまのはむはかりにもひてけるかな』

野夏草

九二八 撫子のふりわけ髪も見ゆる野にかたすくるまでしけるなつくさ』

野夏草

九二九 ~~なたしこのふりわけ髪もみゆる野にかたすくるまでしける夏草~~ 一八才 * 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

水邊夏草

九三〇 夏草はしけりにけりなむかし見し野中のしみつあとと^(中)とるまで * 鼈頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

九三一 小船引く人のほきさへかくれけり野かはの岸にしけるなつくさ』

渡夏草

九三二 夏草はしけりにけりなよとかはをのほる小船もひきなつむまで』 * 鼈頭、墨ニテ「前と重／趣」トアリ

庭夏草

九三三 みし花の木陰やいらなつふかみ庭もまかきもたゝくさのはら』

杜夏草

九三四 夏ふかくしけりにけりなうくひすの聲はおいその杜のなつくさ』

(以下空白) 一八ウ

(十行分空白)

照射

九三五 ともしする火串よりけにみしかきは寄来る鹿のいのちなりけり

九三六 のかれている山にてもなほ世にしらぬうきめを峯にさす照射かな

九三七 高山にしかはなたちそ夏の夜のみしかやまにもともしさすなり』一九才

照射

九三八 のかれ入る山にてもなほ世にしらぬうきめを峯にさす照射かな』 *龍頭、朱ニテ「重」トアリ

連峯照射

九三九 やみの夜の星の光かとはかりにみねにも尾にもさすともしかな』

鵜川

九四〇 ものゝふの八十字治川のはやき瀬にさきをあらそふ鵜飼舟かな』

名所鵜川

九四一 なから川むかしなからのわさなれは鵜飼も罪はあらしと思ふ

九四二 ものゝふの八十字治川の早き瀬にさまをあらそふ鵜飼舟かな』 *龍頭、朱ニテ「重」トアリ

九四三 大井川夜半のあらしにかゝり火の花をちらしてゆく鵜ふねかな』

(三行分空白) 一九ウ

螢

九四四 暮かけてしつか早苗を植はてし小田のみなくちほたる飛ふなり

九四五 さをとめか小田植はてゝかへるさの畔つたひつゝ飛ふほたるかな

九四六 遠地近地(をちこち)に招く少女のとほければかたよりかねて飛ふほたるかな

九四七 なる神も空におとなふよひやみの草のかき葉をてらすほたる「の↓へか」』 *歌末一字、次掲図版参照



九四八 五月雨に思ひも消えず飛ふほたるたれを戀路にもえわたるら(む)』

谷 螢

九四九 飛ふほたる照すを見ればひかりなき谷とも夏はいはれさらまし

九五〇 墨染のくらまの谷に飛ふほたるころものうらのたまや散るら(む)し』

澤 螢

九五一 富士の嶺のけふりはたゝすなるさはに今も燃るはほたるなりけり

澤 螢

九五二 富士の嶺の煙はたゝすなるまはに今も燃ゆるはほたるなりけり』

(一行分空白)「二〇才

海邊螢

九五三 浦風にふかれくゞてすみよしのきし(補)《た》のかたなに行くほたるかな』

川 螢

九五四 淀川をくたも夜舟にともなひてなにはつまでも行くほたるかな』

河 螢

九五五 淀川をくたも夜舟にともなひてなにはつまでもゆくほたるかな

九五六 はし姫のたえぬおもひか昔より世を宇治かはにもゆるほたるは』

河邊螢

九五七 ほたる飛ふ宇治の河原は夜ひかる玉のくたけて散るかと思ふ』

川邊螢

九五八 ほたる飛ぶ宇治の川原は夜ひかるたまのくたけて散るかと思ふ』

池 螢

九五九 かけ見えて手にもとられず猿澤の池のみきはに飛ふほたるかな』

(一行分空白)「二〇ウ

池邊螢

九六〇 こやといふ池のこゝろも知らずし(て)あなたの(岸)峯によるほたるかな』

橋上螢

九六一 飛ふほたる身をうち橋のてもにもつゝみかねてや燃え渡るら(む)し』

窓 螢

* 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

* 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

* 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

九六二 文よむものうき夏のくれかけてあつめぬ窓に飛ふほたるかな』

窓前螢

九六三 卯の花の雪はきえにし「み↓ふ」^{（蛸巻）}み殿のまとをてらすはほたるなりけり』

窓前螢

九六四 卯の花の雪は消え行くもみどの窓をてらすはほたるなりけり』

* 籠頭、朱ニテ「重」トアリ

（四行分空白）「一二一才

螢火透簾

九六五 玉たれの内に思ひやこかるらんひまもとめ来る夜半のほたるは

九六六 いさり火のかけかあらぬかあしすたれ「網↓あ」^{（蛸巻）}みめに透て見ゆる螢か

九六七 川風のすたれ吹あくると高とのに消えぬ火かけはほたるなりけり』

晩夏螢

九六八 末の川流あゝほしと見るはかりあまめくそらに飛ふほたるかな』

晩夏螢

九六九 みそきする人よりさきに川の邊の茅の輪くゞり《て》^{（補入）}飛ふほたるかな』

螢火乱飛秋已近

九七〇 天の河なかるゝ星と見るはかり秋めくそらに飛ふほたるかな』

螢火乱飛秋已近

九七一 末の河なかるゝ星と見るはかりあまめくそらに飛ふほたるかな』

（一行分空白）「一二一ウ

垣夕顔

九七二 夕顔のはなのゑまみそなつかしきむつかしけなる賤か垣根も

九七三 くちをしのちきりとやいはれ人も見ぬ賤か垣根のゆふ顔のはな

埴夕顔

九七四 夕顔のはなにこゝろや引らんかきねにきしるあしろくるまは

九七五 夕顔の花のゑまみそなつかしきものむつかしきしつかかき根も』

（以下空白）「一二一才

* 籠頭、朱ニテ「重」トアリ

蚊遣火

九七六 いふせさも忘れてやたく暮かけて人まつの戸ののきの蚊やり火
九七七 夏山のふもとのさとの蚊遣火のけふりやくものみねとなるら(む)』

里蚊遣火

九七八 蚊遣たくけふりのたゝぬ里もなしいつこかむろの八島なるら(む)』

山家蚊遣火

九七九 炭かまのけふりに夏はたてかへて蚊遣たくなり小野のやまさと』

(三行分空白)

蓮

九八〇 蚊遣たくほのほの家をのかれ来て見るもすゝしき露のはちす葉

九八一 舟うけてとるたをやめの面影もうかへるいけのはなはちすかな』

(一行分空白)「一二二ウ

観蓮

九八二 にこりにもしまぬこゝろの色見えてはちすは花のしな高きかな

九八三 はちす葉の遠きかをりをたつね来て近まさりする花を見しかな』

愛蓮

九八四 糸竹にかけてうたひてあそふまてめてはやさるゝ花はちすかな

九八五 みしか夜をあくるもまたて蓮の花ひらくも音もきゝてけるかな』

蓮露

九八六 風わたる池のはちすのしら露は涼しさまねくたまにやあるら(む)』

九八七 たをやめかすかたの池のはちす葉の露やかさしの玉と見ゆら(む)』

九八八 うけためてかたふく蓮の廣葉よりこほるゝ露のおとのすゝしさ

蓮露

九八九 むけためてかたふくはすの立葉よりこほるゝ露の音のすゝしき』

(二行分空白)「一二三オ

池蓮

九九〇 風なくてはちすのうき葉動きけり池のそこにやうをあそふら(む)』

池上蓮

*籠頭、朱ニテ「重」トアリ

九九一 舟うけてをとめか手折る花はちすこや繪にかけるから人のいけ
 九九二 たをやめかすかたの池の蓮葉のつゆやかさしのたまと見ゆらん(む) *龍頭、朱ニテ「重」トアリ、↓【九八七】
 (以下空白)「一三三ウ



曲雨(夕立) *抹消、二種ノ朱デナサル、「夕立」ハ「ミセケチ」ト同ジ朱ニヨル、次掲図版参照

九九三 涼しさのあまりて寒くなりけり氷雨も(ま)しるゆふたちのそら
 九九四 玉すたれかけしはかりも見ゆるかな夕立するのきのいとみつ

夕立晴

九九五 いつかたに雨やとりして夕立のはれゆくそらにあきつ飛ふら(む)ん

薄暮夕立

九九六 時の間にひろる雲に墨そめのゆふたつそらはくれかゝりけり
 九九七 むら雲のはつれに月は見えなからなほ晴やらぬゆふたちのそら

河夕立

九九八 かへり来るひとむら鷺のかけ見えて川上くらしゆふたちのそら

原夕立

九九九 晴れ行かは月夜を晝とおもはましあしたの原にゆふたちの降る
 一〇〇〇 鬼こもる宿にはありとも立寄らん安達かはらにゆふたちの降る(重) 二四才 *龍頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

禁中夕立

一〇〇一 大宮のうつほ柱におちたきつおともとゝろにゆふたちの降る

旅夕立

一〇〇二 あせをたにしほるはかりの旅衣ゆふたちにさへぬらしけるかな

旅夕立

一〇〇三 やとから(む)里のあたりに夕立のくものあしとていまかゝるなり

杜夕立

一〇〇四 日くらしの聲も涼しくきこえけり夕立するもりの木すゑに

(以下空白)「一四ウ

雨後蟬

- 一〇〇五 なこりなく五月雨の雲はるゝ日にきくや今年のせみのはつこゑ
- 一〇〇六 山川の雨のなこりの水のおとにきそひてもなくせみのこゑかな
- 一〇〇七 ひとしきりむら雨すきてはるゝ日の暑さを添ふるせみのこゑ〜』

樹陰蟬

- 一〇〇八 木かくれて鳴くとはすれと夏山もとよむはかりの蟬のこゑかな』

林頭蟬

- 一〇〇九 夕日さすかた山はやしなく蟬もこゑもすゝしくなりにけるかな』

晩夏蟬

- 一〇一〇 風の薫おとも秋めく夏のゆふくれに木すゑしくるゝせ「の↓み」のこゑかな』

蟬聲秋近

- 一〇一一 散らぬ間を露のよすかと山桐のひろ葉のかけになくせみのこゑ』

(二行分空白)「一二五ウ

扇

- 一〇一二 たをやまかかさすあふきのかひまよりこほれて匂ふ月のまゆ墨
- 一〇一三 山に住む人ならなくに夏の虫はたれもあふきをばなたまりけり * 鼈頭、朱ニテ「意聞エス」トアリ
- 一〇一四 繪に書ける月の匂ひもたゝならぬあふきの風そことにすゝしき』

扇

- 一〇一五 とりならずあふきの風もかをるなりつほねならひの夏のゆふ暮』

扇

- 一〇一六 とゆねならず「風↓扇」の風もかをなりつほねならひのなつのゆふぐれ * 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ
- 一〇一七 いらなしと人なとかめそ暑き日はおほえす高くつかふあふきを * 鼈頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

扇

- 一〇一八 小ゆねしと人なとかめそ暑き虫はおほえす高くつかふあふきを * 鼈頭、朱ニテ「〇」、続ケテ「重」トアリ
- 一〇一九 夕顔のさける垣根のこほれより見ゆるもしろきさしあふきかな』

松下泉

(二行分空白)「一二五ウ

一〇二〇 松か根の岩もる清水さら／＼にうき世のなつは知らてしむら^(む)
一〇二一 涼しさもゆふへはいとま清水に松の葉こしのつきさへそすむ

社頭泉

一〇二二 岩清水わきて流るゝ御手洗のきよきやかみのこゝろなるら^(む)
(以下空白)一六才

納涼

一〇二三 若竹のみとりのすたれふきあくる風おもてこそなつもしられね

納涼

一〇二四 若竹のみとりのすたれ吹きあくる風おもてこそなつもしられね

納涼風

一〇二五 はなち出の竹のすの子の夕すゝみ母屋に知られぬ風そふきける
一〇二六 南より風吹きとほす北とのゝまこひさしこそなつなかりけれ

門納涼

一〇二七 よひ／＼にしかしむ人の數そふは風のすゝしき門邊なりけり

橋納涼

一〇二八 たれもみなゆきすきかねて戻り橋たもと涼しきほりかはのかせ
(二行分空白)一六ウ

橋納涼

一〇二九 いくたひかそゝるにゆきや戻り橋たもと涼しきほりかはのかせ *鼈頭、朱ニテ「重」トアリ
一〇三〇 すゝしさは「つつハ↓いつこ」はあれと風渡る橋のうへこそすかたなりけり

一〇三一 川つらにつとふ小船をおはしまに見おろす橋のうへそすゝしき

一〇三二 すゝみする大河の邊のはし守はなつを知らてや世をわたるら^(む)

舟中納涼

一〇三三 すみた川浪のあや瀬の川のほりなつをはなれて船は行くら^(む)

樹陰納涼

一〇三四 立よりて涼「み↓む」かけともなりにけり手つからさしゝ門のあをやき
一〇三五 夕風のすゝしさあまるあをやきはひろこりたるも憎からぬかな

樹陰納涼

一〇三六 たけよりて涼影ともなりにけり手つから植しかとのあをやま（いん） * 龍頭、朱ニテ「重」トアリ

樹陰納涼

一〇三七 あふきたにとる手もたゆき夏の日に涼しさ招くたまかしはかな』二七才

竹風夜涼

一〇三八 窓ちかき竹の葉そよく風のおとをふしなからきく夜半の涼しさ』

晩夏涼

一〇三九 あふき見る星の光もいつしかとあきほのめかす夜半のすゝしさ』

（駿河國なる）安倍川の涼にゆきて

一〇四〇 あゆはしる安倍のかはらにおり立て瀬ぼしやせまし涼みかてらに

瀬ぼしは川水をせきて年魚をとあわきをいふ方書也』 * 龍頭、朱ニテ「✓」、ソノ上ニ朱ニテ「■」アリ

静閑にておなれし
（木枯の森にすゝみして） * 龍頭、朱ニテ「✓」、ソノ上ニ朱ニテ「■」アリ

一〇四一 駿河路は青葉のをかもすゝしきにゆふかせ立ぬ木からしのもり』

（五行分空白）』二七ウ

晩夏雨

一〇四二 ほろ／＼とはちす花散る夕風にあきをこほして過るあめかな』

（六行分空白）

夏（一）祓 * 「一」、墨書ヲ抹消シ、ソノ上ニ書カル、次掲画像参照



一〇四三 石川にはな田のおひやなかなすら身（む）にまつはるゝ罪も絶えよと

一〇四四 みそきする人のたもとに吹ぬらし夏とあきとのゆきあひのかせ

一〇四五 麻の葉もなかしはてたる御祓川こゝろすゝしきかせ吹きわたる』

出雲國須賀神社奉納に襖橋涼風といふことを題にす

一〇四六 ますけよしすかの小川のみそき橋そよ吹きわたる風そすゝしき』二八才

夏夜興

一〇四七 みな人のこゝろもうきて水鳥の加茂のかはらにすゝむ夜半かな』

夏吉野山

一〇四八 おしなへて青根かみねとなりにけり若葉しけれるみ吉野のやま

(一行分空白)

夏田

一〇四九 今日にはやくさきるはかりなりにけり昨日か植し小田のわさ苗』

來客夏稀

一〇五〇 風をのみ夏はしたしむものにしてとはぬも人のこゝろありけり

一〇五一 しのすたれまきて風まつ夏の日はひまもとめ来る友たにもなし

一〇五二 草も木もしをるゝ夏の日さかりはわか友かきもうらかれにけり』

夏人事

一〇五三 今は世にひむろもる男もなかるらし大路にひさくけつり氷の聲

一〇五四 吹きいるゝ風をこゝろのよしすたれいとゝまとはに夏はあむら(む)

一〇五五 夏川の浅瀬のみつのひとすちはかはらにさらす布にさりける』二八ウ

氷賣

一〇五六 富士の嶺のゆきた(氷)にきゆるみな月のもちありきても賣る氷かな』

夏夢

一〇五七 岩間もる清水のおとをまくらにてむすふ夢さへ涼しかりけり

一〇五八 山窓のひるねの夢をくふものは貌にはあらてやふ蚊なりけり』

夏夢

一〇五九 なつかしきむかしの夢を見つるかな花たちはなの薫るまくらに』

(三行分空白)

夏鳥

一〇六〇 釣人や舟よせぬらしあしの葉のしけき水際に川せみのたつ』

出雲大社(補) ≪の≫ ≪東京別社鎮祭に社頭夏へといふことを≫

一〇六一 宮居する神のまにゝ木々の葉もあをふし垣となれるなつかな』二九才

明治十六年御内命により富内卿(下)へさしあげた三十番

ゆ中東五番(徳大寺宮内卿より 御内命のよしをもておほせことをかう)

餘花 　　ふりければ短冊にしたゝめ奉りたる三十首の中夏五首

一〇六二 散る時は散れはこそとも思ひしをありても花はめてたかりけり *↓【七四六】

暁郭公

一〇六三 あたこ山しきみか原のほとゝきすあかつきおきの人やきくら^(む) *↓【八四二】

夕水鶏

一〇六四 宿ちかく水鶏そた^(む)ゝく夏の日もいまはほとゝくれんとすら^(む) *↓【八九七】

風前螢

一〇六五 ぬは玉の闇の夜風のすかたさへはるかに見えて行くほたるかな

夏月涼

一〇六六 かたひらの袖ひやゝかになりにけりすゝみふかせる夏の夜の月

〔二行分空白〕二九ウ

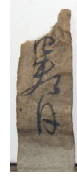
【第三冊・秋】

〈読了〉

櫨紅葉 秋

三 前表紙

*前表紙料紙ト見返シ料紙ノ間、前表紙裏天部ニ貼紙アリ、次掲画像参照



*「前闕」四卷同ト読ムベキカ

「前表紙見返し」

櫨紅葉

(二行空白)

秋歌

(二行空白)

(二行空白)

初秋月

一〇六七 秋来ぬと今宵しるしも久方のつきにかゝれるくものふるまひ』

初秋冊

一〇六八 あやまたす西より秋はたつか弓(い)ゆるさのやまの三日つきのかけ』

(四行分空白)「一才

(半面空白)「一ウ

(五行分空白)

初秋虫

一〇六九 夕月夜あきほのめかす浅茅生にこゑするむしは(な)けにかあるら(む)』

早凉知衣

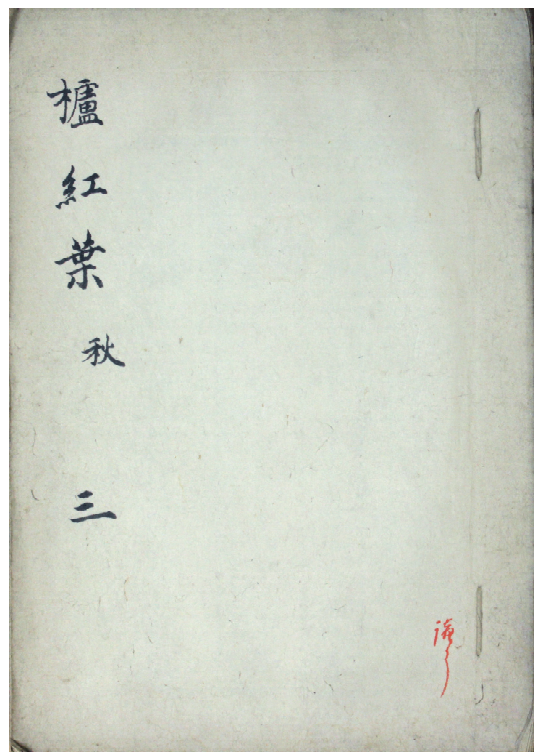
一〇七〇 聲よわる木すゑの蟬のしくれよりそてにおち来る露のつめたさ』

風告秋

一〇七一 こゝろなき草木ものをいふはかり秋をしらする風のおとかな

一〇七二 すてられんものともしらて秋たつとあふきの風のまつ知らすら(む)』

*釐頭、朱ニテ「宮内省入」トアリ、↓【二四二九】



第三冊【前表紙】

山家早春

一〇七三 山里はうき世のほ水とおもひしをいつこも同じあきは来にけり』二才

七夕

一〇七四 今宵あふ二つの星やとしことにひまくらするおもひなるら

一〇七五 棚機のなぬかの夜半のさゝめこと誰かきゝそめて名には立けれ

七夕雨

一〇七六 むつことも思ひやられて星合のゆふへのそらは雨となりなき』

七夕書

一〇七七 たなはたはいかに見るら昔より傳へしふみのまことそらこと』

七夕筆

一〇七八 たなはたもあはれとや見ん秋といへは妻とも鹿の筆のいのち毛』

七夕紙

一〇七九 星合のそらたきものにこかしたる紅葉かさねのかみや手むけれ

(二行分空白)「一二ウ

七夕墨

一〇八〇 手向する松のけふりよほしあひの空ま「?」ひたちのほらな

七夕硯

一〇八一 芋の葉の露のしらたまひろひいるゝ硯にうかふほしあひのかけ』

七夕畫

一〇八二 をりにあふ秋の七草うつし繪にかきて手むけんほしあひのそら』

七夕後朝

一〇八三 たなはた津あやおり出るから錦たちわかれうき今朝にやあるら

萩風

一〇八四 をきの葉のおとろかさすはこの頃の風を秋とも知らすそあらし』

夕萩

一〇八五 秋はきの枝のしなひもまさりけりゆふ露おもくなりやしぬら

(一行分空白)「三才

萩 露

一〇八六 もとあらの小萩はなさく秋といへはもとの心につゆもおくら^(む)

一〇八七 蓮葉のこゝろのみかはおく露をたまとあさむくにはのはきはら』

野 萩

一〇八八 あし引の山の裾野にあきの色をはきにあげても見するはなかな』

閑庭萩

一〇八九 おとつるゝ風のすかたは見えなからあとこそなけれ庭のはき原』

旅宿萩

一〇九〇 庭中の小はきを見ても故郷へあすはとのみそおもひたゝるゝ』

萩似人來

一〇九一 とはれしと思ひかまへしやとをまたうたても吹くか萩のうは風

はきのもとに白き菟の居るかた

一〇九二 露ふかきはきのしつえにかけさすは更ゆく月のうさきなるら^(む)』

(一行分空白) 三ウ

萩のもとに猪のふしたるかた

一〇九三 小男鹿のはなつまといふ萩原にいかてふすあのとこはしむら^(む)』

女郎花

一〇九四 くちなしになとくねるらん^(む)女郎花すゝきは穂にも出てまねくを』

雨中女郎花

一〇九五 ふる雨もなをを野邊におく露のあたに見るへき女郎花かは』

(一行分空白)

月前薄

一〇九六 むさし野のつゝきか原の月影も照らしあまるは尾はななりけり』

故郷薄

一〇九七 立よらん^(む)門たにもなし故郷はさひしさまねくすゝきのみして

一〇九八 秋風に尾はななみよるふるさとは田^(むら)草もうみとなるかと思ふ』 四才

荻 萱

一〇九九 吹くかせにまかせてを見ん(む)みたれてもあしけくはあらぬ(野へ)庭の荳蔻
〔四行分空白〕 * 籠頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

月照草花

一一〇〇 白露のたまのかさしにさす月のひかりをそふる「女(紙)を」みな(へ)ゆしかな

草花映月

一一〇一 村雲のうらみもはれて葉かくれの葛のはなさへ見ゆるつきかな

一一〇二 露むすふ小萩のもとにやとりけり月は尾はなか袖をはなれて

〔三行分空白〕四ウ

閑庭草花

一一〇三 さかりたにさひしき庭の八千草は秋の嵯峨野のたねにやあるら(む)ん

草花交色

一一〇四 かるかやのしとけなけにも見ゆるかな男をみなの花にましりて

一一〇五 八千草の花こきませし秋の野はみやこにしらぬにしきなりけり

一一〇六 龍田姫にしきおるらし秋の野の千くさのはなをたてぬきにして

筆花交色

一一〇七 をみなへしひもとく野邊にぬきかけし藤袴こそうしろめたけれ

〔以下空白〕五オ

秋野

一一〇八 千くさく秋の花野を見てそおもふかくこそ庭は作りいてめと

秋野

一一〇九 さもこそはうきと嵯峨野の秋ならめ露にしをれぬ草の葉もなし

〔四行分空白〕

朝顔

一一一〇 おきいてゝ露のまかきの朝顔をみるく目をも「覺(紙)しつる(紙)さましつ」るかな

朝顔の草

一一一一 朝なく咲きはるとも見えなくにさかり久しきあさかほの花

〔一行分空白〕五ウ

風前露

一一二二 風さそふ草葉の露はかや野ひめ手にまくたまの散るかと思ふ
一一二三 たえず吹く軒端のをきの上風にむすふいとなきをきのしたつゆ』

秋露深

一一二四 武藏野にありといふなる迹水はくさ葉にあまる露にやあるら^(む)』

秋露深

一一二五 まくり手のたもとをさへにぬらしけり尾花か袖の露のふかさに』

秋露深

一一二六 まくりてのたもとをさへにぬらしけり尾花か袖の露のふかさに』

閑居露

一一二七 ひさをしも入るゝはかりゆなる草の庵にところせきまておける露かな』

月前虫

一一二八 あし曳のかた山すけのみの虫もつきになく音はかくれさりけり』

(一行分空白) 六才

虫前虫

一一二九 ころもうつ音もきこゆる月の夜にはたをる虫やいつこなるら^(む)』

風前虫聲

一一三〇 吹く風に草葉のつゆやこほるらん^(む)すかりしむしの聲のみたる』

露底虫

一一三一 下葉よりいろつく萩の露やさは音になくむしのなみたなるら^(む)』

一一三二 とろせき虫の音きけは草のはらつゆにも聲のあるかと思ふ』

露底虫

一一三三 虫の音も露のそこにそ聞ゆなる明方ちかく夜はなりぬら^(む)』

一一三四 露ふかきところもえかほになく聲は籠をはなたれし^(む)瀬^(む)にや分^(む)くゆ^(む)』

(二行分空白) 六ウ

虫吟露

一一三五 夕されは尾花か袖におくつゆをなみたにかりて虫のなくら^(む)』

* 龍頭、朱ニテ「重」トアリ

曉「虫」↓（一字分空白）虫

一一二六 鴟の啼く木末はあけて浅茅生になほ夜をのこす虫のこゑく』

庭上虫

一一二七 たちいて、月見まほしき庭の面もふま^{（む）}かたなき虫のこゑかな

一一二八 秋の野につくれるやとのにはなれは所得かほにむしも鳴くら^{（む）}』

故郷虫

一一二九 わた殿のすたれもやれしふる宮にむかしをかけてすゝ虫の鳴く

一一三〇 ふる里はむかしのもやのすのこよりすゝき生出てこほろきの鳴

一一三一 昔たかはなちてきゝしたねなら^{（む）}野となる庭になくむしのこゑ』

野虫

一一三二 うらやまし繪にもかゝれぬ虫の音を野守は宿にみながら「？↓そ」^{（貼紙）}きく』七才

野虫

一一三三 むかし誰かはなちてきゝしたねなら^{（む）}まかまの野邊に鳴^{（補心）}』虫の聲』 *籠頭、墨ニテ「重」トアリ

野外虫

一一三四 はるかにも聞えけるかな住吉の遠さと小野のま^{（つ）}むしのこゑ』

野徑虫

一一三五 ^{（お）}木く露のそこはかとなき虫の音に秋の野みちはゆくかたもなし』

霜草虫吟

一一三六 霜かれてまかきにのこるつる草のほそくなり行く虫のこゑかな』

（以下空白）七ウ

秋風

一一三七 鳴く蟬のつくくをしき月日かなことしも今はあきかせの吹く』

朝秋風

一一三八 朝戸出のこの山かせ秋ふけてうつらころものそてそさむけき

一一三九 秋あはせまたとりいてぬおこたりを今朝吹く風そおとろかしける』

秋風入簾

一一四〇 なれきつるつはめはうとくなりしより軒の簾垂に秋かせそ吹く』

秋風入簾

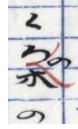
一一四一 なれきつるつはめは疎くなりしより軒のすたれに秋かせそ吹く』

* 龍頭、朱ニテ「重」トアリ

田上秋風

一一四二 くる《の》木補入の枝にかけてほす稻葉をわたる小田のあきかせ』

* 「の」、補入記号ノミ朱、次掲図版参照



山家秋風

一一四三 山里もうき世の外にあらねはやあきはかなしきかせの吹くらむ』八才

(五行分空白)

朝鹿

一一四四 あけぬるか小野の草ふし露さむみねぬ夜の鹿のこゑ「の↓は」のこりて』

鹿聲何方

一一四五 よひ／＼に所定めす小男鹿のとふやいつこの「を↓は」きかはなつま』

鹿聲幽

一一四六 鹿の音もそよとはかりに聞ゆなりあき風わたるぬなのさゝはら』

(三行分空白)「八ウ

月前鹿

一一四七 雨の夜はわひつゝや寐しはれわたる月につまよふ小男鹿のこゑ

一一四八 月夜には来ぬ人またるなれもしか思ふこゝろに音をや鳴くらむ』

山中鹿

一一四九 河内女や袖ぬらすらむしら浪のたつ田のやまの小男しかのこゑ』

野鹿

一一五〇 大江山いく野のしかの鳴く聲にさつ矢のかれしむかしをそ思ふ』

山家鹿

一一五一 よそに聞く人も袖をやぬらすらむわかすむ山のさをしかのこゑ』

故郷鹿

一一五二 ふるさとの春日の野邊に鳴く鹿はわかき山のつまや戀むふらむ』

〔三行分空白〕九才

〔三行分空白〕

秋 夕

一一五三 あれまさるわか家鳩のふつゝかに啼くゆふ暮そあきはかなしき』

秋 夕

一一五四 あれまさるわか家鳩のふつゝかになく夕暮そあきはさひしき』 *鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

田家秋夕

一一五五 八束穂のたり穂のをしね守る庵も秋「は↓の」ゆふへはこゝろさひしも』

名所秋夕

一一五六 たちのほる霧のまかきの島かくれゆふへさ(ひ)しくさす日影かな』

秋の夕角田河原なる梅若寺にて

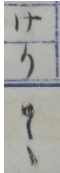
一一五七 すみた川今は(總)むかしの物語おもへはかなしあきのゆふくれ』九ウ

故郷秋夕

一一五八 大かたの世のかなしさをふるさとにあつめやすら(む)秋の夕くれ』

閑中秋夕

一一五九 世の中をすてゝすむ身もつれゝに絶えぬは秋の夕へなりけり』 *和歌末尾、墨ニテ未勘ノ記号アリ、次掲図版参照



秋 夜

一一六〇 初霜のわかもとゆひにおきしより夜さむに秋もなりまさりつゝ

一一六一 ともし火もを暗き閨の壁代にわかかけな(あ)きあ(あ)きの夜半かな』

秋夜長

一一六二 まきかへし賤かころもをうつたへになかきは秋の夜比なりけり

一一六三 鹿(麻)ふすますそみしかくも覺ゆるは秋の夜なかなれはなりけり

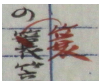
一一六四 宵の見し夢は昨日のうつゝかとおもふはかりの秋のよ(な)ゆ(か)ま』

秋 雨

一一六五 百草のはなのまかきをゆふくれに雨さへしのをつかねてそふる』一〇才

秋 雨

一 二六六 そほぬれてたてるそうつの(葉)巾笠をふりやつしたる秋のあめかな
* □字、下掲図版参照
一 二六七 秋風にやれし(を)のき端のはせを葉(を)うたてもたゞく雨のおとかな



駒 迎

一 二六八 雲の上に今日こそ聲のきこゆらし澤邊になれしつるふちのこま
一 二六九 武藏野の尾花あし毛のこまをこそ月のあきには引くへかりけれ

(以下空白) 一〇ウ

月

一 二七〇 ひとりすむ月やさひしと思ふら(む)あまり晴たるあきの夜のそら
一 二七一 てる月をうはの空にも見つるかなわか世ふけゆくほとも忘れて

冊

一 二七二 きく紅葉なにはあれとも秋はなほ月のかつらそいろまさりける

月似氷

一 二七三 月かけのしらすは露(と)見えなから池のおもてはこほ(りた)りけり
一 二七四 秋の夜の月のかけさへこほるかと思えこそわたれ諏訪の水うみ

秋月勝春花

一 二七五 雲とのみ見えしよし野の花よりもうへに立田のやまの端のつき

草花映月

一 二七六 まゆ(ね)かれてほのめきいてし月影も尾花にのみはやとらさりけり 一一才 * 麓頭、墨ニテ「前ニ／出」トアリ、↓【一一〇二】詞書
神宮奉納 (への歌に) 秋月明 (といふことを) * 詞書釈文、修正最終形ヲ示セリ、次掲図版参照



一 二七七 秋風に八重たなくもをはらはせて神路のやまにのほるつきかけ
一 二七八 秋の夜の月すみわたるそら「見(見)↓(見)」朧(見)て卵の毛はかりの雲たにもなし

秋月楊明輝

一 二七九 秋といへはこゝろも空にすむものをてる月のみと思ひけるかな
一 二八〇 秋といふ時の名もなき神世よりつきはこの頃照りまさりけり

一一八一 いかてかく照りまさるら（む）久方のつきは秋とも知らしもの（ゆる）』

明月如晝

一一八二 秋の夜の月のうの毛の末さへも見ゆはかりなるかけのさやけさ

一一八三 つゆすかる草葉のうらになく虫のかけさへ見ゆる月のさやけさ』

（二行分空白）一一ウ

獨見月

一一八四 つく／＼とひとりなかむる月夜よし夜よしとさらは誰に告げまし』

獨見月

一一八五 さよふけて寐よとのかねはきゝなから（くま）に獨月を見るかな』

嘯月といふことを

一一八六 いくたひか立て見居て見みれとあかぬ月に嘯ふく秋の夜半かな

一一八七 ことゝはぬ月のかほのみ守りてそ秋の夜なくうそふかれける』

十三夜

一一八八 もろこしの人は知らすや望の夜にまさる今宵のつきのひかりを

一一八九 八束穂の足穂の小しねかりあけて御代なかつきの月を見るかな』

十三夜

一一九〇 なか月の十日あまりの三かさ山ふりさけみれは（ゆづあ）いつるつきかけ』一二才 *釐頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

十三夜といふ五文字を句のかみにおきて

一一九一 しら露のふかき草の戸さしもあへすむかふ軒端のやまの端の月』

十三夜無月

一一九二 なか月の十田あまりの三かさ山ふりさけ見てもかひなかりけり *釐頭、墨ニテ「重」トアリ

一一九三 秋の月こよひもありと思ひしにそらたのめにもなりにけるかな』

八月十四日月見のまとゐに一人来さりし友にいひや（りけ）る

一一九四 まつよひの月のまとゐに君ひとりかけたるかけの惜くもあるかな』

（一行分空白）

十五夜月

一一九五 望月の駒引く今日のくれかけてやまたちいつるかけのさやけさ』一二ウ

松浦三位の月宴に十五夜翫月へといふことを＊鼈頭朱ニテ「✓」、ソノ上ニ朱ニテ「■」アリ

一一九六 この殿のこよひの月のうたけとてみなみおもてに圓居せりける

一一九七 なにこともみちたらひたるこの殿のおくまで照らす望の夜の月

一一九八 望月のみちたらひたるひかりさへつきくしくも見ゆる宿かな』

十六夜月

一一九九 よひくのあかぬなめをしはらくはやすらはせても出る月かな

一二〇〇 さはかりはまたかけもせぬ月影もいさよふのみそ昨日には似ぬ』

晴夜月

一二〇一 晴わたる月のひかりにけおされて今宵はほしのひとつたになし』

月前雲

一二〇二 なかくにももり曇らぬ影もよし月にとみなふ夜半のうきくも』

雲間月

一二〇三 みるまゝに雲のはつれを匂はしていて来る月のかけそうれしき』

雨後月

一二〇四 昨日よりいくたひそく村雨に今宵のつきのかけみかきけ（む）』一二才

暁更月

一二〇五 後の世はさもあらはあれ西へゆく月にこゝろはかたふかれつ』

山月（割書ニス）
は文字を頭にお（まいて）

一二〇六 はるかなる尾の上の鹿の聲さへもさやかにすめる夜半の月かな』

岡月

一二〇七 武藏野の尾花のなみにうかひいてし向ひの岡をてらすつきかけ

一二〇八 久方の月のかつらのもみち葉もやしほのおかをてらすあきかな』

野月

一二〇九 雲はらふ風さへきよし野のみやの黒木のかきねつきしろくして』

野冊

一二一〇 出るより入るまでつきの影は見き秋は野なかにすむ（り）へかりけ』

（二行分空白）「一三ウ

花野月

一一二一 もゝ草の花のむしろにしくものはあらしとそ思ふ秋の夜のつき』

野亭月

一一二二 小ゆるより入るまで月の影は見きあきは野中にすむ人かりけり』

（以下空白）「一四オ

（十行余空白）

河上月

一一二三 かくるへき山の端もなき大「井川（貼紙）川↓」すゑとほしろくすめるつきかけ

一一二四 すみた川うかへる月の影見ればみつのそこにもそらはありけり』

（一行空白）「一四ウ

池上月

一一二五 はれわたる月にうかれて夜もすから池のほとりを幾めぐりしつ

一一二六 池廣みうかへる月のかけ見ればそこにもそらのあるかと思ふ

一一二七 庭の面は霜とあさむき池みつはこほりと見する夜半（秋の夜の月）のつきかな』

池上月

一一二八 静なるいけのころにすむ月は世のうきくもゝかゝらさりけり』

池上月

一一二九 池の面にひかりかはしてくもりなき友かゝみとも見ゆる月かな

池上月

一一三〇 ~~くもりなき池の~~くもりなき池の（おもてにすむつきの）つきに影りつすともかゝみとも見ゆる月かな

（三行分空白）「一五オ

井月

一一三一 むすふ手のしづくも（玉）團をみかきけり月の影さす榎の葉井のつき』

橋上月

一一三二 たちとまり見ぬ人こそはなかりけり月すみわたる瀬田のなか橋』

都月

* 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

* 鼈頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

* 鼈頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

* 鼈頭、朱ニテ「重カ」トアリ

一二三三 世の人のねかひもさこそみちぬらめみやこにすめる望の夜の月』

都_冊

一二三四 露むすふしたりやなきのしたひかるすさか大路の月のさやけさ』

花洛_冊

一二三五 露むすふしたりやなきのしたひかるすさか大路の月のさやけさ

* 鼈頭、墨ニテ「重カ」トアリ

一二三六 春はたゞ雲かとはかり見し花のみやこのそらはいまあきのつき』

(一行分空白) 一五ウ

簾外_冊

一二三七 玉たれのすこしはあかすまきあけてくまなき月の影は見てまし

一二三八 つく／＼と見るはいむてふ月のかほを簾こしにも打_{まも}守_もらまし』

閑居_冊

一二二九 よもきふの宿ものふかく月すみて露のたましくとこのさむしろ』

田家_冊

一二三〇 には鳥の葛飾わさ田かりて干すはてにもかゝるつきのかけかな』

松浦_{補入}《伯爵家》の別荘にて 田家月へといふことを

一二三一 こもまくら高田のいほもすみわたる月をし見れはいこそ寐_まられね』

樵夫_{割注}歸月 よ文字を頭にお_まけ

一二三二 よのうきめ見えぬ山路の月かけにうたひつれてやかへる柴ひと』

(一行分空白) 一六オ

月下_冊

一二三三 はかりなくのむ盃のめくるまにそらゆく月もかたふきにけり』

遊士_{割注}行月 つ文字を頭にお_まけ

一二三四 月影にあくかかれてゞゆく人はくさのまくらもむすはさるら_むれ』

月前_冊

一二三五 子を思ひて鳴くにはあらし面白く月すむ夜半のともつるのこゑ』

(以下空白) 一六ウ

(六行分空白)

月前情

一二三六 ちりはかりうき雲もなき月見つゝなとかは千々にも思ふら^(む)ん

月催涙

一二三七 なかむれは袖に涙のつゆむすふしもこそつきのひかりなりけれ

(一行分空白)

惜月

一二三八 つもりつゝ老となるまでめつれともなほあくよなき月の影かな』一七才

(七行分空白)

月の歌よみける中に * 鼈頭、朱ニテ「✓」アリ

一二三九 秋の夜の月はむかしのなになれは見ぬ世のひとの戀し^(む)かるら^(む)ん

月の歌の中は * 鼈頭、朱ニテ「✓」アリ

一二四〇 秋の夜の月はいかなるゆゑのありて見れは見ぬ世の戀し^(む)か^(む)ら^(む)ん

(二行分空白)』一七ウ

* 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

月の歌よみける中は

一二四一 秋風のたつ田の神にいのりて^(む)こよひのつきにくもなかるへく

月の歌よみける中

一二四二 ものかはり星うつり行く世の中を知らず顔にもすめるつきかな

月の歌の中は

一二四三 つもりつゝわか世もふけぬ今はさはめてしと思へとあかぬ月かな

月の歌よみける中

一二四四 何こともさはりおほかる世の中は月も雲間にかくれてやすむ

一二四五 くまもなくてらせる月のかゝみ山おいゆくかけは移らすもかな

(三行分空白)』一八才

(半面空白)』一八ウ

鷹

一二四六 うき秋をみなみのほとになけく世に北より鷹は鳴き^(て)来^(て)にけり

鷹

一二四七 露白くあけゆくそらに月おちてひとつらひきくわたる鴈か音』

一行斜鴈 *詞書、一字上ガリ、底本ノママ

一二四八 秋風に吹かるゝ鴈のひとつらはゆかみ文字とも見えわたるかな』

鴈行寫水

一二四九 かゝみ山みね飛ひこえて来る鴈のかけこそうつれ志賀のみつ海

一二五〇 難波江にうつれる鴈のたまつさはあし手かきせる心地こそすれ

一二五一 おきいてゝ向ふたらひの水の面にけさ来る鴈のかけそうつれる』

月前初鴈

一二五二 てる月のまへわたりする初鴈はさすかにつらもみたさゝりけり

一二五三 月夜よしをりもはたよしあふき見る空にさやけきはつ鴈のこゑ』一九才

月下落鴈のかた

一二五四 てる月のまへわたりしてみよし野のたのむによるの鴈にやなるら（む）』

雨中鴈

一二五五 ~~ふも雨ににしめる文字のよもちしてよみもとかれぬ鴈の玉ゆき~~ *龍頭、朱ニテ「宮内省入」トアリ、↓【一四三二】

曉初鴈

一二五六 さし櫛のあかつきおきに聞ゆなりとこ世を出しはつかりのこゑ』

深更鴈

一二五七 まちわひし雲井の鴈のたまつさを夜ふかき窓のつきに見るかな』

旅中（中）鴈

一二五八 ふるさとへやる文章をかきさしてなかむる空にわたるかりかね』

（三行分空白）一九ウ

（河）川朝霧

一二五九 舟よするふしみの里はあけにけりまた夜を残すよとのかはきり

一二六〇 朝日山けさはかけたに見えぬかな水かみふかき宇治のかはきり』

湍朝霧

一二六一 朝風をまちとる舟のほのくといまかはるら（む）利根のかはきり』

湖上霧

一二六二 富士の嶺のふもとも見えすせのうみもつゝみこめたる秋の朝霧』

古渡霧

一二六三 霧ふかみそことも見えすしかすかの渡に舟をよふこゑはして

一二六四 夕きりそたちへたてけるすみた川渡りのふねもありやしやと

一二六五 さゝかにのもくてにかけし八つ橋の渡りも見えすきり深くして』

たのむしんまをさへく 八橋のわらふもなを霧深くして
*刊本

(一行分空白)「二〇才

隼上霧〈堤〉 *次掲図版参照



一二六六 ひく人もひかるゝ舟も見えぬまで淀かはつゝみきりたちわたる』

(以下空白)「二〇ウ

擣衣

一二六七 秋風によもきのかみをけつらせて麻のさころもうつはたかつま

一二六八 きく人のなみたもよほす聲そとも知らてやしつかころも擣ら^(む)』

擣衣

一二六九 みちのくの半^(む)冊のせは布あひかたき妻こひころも妹やうつら^(む)』

擣衣幽

一二七〇 水上のせき屋の里かすみた川ありやしやにころもうつこ^(む)多』

(一行分空白)

月前擣衣

一二七一 かけうつす月のひかりもまきこめてたれ白妙のころもうつら^(む)』

一二七二 久方のそらにきこゆるさ夜きぬた天津少女やつきにうつら^(む)』

一二七三 秋の夜の月清ければ誰かさともいひ合せてやころもうつら^(む)』二一才

風前擣衣

一二七四 秋風にうらむる聲そきこゆる真^(ま)々^(ま)のころもたれかうつら^(む)』

一二七五 さそひ来る風しあらずはさよころもうつたへにわか袖ハぬらさし』

深夜擣衣

一二七六 みどり子の乳ふきはなれてぬる夜半を待ちてやしつか衣ありゆらん』

深夜擣衣

一二七七 老らくかよひまとひして寐覺してきくは夜中のきぬたなりけり』

浦擣衣

一二七八 秋ふかくなるみの浦にあまの子かうつやめゆひのころもなるらん』

一二七九 浦とほく風のまに／＼聞ゆなるきぬたはなみの擣にやあるらん』

一二八〇 こゝもとに浪のよる／＼聞ゆるは須磨の浦わのきぬたなるらん』

一二八一 三保の浦の松の木かけにきこゆなり天津少女やころも打らん』

(一行分空白) 一二二ウ

水郷擣衣

一二八二 ころもうつ音も流れて水無瀬川ありとしらるゝやまもとのさと』

名所擣衣

一二八三 卯の花の雪にさらせる手つくりを月にうつなりたまかはのさと』

山家擣衣

一二八四 山鳥の尾のへへたてゝしつの女かつまゝちころも今宵うつらん』

(以下空白) 一二二オ

(半面空白) 一二二ウ

朝 鶉

一二八五 伏見より朝たち来れはおく露のふかくさの野にうつら鳴くなり』

夕 鶉

一二八六 まのゝ浦や尾花なみよる夕風にかくろへかねてうつら鳴くなり』

故郷鶉

一二八七 かりにたに人はとひ来ぬ故郷になとかくろへてうつらなくらん』

一二八八 神垣のひろきみかけにかくれつゝなと世の中をうつらなくらん』

* 籠頭、朱ニテ「宮内省人」トアリ、↓【二四三二】

(二行分空白)

野分

一二八九 さきましる男をみなのはな園をうしろめたくも吹く野わきかな』二三才

(半面空白)「一二三ウ

九月九日

一二九〇 今日をせに植しまかきの菊のはなをりとするはかり咲にけるかな

一二九一 うちむれてのほる山路の菊の花つみてひさこのさけにうかへ^(む)』

植菊待花

一二九二 移し植て一日を千^(せ)竹の秋としもまつさへ久ししらすくのはな』

伴菊延齡

一二九三 をりかさす菊とかしらのしら髪といつれか千世のいろ^(小見ゆゆ世)まさるさ^(む)』

折菊

一二九四 をりとりて見れば黄菊もましりけり霜夜の月のしらすくのはな

一二九五 菊の花をりてやまた^(む)しる妙のそてふりはへてひとも来るかに

一二九六 酒つほにをりてさしたる白菊の^(花に)水^(む)には酔へるいろもましれり』

(二行分空白)「一二四オ

菊有新花

一二九七 うつろへる中^(ま)にい^(ま)きさく花もありていよく久し菊のさかりは

一二九八 うゑなへしまかきの菊のかすを多み去年まては見ぬ花も咲けり

一二九九 仙人のめつるものとも見えぬまてときめく菊のはなもさきけり』

菊花盛久

一三〇〇 きくの花またせしほと久しさをとりかへしても見る盛りかな

一三〇一 露^(し)も「露^(し)の」おきなさひせる白菊ははなのさかりもひさしかりけり

一三〇二 あたにのみさき散る花にならぬや千世ふる菊の心なるら^(む)』

月前菊

一三〇三 あたしいろは月のひかりにけおされてひとりさやけき白菊の花』

雨中菊

* 龍頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

一三〇四 秋の雨はいたくな降りそ一年の花のとちめときくのさかりに
一三〇五 おもほえず千年やへな(む)きくの花さくやま里にあまやとりして
(二行分空白)「二四ウ

山路菊

一三〇六 かくれすむ人もこそあれ山松のかけふむみちにきくのにほへる』

水邊菊

一三〇七 さゝれゆく野川の水にかけ見えて香さへ流るゝしらきくのはな』

籬菊

一三〇八 咲きにけり日長きはるの手すさひに植しまかきのしら菊のはな

閑庭菊

一三〇九 山人のすみかにいつか来に(む)け(む)と思ふはかりのにはのしら(きく)ゆ(ま)』

小柴垣と名つきたる菊を題(お)に下 ※詞書、次掲図版参照



一三一〇 白菊のさきこほれたる小しはかきものかたり繪の心地こそすれ』

菊の繪に(か)ま(ま)ゆ(ゆ)(く)

一三一 千世かけて見るへかりけり咲しより散るといふことは白菊の花』二五才

菊の籬に鶯のとまれるかた

一三一二 鶯もたつね来にけりさく(め)く(め)ゆ(め)花のおとゝときくのまかきに』

(六行分空白)

蔦

一三一三 来る人もたえしついちのくつれよりはひかゝりけり蔦の(す)み(み)ち(ち)は(は)』

疎屋蔦

一三一四 黒木もてたてたる小屋もくれなるに匂ふは(貼紙)「葛(葛)蔦(蔦)」のもみちなりけり』

(二行分空白)「二五ウ

紅葉

一三一五 秋このむ人に見せはややま姫かよそほひたてしもみちかさねを』

紅葉

一三二六 おりいたす言葉のあやもおよはぬは染る紅葉のにしきなりけり』

紅葉

一三二七 もみち葉に心をそめてあき山そわれはとわれもいはれけるかな』

待紅葉

一三二八 小倉山いまひとたひの露霜を「（貼紙）い↓ま」ちてや見ましみねのもみちは

一三二九 露霜のまたそめあへぬ紅葉にもこかるゝものはこゝろなりけり』

紅葉待霜

一三三〇 水くきの「か↓を」かへの木々の薄紅葉ねてのあさけのしもやまつら（む）』
（一行分空白）「二二六才

紅葉待霜

一三三一 あかつきの霜やまつら（む）もみち葉は夜の間の露をした染にして』

初紅葉

一三三二 夕（月）夜ををくらの山のうすもみちしたてるまてはいつか染むら（む）』

紅葉浅

一三三三 くちなしの色に出にけりうす紅葉からくれなゐのした染にして』

紅葉深

一三三四 をくら山今ひとしほの露しもをまつはかりなるみねのもみち葉』 *龍頭、墨ニテ「重」トアリ、↓【一三二八】

紅葉深

一三三五 いつしかと秋たけなはになるまゝに紅葉も酔をつくしけるかな

一三三六 いく時雨いく露霜かそめつら（む）千しほににほふ木々のもみち葉』 *龍頭、朱ニテ「✓」、ソノ上ニ朱ニテ「■」アリ
（三行分空白）「二二六ウ

紅葉深

一三三七 秋の巾もやまたけなはになりけらし紅葉も酔をつくすいろかな *龍頭、墨ニテ「重」トアリ、↓【一三二五】

一三三八 小く時雨いくゆ霜はそめ川のましの木の葉のい（む）わに（む）い（む）わ（む）』 *龍頭、朱ニテ「✓」、ソノ上ニ朱ニテ「■」アリ

或家（さ）は（さ）当座に紅葉深へといふことを *詞書積文、修正最終形ヲ示セリ、次掲図版参照



一三二九 露しものこゝろおきなくくむ酒に紅葉も多ひをつくすいろかな』

紅葉浅深

一三三〇 そめのこすかたもありけり唐錦はたはりひろきやま「もみ↓のも」みちは

一三三一 ふもとより色つく木々は山姫かすそ濃にそむるころもなるら^(む)』

紅葉處々

一三三二 あをかりし稻荷の山もしくれする小倉のみねもみちしにけり』

折紅葉

一三三三 あそひ飲む人のおもてもをりかさす紅葉の色におとらさりけり』

(二行分空白)「二七オ

紅葉見にいきける時通すから

一三三四 ぬす人のたつたの紅葉折りとは山のとねともいはるへきかな

一三三五 もみち狩けふのえものはあるか中にいろこき枝ををれるなりけり』

月照紅葉

一三三六 なか／＼に夜の錦もいろはえてみねのもみちをてらすつきかけ』

雨後紅葉

一三三七 くれなるのふりいてゝ匂ふ紅葉は[↓]一村さめのはれてなりけり』

霧中紅葉

一三三八 うすものをおほふ錦はあき霧のたつたのやまのもみちなりけり』

霧中紅葉

一三三九 にしき著てうはおそひせる色なれや霧たちこめし山のもみち葉』

(二行分空白)「二七ウ

夕紅葉

一三四〇 散るもみちたきてや酒をあたゝめ^(む)山かせさえて日は暮んとす』

山紅葉

一三四一 由妙のまわもほすてふ夏すきてにしきをさらすあまの香具やま』

*籠頭、墨ニテ「重」トアリ

山紅葉

一三四二 我このむ人に見せはややま姫かよそほひたてしもみちかさねを』 *龍頭、墨ニテ「重」トアリ

山路紅葉

一三四三 下もみちわけゆく山のつゝらをりいくへたゝめる錦なるらん』 *龍頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

山中紅葉

一三四四 下もみちわけゆく山のつゝらも折りいくへたゝめる錦なるらん』 *龍頭、朱ニテ「重」トアリ

暮山紅葉

一三四五 からにしきたゝまくをしき木陰「?↓か」な紅葉かつ散るゆふくれの山

一三四六 夕月夜をくらの山はもみち葉のかけはかりこそくれのこりけれ』二八才

谷紅葉

一三四七 あやふさもわすれてたちて見つるかな細谷川のきしのもみち葉

一三四八 たなはたの逢ふ瀬にはあらぬ谷川にもみ「み↓ち」の橋を誰か渡しけれ』 *龍頭、朱ニテ「重」トアリ

谷紅葉

一三四九 たどりゆく山のかげ路のあしもとに木末見おろす谷のもみち葉

一三五〇 高彦根かみのひかりもかゝりけれん三谷てりわたる木々の紅葉』

海邊紅葉

一三五一 風あらし磯に寄せてはかへるてもみちのにしきあらふしら浪

一三五二 うちよする浪にぬるてもみち葉は時雨もまたて色まさりけり』 *龍頭、朱ニテ「✓」、ソノ上ニ朱ニテ「■」アリ

海邊紅葉

一三五三 もちよする浪にぬるてもみち葉は時雨もまたて染んすぬん』 *龍頭、朱ニテ「✓」、ソノ上ニ朱ニテ「■」アリ、続ケテ下ニ朱ニテ「重」トアリ

瀧邊紅葉

一三五四 しら糸をからくれなるに染かへて紅葉をさらすぬのひきのため』

(一行分空白)「二八ウ

瀧邊紅葉

一三五五 ふたら山あけて見つれば霧降のたきのあたりはもみちしにけり

一三五六 酒の香もありときこえし瀧津瀬に多へるかこと「か↓き」木々の色かな』

池上紅葉

一三五七 さゝなみのあやおりいつる池水をゆはたに染るきしのもみち葉』

庭紅葉

一三五八 庭もせの木々の紅葉のいろ見れはあるしも秋にこゝろそむらぬ^(む)

一三五九 いつこをかさらに尋ねぬ^(む)秋ふかき庭のもみちをぬなからに見て』

庭紅葉

一三六〇 ひとむらの庭の紅葉は野に山にこゝろをそむるはしめなりけり』

垣紅葉

一三六一 色ふかき葛のもみちはつきひちのくつれよりこそはひ掛りけれ』二九才

田家紅葉

一三六二 千々の葉も黄葉のいろにいてにけり秋をさめする小山田の朧と^(か)

旅中紅葉

一三六三 紅葉散るたつたの山を秋行けはすりもはたこもにしきなりけり』

古寺紅葉

一三六四 大寺にはのもみちは法の師のころものいろにそめてけるかな』

瀧の川紅葉

一三六五 もみち葉の名の紅葉見にゆきて^(の)瀧の川いほうつおともきこえさりけり』

杜紅葉

一三六六 からにしきそめかけけりな白髪のもりの木末もおきなさひして』

にしき木

一三六七 もみち葉のなにはあれとも錦木の名におふ色のめつらしきかな』

(一行分空白) 二一九ウ

惜 秋

一三六八 今さらになど惜しむらぬ^(む)うしといひ悲しと思ふあきのわかれを

一三六九 きさらきの花にもまさるもみち葉の散り行く秋を誰か惜しまぬ』

暮 秋

一三七〇 くれてゆく秋も今はのころも手になみたしくる^(この)此ゆふへかな』

暮秋月

一三七一 秋ふかみ木末にゑめるいか栗のわれていてたるつきのかけかな』

暮秋冊

一三七二 入るを惜しみ出るを待ちし月影もいまはつかになれる秋かな

一三七三 月の舟雲のなみ間に流れ行くあきのとまりやいつこなるら(む)

一三七四 月の入る西の山邊に閑すゑてくれゆくあきをとゝめてしかな』

暮秋冊

一三七五 秋ふけし今宵のつきのかけすみてはた寒かりもなきて来にけり

一三七六 色にほふますほのすゝき秋ふけて白くも見ゆるつきのかけかな』三〇才

暮秋風

一三七七 いまさらにおとろかれけり冬近み時雨をさそふあきのやまかせ』

暮秋擣衣

一三七八 冬もやゝ近きとなりの賤の女かときあらひころも急きうつなり』

暮秋鹿

一三七九 紅葉散りつきかけおちて行く秋ををしか鳴く(り)な山かけにして』

九月盡

一三八〇 くれて行く秋も今頃のころも手になみたしくるゝこの夕へかな』

秋 天

一三八一 鴈か音もあはれくといふ文字をかきつらねたる秋のそらかな』

(四行分空白)「三〇ウ

(四行分空白)

秋 晴

一三八二 夕日影あかさあきつの群れて飛ぶそらには迷ふしらくももなし』

秋 晴

一三八三 露わけし袖もかはけりあき裕うらめつらしくはるゝ日かけ(に)』

津輕伯(補)《爵家》の小石川の別業にて 山家秋へといふことを

一三八四 夕霧のまかきのやまに鳴く鹿のこゑもまきれぬやとのしつけさ』

秋 山家

* 龍頭、墨ニテ「重」トアリ、↓【一三七〇】

* 「いふ」ノ「い」字、墨書ノ上カラ朱書デナゾリ書

一三八五 さひしさはさもあらはあれ山里のこゝろすさひは秋にさりける』

(一行分空白)「三二一才

秋吉野山(秋) * 龍頭、朱ニテ「✓」、ソノ上ニ朱ニテ「一」アリ、詞書「秋」字、朱書ニテ〇ヲ重ネ書

一三八六 みよし野の山は紅葉もさくらにてやまとにしきを織り出にけり』

山家秋深

一三八七 里の子にとりつくされて山柿の木すゑさひしくなれるあきかな』

山中秋深

一三八八 山松のおち葉にまじる茸の香のふかくもあきはなりにけるかな』

(以下空白)「三二一ウ

(二行分空白)

茸 狩

一三八九 散りつもる松のふる葉の下にこそいまおひ出るたけはありけれ

一三九〇 ふみわくるわかあしもとにある茸を知らてよそをも尋ねけるかな

一三九一 紅葉かりまた時はやし松やまのはつたけかりにいてたちて見れ

一三九二 この秋のはつたけかりにいさゆか^(む)日を降^(降)る雨も今日晴にけり』

七月はかり蟬の聲をきゝて

一三九三 いたつらに今年もなかは過ぬ^(にけり)を^(つ)つく^(く)をしと蟬の啼くなる』

秋神祇

一三九四 榊葉にますみのかゝみとりかけし神代をてらすつ^(き)よみのもり

一三九五 石清水すめるやあきのつきかけにはなちし魚のかけも見えつゝ』三二二才

川田小一郎君の土佐國なる別業にて今年始めての秋

をさめを祝ひて

一三九六 浅からぬ君かこゝろの深田には水穂のをしね八束たりけれ』

おなし新米をいとようるはしき新藁の俵に入れて親

しき人々におくられけるを

一三九七 秋の田のかりそめならぬこゝろをもいれてや見する米の俵に

あるしに代りて

* 龍頭、朱ニテ「宮内省入」トアリ、↓「一四三三」

* 龍頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

一三九八 年ありていねつむ秋の庭すゝめをとるはかりもうれしかりけり
(六行分空白)「三三ウ

數よみ十五首 *以下二行、修正最終形ヲ示セリ、下掲図版参照

初秋風

一三九九 たなはたのあふ夜や近くなりぬら(む)天のかはらをわたる秋かせ

夕露

一四〇〇 夕されはおく露おもくなりぬら(む)しをれて見ゆる軒のしたをき

野菽

一四〇一 小男鹿もかよひ来ぬへく秋のいろをはきにあけても見する野邊かな

岡薄

一四〇二 夕月夜さすか「岡(貼紙)↓た」の「?(貼紙)↓は」なすゝきほの(う)朧(う)きかけの見えわたりけり

路女郎花

一四〇三 ゆくりなき路ゆきすりの女郎花をらてす「て来る(貼紙)↓くるか」をしくもあるかな』

庭菫萱

一四〇四 つくろはぬ庭のかるかやいとゝしく心のまゝにうちみたるら(む)

行路蘭

一四〇五 ふみわくる野中のみちの藤はかまのこる匂ひもなつかしきかな』三三才

夜虫

一四〇六 月影のふけゆくまゝにあさ茅ふの虫の音たかくなりけるかな

曉初鴈

一四〇七 うちわたす野末の森に月おちてあけかたさむきはつかりのこゑ

山「鹿(貼紙)↓×」鹿

一四〇八 宮城野のはさか花つまよはふらししのふの山に(さを)小(さを)鳥しかのなく

江鶉

一四〇九 夕日影比良のたか嶺にかくろへて(まの)菓(まの)野のいり江にうつら鳴なり』

澤鳴

一四一〇 あまたゝひ鳴の羽根かき音すれと野さはの水はにこらさりけり

丁
數
よ
み
十
五
首
初
秋
風

河上霧

一四二一 信濃路もこし路もわかす立わたる川なかしまのあきのあさきり

舟中月

一四二二 蘆間より一葉のふねをさしいてゝさはるものなき月を見しかな』三三ウ

暮秋月

一四二三 たちまちも居まちもすきて秋もはやはつかに残る月のかけかな』

(一行分空白)

〔明治〕二十四年九月十七日良夜にあたりければとて松浦伯〔爵〕

ゆ家にて人々とともによめる十五首

*詞書、修正最終形ヲ示セリ、次掲図版参照



〔山中月〕^(貼紙)×〕山中月

一四一四 なか／＼にまたきかくるゝ峯もなし山また山にすめるつきかけ

山家月

一四一五 てる月のみやこの人も見せはやな山さとふかくすめるひかりを

松間月

一四一六 月影はいつくはあれと庭^(ま)未^(ま)つ^(ま)の木の間はなるゝをりそうれしき

閨中月

一四一七 しとけなくねたるすかたの我ながら恥かしきまで照る月夜かな』三四才

寄月初戀

一四一八 玉たれのをすのとまやの夕月夜ほの見てしより思ひそめてき

寄月尋戀

一四一九 秋の夜のつきぬ思ひにしるへなきやみ路をさへもたとりつるかな

寄月稀戀

一四二〇 まつ人はこのころうとく^(り)な^(り)にけり夜な／＼月の影はさせとも

寄月待戀

一四二一 来ぬ人をみまぢふし待（補心）《ち》まつほとにつこもりにさへ夜はなりにけり

月下菼

一四二二 白露もこかねのたまと見ゆるかな月かけやとるにはのはきはら

寄月祝民

一四二三 にひしほりくみつゝあそふ里人の聲にきはしき夜半のつきかな

月前薄』三四ウ

一四二四 わたつみにまかふ尾花の浪の上をわたるは月のうさきなりけり

橋上月

一四二五 ふみならず里の板橋つきかけのしもにはあともとゝめさりけり

蘭薰枕

一四二六 藤はかまたかぬきおきて秋風のつけのまくらの香（に）水（む）にほふら

秋 霜

一四二七 ひつちさへ花さきぬやと思ひけり年あるあきの小田のはつしも

故郷菊

一四二八 いく夜（秋）も根はかれずしてさきにけり年ふる郷のにはのしらきく』

（五行分空白）一三三五才

（半面空白）一三三五ウ

明治十六年御内命によりて宮内卿へ差出候三十首の

中秋五首 〈徳大寺宮内卿より 御内命のよしをもておほせことをかうふ〉

初秋月 りければ短冊にしたゝめ奉りたる三十首の中秋五首〉

一四二九 秋来ぬと今宵しるしも久かたのつきにかゝれるくものふるさと *↓【一〇六七】

夕草花

一四三〇 水そゝくゆふへよりこそまたれけれ咲くら（む）明日の朝顔のはな

雨中鴈

一四三一 ふる雨中にしめる文字のこゝちしてよみもとかれぬ鴈の玉章 *↓【一二五五】

夜擣衣

一四三二 みどり子の乳房はなれてぬる夜半を待ちてや賤かころも打ら（む） *↓【一二七六】

山中秋深

一四三三

山松の落葉にまじるたけの香のふかくもあきはなりにけるかな』三六才
(半面空白) 三六ウ

*↓【二三八八】

【第四冊・冬】

〈二百九十七首〉

〈読了〉

櫛紅葉 冬

四「前表紙

*前表紙料紙ト見返シ料紙ノ間、前表紙裏天部ニ貼紙アリ、次掲画像参照



*「五卷」ト墨書サル

「前表紙見返し

櫛紅葉

(二行空白)

冬歌

(二行空白)』

(二行空白)

初冬風

一四三四 冬の来てふたか^(む)んと思ふ北窓に木の葉吹き入るゝ山おろしの風』

初冬時雨

一四三五 ゆくりなくふり出にけり神無月時雨も今日やはしめなるら^(む)ん』

初冬朝

一四三六 さとの子かもち引かくる朝鳥のこゑかしかましふゆは来にけり』

海邊初冬

一四三七 百川のおちいる海のみなとくち「なかれてふゆ^(貼紙)もみちなかれ」てふゆは来にけり』

初冬田家

一四三八 小山田のをしねも今はかりはてゝ麥のたねまくふゆは来にけり』一才

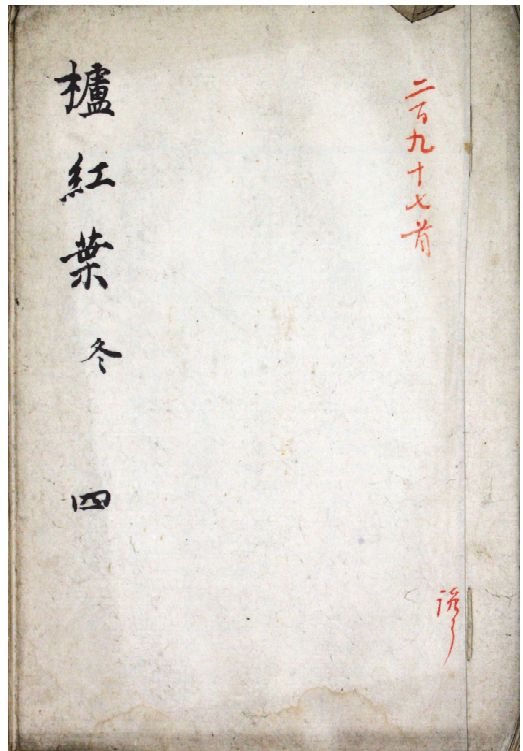
初冬田家

一四三九 小山田のをしねもいまはかり果て麥のたねまくふゆは来にけり』

山家初冬

一四四〇 山里の岩井のみつをくみあけてけふりにふゆのたつをこそ知れ』

*籠頭、朱ニテ「重」トアリ



第四冊【前表紙】

時雨

一四四一 晴くもり日かけみしかき神無月いそかはしくもふるしくれかな』

時雨

一四四二 定めなきそらとさためし神無月今日もしくれのはれくもるら^(も)ら^(む)』

初時雨

一四四三 小倉山いまひとしほの紅葉はをまつにかひあるはつしくれかな』

時雨知冬

一四四四 冬来ぬと時雨やそらにさたむらん^(ま)ことしもときを違へさりけり』

(一行分空白)一ウ

〔月↓×〕月前時雨

一四四五 月影にひとむらかゝるうき雲のゆくへも見えてふるしくれかな』

一四四六 ひとしきり月をよこきる村雲はいつくにかゝるしくれなるら^(む)』

夕時雨

一四四七 西山に日もかけろふの夕されは晴れ間も見えずふるしくれかな』

夜時雨

一四四八 鴈か音もまくらに^(ち)むらなく聞ゆなりひとむらすくる夜半の時雨に』

寐覚時雨

一四四九 ねさめするまくらよ^(補入)まつおとつれて^(あと)躰^(む)より^(む)暈るさ夜しくれかな』

遠山時雨

一四五〇 山崎のをこしに見ゆる村^(雲)まゆは人はたにかゝるしくれなりけり』

一四五一 香具山に日はさしなから雲きほふ畝火みゝなししくれふるなり』二才

遠山時雨

一四五二 山崎のをまじしに鬼ゆあ村くもは人はたにかゝあしくれなりけり』 *籠頭、朱ニテ「重」トアリ

行路時雨

一四五三 袖笠にしのかはかりの村しくれくものあしきへとくすきにけり』

一四五四 二人連れあひかさにしてゆく人のかた袖ぬらすむらしくれかな』

(以下空白)一ウ

落葉少

一四五五 吹きちらす嵐のにはの木々の葉はおもひしほとも積らさりけり』

落葉深

一四五六 谷川の浅瀬のみつはふゆかれておち葉のふちとなりけるかな

一四五七 あすか川きのふの淵を今日見れば瀬にかはるまで散る木の葉かな

一四五八 もみち葉はふみわけかたくなりぬら^(む)通ひし鹿の聲も聞えず

一四五九 ふみわくる小鳥のあしもうつむまで垣根の木の葉散り積りつ』

落葉埋水

一四六〇 散りつもる落葉かしたの埋れみつさら／＼音もたてすなり『^(貼紙)き↓に』き』

風前落葉

一四六一 うちむれてとふ千鳥かとするはかり磯山かせに散る木の葉かな』

瀧邊落葉

一四六二 冬~~か~~れてお~~つ~~るもほそき瀧壺にうつまくはかり散る木の葉かな』三才 *鼈頭 朱ニテ「宮内省入」トアリ、↓【一七四〇】

曉庭落葉

一四六三 散りしける庭の木の葉の霜の上に月さへおつるあけかたのそら

一四六四 霜しろくあけゆく庭に散り来るやつきのかつらの紅葉なるら^(む)』

行路落葉

一四六五 道の邊のやなきはかれて落葉のみふまるゝ陰となりけるかな

一四六六 冬かれしすさか大路のやなきかけこのころふむは落葉なりけり

一四六七 大和川こえてきつちのみちの邊におつるや奈良の古葉なるら^(む)』

車中落葉

一四六八 坂みちをおろしかけたる小車のとまりもあへす散るもみちかな』

閑庭落葉

一四六九 吹きよせて風のつくれる筑「波山^(貼紙)↓山は」はらはぬにはのおちはなりけり』

(二行分空白)「三ウ

社頭落葉

一四七〇 立ましる紅葉は散りていなり山すき間にのこるあけのたまかき

一四七一 廣前にぬかつきををれはしゝしものひさゆ^(つ)うへにも散る木の葉かな
一四七二 かきくもりしくるゝ山のもみち葉は鏡のみやに散りかゝりつゝ』

社頭落葉

一四七三 かきくもりしくるゝ山のもみち葉は鏡のみやに散りかゝりつゝ
一四七四 ひろまへに額つきをれはしゝしものひさの上まで散る紅葉かな』

* 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

* 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

(以下空白)「四才

残菊

一四七五 おく霜にまか^(イギ)ゆ色になり^(イギ)にけりうつろひまさるしらきくの花』

* 朱ニテ抹消箇所、次掲図版参照



残菊

一四七六 さらにまた色こそまされ神無月^(し)くれふりにしにはのしらきく』

残菊久

一四七七 すみよしの松の木陰に千世しめて残るもひさししらきくのはな』

残菊帯霜

一四七八 白きくの花におきたるあさ霜をきせわたるとも思ひけるかな

一四七九 うゑなへしまかきの菊はおく霜にやつれてのちの面しろきかな』

(三行分空白)「四ウ

残菊映水

一四八〇 もみち葉は散りて流るゝ山川にかけさへのこるきしのしらきく

一四八一 むすふ手に千代のにほひや残るら^(む)うつろひまさる菊のした水』

(二行分空白)

残紅葉

一四八二 色あせて散りのこりたる紅葉はふるきにしきのさいてなりけり』

(二行分空白)

朝霜

一四八三 月に啼くうかれからすとおもひしをおく霜白くあけぬこの夜は

一四八四 よもすからまかひし月の影きえておくしも白くあけぬこの夜は』五才

庭上霜

一四八五 庭の面の池にわたせる板橋のしもにはひとのあとたにもなし』

行路霜

一四八六 今朝みれはお「き↓く」霜しろし昨日かも「あらねらし↓敷（貼紙）ならしてし」みちのまさこに』

閑庭霜

一四八七 庭に来てあさる小鳥のあしおとも聞ゆはかりにおけるあさしも

一四八八 菊はかれ紅葉は散りて庭の面はしものはなこそさかりなりけれ』

山家霜

一四八九 山かつか今朝はみやこに出にけらし霜にあとある谷のかけはし』

樵路霜

一四九〇 この朝けおくしも白し柴人かくろ木をはこふ小野のやまみち』

（二行分空白）五ウ

枯野篠

一四九一 色かへぬ野邊の小さくは八千くさの冬かれてこそ顯はれにけれ』

寒樹風

一四九二 散りはてゝ残る木の葉もなきものをいつまでとてか嵐吹くら（む）』

静岡にて（こからしのおとをきゝて）嵐（嵐）

*詞書釈文、修正最終形ヲ示セリ、次掲図版参照



一四九三 する河路はおとにきこえし木枯のもりのあらしも世に似さりけり』

おなしころ

一四九四 世の風をいとふ野中のひとつ屋にあなかまけふもあらし吹くなり』

（一行分空白）

寒松

一四九五 木本人ややすゆ野路のかま松をますかた冬はかけのまひしま *鼈頭、朱ニテ「宮内省入」トアリ、↓【二七四四】

一四九六 いつはあれといつくはあれと冬かれの庭にそ松は時めきにける

一四九七 さゝかにのくもてに繩を引はへてゆきをれいとふ庭のまつか枝』六才

寒松風

一四九八 ふる葉みなさそひつくせる木からしに冬こそまされ松のみとりは

一四九九 木からしの古葉は散りてなか／＼にみとり色ますにはの松か枝

一五〇〇 冬こもりしつけき庭のまつかせは音せぬよりもさひしかりける』

寒松風

一五〇一 山風にまつの実おつる音すなりのこるふる葉やいまはなからし』(む)

山寒松

一五〇二 木からしにふきさらされて山松もすこしやせたる冬のかけかな』

(以下空白) 六ウ

(一行分空白)

寒草

一五〇三 みたれてもあしけくはあらぬ荻萱のかれたるもはたなつかしきかな』

寒草少

一五〇四 かれふして見ればさまでもなかりけり茂りしまゝの庭の八千草』

寒草所々

一五〇五 むさし野のつゝきか原の枯尾はなと「ろ↓こ」ろ／＼にたかく見えけり』

岡寒草

一五〇六 見わたしの岡邊の草はふゆかれて「?(貼紙)↓(駒)鈴」をとゝめ(む)んあを葉たになし』

岡寒草

一五〇七 みわたしの岡邊のくさは冬かれて駒をよゝめ(む)ん青葉たになし』 * 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

野寒草

一五〇八 霜しろき武藏野の原にひとものゆかり色濃きりんたうのはな』七才

野寒草

一五〇九 駒止め(む)ん青葉も見えず草のはらあさゆふしものはなは咲けども』

(三行分空白)

江寒蘆

一五二〇 風わたる江口のあしは冬かれてよす「かる舟↓るふね」にもさはらさりけり
一五二一 水鳥のかもの青羽にいろかへてふる江のあしはしもかれにけり』

氷初結

一五二二 はしためかことくしくもい「はふはかり^{（貼紙）}↓ふはかり廚」屋の水はこほり初けり』

氷初結

一五二三 薄こほりむすひそめけり池水のそこにはうをのかけも見えつゝ

一五二四 かれはてし岸のやなきの糸なからむすひそめけり池のうすら^{（ひ）}氷』七ウ

河水初氷

一五二五 涼みせし川瀬を見ればなつむしの知らぬ^{（貼紙）}上ほりそ結ひそめける』

江水初氷

一五二六 白銀をのへて張りたるこゝちして太刀つくり江は氷りそめける

一五二七 かけ見えし岸の紅葉も散りはてゝ蔦のほそ江はつらゝるにけり』

瀧「氷^{（貼紙）}↓×」水

一五二八 岩間にはこほりむすへといくすちか^{（井掛つゝあ）}とけてみたるゝ瀧のしら糸』

（三行分空白）

細流水

一五二九 道の邊のひととやなき冬かれて清水にむすふうすこほりかな』

（一行分空白）八才

池 氷

一五三〇 風さやく難波のあしのを寒みひまなくこほるこやのいけみつ

一五三一 あつこほりむすひ^{（と）}氷めけり池水にたゝよふにほの浮巢なからに』

池水半氷

一五三二 かたわれてうつりし月のおもかけにこほりも結ふにはの池みつ』

井 氷

一五三三 筒井つゝあつゝにむすふうすら氷はたかくみあけし名残なるら^{（む）}氷』

田 氷

一五三四 ますら男かかりをさめてし小山田を冬来て^{（はる）}春はこほりなりけり』

* 龍頭、朱ニテ「宮内省入」トアリ、↓【一七四二】

一五二五 筑波山しけき木陰もふゆかれてしつくの田居はつらゝるにけり』

(一行分空白)八ウ

冬 月

一五二六 ふりはへてとふ人もなし雪よりもてる影さゆるふゆの夜のつき

一五二七 ふたつみつおくれで渡る鴈か音のかけ「さ↓も」寒けきふゆの夜のつき』

冬 月

一五二八 いかにせん吹く風さゆる閨の戸もさすかにをしき冬の夜のつき

一五二九 つるきたちさやかに見ゆる光かなおく霜しろきふゆの夜のつき』

冬 月

一五三〇 なきもせてかまとに来ゐるこほろきの見ゆるも寒し冬の夜の月

一五三一 おいにたるおむなのけはひおもほ「?↓え」てかけすさましき冬の夜の月』

澗庭冬月

一五三二 木の葉散りゆく水かれし谷川のいは間にこほるふゆの夜のつき』

湖上冬月

一五三三 二荒山雪よりいてゝみつうみのこほりを照らすふゆの夜のつき』九才

水上冬月

一五三四 権ますは木漕ぐ舟のこほりをくたく川水にわれてうつれるふゆの夜のつき *鼈頭、朱ニテ「宮内省入」トアリ、↓【一七四三】

一五三五 小書木の葉散り行く水かれしたに川のこほりと見ゆる月のかけかな』 *鼈頭、墨ニテ「澗庭冬月」と同趣故省く」トアリ

池上冬月

一五三六 池水にうかへるをしのつるき羽にひかりを添ふる冬の夜のつき』

野冬月

一五三七 秩父嶺の雪のひかりもかつ見えて月かけさむしむさしのゝはら』

野冬月

一五三八 かりくらしかへるたもとに宿りけり交野のみのゝ冬の夜のつき』

社頭冬月

一五三九 みかゝれし御影の石のたま垣にひかりかゝやく冬の夜のつき』

(三行分空白)九ウ

霜夜月

一五四〇 白露をむすひかへたる霜の上にしもをかさぬる夜半のつきかけ
一五四一 霜はらふをしの劍羽さやかにもひかりをみかくふゆの夜のつき』

* 鼈頭、墨ニテ「池上冬月」と同趣省」トアリ

寒山月

一五四二 くもりなき光もさむし焼太刀のとなみのやまのふゆの夜のつき』

寒山冊

一五四三 おほかみのほゆる高嶺にかけさえて身の毛もよたつ冬の夜の月』

寒山冊

一五四四 きりいたす石のひかりもきらめきて白河山にさゆるつきかけ』

池寒月

一五四五 かたわれてうつれる月の影はかりなほこほれる庭のいけみつ

一五四六 池の面のこほりの上においてつきて（光りをさむる冬の夜の月）十一冊の冊やひかりをさむる』

* 鼈頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

（一行分空白）「一〇オ

寒月浮水

一五四七 月影の流るゝ見れはおちたきついは間のみつはこほらさりけり

一五四八 谷川のこほりのしたをゆく水のすきとほりても見ゆるつきかな

一五四九 花紅葉うつりし水もふゆかれてひとりなかるゝつきのかけかな』

寒閨月

一五五〇 かへしろの朽木かたさへうらさひし閨のひまもる冬の夜のつき

社頭寒月

一五五一 くもりなきみかけの石の鳥居さへひかりさ（社頭）やけき冬の夜のつき

一五五二 かたそきのゆきあひの間よりおく霜のひかりもさむし冬の夜の月

一五五三 水鳥の加茂のやしろのみたらしにこほりて浮ふふゆの夜のつき』

（以下空白）「一〇ウ

衾

一五五四 麻ふすまきその山路のさよ風に木の葉をさへもかさねけるかな

一五五五 しらゆきのふる（補入）《と》も知らすくれなるのこ染の衾かさねぬる夜は』

夜 衾

一五五六 むらさきの根すりの衾かさね来てすみれつむ野を夢に見しかな

(二行分空白)

遠千鳥

一五五七 とほさかる友よひつきの濱千鳥あるかなきかに聲のきこゆる』

海邊千鳥

一五五八 濱千鳥こゑちり／＼に飛ひきえて文字の浦にもあととはとめす』

(一行分空白) 一一一才

浦千鳥

一五五九 すみよしの松の木陰に鳴く千鳥千代をかそふるこゑかとそきく

一五六〇 海人かほすあみの浦わのさよ千鳥目にこそ見えね鳴く聲のする』

瀉千鳥

一五六一 をりしもあれ月の出しほの清見潟寄せ来る浪に千^(ち)とり鳴くなり』

河千鳥

一五六二 ふけぬるか筑波嶺おろしさえ／＼てみな瀬川に千鳥なくなり』

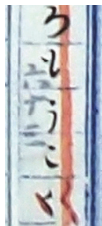
(以下空白) 一一一ウ

水鳥多

一五六三 うちむれてたつ水鳥のおほ澤やいけのこゝろもうこくはかりに』

水鳥多

一五六四 ももぢれてたつ水鳥のおほ澤やいけのこゝろもももぢ^(く)はかりに』



*籠頭 朱ニテ「重」トアリ、「もうこ」下ニ「六十三」ト透ケテ見ユ、図版参照

夕水鳥

一五六五 夕つく日しつむと見ゆるかけろふの小野の古江に鴨のうかへる

一五六六 夕日かけ入江に眠るみつとりはつ^(き)夜^(む)になりて目やさますら

一五六七 うき寐する玉藻のどこをかるの池に夕暮かけてをしとりのくる』

海上水鳥

一五六八 蜚小船うかふと見ゆる水鳥のなかにかもめはなみをたてけり』

池水鳥

一五六九 池水のひろきこゝろに遊ふらしをしもたかへもおのかむれく』一二才

池水鳥

一五七〇 いかるかのよるかの池を今朝見れはをしもたかへも群て来にけり』

水鳥馴舟

一五七一 みなれ棹みなれやすら（む）浪の上にかへる鳥のさしもさわかず』

(以下空白) 一二二ウ

霰

一五七二 はつ雪になりな（む）空と見るなへにまつおとたてゝふるあられかな』

寐覺霰

一五七三 うたてなどおとろかすらん玉霰ふらてもさむる夜半のまくら（む）』

閑庭霰

一五七四 落葉たにはらはぬ庭のこけむしろあらは玉をしきてけるかな

一五七五 霜かれの垣根にあさるにはすゝめ拾は（む）とするたまあられかな

一五七六 人も来ぬ庭のたまさゝ友すりの音かときけはあられなりけり』

荒屋霰

一五七七 軒端くち板間はあれてたまあられ音するほとはたまらさりけり』

橋上霰

一五七八 ぬきとめぬ玉かとはかりみちのくの緒たえの橋に降あられかな』

野外霰

一五七九 さゝ浪や比良の根おろしさえくゝて眞野のかやはら霰ふるなり』一三才

(五行分空白)

雪

一五八〇 塵塚もやまと見るまでおもしろくふりつもりけり今朝のしら雪

一五八一 草も木も雪にうもれておもしろといふより外の（との）こゆ（と）葉もなし』

霽

一五八二 春ならぬこゝろの駒もいさみけり野山はゆきのはなさかりにて』

山初雪

一五八三 されはこそすき間の風もさむからしはつ雪ふれり手まくらの山』

遠山初雪

一五八四 玉くしけあけてこそ見「め↓れ」^(貼紙)打むかふかゝみの山の今朝のはつゆき』一三ウ

嶺初雪

一五八五 武藏野や秩父の山のをみねよりことしもゆきは見えそめにけり

一五八六 昨日こそしくれの雲のかゝりしか生駒のたけははつゆきのふる

一五八七 年つもるおもかけ見えて黒髪はやまのいたゝきはつゆきのふる』

浅雪

一五八八 ふる雪をあさ^(補入)「><>」ふませて「X↓>」駒さくりまたひつめたに隠れさりけり』

浅霏

一五八九 おりたちて見る庭の面に浅沓のあとこそこのれ今朝のしらゆき

一五九〇 ~~ふも雪をあさふませゆく~~駒さくりまたひつめたに~~も~~隠れさりけり *鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

一五九一 のる駒のつめもかくれす浅茅原氣しきはかりにつもるしらゆき』

雪似花

一五九二 すみた川つゝみの雪の見わたしはやよひの花にいつれ増されり』 *ユノ歌ノ上二三行分ノ原稿用紙ヲ貼付シ、以下ノ二首書カル

雪似花

一五九三 雪ふれはかれ木に花も咲きにけりいさおきなさひ立いてゝ見^(む) *鼈頭、朱ニテ「〇」アリ

一五九四 枝たわにつもれるのみか吹く風に散るさへはなと見ゆる雪かな』一四才 *鼈頭、朱ニテ「〇」アリ

連日雪

一五九五 今日はまだいつこゆき見^(む)昨日こそすみた川原に舟はうかへし

一五九六 ふりつゝく雪のあそひに月花のとものかすさへのこらさりけり』

夜雪

一五九七 さら／＼と音きこゆなりさゝの葉のさやく霜夜や雪になる^(む)ら^(む)』

夜霏

一五九八 吹きすさふ松のあらしの音絶えて雪になりゆく夜半のしつけさ』

山 雪

一五九九 白浪のこゆとはかりも見ゆるかな雪ふりつもるすゑのまつやま』

(二行分空白)

雪満群山

一六〇〇 呉竹のはやまも松のしけやまもけちめなきまてつもるしらゆき』

(一行分空白) 一四ウ

海邊雪

一六〇一 磯山も州濱もわかすなりにけり見ゆるかきりはゆきのしらなみ』

海邊霜 * 龍頭、朱ニテ「△」、ソヲ朱ニテ抹消

一六〇二 小舟やまもはまゆき うちわたす濱邊は雪のふりつみて白くも見えぬなみのいろかな』

* 龍頭、朱ニテ「〇」、ソヲ朱ニテ抹消

湊 雪

一六〇三 みなと江をとちし氷の朝ひらき漕いでしふねのあとも見えつ』

川 雪

一六〇四 散る花のはるおほゆるは大井川あらしのやま「に↓の」ふふきなりけり』

名所雪

一六〇五 白鳥のさきさか山は冬ふかくふりつむゆきの名にこそありけれ』

〔雪↓原〕^(貼紙) 雪

一六〇六 たちいて^(む)れものとも見えす雪の原月にうかれしあきもありしを』 一五才

野外雪

一六〇七 うちわたすをちかた野邊をゆく人の小笠もしろくつもる雪かな』

竹 雪

一六〇八 をるはかりつもれは雪のしつれつゝおきかへりけり軒のくれ竹

一六〇九 笛になる園のくれ竹ゆき折れのこゑさへたかくきこえけるかな』

松上雪

一六一〇 けさ見れば六つの花こそ咲きにけれ五つ葉の松の枝もたわゝに

一六一一 夜半にこそ松のあらしは絶え「ぬ↓に」しかされはよつもる^(補入) 朝のしら雪』

雪中松

一六二二 ふりしきる雪の野中の一つまつ人にありせはかさきせましを
一六二三 なか／＼に翁さひても見ゆるかな雪につ(あ)づ(き)つくにはのおいまつ
(一行分空白) 一五ウ

松竹帯雪

一六一四 立ならふ松と竹とにふるゆきは友(し)らかとも見るへかりけり』

杜雪

一六一五 咲く花の春おもほえて角田川ふりつむゆきのしらひけのもり』

雪中客来

一六一六 ゆき見(む)れと駒にくらおおく折しもあれふみわけて来る人もありけり

一六一七 わらはへの雪ま(る)れはしにゆくりなく今朝来る人も交りけにかな』

雪中客来

一六一八 白雪のふりはへて来る人はみな見しつきはなのともにさりける』

雪の夜友のもとにいひやりけるといふことを題に

て

一六一九 君や来(む)れわれやゆき見(む)れふりつもる今宵こゝろの深さくらへに』

(一行分空白) 一六才

雪中興

一六二〇 少女子か消えぬ日かすをうけひつゝ争ひつくるゆきのつきやま

一六二一 かれ木にも花さく今朝はおきなさへ雪におりたつ壺のうちかな』

雪中興

一六二二 うくひすも初音あはせよ春かけて梅か枝うたふゆきのあそひに』

雪達「磨(貼紙)」のかたに

一六二三 あめつちのふたつの中に見るものは一ったになき今朝の雪かな』

(一行分空白)

雪中望

一六二四 あめつちはみなから雪になりはてゝ富士の高嶺も分れさりけり』

雪中獸

一六二五 ふみまよふ雪の山路のしるへには老たる^(う)朧^(らう)もたのみなりけり』
(一行分空白) 一六ウ

社頭雪

一六二六 廣前におきたらはせるみてくらの横やまのことつもるゆきかな
一六二七 しら雪のふるきやしろの朝^(あ)ま^(ま)も^(り)われこそ跡はつけそめにけれ
一六二八 神垣^(かみ)のには火は消えてあまほ^(あ)ら^(ま)け^(り)塵^(ちり)ひとつなき今朝のゆきかな * 麓頭、朱ニテ「宮内省入」トアリ、↓【一七四二】
一六二九 「石上か↓いその」かみふるき社のひろまへも塵ひとつなき今朝のゆきかな
一六三〇 しろたへに雪ふりつもる廣前のきよきやかみのこゝろなるら^(む)』
(以下空白) 一七オ

(半面空白) 一七ウ

(一行分空白)

炭 竈

一六三一 久方のあまきの山にやく炭のけふりやみねのくもとなるら^(む)』

炭 竈

一六三二 すみ竈のけふりそくろき白たへにふりつむ雪のおほはらのさと』

炭竈煙

一六三三 やく炭のさくらの名をそおもひやるけふりの末の峯のしらくも』

遠山炭竈

一六三四 きえやらぬ雪氣の雲とおもひしは炭やくやまのけふりなりけり』

深山炭竈

一六三五 雲とのみたてるけふりは奥山にすみやくひとのあはれなりけり』

(二行分空白) 一八オ

爐 ひらき

一六三六 すさましと見てしすひつに火おこしてよりそふ冬となりにけるかな * 麓頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

爐邊似春

一六三七 さくらすみその枝炭を折りくへて春をもよほすうつゆ火のもと』

爐邊會友

一六三八 琴ならぬ桐の火をけをかきなてゝこゑしる友のまとゐをそする
一六三九 しる人そ知りて来ぬら^(む)たきものゝ梅か香ふかき夜半の埋火』

爐邊閑談

一六四〇 もろともに遊は^(む)春のあらましをまつかたりあふ^(う)ゆ^(も)つめ火の本
一六四一 うつめ^(ミ)氷の灰もゆき^(ミ)そつ^(ミ)ぢりける見し月花のしな^(ミ)ためして』

爐邊閑談

一六四二 けたものゝ炭さしそふる埋^(ミ)ゆ火にみなはひよりてたかる夜半かな』
* 龍頭、朱ニテ「^(ミ)トアリ
(二行分空白)」一八ウ

爐邊閑談

一六四三 め^(ミ)ゆ^(ミ)火の灰も雪とそつ^(ミ)もりけるみし用は本のしな^(ミ)ためして』
* 龍頭、朱ニテ「重」トアリ
爐邊閑談

一六四四 ほたの火に庭のおち葉もたき添へてやま^(ト)も^(ト)積れ^(補入)へる^(補入)者かたりせ^(む)』

征清の軍にありける比松浦^(補入)家^(補入)の^(補入)納會に^(補入)爐邊閑談^(補入)といふことを

一六四五 かちすさふ大御軍のよろこひをよりてかたらふうつ^(ミ)ゆ火のもと
一六四六 うつ^(ミ)ゆ火に炭さしそへてかたるかなありなれ河の北のさむさを
一六四七 うつ^(ミ)ゆ火のものとまとゐもこの冬はいくさかたりの外なかりけり
一六四八 うつ^(ミ)ゆ火のあたりはなれぬ翁さへことしはいくさものを語して』

(以下空白) 一九オ

神樂

一六四九 うけ^(ヒ)かぬ^(ヒ)神やなから^(む)あつ^(む)さ弓もとすゑうたふ宮つこのこゑ
一六五〇 さかき葉にゆふしてかけてはふり子か神代にかへす舞の袖かな』

夜神樂

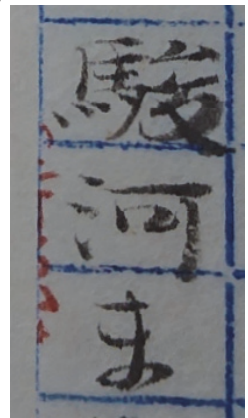
一六五一 さくはうしうつおとはやくなりにけり夜半の神樂もたけなはにして
一六五二 しりなる子あかゝりふむなといふはかり賑ふ夜半の里神樂かな』

里神樂

一六五三 いその上ふるき手ふりに獅子頭かつきても舞ふさとかくらかな』
里神樂

一六五四 鳥か鳴く吾妻あそひの駿河まひ世もしつ岡のさとかくらかな』

*「駿河ま」左傍ニ、次行朱書痕跡見ユ、次掲図版参照



〔四行分空白〕一九ウ

早梅

一六五五 今はとて雪のふる巢のうくひすも尋ねきぬへきうめ咲きにけり

一六五六 咲きそむる花の敷さへよまれける雪をあつむるまどのうめか香』

早梅

一六五七 うくひすのさゝなき初る敷かけに冬木のうめのはな咲きにけり』

〔明治〕二十三年十二月田中ミの子(か)月次の會初め（T）に早梅（といふことを）

一六五八 いまよりののちの盛もまつ見えて春にさきたつやとのうめか香』

雪中早梅

一六五九 いちしろく咲きいてにけりこの朝け雪にあけたる窓のうめか枝

一六六〇 こゝかしこかつくさける梅か枝をみなから花になせる雪かな』

野早梅

一六六一 鳥柴にきりてきしをもつけつへく狩場の小野のうめ咲きにけり』二〇才

冬日尋梅

一六六二 いちはやきみやひ心をしるへにて冬こもりせぬうめやとはまし』

冬曲尋梅

一六六三 山かつかほたゝく烟すゑかすむあなたにかけやうめはさくら(む)』

冬至梅を

一六六四 冬の日も糸すちはかりのひぬとて軒端のうめもほころひにけり』

梅花先春

一六六五 あら玉の年におくれてたつ春をまちなかてこそうめは咲きけめ』(批)

*龍頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

梅花先春

一六六六 あら玉の年におくれてたつはるをまちかねてこそ梅はさくらめ』 *鼈頭、朱ニテ「重」トアリ
一六六七 いちはやくさくをほまれの梅の花いまは春邊も待すやなるら』 *鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

(二行分空白)「一一〇ウ

梅花先春

一六六八 うくひすの宿はと問「?」ひて」来^{へむ}春のしるへの梅は咲きそめにけり』

寒梅

一六六九 霜けふる空をかすみに匂はしてふゆ木のうめは咲きそめにけり』

寒梅

一六七〇 玉あられ枝につもると見えたるは冬木のうめのつほみなりけり *鼈頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ
一六七一 とくろえて老木の梅はさきにけり冬かまへ《た》る にはのまかきに』 *鼈頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

詩題寒梅凍へ雀圖《詠藻》といふことを *鼈頭、朱ニテ「△」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

一六七二 さく花もにほひしまれる梅か枝にすかたやせたる友すゝめかな』

(以下空白)「一一一オ

(半面空白)「一一一ウ

惜年

一六七三 またひとつわれに齡をくれて行く年とはおもへと惜き今日かな
一六七四 ゆく年ををしむこゝろはなからへて百とせふとも變らさらまし
一六七五 ゆく年の惜しむにとまるものならば追儼ふわさもせずそあらまし』

惜年

一六七六 をしめともつれなく暮てゆく年に身は捨てらるゝ心地こそすれ
一六七七 つかたへゆくものと「は^積し」て惜むなりわか身は積る年のをはりを
一六七八 わか身にはつもらて年のゆかませはをしとはさても思はさらまし
一六七九 いたつらに老のよはひをかさねてもなほをしまるゝ年の暮かな』

(四行分空白)「一一一オ

歳暮

一六八〇 物こゝろしりそめしより四十あまりなれても惜しき年の暮かな

一六八一 月花にあそひくらしゝひと年の名残もをしききのふ今日かな』

歳暮

一六八二 立かへる春も早瀬のとしなみをゆくものとのみおもひけるかな』

歳暮

一六八三 なにゆゑにをしむと人にとはれなはやさしかるへき年の暮かな』

歳暮

一六八四 年くれて野にも山にもふる雪をかしらにのみとおもひけるかな』

一六八五 むかしにもかはらて年は暮にけり三十日に月はいつる世なれと』

歳暮

一六八六 散り残る紅葉たにまたあるものをあまりはかなくくるゝ年かな』

(一行分空白)「一二ウ

箱館に在ける比(ト)歳(ト)暮(を)

一六八七 あつさ弓矢こしのさきは暮てゆくとしの早瀬の名にこそありけれ』

惜歳暮

一六八八 くれて行く年のをたまきくりかへしくりかへしても惜まるゝかな』

惜歳暮

一六八九 昔にもまさる惜しさはひと年のふゆのなかはにをはるなりけり』

一六九〇 また冬のなかはと思へはむかしにもまさりて惜しき年の暮かな』

〈明治〉十七年松浦(伯爵)〈家にて〉^(補入)歳暮雪(といふことを)

一六九一 年くれて野にも山にもふる雪をかしらにのみとおもひけるかな * 鼈頭、墨ニテ「重」トアリ

一六九二 花にとひ月にうかれし野も山もゆきにうもるゝとしのくれかな』

海邊歳暮

一六九三 曆たに見ぬめの浦に船の帆もまきをさめたとしのくれかな』二三才

湊歳暮

一六九四 百ふねのはつる湊もくれて行くとしなみこそはとまらさりけ「り↓れ』』

歳暮爐火

一六九五 うつみ火のあたりはさらすゆく年のおくり^(むか)甫へもなほさりにして』

歳暮松

一六九六 紅葉散り残れる菊もかれゆけとまつには見えぬとしのくれかな
一六九七 くれてゆく年のいそぎも知らずしてひとり静けき庭のまつかせ

〔明治〕十七年《鶴》久子《納會》《に》歳暮松《といふことを》

一六九八 くれぬるかまた一年を千世ふへき松のよはひのかすとりにして』
歳暮竹

一六九九 ことし生の軒端の竹もうくひすの春まつやとゝなりにけるかな』
〔三行分空白〕一三ウ

歳暮梅

一七〇〇 くれ残る日数はかりに二つ三つ年のこなたにうめさきにけり
一七〇一 あたらしき年のまうけにゆひかふる垣根のもとの梅さきにけり
一七〇二 鉢の木の梅のはやしとなりけり暮ゆくとしのいちのちまたは
一七〇三 ゆく年の市のたなゝる鉢の木にはる匂はするうめのはつはな』

歳暮梅

一七〇四 ゆく年のいちはやくこそ咲きにくれたな「並へ↓に並」へし鉢の木のうめ』
歳暮祝

一七〇五 くらにつむおくての稻もあまりありて豊けさしるき年の暮かな』
歳暮祝

一七〇六 またひとつわれに齡をくれてゆく年をはえこそ惜しまさりけれ』
〔三行分空白〕一四オ

送年

一七〇七 ゆく年を惜しむこゝろそはてもなきおくる日数は限りあれども
一七〇八 よしさらは今はをしまし暮はてゝとくたちかへれ年のはしめに
一七〇九 をしと思ふこゝろをかへていさきよく暮ゆく年を送りてしかな』

〔以下空白〕一四ウ

春漸近

一七一〇 つほみにて瓶にさしたるうめか枝もやゝ氣しきたつ春の色かな』

*籠頭、朱ニテ「〇」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ、ソノ下ニ墨ニテ「重」トアリ

春漸近

一七二一 おのつから黄はむやなきの糸にこそ春のより来る色は見えけれ』

*鼈頭、朱ニテ「○」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

冬 雨

一七二二 さえ／＼しみその雨になりしより寒さも少しゆるみけるかな』

冬 夜

一七二三 雪氣にもまさる寒さそ身にはしむあまり晴たるふゆの夜のそら』

冬夜長

一七二四 天の戸はいつかあくら（む）冬（む）の夜のでかなき鳥もまたこゑのせぬ』

（三行分空白）「一五才

冬 山

一七二五 薪樵るふゆのやまひとこゝろせよはるは花咲く木々もこそあれ

一七二六 いた（つら）ゆし年もはつせの山おろし冬こそいとゝはけしかりけれ

一七二七 たきゝこる鎌倉山のまつかせも日にけにさむくなれるふゆかな』

／＼イキ茶吉野山（※）

*鼈頭、朱ニテ「○」、ソノ上ニ朱ニテ「✓」アリ

一七二八 よし野山冬のはつ花咲きにけりいまはたはるのおもかけにして』

*鼈頭、朱ニテ「△」、ソヲ朱ニテ抹消

冬 池

一七二九 もみち葉の散りかゝらすはかけうつる鏡の池はくもらさらまし

一七二〇 草も木も冬かれわたる野邊になほみとりを残すはらのいけみつ

一七二一 冬かるゝやなきの髪もうすらひに結はれにけりにはのいけみつ』

山家似春

一七二二 かへり咲く花さへ見えてあし引の山ふところはふゆとしもなし』

（二行分空白）「一五ウ

冬 籠

一七二三 梅か香をそらたき物にかをらせてふゆこもりせるやとの長閑さ』

賣炭翁

一七二四 冬の来て山より里に出て賣るすみはおきな（む）のやくにやあるら（む）』

冬 鳥

一七二五 もみち葉はひと葉残らぬ枝に来て我が羽にほはすてりましこかな
一七二六 冬かれてつらのみ残るゆふ顔のかき根かくれにやま^(から)のなく』

冬 馬

一七二七 朝戸出の袖のひえとりこゑすなりしつか麥まくはたのかきほに』

冬 浦鶴

一七二八 冬の夜の長井の浦に鳴くたつは子をおもひてや寐られさる^(む)ら』

冬 獸

一七二九 あらし吹くまくらの山の木の葉猿夜すからさわくこゑの聞ゆる』二六才

冬 竹

一七三〇 松ならば杖つかせまし雪をれのこゝろもとなきにはのくれたけ

一七三一 木からしに松のふる葉のこほるゝをそよとも竹は知らず顔して』

冬 竹

一七三二 霜さやく聲さへたかく聞えけりふゆの夜長き窓のくれたけ』

冬 花

一七三三 秋の夜の月のかつらに咲きかへて朝しもしろきひゝらきのはな』

冬 花

一七三四 大かたは霜かれはてし野邊にいまのこるもあはれりんたうの花』

歸り花

一七三五 紅葉散る山ふところのさくら花誰かあたゝめてふゆは咲かせし』

十月はかりへに

一七三六 小春日の^(そ)あるきそおもしろき散りゆく紅葉かへりさく花』

(一行分空白) 二六ウ

寒菊のかた

一七三七 冬さむみ今はたわたも著せな^(む)ら秋におくれしはなのおとゝに』

或人の許にて寒牡丹といふ花を瓶にさしたるを見て

一七三八 ことのはの花にもとめやるやとなれやいろ^(もの)ふかみ草冬も咲かせて』

鶴久子^(か)の家の庭なる芍薬の見驚と名つきたるか十一

月ばかり花のさけるを見て

一七三九 冬かれの庭にはな咲くえひす草見ておとろかぬひとはあらしな』二七才

(以下空白) 二七才

明治十六年御内命によりて富内卿へまじし出せる三十

首の中冬五首 〱 徳大寺宮内卿より御内命のよしをもておほせことをかう

瀧邊落葉 〱 ふりければ短冊にしたゝめ奉りたる三十首の中冬五首 〱

一七四〇 冬かれておつるもほそき瀧つほにうつまくはかり散^(補)る^〱 木の葉かな *↓【一四六二】

氷初結

一七四一 涼みせし川の瀬見れば夏むしの知らぬこほりそむすひそめたる *↓【一五一五】

社頭雪

一七四二 神垣には火は消えて朝ほらけすきの葉しろくつ^(も)るゆきかな *↓【一六二八】

水上冬月

一七四三 棹させは氷くたくる川みつにわれてうつれるふゆの夜のつき *↓【一五三四】

寒松

一七四四 みな人のやすらふ野路のかさ松もかすかに冬はかけのさひし^(イ)き *↓【一四九五】

(二行分空白) 二七才

【第五冊・戀】

〈八十四首〉

〈読了〉

櫪紅葉 戀

五 前表紙

*前表紙料紙ト見返シ料紙ノ間、前表紙裏天部ニ貼紙アリ、次掲画像参照



*「五卷」ト墨書サル

「前表紙見返し」

櫪紅葉

(一行空白)

戀歌

(一行空白)』

初戀

一七四五 なにとなく空なかめのみせらるゝや世を知りそむる驗しなる「?_(貼紙)↓_(む)ら_(む)』

(四行分空白)

互忍戀

一七四六 いもか島かたみの浦にあまのかるめをくはせつゝ忍ふころかな

一七四七 しはしたゝいひあはせつゝ忍ふるはしるしきよりも頼もしきかな 一才

聞聲戀

一七四八 たれま_(む)つと寐ぬ夜の人の聲_(む)な_(む)ん_(む)つ_(む)しり歌の_(む)ま_(む)に_(む)く_(む)ま_(む)は_(む)』 *龍頭、朱ニテ「宮内省入」トアリ、↓【一八三〇】

聞聲戀

一七四九 さてもなほ物こしにたにあはしとや小簾のひまもる聲_(はかりして)は聞えて *龍頭、朱ニテ「」アリ

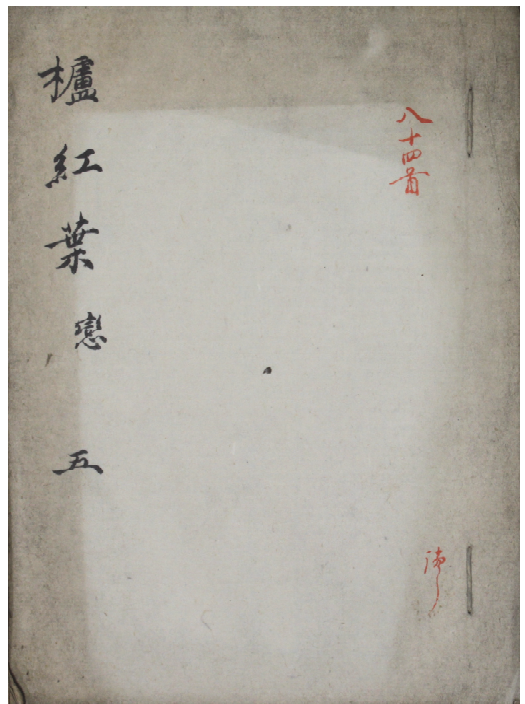
一七五〇 たれま_(む)つと寐ぬ夜の人の聲_(む)な_(む)ん_(む)つ_(む)しり歌の_(む)ま_(む)に_(む)く_(む)ま_(む)は_(む)』 *龍頭、朱ニテ「重」トアリ

聞聲戀

一七五一 まてもなほ物こしにたにあはしとや小簾のひまもる聲_(はかりして)はかりしや』 *龍頭、朱ニテ「重」トアリ

(以下空白)「一ウ

祈戀



第五冊【前表紙】

一七五二 ねきことのしるしたになし戀といへは神も心にまかせさるら^(む)
一七五三 さてもなほかけたに見えず逢ふことを鏡のみやにかけて祈れと』

祈戀

一七五四 人しれず祈るころを法の師にさとらるゝこそおもなかりけり』
祈不逢戀

一七五五 三輪の山祈るしるしは見えもせてむなしく年のすきたてるかな』

馴戀

一七五六 まくらつく妻屋の軒に咲くはなの馴れは^(補)『^(補)』なれて^(補)『^(補)』物をこそ思へ』
(四行分空白)「一二才

偽戀

一七五七 そらことゝかつは思へといひなしの善きに心のなほひかれつゝ』
(二行分空白)

不叶心戀

一七五八 思ふこといひもかなへぬ言の葉に人のこゝろもとけ『ぬ^(貼)す』やあるら^(む)』
隱身戀

一七五九 山からの身のほとかくす人ならし尋ねてや見^(む)ゆふかほのやと
一七六〇 深草のふかくもひとはかくろへて我をうつらの音になかすら^(む)』
(一行分空白)

久待戀

一七六一 わすれくさはつむら^(む)住の江のまつほとふれと音つれのなき』
(二行分空白)「一二ウ

待空戀

一七六二 まちわふるかひもなからの橋はしら流るゝ物はなみたなりけり』
遣車待戀

一七六三 かへり来ぬ車やとりはたちまちの月よりほかにさすかけもなし』
(以下空白)「三才

恨後逢戀

一七六四 へたてなき中とそ今はなりにけるすきしうらみもいひかはすまで』

恨後逢戀

一七六五 うちとくる中のこゝろのひとへきぬ重ねて思ふうらみたになし

一七六六 小たてなき中とそ今はなりにける恨みをさへにいひかはすま』

* 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

絶後逢戀

一七六七 たちかへり結ふもうれし石河やはなたのおひのなかはたえしを』

逢後難遭戀

一七六八 たはやすく思ふ日たかふ貝おほひふたゝひあはすなりにけるかな』

暁別戀

一七六九 今はとてよするくるまの音もらし引きわかれ行く横くものそら』

(五行分空白)「三ウ

名立戀

一七七〇 たえまなくもゆる烟の名に高〔貼紙〕「くゞき」浅間のやまやわかみなるら〔む〕』

名立戀

一七七一 よし野川よしやうき名はたちぬとも妹背の山のなかはたえせし』

無名立戀

一七七二 いかにせ〔む〕名のみひゝきのなたにして人にあふ瀬は浪のうたかた』

増 戀

一七七三 おもかけをよし野のさくら更科の月日にまさるわか思ひかな』

變 戀

一七七四 われならぬ人に思ひやつき草のうつれはかはるこゝろなるら〔む〕』

違約戀

一七七五 さりともと思ひたのみしかねことも徒らふしにふくる夜半かな

一七七六 今宵わかかたふたかると聞えしはたかへところのあれはなるら〔む〕』四才

時々驚戀

一七七七 わか門を折々する小くるまの音にもむねのとゝろかれつ』

(五行分空白)

隔戀

一七七八 山鳥の尾の上へたてゝ寐る夜半のなかき思ひをひとはしらしな

隔夜戀

一七七九 ふしなれしこゝろたゆみに呉竹のひとよ二夜をへたてけるかな

隔一夜戀

一七八〇 こよひたにとはまし物を明日の夜と今朝しも人に契りおかすは

(二行分空白) 四ウ

思戀

一七八一 つく／＼となかむる空にたちまよふくもやおもひの煙なるら(む)

思貴人戀

一七八二 葉の上の人は知らしなよそなからみはしの本(む)にも思ふとは

初疎後思戀

一七八三 かりそめにいひしこと葉の塵ひも積れは山となあおもひかな

思移媒戀

一七八四 玉章のつてもたのむにことよせてわりなく袖を引きとめしかな

(五行分空白) 五オ

欲絶戀

一七八五 こゝろにもあらてやつひに絶えぬへきつな引てのみ過るあまりに

忍絶戀

一七八六 みちのくの忍ふとのみとおもひしをつひに緒絶の橋となりぬる

(三行分空白)

春「戀」(貼紙)「戀」

一七八七 わすれすよ朧月夜のほそとのにほの／＼見てしひとのおもかけ

山家春戀

一七八八 あふことのかた山椿ほろ／＼とおつるは袖のなみたなりけり

(三行分空白) 五ウ

(二行分空白)

* 龍頭、朱ニテ「宮内省入」トアリ、↓【一八三二】

* 龍頭、朱ニテ「宮内省入」トアリ、↓【一八三二】

* 龍頭、朱ニテ「〇」アリ

夏戀

一七八九 うたゝねの枕にくゆる蚊遣火はわかしたもえのけふりなりけり』

冬戀

一七九〇 夜をさむみ袖のなみたもこほるまでとけぬは人の心なりけり』

歳暮戀

一七九一 とし浪のこえすもかなと思ふかなちきりし（こじ）篝のすゑのまつやま』

（以下空白）一六才

夕戀

一七九二 こゝろ引くかたはたかへし小車のわすれぬ花のゆふかほのやと

一七九三 さゝかにのくものいかにと待れつゝみたれし髪をゆふ暮のそら

一七九四 夕暮のそらたにもものゝかはかりもこかると人に知らせてしかな』

暁戀

一七九五 こぬ人をま「ち（貼紙）↓つ」夜なからあ「？（貼紙）↓り」しけのつれなき月の影を見しかな』

旅戀

一七九六 旅ころもかたのまよひを吹く風にいとゝみたるゝわか思ひかな

一七九七 馬（うまぎ）塵路のはゆまつつかひの鈴の音のふりすてかたき戀もするかな』

（夢）禁中逢戀

一七九八 あふと見し今宵の夢しさめさらは常世ゆくともなけかさらまし

一七九九 中たえし人にもあふとみつるかなうれしきものは夢のうきはし』

（二行分空白）一六ウ

（一行分空白）

夢後戀

一八〇〇 さめてなほうつゝの耳に残りけりゆめわするなといひし一こと』

戀病

一八〇一 人しれすなやめるむねのいたつきを（くすし）薬師はなると名（を）作「？（おほ）↓命」すら（む）ん』

人のもとにて枕にかきつくといふことを

一八〇二 かひなしと思ひなすてそ春の夜のみしかき夢のまくらなりとも』

(以下空白) 七才

(半面空白) 七ウ

寄月戀

一八〇三 おもふその人にはそはてわか影のほそりも行くかありあけの月』

寄月初戀

一八〇四 玉たれのをすのとやまの夕月夜ほの見てしよりおもひそめてき』

寄月尋戀

一八〇五 秋の夜のつきぬおもひにしるへなき暗(やみ)をさへにもたとりつるかな』

寄月絶戀

一八〇六 来ぬ人をぬまぢふしまぢまつほどに(つこもり)のみ夜はなりにけり』

寄雨戀

一八〇七 契りおきし人はさは(り)は(り)てつくくくと憂身知らるゝ夜半の雨かな』

寄海戀

一八〇八 しのふれといまは色にも伊豆の海やいつ見し間にか思ひ初めけ(む)』

一八〇九 あはの海やあはて雲井はへたつともなるとし聞(補入)「か」は嬉しからまし』八才

寄石戀

一八一〇 かすくにくたくくころを石の火のうちいてゝ人に知らせてしかな』

寄井戀

一八一一 くみあくる筒井のそこのつるへ繩引たかへてもあはぬきみかな』

寄橋戀

一八一二 あふみちにかけたる瀬田の(はし)橋たなくゆきたかひても(あは)命ぬ君かな』

寄紅葉戀

一八一三 こもりくの初瀬の山のみもち葉や物思ふそてのいろと見ゆら(む)』

寄獸戀

一八一四 このころはたえても人の問はぬかないたちの道を切しはかりに』

寄馬戀

一八一五 行きかよふいか門をや知りつら(む)おはねと駒のあかき速むる』

(二行分空白)「八ウ

寄鳥戀

一八二六 いとしく思ひましこの音に啼きてしとに袖を濡しけるかな』

寄虫戀

一八二七 物おもふなみたの雨にそほぬれてうきみの虫の音のみそ啼く』

寄書戀

一八二八 つら杖をつくゑによるも夜もすから文くりかへし物をこそ思へ』

寄筆戀

一八二九 なみたのみかきくらされてとる筆の行へも知らず物をこそ思へ

一八三〇 かくとたに知らせ(む)れと思ふ玉つさの筆もころに「委(貼紙)任」せさりけり』

(三行分空白)「九オ

寄硯戀

一八二一 ころして硯の塵もふかききなどおもふことかなはさる(む)ら(む)れ

一八二二 せきあへぬなみたの雨のたまりなは硯のうみもいろやかは(む)ら(む)れ

一八二三 いかさまにかき流さまし打むかふ硯のうみのふかきおもひを

一八二四 つれ／＼にひくらし(む)ぢかふ硯にも書つくされぬおもひなりけり』

寄衣戀

一八二五 それかとも思ふ妻戸のまへわたりころときめく衣の香そする』

寄燈戀

一八二六 燈火もかゝけつくして秋の夜のなかきおもひに消ゆるころかな』

寄埋火戀

一八二七 夜もすからすひつの灰の手習に消ゆるおもひをかきすさひつ』

(四行分空白)「九ウ

寄車戀

一八二八 きぬ／＼の誰か歸るさそ朝ほらいとやつしたる(綱)綱代くるまは

一八二九 あはれ世をうしの車になゝくるまつむともつきし戀のおも荷は』

(以下空白)「一〇オ

(半面空白)「一〇ウ

明治十六年御内命によりて富内卿へまじあけたる事

十首の中戀五首 〱徳大寺宮内卿より 御内命のよしをもておほせことを

聞聲戀 かうふりければ短冊にしたゝめ奉りたる三十首の中戀五首

一八三〇 たれまつと寐ぬ夜の人の聲なら(む)つゝしり歌のこゝろにくきは *↓【二七四八】

初疎後思戀

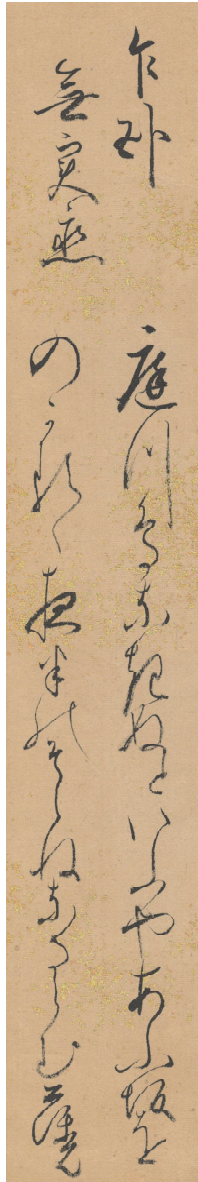
一八三一 かりそめにいひし言葉の塵ひちもつもれば山となるおもひかな *↓【二七八三】

思貴人戀

一八三二 雲の上の人は知らしなよそなからみはしの本(もと)にものおもふとは *↓【二七八二】

〈T〉 臥無實戀 *詞書冒頭、「乍」脱ナルベシ

一八三三 庭つ鳥鳴きぬといふやあふさかをのかるゝ夜半の空音(む)なるら(む)



*架蔵短冊

老後戀

一八三四 おいぬれは人のなさけに身にしみて戀(いよ)もろくなるなみたかな』一才

(半面空白)「一一ウ

【第六冊・雑】

櫛紅葉 雑

六「前表紙

「前表紙見返し」

櫛 紅葉

(一行空白)

雑 歌

(一行空白)』

日

一八三五 岩戸あけし神代もかくや玉くしけふたみの浦にいつる日のかけ

曲

一八三六 すへらきの御おやの神と天津日をあふけはいよ^(かしこ)恐かりけり』

星

一八三七 水やそら空や水かとまかふ夜になかるゝほしのこゑそきこゆる

(三行分空白)「一才

山路雲

一八三八 かへり見る里は雲間になりにけりやま路もこゝや^(む)たうけなるら^(む)』

暮山雲

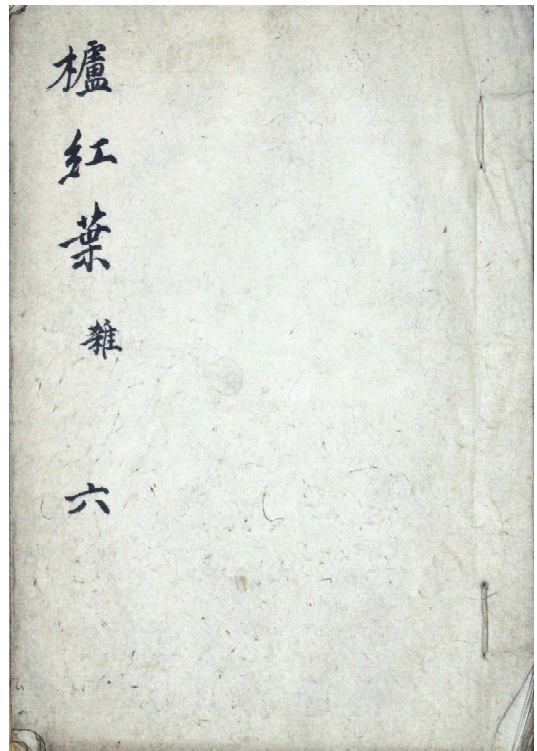
一八三九 夕されは柚やまひとにともなひて雲もふもとにおりたち^(む)にけり』

海上雲

一八四〇 しらぬひのつくしわたりと見るはかり松浦か沖にかゝるしら雲』

山家雲

一八四一 白雲もこゝろありてやくくすら^(む)世をのかれすむ山かけのやと』



第六冊【前表紙】

雲無心出岫

一八四二 おもひ入る人たにあるをこゝろなき雲は山よりたちいてにけり』

(五行分空白) 一ウ

(五行分空白)

山中雨

一八四三 ともすれは小雨そほふるみやまちは笠やとりする軒端たになし』

(以下空白) 一二オ

(半面空白) 一二ウ

(以上空白)

暁

一八四四 あしたまつつかへしそきし老か身もなほ鳥か音に目を覺しつゝ

一八四五 うきものと昔はきゝし鳥かねをまちあかすまておいにけるかな』三オ

(半面空白) 二三ウ

(以上空白)

暮村煙

一八四六 夕日さすかた山かけにいへむらのあり數見えてたつけふりかな

一八四七 夕けふりおもひありけにたつ見れはこの山里もうき世なりけり』四オ

塩屋煙

一八四八 さもこそはからき世わたるあまならめ塩やく煙ほそくたつるは』

(以下空白) 四ウ

(半面空白) 五オ

(三行分空白)

雨後山

一八四九 村雨のはれゆくそらの夕はえにけちかく見ゆるうみこしのやま』

(以下空白) 五ウ

(一行分空白)

富士山

一八五〇 天の下竝ふものなきすめくにのしるしや富士のたかねなるら(む)

一八五一 女男の神つくりかためし國土のあまりや不盡のたかねなるら(む)

一八五二 比叡の山たとひはたちはかさぬともなほ不盡の嶺の麓ならまし

一八五三 し(ま)このむ神代の神のたはふれにつくりし山か富士のたか嶺は

富士山

*コノ紙片、下部余白ニ付箋ヲ貼付セリ

一八五四 あなめつらあなおもしろの富士の嶺や遠く見れとも近く見れとも

富士山 鷹(鷹) 茄子の三つを

一八五五 富士の嶺のましらふの鷹手にすゑて鳥狩なす日の袖のさむけさ

*「鷹」字、下ニ「鳥」字を朱ニテ加へ、「鷹」ト訂ス

(一行分空白)

名所山

一八五六 大和にはむら山あれとよきひとのよしとよく見しみよしの山六才

名所山

一八五七 山城は名たかき山もおほかれとまつめにつくはひむかしのやま

一八五八 よしといふ吉野の川をなかにして名(も)むつましき妹と背のやま

武藏國大里郡(補入) 青山を

一八五九 胄やまかけちにさける卯の花ををとすしころの(いと)かとそ見る

一八六〇 かふと山ふもとにしける葛の葉を吹きかへしけり秋のはつかせ

(二行分空白)

野

一八六一 すきかへす田の黒塚となりはてゝ鬼こそすまね安たち野のほら

野眺望

一八六二 賤の男かこまひきかへるかけ見えて末野の原にゆふ日さすなり

(二行分空白) 六ウ

(一行分空白)

縣

一八六三 をりくはみやこの人もたつね来るあかたそ世にはすみよかりける

(五行分空白)

驛路鈴聲

一八六四 旅まくらさらても夜半のいねかてにはゆま使のすゝか音そする

一八六五 うまや路に鈴のおとこそ聞ゆなれ閑の戸さしもい「や↓^(貼紙)ま」やあくら^(む)

一八六六 みてくらの使^(たつ)なるらしすゝか山せきのうまや路ふりはへてゆく』 *鼈頭、朱ニテ「、」アリ

行路夜深

一八六七 たれならぬわかあしおとの聞ゆるもそゝろさひしく夜は更にけり』七才

(三行分空白)

名所橋

一八六八 あつさ弓矢はきの橋はものゝふのむかしをかくる名にこそありけれ』

(以下空白)「七ウ

(以上空白)

晴後遠水

一八六九 吹きわたる濱松風にくもはれてみとりに見ゆるあめのなかかは

一八七〇 玉くしけふたこの山は雲はれてはこねのうみにゆふ日さすなり』八才

水石契久

一八七一 さもこそは契たえせぬ中な「め↓^(貼紙)ら」め岩間のみつはとこ^(な)むめにしして

一八七二 動なき岸のいはほのありてこそ水のゆく瀬もかはらさりけれ』

水布架木

一八七三 松か根の岩間の清水いつよりか千代をちきりてすみそめに^(む)けれ』

(三行分空白)

池水浪靜

一八七四 長閑なる池のこゝろに魚をとるあたりはかりそ波もたちける』

都名所の中長岡池へを

一八七五 宮人のそてのにしきの名残とやもみちうつろふなかをかのいけ』

(二行分空白)「八ウ

(一行分空白)

瀧

一八七六 天の川せきくたすかと見るはかり雲よりおつる那智のおほたき』

瀧

一八七七 御熊野やくちら汐ふくおきなかの舟より那智のたきを見しかな

一八七八 きりふりもうらみもあれと二荒山華巖のたきそ世にふたつなき』

深山瀧

一八七九 おもひ入るみやまの奥の瀧つ瀬にうき世の塵をなかしつるかな』

庭瀧

一八八〇 布さらすたま川の水せきいれておとすかにはのたきのしらいと』

三河國八名郡なる七瀬を

一八八一 七瀬の名になかれたるしら糸はたなはたつめやさらしかけ^(む)』

瀧の繪に

一八八二 ちかよらは袖にしふきもかゝるかと目にこそ見ゆれ音なしの瀧』九才

市中温泉

一八八三 軒つゝき日に増し月に數そへは伊豫の湯けたもしかすやあらまし』

井

一八八四 うつもれて苔のみ深き石井つゝおもひのほかにもつはすみけり

一八八五 をとめ子かむかししのひて今たにもなみたくまるゝ眞間の井の水』

(以下空白) 九ウ

(一行分空白)

海邊朝

一八八六 玉くしけあけてふた見の浦見れば海のおもてはかゝみなりけり

一八八七 安房の山たなひく雲は横濱をあさひらきするふねのけふりか』

海邊夕

一八八八 夕つゝのひかりも月と見ゆはかりさすかけ廣きなみのうへかな

一八八九 しまつとり鶉の歸り来る磯山の木かけをくらくなるゆふへかな

一八九〇 をちこちに蜃かいさり火見えそめて夕日かくろふ沖津しまやま』

海邊煙

一八九一 大君のおものゝ濱はあまか屋にたつるけふりもにきはしきかな』

海邊興

一八九二 おりたちて貝ひろふ子かたのしさをはきにあけても見する浪かな

一八九三 たのしさをはきにあけても見するかな汐干狩してあそふ少女は

一八九四 世のうさも忘れ貝をやひろふら^(む)汐干のかたにあそふをとめは』一〇才

海上眺望

一八九五 ゆふなきにくちら汐ふくけふりのみ白くもたてる浪のうへかな』

海上眺望

一八九六 夕なきにくちら汐ふくけふりのみしろくもたてる浪のうへかな』

(三行分空白)

* 龍頭、朱ニテ「重」トアリ

海路山

一八九七 おとに聞く名和の湊やちか^(む)ら^(む)なみ間に浮ふ舟のうへのやま』

(二行分空白)

浪聲混雨

一八九八 雨さそふ比良の嶺おろしみつうみの浪のおとにも立まさりけり』

(一行分空白)「一〇ウ

浦 煙

一八九九 くちらよる熊野の浦にたつけふりよその見る目も賑はしきかな』

名所浦

一九〇〇 たくふすま新羅國をひきよせし神代をかくるおうのうらなみ

一九〇一 まさこ路に寄せたる貝はたましくけふたみの浦の蒔繪なりけり』

出雲國美穂の崎にて

一九〇二 引よせし國のみさきか出雲のや嶋根のはての三穂のみさきは』

備前國むしあけの迫門を懸けず

一九〇三 夢にたに見るよしもかな粟のいひむしあけの迫門のあけほのゝ空』

古渡雨

一九〇四 すみた川ふるきわたりの雨もより舟こそりてもぬらすそてかな』

古渡舟

一九〇五 おひ風に矢はせのわたりするふねはまことにいるか如くなりけり』一一才

端筆畫越後国なる元山何某の邸内に《端雲臺(補心)といふ》ありて明治九年

「越後(貼紙)」御巡幸の時行在所になりしより名付し所なりと云

※(て歌こひければ)

一九〇六 あふき見し天津日影のかしこさは雲のうてなの名にのこりけり』

いにしへみちのくのしのふもちすりをすりたる時に

用ゐし石の世にあらはれしをよるこひてこの國人何

某か人々に歌よ(こひ)ませける時(に)

一九〇七 いにしへをしのふもちすり誰見よと千世ふる石の「哀れ(貼紙)顯は」れにけり(む)

一九〇八 うつもれて年する石もあらはれていとゝむかしを忍ふもちすり』

駿河國安倍郡狐か崎なる梶原塚を尋ける時(に)

一九〇九 そのかみのこやはたすゝき秋風にみたるゝ野邊もあはれなるかな』

(二行分空白) 一一ウ

〔浅草橋場なる郷純造君の別業〕随意莊十二勝郷(註)浅草橋場町にあり

澤上櫻雲 (の)《歌》

一九一〇 花のくもいよ／＼白く見ゆるかな水みとりなるすみた川原は

白社松靄』

一九一一 咲きつゝく花の絶之間かしら鬚のまつのみとりにたてる霞は

古渡鷗聲

一九一二 角田河ふるさわわたりのみやこ鳥むかしをかたるこゑかとそきく

遥林帘影

一九一三 うま酒を三輪のしるしのはた見てそすきゆく人も立とまるらし

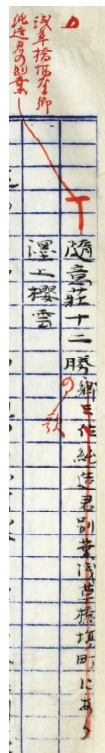
綾瀬静帆

一九一四 静なる浪のあや瀬の川のほりゆくら／＼に舟やくくら(む)

鐘淵明月

一九一五 水そこにしつめる鐘も見ゆるかとおもふはかりの月のさやけさ』

*龍頭、朱ニテ「〇」アリ、詞書原状次掲図版参照



（一行分空白） 一三才

水神涼雨

一九二六 里人かいのりし雨かなつの日のゆふかけて降るみくまりのもり

今戸曉煙

一九二七 よくくもの空になひくやかはらく今戸の里のけふりなるら（む）

金山鯨吼

一九二八 おとろかす浅草寺の鐘のおとに夜なきさともときやしるら（む）

柳圃虫吟

一九一九 夜寒にやなりまさるら（む）「から（貼紙）らか」れて細きやなきのはたをりの聲

秋葉紅楓

一九二〇 いくしほか染つくしけ（む）くれなゐに匂ふ秋葉のもりの木すゑは

筑波白雪

一九二一 角田川さくらの紅葉散りはてはつゆきしろしをつくはのやま』

（一行分空白） 一三才

（肥前国）（丁）平戸十景 *詞書原状次掲図版参照

龜岡明月

一九二二 あつさ弓矢くらも高き龜をかむかしを照らすつきのかけかな』

昇掉翠松

一九二三 立ならふ松のしつ枝を洗ふまで汐みつあしのかなへさきかな』

渡頭艤舟

一九二四 今日もまたみやこ人や来にけらし入江のわたり舟よそふなり』

海門漁火

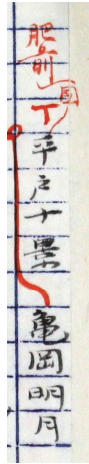
一九二五 しらぬ火の浪をやくかと見るはかり平の戸てらす蟹のいさり火』

笠岑朝暾

一九二六 なこりなく夜の間の雨のくもはれて小笠の岑にあさ日さすなり』

黒兒群鴉

一九二七 ぬは玉のくろこの嶋はむらからす寐くらにしさすところなりけり』 一三才



牛首怒濤

一九二八 うち寄する浪の朶(く)るまの輪にも似て岩間をめくる牛かくひかな』

鷹島征帆

一九二九 ましらふの鷹崎の沖ゆく舟をかせなかれしてとふかとそ見し

鏡浦泛鷗

一九三〇 白浪のたちもさわかすくもりなすかゝみの浦にうかふかもめは

良威殘雪

一九三一 ひとむらのつくしわたかど見るはかりよしめの山に残るしら雪

瑞雲寺眺望

一九三二 およひをる十のなかも軒端より一目に見ゆるみねのふるてら』

(三行分空白) 一二二ウ

〔松浦伯爵家の庭園の名ところの歌の中〕

おなしく手向社

一九三三 常磐木に枝をましへて咲く花やたむけのもりにかゝるしら木綿』

一九三四 とき木に枝をましへておなしく花や手向のもりにかゝるしらゆふ』

蓬萊園名ところの中たゆたふ道

一九三五 たれもみなたゆたふ道はさりあへす散りかふ花の木陰なりけり』

おなしく綾おる岸

一九三六 咲く花にやなきの岸をうちませて錦あやおるきしのさゝなみ』

蓬萊園中名所花

一九三七 ちく花にやなきの糸をうちませてにしきあやおるおなしくましのさゝ涙』

蓬萊園勝景の中由縁磯藤雪

一九三八 むらさきの雲「にはかおなしくかとは」かり見ゆるかなゆかりの磯の藤なみのはな』一四才

向柳原町なる松浦おなしく伯爵家おなしくの毬にて

一九三九 梅か香も吹き来る風おなしくうちむかふやなき原こそころゆきけれ』

松浦伯おなしく爵おなしくのおなしく巢鴨のおなしく里おなしくのおなしく別業にて窓含西嶺千秋雪といふ心を

一九四〇 新室のまるとにひかりをそへてけり千世もきえせぬ雪の富士の嶺』

(以下空白) 一四ウ

箱館に在ける比長月九日初雪のふりけるに

一九四一 霜とのみ見し白菊のはなの上に今年もゆきはふりそめにけり』

おなし比江戸なる仲田御年かつかさえたるよろこひ

の文のおくにかきておくれる

一九四二 深みとり春まつかえにすこもりしたつか音高く今日そきこゆる』

明治のはしめ遠江國にさまよひける時

一九四三 國をさり家をはなれてしら雲のあはゝかたけを今日も見るかな』

静岡なる草深といふ所にすみける此へころ』

一九四四 今は世をうつらの床のかくろへて住まはやすま草ふかのさと』

(三行分空白) 一五オ

静岡に在ける比七月ばかり浪のおといく高く聞えけるに

一九四五 うち寄する駿河の國の名もしるくなみの音こそたかく聞こゆれ

一九四六 こゝもとにいま寄するかと思ふまてまくらをゆるする浪の音かな』

新居月

一九四七 ありとたにしらぬ窓よりさし入てわれよりさきにすめる月かな』

(以下空白) 一五ウ

故郷

一九四八 ふる里は「里↓玉」のうてなのかけもなしくたけて残るかはらのみして』

故郷

一九四九 本も里は玉のうてなのあともなしくたけて残るかはらのみして』

故郷鳥

一九五〇 ありしにもあらずなりにし故郷におもかはりせぬかほよ鳥かな

一九五一 村鳥のねくらとのみそなりにけるいもとすみにし里のをはやし

一九五二 わひしらに友よふ聲そあはれなるすみあらしたる里のいへはと

一九五三 立いてし人はおとせぬふるさとに巢守の「鳥↓と」りのかへりてやなく』

*籠頭、朱ニテ「、」アリ

*籠頭、朱ニテ「重」トアリ

故郷にかへる人をわかるとて

一九五四 きてかへる錦とおもへ旅ころもたつとしけきはをしまれにけり』

渡部孝子が卒業して故郷へ歸るをわかるとて *鼈頭、朱ニテ「〇」アリ

一九五五 ふるさとおやはまつらむ我はたゝこのわかれこそ惜まれにけれ』一六才

(半面空白)「一六ウ

箱館の俵はてゝ江戸に歸らん^(む)ずる時人々に別ると
て

一九五六 うれしともうしとも思ひわひかぬる袖はなみたの湊なりけり

おなし時ある人に

一九五七 旅ころもともにたちな^(む)わか袖をわきてもぬらすむら時雨かな

箱館にて中井梅成か江戸にかへるをわかるとて 〳 秣^(む)以 *鼈頭、朱ニテ「〳」アリ
たれは^(む)かき

一九五八 君やさは飛ふにあきてや歸るら^(む)名残つきせぬとりのあとかな』

静岡に在ける比あからさまに江戸に行く^(人)米に

一九五九 むかし忍ふ草のまくらにさみたれのふる里いかに露けかるら^(む)』

山高郁堂か東京に旅立をおくりて

一九六〇 わかれゆく君か旅路のほとゝきすはやく歸るにしかすとを鳴け』

(二行分空白)「一七オ

山内芳秋ぬし難波より上り来て一日はしつかにかた

はらは^(む)なと契りおきつるに事しけきにさはりてふ

たゝひあは^(手紙)せ別れければ

一九六一 こやの池のあしのやへふきひまをなみ難波のことも問はずなりにき』

前島逸堂か上総に行くをわかるとて

一九六二 今日わかれ明日きさらつの通ひ舟ひと日もたえしおもふ心は

一九六三 竹芝の浦より見ゆるかのゝやまかのかたなれやきみかあたりは』

松浦伯^(補)〳〳の吉野の花見にゆくを送りて

一九六四 よき人によしと見られて吉野やまことしは花もうれしからまし』

大平信直か出羽國庄内に歸るを別るとしてしやうない

といふ五文字を句のかみにすゑて

一九六五 しきしまの大和たましひうききなくなをあげ(む)礼日を今よりそまつ』

(一行分空白) 一七ウ

長門國に歸る人をわかるとて

一九六六 わかるともことかよはせよ玉章のもしの関路のあとたえすして

一九六七 しはしたにわかれををしき遠さかるなかと君を思はさりしを』

松浦五位の外国に旅立をおくりて *鼈頭、朱ニテ「」アリ

一九六八 君かためこゝろつくしの松浦舟ことくにまでもおし渡るら(む)礼

一九六九 大君のちかきまもりとなりな(む)礼遠きくにをも見てかへり来て』

醫學士吳秀三ぬしか獨逸國にいてたつを送りて

一九七〇 こと國のくすしきわさをもとめて世のうき瀬をも救へとそ思ふ』

(四行分空白) 一八オ

旅

一九七一 うき旅もしはしの程そおもしろき見るものことに珍らしくして』

旅 暁

一九七二 夜をこめて都をいてし旅ひとのまつ(助紙)の火しろしあふさかのやま

一九七三 関の戸もいまやあ「?↓く」ら(む)礼かへり「?↓り」みるみやこの方に鳥か音そする

一九七四 いつよりも身にしむものは旅ころも暁つゆにぬるゝなりけり

一九七五 ありあけの月のみやこをあとにしてこゝろほそくも行旅路かな』

旅行友

一九七六 草まくらあひやとりして語らへはかたみに聞しひとにさりけり

一九七七 ふるさとのうからやからも及はぬは旅(ち)寐の友のむつひなりけり』 *鼈頭、朱ニテ「」アリ

山路旅行

一九七八 手向山た(ち)ゆちやすらひてけ(た)さいてし里やいつことかへり見るかな』 *鼈頭、朱ニテ「」アリ

(二行分空白) 一八ウ

明治廿三年四月松浦伯(補入)《《爵》》にいさなはれて肥前國平戸に

あそひける時田平といへる渡りの船中にて今日しも

近きあたりにてとり得たりといふくちらを見て

一九七九 いく里のには「ふ↓ひ」ならん(む)十ひるあまりながすの鯨(ま)今日は取えて

本がすは鯨の名本ゆ

おなし時四月廿六日佐世保(補入)《に》《に》行幸ありけるよし平戸に

聞えけるに

一九八〇 はれわたる日影を見てもうるはしき大御氣色そさらにしらるゝ

おなし時松浦郡今福の里なる宮本彦造ぬしの家にて

一九八一 昔よりさかゆるやとの松か枝はいま吹くかせものとけかりけり

(三行分空白) 一九〇

水戸 《観》梅兎の紀行中作 《ゆくさく》の歌

一九八二 くれなゐの塵のけかれをはらふこそみとりの竹の葉風なりけれ

きぬ川にて

一九八三 つむきおる結城のさとゝ見しほとにきぬ川をさへ渡り来にけり

《水戸の》梅園にて

一九八四 名に高き梅の園生はいしふみの文字さへにほふこゝちこそすれ

徳川三位君の松戸の別業にて *鼈頭、朱ニテ「」アリ

一九八五 常磐なる松戸のさとに千世しめてうき世の花やよそに見るら(む)

一九八六 劔太刀利根の河邊にしやまのむかしを見ん(む)とおもひかけきや

(五行分空白) 一九ウ

(四行分空白)

晃山紀行中 《くさく》の歌 *詞書原状下掲図版参照

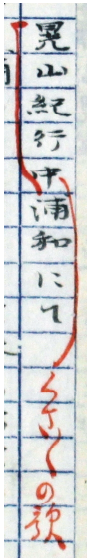
浦和にて

一九八七 里の名を浦わときゝてそは麥のはなのしろきもなみかたとそ見し

文挾驛にて

一九八八 うたふへき水(こ)ともあらしを道のへになにさゝくらん(む)文はさみの里

一九八九 苔青くいはなみしろしたにかはの岸のもみちはくれなゐにして



一九九〇 もみち葉(せ)をわけゆく山のつゝら折いくへたゝめる錦(む)なるら

〈日光の〉瀧(た)のうた

一九九一 くろ(くろ)んあ(あ)んはうとうはん(はん)にやとりくゝに心を洗ふ瀧つ白浪
日光にてくろくよめる時

華嚴阿舎(あ)力(り)等(とう)般若(はんにや)法(ぽう)華(わ)涅槃(ねはん)以上木期

一九九二 敷島のうたの濱には来たれともこと葉のたまはひろはさりけり』二〇才

一九九三 もみち葉はよしたかすともうま酒はあたゝめてこそ飲へかりけれ

一九九四 玉くしけあくるあしたの水うみや黒かみやまの湯するなるら(む)

一九九五 小くるまをとゝめかねたる坂みちに名残をしくも見る紅葉(む)かな

一九九六 ふたら山ひらくる園にもろ人のあそふやかみのこゝろなるら(む)

一九九七 めくりゆくくるまの道も長月のつき見る夜半はあかすそありける』

松島曲(うた)記(し)の中(なか)へくさくさの歌

一九九八 稲の穂もすこしいろつく赤は「?↓ね」の青田のおもにしらさきのたつ

福島驛(えき)なる松葉館(くわん)にやとりて阿武隈川(あぶくまがわ)の月を見て

一九九九 なつかしき(し)菫(すみ)のみやこの東やまおもかけうかふ浪のうへのつき

鹽竈(しほがま)の浦(うら)より舟出しけるに

二〇〇〇 ちかの浦(うら)も見(み)水(みづ)く遠(とほ)くなり(る)にけりきりのまかきの嶋(しま)かくれして

〈松島の〉觀瀾亭(くわんらんてい)にて

二〇〇一 松風のおともきえこす朝なきにたゝさゝなみを見るはかりにて』二〇ウ

(三行分空白)

〈丁〉松島八景

梅浦春景(うめうら)今は梅なし昔は多かりしとぞ

二〇〇二 花さきしむかしの春そしのはるゝ梅のうらわのおほろ夜(よ)のつき

霞浦(かすみうら)歸鴈(きげん)

二〇〇三 のとかなるかすみか浦にあまの子かわかめかりか音今歸(かへ)るらし

江縣(えげん)残花(ざんか)

二〇〇四 春ふかき江のあかたなるさくら花ほかの散りにし後(のち)や咲(さ)くらら(ら)

雄島夕照(おのしまゆさく)

二〇〇五 夕日さすとよはた雲や法の師のすみし^{（せ）}しまのしるしならまし

塩竈暮煙

二〇〇六 塩かまのうらめつらしくくるまより船よりもたつ夕けふりかな』二二才

瑞巖晚鐘

二〇〇七 まちわふるかけはつれなきあかつきに月出にけり山てらのかね

松島秋月

二〇〇八 松しまはいつこはあれと名にたかき月見か崎そあきはゆかしき

竹浦夜雨

二〇〇九 笛になる竹の浦わにふねとめてひとよあめをもきゝてけるかな

中尊寺にて

二〇一〇 ころも川ころも手寒し白かはのせきよりおくのせきのあきかせ^{（山）}

燕澤の碑を見て

二〇一一 くる鴈のたまつさならてつはめ澤ふるき石ふみ今日見つるかな』

（四行分空白）二二ウ

月前旅宿

二〇一二 むやひする舟子の聲もしつまりてやかたにすめる夜半の月かな

二〇一三 とまりする湊の舟^{（補入）}の帆はしらにたかくもかゝる夜半のつきかな

二〇一四 こゝろさへすみわたりけり船はつる入江の芦間つきしろくして』

旅宿夜

二〇一五 なにとなくひるまはものにまきれても夜こそ見ゆれ旅の憂き目は

二〇一六 湯あみしてあしさしのふる旅やかたよるものさへ和やかにして』

海邊旅宿

二〇一七 東路のたひ寐のうさもわするゝは清見かさきのやとりなりけり

二〇一八 うしほあむなきさの人もおほ磯のさとにきはしき旅やかたかな』

海辺旅宿

二〇一九 わかためにたくや夕けの煙さへあまかいそ屋はいふせかりけり』二二才

羈中憶郷

二〇二〇 立かへりいつしかいもか手まくらに積る旅寐のものかたりせ^(む)』

旅泊雨

二〇二一 今日もまた笹もるあめの糸水にいり江のふねはつなかれにけり』

(以下空白)「二二ウ

(一行分空白)

閑居

二〇二二 いまは世にひかるゝこともなきやとに聲する友のなと待^(補)《た》^(む)るら^(む)』

閑居雲

二〇二三 しら雲もこゝろありてやかくすら^(む)世をのかれ住むやとの軒端は』

閑居水

二〇二四 水の音にうき世の耳をあらはせてこゝろをさへもすます宿かな

二〇二五 流れゆく岩間の清水さら／＼にうき世のみはきかぬやとかな

二〇二六 すみなれて今はうき世をわすれ水むすふ野中のひとついへかな』

閑中燈

二〇二七 まつ人もなき我やとのともし火になといたつらに花は咲くら^(む)』

閑中娯

二〇二八 日にもあて水もそゝきて朝夕にはちのうゑ木をもてあそひつゝ』二三才

林下幽閑

二〇二九 かけふかき杉の下庵世のひとをたつね来よとはおもはさりけり

二〇三〇 くれなるの塵はましらてみとりなる木くれの奥そゆかしかりける』

庭

二〇三一 なか／＼につくらぬ庭そおもしろき巖のさまもみつのこゝろも

二〇三二 石も木もあるにまかせてつくる「ぬ^(貼紙)は」すもの古たるそ庭はよろしき

二〇三三 しまこのむ^(あるし)まからこそしられけれ洲濱たちたるにはのやりみつ』

(以下空白)「二三ウ

古宮

二〇三四 ことくにの人の家居もましりけり西ふく原の「?^(貼紙)ふ」るきみやこは

二〇三五 大和にはふるきみやこのあまたあれと名もむつまじき敷島の宮』

※コノ紙片、下部余白ニ付箋ヲ貼付セリ

古寺苔

二〇三六 石ふみの文字たに見えず古寺のおくつきところこけふかくして』

古寺鐘

二〇三七 千年ふる鶴のはやしの鐘のこゑもるにたかくきこゆなるかな』

(三行分空白)

古戦場

二〇三八 ふきおろす^{うしろ}嶺の山の風をいたみおきにたよふ須磨のうらふね

二〇三九 ものゝふの昔の矢つかおもほえてこてさし原のしのに吹くかせ』二四才

古戦場

二〇四〇 おとにきくひよ鳥越を来て見れはいまもはけしき山おろしの風

二〇四一 吹おち^すりしもの山の風をいたみ沖にたよふ須磨のうらふね』

借濃名所の中川中島

※龍頭、朱ニテ「重」トアリ

二〇四二 はたすゝき霧のたえまにほの見えて川中しまにあきかせそ吹く

桔梗原

二〇四三 ものゝふのかふとのしころ思ほえてかたふく花のきちかうか原』

(以下空白)「二四ウ

(一行分空白)

山家

二〇四四 葛かつらかゝるすみかの楽しさを世にまつはるゝ人はしらしな

(二行分空白)

山家雨

二〇四五 山里はかやの軒端もこけむしてあめのいろさへみとりなりけり』

(二行分空白)

山家水

*龍頭、朱ニテ「宮内不入」トアリ

二〇四六 山おかくすみてもそしれ世の人にくまれぬ水はにまめさりけり』

(二行分空白)「二五才

山家橋

二〇四七 うき世には思ひもかけぬ山里のはしはしらにはかくこともなし
二〇四八 山川のはしのうへより見わたせははるかしたにも家はありけり』

(一行分空白)

山家客来

二〇四九 とふ人にうらやましともいはるゝそわかすむ山のかひにはありける
二〇五〇 蔦かつらはひかくれすむ山里になほ来るひとの絶えすもあるかな』

(以下空白)「二五ウ

(三行分空白)

田家水

二〇五一 しつかやのかきねの水のほそなかれ洗ふは太きおほ根なりけり』

申家水

二〇五二 賤小屋の垣根のみつのはそなかれあらふはふとき大根なりけり』
(以下空白)「二六オ

*龍頭、朱ニテ「重」トアリ

小學校

二〇五三 花も咲き實もなりいてむめさしこそ文のはやしにまつは見えけれ
二〇五四 海山にまされるさちは里の子が入つたふみのはやしなりけり』

(以下空白)「二六ウ

(一行分空白)

竹緑久

二〇五五 竹馬のわらはあそひのむかしより契りし千世(代)のいろそかはらぬ』

竹不改色

二〇五六 くれ竹は草「木↓^(貼紙)に」も木にもあらねはやうへはる秋もしらぬいろなる』

竹有佳色

二〇五七 みそのふのいくみ竹よたけいく御代もかはらぬ色めつらしきかな
二〇五八 くれ竹は木にも草にもあらずしてひとふし見ゆる千代の色かな』

*龍頭、朱ニテ「△」アリ

移 竹譜

二〇五九 窓ちかくひとむら竹を移しうゑてつきと風とをまつゆふへかな』

〔鶴〕久子（補入）《か》發會（補入）《に》庭竹（なみり）へといふことを〕

二〇六〇 なつかしき草木もあれとわか友といひて久しきにはのくれたけ』二七才

隣家竹

二〇六一 へたてなき隣の庭のくれ竹はわかまけいほの垣根なりけり』

竹契齡

二〇六二 もろともに千年の坂もこえぬへき杖とそたのむやとのくれたけ』

（以下空白）二七ウ

松

二〇六三 十あまり八つはかりかは松はたよろつの木々の君とそいはまし

二〇六四 立まじる松しあらずはいろ匂ふ花もみちもはえなからまし』

榊

二〇六五 かきりなきまつの齡を千代まてはいつの世に誰か數へおきけ』（む）

老松

二〇六六 いくかへり若やく世にもあひきつゝ老たる松のよはひなるら』（む）

庭松老

二〇六七 年ふりて庭に杖つくおいまつもいろはわか木におとらさりけり

二〇六八 あひおひのこゝちこそすれ昔わか手つから植しにはのおいまつ』

庭稚松

二〇六九 老たるもなつかしけれとおひさきの千世（代）たのもしき庭のわか松』二八才

松歴年

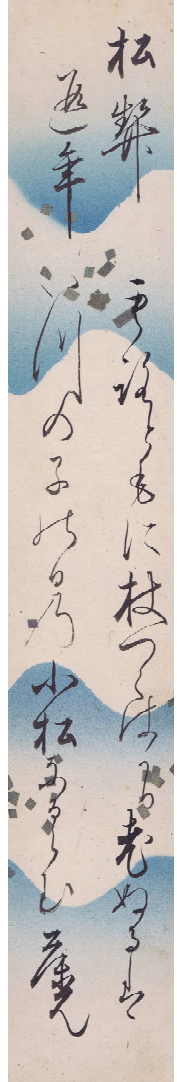
二〇七〇 かくはかりめてたき御世は千年へし老木の松もしらすやあるら』（む）

松浦四位の會初に松歴年へといふことを〕

二〇七一 年をへていよゝ高くなりにつけり名におふそのゝ松の木かけは』

松契遯年

二〇七二 もるとともに杖つくはかり老ぬるはいつの子の日の小松なるら(む)』



*架蔵短冊

松不改色

二〇七三 苔のむすいはほに根さす老松はおなしみとりに千世やへぬら(む)

二〇七四 二葉より千世をこめたる松なれば老てもいろのかはらさるら(む)

二〇七五 色かへぬみさをへ見する松やさは老てますくさかりなるら(む)

二〇七六 おもかけもかはらて年の積れるやまつ(む)の千代ふるすかたなるら(む)

二〇七七 年ふりて庭に杖つくおい松の若木にまさる千世のいろかな

二〇七八 むかしより千世のためしに引かるゝを久しきものと松も思は(む)』

(二行分空白) 二八ウ

(二行分空白)

松爲友

二〇七九 老らくの友はまれにそなりにける松たにわれをうとますもかな』

嶺上松

二〇八〇 花もみちその春秋のあらそひをはなれてたかきみねのまつかな』

嶺上松

二〇八一 いくそはく「つ↓へい」く千年ともしら雲にそひえて高きみねのまつか枝』

澗底松

二〇八二 光なき谷間のまつもおいて世にしる人おほくなりけるかな』

岸松

二〇八三 わたし船まつところともなりにける岸に杖つく松のしたかけ』

(二行分空白) 二九オ

庭松

二〇八四 人ことにいひ合せてもつ「ちく↓くら」しを松をはらゑぬにはなかりけり
二〇八五 みやことも鄙ともいはす庭といふにはは松のなきにはそなき』

庭上松

二〇八六 世の中のうつれはかはる庭つくり松ひと木こそむかしなりけれ
二〇八七 わかやとのものなりながら若かりしむかしはしらぬ庭のおい松』

翠松遶「松↓屋」

二〇八八 年々にみどりいろそふ松かきのおくゆかしくも見ゆるやとかな
二〇八九 たかこゝに千世(代)をしめたるやとなら(む)緑にかこふ松のかき根は』

翠松遶塵

二〇九〇 としにみどり色そふ松かきのおくゆかしくも見ゆる宿かな』
(二行分空白)「二一九ウ

名所松

二〇九一 つれなさは時雨のみかは山の名のあらしも松はしらすかほして』

舊都松

二〇九二 色かへぬ御垣のまつ(む)の深みとりこはたかためのみさをなるら』

故郷松

二〇九三 色かへぬ常磐の「?」の松↓松(貼紙)はふる』さとゝなりしもしらてとしやへぬら』

松の門三艸子の新宅祝に「T」閑居松へといふことを

二〇九四 きはしき市の中にもかくれかのありとやこゝに松かせの吹く』
(以下空白)「二三〇オ

松風入琴

二〇九五 さよふかき窓にすゝしく琴の音はたれまつ風(む)のしらへなるら』

松有歓聲

二〇九六 十かへり花さくやとの松風やうれしきこと(む)の音にかよふら』

社頭松

二〇九七 これやさは一夜におひしたねなら(む)北野(む)の宮(む)のまつ(む)のむらた(む)や
二〇九八 宮はしらたてそめし世も住吉のおまへのはまのまつ(む)はしるら』

二〇九九 大かたに千世とはいはし神代よりさかえ来にけるすみよしの松』

静岡なる八幡清雄か家の會に（T）社頭松（といふことを）

二二〇〇 神垣に年ふるまつのひとならはむかしかたりも「か↓き」かましものを

二二〇一 宮柱ふとしき立てるいはか根のまつはかみ卅のたねにやあるら^{（む）}』

（一行分空白）「三〇ウ

（半面空白）「三二オ

（四行分空白）

柊

二二〇二 八ひろ銚名にきこえたるひゝらきは葉にある針も人をさしけり

二二〇三 いかめしき葉にはたかひてさゝやかにさきてやさしき柊のはな』

松浦伯（^補）爵家の（）庭中（の）松のもとに靈芝の生ひたるをことほきて

二二〇四 よろつ代の名におふ茸もおひにけり八千代へぬへき松の木蔭に

二二〇五 さゝれ石のいはほとなら^{（む）}末かけてよろつ代といふたけや生け^{（む）}』

（二行分空白）「三二ウ

（一行分空白）

鶴

二二〇六 おりたつもねふるも飛もあしたつはなへてゆたけき姿なりけり

二二〇七 千年ふるよはひのみかはあしたつはすかたも聲も品たかきかな』

晴天鶴

二二〇八 くまもなきみとりの空に白雲のなひくはたつのわたるなりけり

二二〇九 あふき見る雲井のたつの一聲にこゝろさへにもはれにけるかな』

晴末鶴

二二一〇 くまもなく晴わたりけり青雲のしろきはたつのつはさのみして』

月前鶴

二二一一 子を思ひてなくにはあらし照月のおもしろき夜のとほ鶴のこゑ』

島鶴

二二一二 鎌倉にむかしはなちし鶴かもし江のしまあたりいまもあそふは』

(一行分空白) 三三二才

海邊鶴

二二一三 竹芝の浦わの松にいまひとつ千代をくはふるともつるのこゑ『

海邊鶴

二二一四 伊勢海や嶋根のたつにことゝは^(む)稲穂さゝけし^(代)千世のむかしを』

(以下空白) 三三二ウ

(一行分空白)

洲 鶴

二二一五 和田の原にはよくはれし沖津洲にひなうちつれてあそふとも鶴』

〈松浦家の発會に〉鶴立洲松浦初會〈といふこと〉を

二二一六 仙人の千世のともつるむれあるはよもきか島の洲さきなるら^(む)

二二一七 わた中^(箱)の^(箱)『日向國宮崎宮にてひよもきかしまはこ』ゝかとも洲さきに立へてゝるたつにとはゝや』

(四行分空白)

〈明治十三年〉勅題庭上鶴馴へといふことを

二二一八 御垣もり衛士にもなれて大庭のおはしのもとにたつあそふなり』三三三才

禁中鶴

二二一九 おりたちてつるもこそ舞へ宮人の竹川うたふあらはしりに』

名所鶴

二二二〇 舞ひ遊ぶすかたも和歌の浦鶴はおゆともしらて千世やへぬら^(む)

二二二一 おもかけのかはらて年やかさぬら^(む)昔なからの和歌のうらつる

二二二二 かくしつゝ千世やへなまし面影のいつもかはらぬ和歌のうら鶴』

松上鶴

二二二三 苔のむすいは根の松にすむ鶴はつみかさねたる八千世^(代)なり^(む)けり』

松上鶴

二二二四 和歌の浦の芦邊もしほやみちぬらん^(ま)なきさの松に鶴のむれある

二二二五 あかしかた繪島の松にすむつるの千代のすかたは筆もおよはず』

松上鶴

二二二六 あかしかた繪島の松にすむたつの千代のすかたを筆もおよほぬ』 *龍頭、朱ニテ「重」トアリ

(一行分空白)「三三二ウ」
(二行分空白)

鶴遐年友

二二二七 久かたの雲井にたくきこゆなり君か千年のともつるのこゑ

二二二八 松か枝に千とせをかけてきこゆなり君をそ老のともと見るらぬ』^(む)

鶴の一羽たてるかた

二二二九 うちむれてとひかふよりはおりたつか心たかくも見ゆる影かな

二二三〇 ゆたかにも立補入《て》《るつるかな我ひとり千世はしめつといはぬはかりに》

鶴心とやたせるかた

二二三一 立ならふものこそなけれ小松原ひとりしめたるたつのすかたは』

鶴のむれたせるかた

二二三二 そら高く飛ふにあきてやおりたちて澤邊に遊ぶ千世のともつる

二二三三 すかたには老もわかきもわかねとも友むつれして遊ぶあしたつ』三四才

暁 鶏

二二三四 なか／＼に八聲の鳥そむつましきあけぬとつくる人もなき身は

二二三五 神代をもかけるとなくか天の戸をおしあけかたのにはとりの聲』 *龍頭、墨ニテ「春のβニ／出つ」トアリ、↓【三九】

暁 鶏

二二三六 なか／＼に八聲の鳥そむつましきあけぬとつくる人もなき身は』 *龍頭、朱ニテ「重」トアリ

(二行分空白)

鷺

二二三七 しら鷺はいよ／＼白し紅ににほふはちすの葉かくれにして』

鷺の《たてる》かた

二二三八 こもり江の藻にふす魚やねらふらんとむころもさらす鷺のたてるは』

詩題江雨鷺飛

二二三九 雨ましりあしの花ちる浪葉江にさきのうは毛も飛ふかと思ふ』三四ウ

梟鳴松桂枝といふ心を

二二四〇 ひはたくちいらかやふれてもる月のかつらか枝にふくろふの啼』

鷺

二二四一 ものゝふも弓矢はとらすなりにけり長閑に羽うてえそのあら鷺

二二四二 雪しまきしら浪たかきいはかとうは毛ふかせてたてる鷺かな』

蝦夷の島に雪ふり鷺の飛ひたるかた

二二四三 みちのくのえその島わに飛ふ鷺の羽かせもあらくたつ吹雪かな』

(七行分空白) 二三五才

(半面空白) 二三五ウ

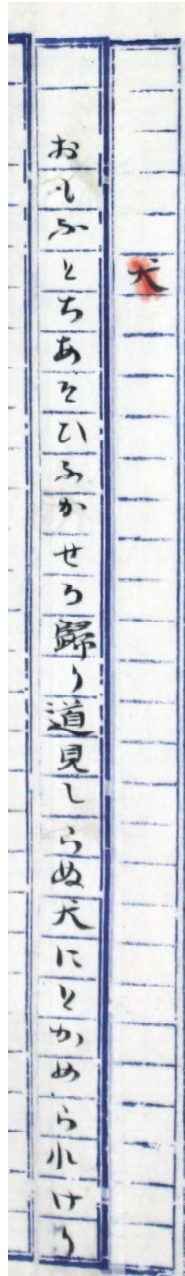
犬

二二四四 おちたるもひろはぬ御世は道の邊にぬしなき犬の鳴く聲もせず』

犬

二二四五 おもふとちあそひふかせる歸り道見しらぬ犬にとかめられけり』

* ユノ用紙、二行分ノ原稿用紙ノ上左側ニ、歌本文ノ原稿用紙一行分ヲ貼付ス



牛

二二四六 千里ゆく駒もなにせ(む)ことひ牛ももの咲く野に放ちおく世は

二二四七 うちつれて桃咲く野邊に遊ふなりうしとも世をは思はさる(む)ら

二二四八 大津馬のいそくゆふへにからくるま引おくれてもかへる牛かな』

猿

二二四九 かたわれて木の間にかゝる月影のをくらき峯にましらなくなり

二二五〇 さかしらに人のまねする人よりもまさるは山のおくにこそすめ』

(二行分空白) 二三六才

亀

二二五一 静かなるいけのこゝろにすむ亀はなほうきしつむ時はありけり』

池上亀

二二五二 よろつ代のこゝをすみかに思ふら^(む)んところもかへぬ池の岩かめ』
亀のむれゐるかた

二二五三 萬代をかさねて見るもうれしきはむれゐる亀のすかたなりけり』
(三行分空白)

鯉のかた』

二二五四 年をへて瀧の門にもほるへくひれふるこひのいさましきかな

二二五五 瀧津瀬にひれふる鯉をいさましき古井にしつむふなもある世に』三六ウ

*コノ用紙、三行分ノ原稿用紙ノ上右側ニ、歌題ノ原稿用紙一行分ヲ貼付ス

(一行分空白)

酒

二二五六 吳竹のみとりの酒はつえよりもおいをたすくるくすりなりけり

二二五七 ゑひし』^(貼紙)ゑひしれてたちまふあしの十文↓れてたち舞ふ足の十文字をいく』百たひかふみあそふらん^(む)』 *「文」字、書キサシ

漣

二二五八 うけてまたかへすあらむの盃につきぬなさけをくみかはしつゝ』

漣

二二五九 玉たれの子瓶の酒にゑひしれてあしはよろきのいそかれもせず』

酒忘憂

二二六〇 酒のめは憂き世の夢も覺めぬるを酔ふものとのみ思ひけるかな

二二六一 ^(春の野)野に山にかすみを汲てあそふ日はとりをうらやむ歎たになし

二二六二 うしとおもふ世に楽しくそなりにけるこれや聖の情けなるら^(む)ん

二二六三 吳竹のうきふししけき世なりとは酒飲まぬ人の云にやあるら^(む)ん』三七オ

二二六四 世の中にありわつらへる病をもいやすくすりは酒にそあるらし

二二六五 つなかるゝ世のほたしをもとくものはこの一杯の酒にそありける

二二六六 くれなるの塵のけかれをはらふこそみとりの竹の葉風なりけり

二二六七 竹の葉にこゝろの塵をはらはせて憂して^(ふ)節は世になかりけり』

二二六八 すみ「わ↓」に』こり黒き白きもけちめなり飲みてそ世をは過くへかりける *コノ用紙、次用紙ヲ左端上ニ貼付ス

二二六九 もみち葉をたきつゝ酒をあたゝめて飲て忘れ^(む)ん世の憂きあきを

- 二二七〇 千々にものを思ふこゝろを一杯の酒にはやくもわすれけるかな
 二二七一 千尋あるみとりの竹の葉かくれに遊び飲みてはうきふしもなし
 二二七二 巢竹のみとりのさけはつえ(糸)よりも老をたすくもくすりなりけり * 鼈頭、朱ニテ「重」トアリ
 二二七三 もけてまたかへすあもむの盃につきぬなさけを汲みかはしつゝ * 鼈頭、朱ニテ「同」トアリ
 二二七四 天地も「すれ(貼紙)↓わす」るゝ酒のゑひこゝろちりはかりたにうきくもゝなし』
 (二行分空白)「二七ウ」

茶

二二七五 山川の清水に木の芽煮てのみてうき世のゆめをさましつまかな』

かにのいほ(編)といふ五文字を句のかしらにすゑて茶室

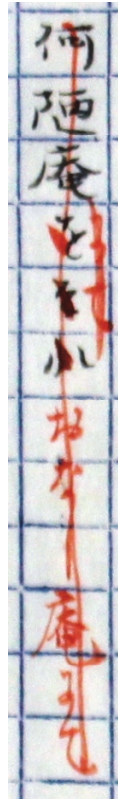
の意を尾張人河村清綾か乞ふに

二二七六 かまの湯のにゆるおとのみのかにていまはうき世の絆たになし』

何陋菴にて橋本竹友翁茶(か)へを点してすゝめけるに

二二七七 七十にあまるおきなかつたつる茶の手ふりものは越すそありける

何陋菴(註)を七札(註)へおなし庵にて * 「をそれ」、ミセケチ。次掲図版参照。鼈頭ニ朱ニテ「ゝ」アリ



二二七八 それなからなにのいやしき事かあら(む)黒木の柱かやののき端の

ま杜

二二七九 柴の戸を見てこそしのへ世の花をいとひし君かこゝろふかさを』

(二行分空白)「三八オ」

明治二十九年三月十四十五の両日松浦伯(補)《(補)蓬萊園に

て大茶湯といふことのあるけり日おのれ剃髪染衣の

姿にかへて園中一室の庵主とありて茶(な)たつるわさし * 鼈頭ニ朱ニテ「ゝ」アリ

ける時しもをとつ日ふりし雪名残無う消えていと

とかなりければ

二二八〇 のとかなる春のこゝろになりけりかしらの雪も今日は残らて』

(以下空白) 三三八ウ

(一行分空白)

讀書

二二八一 あかす見る書のこゝろをあちはひても食ふ時も忘れけるかな

二二八二 よむ文にむかしの人を友としてくらす日かけはなかしともなし』

讀史有感

二二八三 時にあへはねつみも虎となるものをしかを馬とも云はゝいひて^(む)』

某讀姉川戰記といふことを

二二八四 しる人に知られてひとり姉川のみつのおもてをおこしつるかな』

(以下空白) 三三九オ

明治六年初めて太陽曆を頒行せられる時〈に〉

二二八五 月なみも移れはかはるはつこよみ花さくころをまつひらき見む』

(以下空白) 三三九ウ

(以上空白)

〈明治〉十九年一月三十日上野の松^(マ)韵亭にて語學會のありけ

るに雪いみしう降て友たちのおそかりけれは

二二八六 ふる雪に道やまとへるふみわけ^(む)こゝろ深さはおくれさらめと』

- 松浦多氣志樓（か）著せる壺碑考のおくに牛蒡（か） *龍頭二朱ニテ「」アリ
- 二二八七 かきつくす壺の石ふみふみ見ても千とせのあとを知るへかりける
- 二二八八 みちのくの多賀さかしらにするへして壺の石あとたかへけん（む） 四〇才

壺の碑考をみる 尾光

みちのくの壺の碑考をみる
 はあゆむ壺の碑考をみる
 壺の碑考をみる
 壺の碑考をみる

※松浦武四郎『壺廻碑考』（玉巖堂、一八七二）より
 ※国立国会図書館・デジタルコレクション所掲

（おなし人の）
 松浦多氣志樓が古き鈴を多く集めてそのかたともに
 すり巻にもものせるを見て

- 二二八九 石上ふるきをこのむきみか名もいよ／＼ひくすのおとかな
- 二二九〇 うれしさに翁（む）もまひやいてぬらんふりにし鈴のかすをあつめて』

裁縫指掌といふ書に中村正直先生（ぬし）に代りて *籠頭ニ朱ニテ「ハ」アリ
からころもたちぬふわさしよからすは錦も綾もはえなからまし』



から衣ならぬふわさ

しよからすは

錦も綾も

はえなからまし

あはれぬひげ

あはれぬひげ

あはれぬひげ

あはれぬひげ

中村正直

※近藤寿和『裁縫指掌』上（近藤寿和、一八八〇・二）
※国立国会図書館・デジタルコレクション所掲

春月へ花へ歸鴈へ三題歌合の判しける時その巻のおくに

二二九二 月かすむ花の雲井にかへるかりとりあつめてもめつらしきかな』

開化新題の中新聞停止へといふことを

二二九三 いくそたひつまれてもなほつきせぬは言なし草の種にそありける』

(以下空白)四〇ウ

* 文久三年江戸將軍家上洛の繪卷物にしるす(を)松浦四 * 鼈頭ニ朱ニテ「」アリ

位に代りて * コノ箇所、「江戸」ト墨書シ、ソノ上ニ貼紙ヲ以テ抹消ス

二二九四 梓弓はる／＼のほるみやこ路はふるきためしを引にそありける』

備後國山南村先照寺の什物円「物↓光」(貼紙)大師画傳の掛幅を見

て

二二九五 あはれわれすくせいかなる契ありてかゝるみ影を今をかむら^(む)』

* 薩摩國櫻島の繪にかの國人の歌乞へりければ * コノ箇所ニ丁子色ノ「」アリ、書込ナラン歟

二二九六 日の本の花の名に負ふさくら島あふきても見よみやこかたひと』

かの人のうつしものせる古器物とものかたを見て * 鼈頭ニ朱ニテ「」アリ

二二九七 飛彈人のむかしもたりしうつは物そのうつし繪も巧なりけり』

水の面に蓮の花咲き浮葉の上に蛙のあるかた * 鼈頭ニ丁子色ノ「」アリ、書込ナラン歟

二二九八 咲く花もたへなる池のはちす葉にかはつものりの聲やたつら^(む)』

(一行分空白)四一オ

蛸の畫に

二二九九 入るといふまことの道は名のみにていもに思ひを猶やかくら^(む)』

(二行分空白)

桃源圖

二三〇〇 三千年になるてふ桃のみなかみは老すしなすのひとや住むら^(む)』

詩題寒江獨釣圖(詩題)

二三〇一 白鷺のうは毛の雪もさむき江に細きやなきのいとをたれつ』

(五行分空白)四一ウ

劍

二二〇二 つるき太刀さやにをさまる世なれともさすかに身をは放たさりけり』 *コノ用紙、次紙ノ上左側ニ貼付サル
二二〇三 ますら男のこゝろとつかの劔こそ神代なからのひかりなるらめ』

浅田宗伯國手か新に劔を造らせて龍のかた彫りつけ
たるに歌乞へりければ

二二〇四 秋の水さやけき見れはおとにきく龍のいつみもかくやとそ思ふ』

癡刀

二二〇五 捨てすむ世こそやすけれ小劔太刀むかしは身をもはなたさりしを』
(二行分空白)

弓

二二〇六 ものゝふのあら木の真弓いにしへに押返しても張ら^(む)れとそ思ふ

二二〇七 うはへのみつよきすかたを飾り弓ひとのこゝろの花ぬりにして』 四二才

明治二十年徳川三位殿の館に行幸ありて流鏑馬のわ

さ御覽せさせ給ひける時

二二〇八 弓矢とる籠手の赤地のにしきこそ天つ日かけにかゝやきにけれ

おなし時射手の人々の年老たるか多きを見て

二二〇九 翁さひきるやにしきのひたゝれも今日をはれなる射手のもろ人』

明治二十年四月十七日忍か岡にて騎射を見て

二二一〇 ものゝふのふるきためしを引く弓に駒さへいさむ花のかけかな

二二一一 そのかみを忍ふかをかに馬弓のむかしを見るもなつかしきかな』

井上義斐^註 韮^註 矢に鷹をそへておくりけるに *驚頭ニ朱ニテ「」アリ

二二一二 あやまたす飛ふ鳥をたに射とるへき君か弓矢をまなひてしかな』

(以下空白)「 四二ウ

(以上空白)

楯

二二二三 小さくらの鎧のそてにとりそへて花いかたくむたてのいたかな』 四三才
(四行分空白)

對 鏡』 *コノ用紙、次用紙ノ右端上ニ貼付サル

二二二四年をへてむかひなれにし鏡にもむかしのかけは見えずなりにき
二二二五朝な／＼むかふかゝいつしかと「埋もれ（照紙）うつれ」はかはる老の（お）影』
（三行分空白）

樂焼の茶碗を

二二二六 おいらくの名をむつましみ釜の湯のわきて心もくまれぬるかな』

（二行分空白）「四二ウ

水戸三位君松戸の別業にて手つからつくらせ給ふ茶

碗を賜はりける（ひ）し（か）こまりにそへ（て） * 籠頭二朱ニテ「」アリ

二二二七 くみいれてたつる木の芽も一しほの松のみとりの色やそふら（む）

二二二八 木の芽煮る草のいほりの釜の湯もわきてやたてむ松かせのこゑ』

（二行分空白）

亀の甲もてつくれる笠を

二二二九 石亀のかはらてとしをかさぬるはいたゞく人のよはひならまし』

（二行分空白）

竹裡燈

二二三〇 みとりなる竹の林にともし火の花はあかくも見えにけるかな

二二三一 くれ竹の葉わけの風のをり／＼に見えみ見えすみさす火影かな』 四四才

樓上燈

二二三二 あて人のうた（け）なるら（む）高殿のおはしまてらす夜半のともし火』

（二行分空白）

つくゑ

二二三三 難波津をならひそめてし文つくゑに今たに寄りて蘆手をそかく』

ゆぐれ

二二三四 難波津をならひそめてし文机にいまたによりてあしてをそかく』

（二行分空白）

杖

二二三五 わけまよふ歌の中山みちとほみつら杖ならてつくつ（ゑ）はなし』

* 籠頭、朱ニテ「重」トアリ

(以下空白) 四四ウ
(二行分空白)

電話器

一二二六 たなはたにかしてや見まし天の川たちへたてゝも語りあふへく』
(二行分空白) * 龍頭ニ朱ニテ「」アリ

金禄公債

一二二七 「明日か川きの↓飛鳥川きのふ」のふちは背になりてさためなき世を渡る今日かな』
(以下空白) 四五才
(半面空白) 四五ウ

車

一二二八 おもふとちかたらふ夜半は小くるまのくさひぬきても引止めて』
一二二九 千鳥鳴く加茂川隰(堤)よるゆくはいもかりいそくるまなるら』
(一行分空白)

自轉車

一二三〇 手もたゆくまはず車は水とりのあしにひまなきおもひのみかは』
(二行分空白)

鉄道馬車

一二三一 くらかねの道もうもるゝ白雪においたるうまも行きなやみつ』
(一行分空白) 四六才

水 潜

一二三二 あやふまで千尋の「?」底』せかつかなん龍(龍)のあきとのたまもとるへく』
(三行分空白)

聞村笛

一二三三 春風のふきさそひ来る笛の音はうめ散るさとのあたりなるらん』
(三行分空白)

鳳 笙

一二三四 竹の實をはむてふどりの音にかよふ笛のしらへそ世に類ひなき』

(一行分空白) 四六ウ

夜琴聲

二三三五 聞く人のこゝろさへにも引れける夜ふかき窓のつまことのこゑ』

夜琴聲

二三三六 鳥か鳴くあつまのことも聞ゆるは夜ふかき窓のあそひならまし』

琴有「観↓歎」聲

二三三七 松風にしらへあはするつま琴のをことにかよふ千世のこゑかな』

(二行分空白)

圍碁

二三三八 うちやめて笑ふ聲のみ聞ゆるはいまあらそひのはてし_(む)なるら_(む)』

二三三九 あまたゝひうちかそへてもたのしさの盡ぬや濱の真砂なるら_(む)』四七オ

玉突

二二四〇 かつまたの池のこゝろに風見えて玉をまるはすつゆのはちす葉』

(六行分空白)

鐘聲何方

二二四一 西山に月はかたふくあかつきのかねのひゝきは嗟峨かふくらか』

舟中聞鐘

二二四二 この寐ぬる朝つま舟は三井寺のかねのこゑにやゆめ「せ_(む)さ」ますら_(む)』

(一行分空白) 四七ウ

(一行分空白)

釣舟

二二四三 すみた川つりする舟に言とは_(む)今日_(む)はえものゝありやなしやと

二二四四 よさの海やうら島の子かいにしへもうかひ見_(む)ゆ蟹_(む)のつりふね

二二四五 思ふこと世にありとしもなみの上にかひて渡るあまのつり船』

漁舟

二二四六 秋風にさわくもしろき浪の穂にすゝきつりふねこきかへるらし』

(三行分空白)

袖川筏

二二四七 ほとともにくたりのみゆく袖川の(い)かたや老か身のたくひなる』四八才

朝眺望

二二四八 すみなれし軒端の山も見まさりのするはあしたの氣色なりけり

二二四九 海川の「海(山)野」やまもことに見まさりのす(る)はあしたの氣色なりけり』

四時嘯雪処といへる心を

二二五〇 時しくの高嶺のゆきはよろつ世もかはらぬ宿のひかりなりけり』

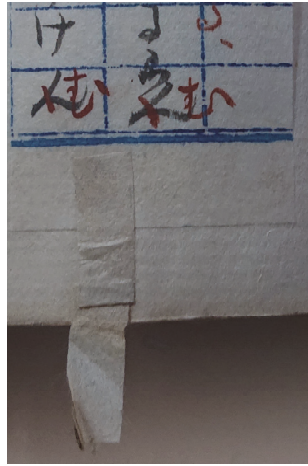
(以下空白)二四八ウ

聖徳太子

二二五一 馬屋戸の御子の馬子をひきたるはかたみに法のためにや(そ)ある(む)ら(む)

二二五二 馬屋戸の名にお(う)ふ御子のいかなれば鹿の園にはおもひりけん』

* ヌノ紙片、下部余白ニ付箋ヲ貼付セリ(次掲図版参照)
* 龍頭、朱ニテ「」アリ



〈在原〉業平朝臣

二二五三 すみた川君しとはすはみやこ鳥ありやなしやも知られさらまし』

聖廟

二二五四 なる神のとろくはかり聞えしや天にも満る御稜威なりけん』
* 龍頭、朱ニテ「」アリ

菅公 * 龍頭、朱ニテ「」アリ

二二五五 藤浪のうらむらさきのうはすはこそめの梅のいろはあせしを』

清少納言

二二五六 身のほとにあはせし人の門よりも君かこと葉の高くもあるかな』

(二行分空白)四九才

源爲朝

二二五七 くるかねの楯はものかはひと矢にて大ふねをさへくつ^{かへ}速しつる

二二五八 名に負へる筑紫のみかは南の海おきなはをさへきみそなひけし

二二五九 山をぬき船をおすにもまされるは君か弓矢のちからなりけり』

源義仲

二二六〇 うつ蟬の「知^{貼紙}↓」りへをねらふかまきりの斧のやふれし木曾の深山木』

源朝卿

二二六一 あしたぬ蛭の小島にとしをへてあなから人をなひけつるかな *鼈頭、朱ニテ「宮内省入」トアリ、↓【二六五〇】

源廷尉

二二六二 鳥うちにまく白紙のしら真ゆみとるやいくさのきみならてたれ』

辨慶

二二六三 呉竹をきりてさしたる雪もよにふかきころのそこは見えつゝ』

(二行分空白) 四九ウ

梶原景時

二二六四 おのか身もつひに薪となりけらしかまくら山の木々をこるとて』

曾我兄弟

二二六五 おなし世にたち竝はしと双子山不盡の野に出しかひはありけり』

青砥藤綱

二二六六 なめり川浅瀬を照らす松の火にふかきころのそこは見えけり』

楠正成卿

二二六七 九重の近きまもりはたちはなのみきにいてたるものなかりけり

二二六八 右^つよりもかたきみまをの楠はよの代^つくもぬ名にまそありけり』

名和長年卿

二二六九 おきつ浪千重にもおほきみもふねの上こそ頼みなりけめ』

(二行分空白) 五〇オ

加藤清正

二二七〇 から国の虎とふ神のたけき名もきみにはいかてゆつらさるへき』

*鼈頭、朱ニテ「宮内省入」但少と異也」トアリ、↓【二六五二】

(以下空白)一五〇ウ

延元のむかし常陸國真壁郡伊佐の城に在りて南朝の
御爲に忠節を盡し、伊達行朝朝臣の五百年祭に朝臣

の歌の新拾遺集にのりたる「かりそめとおもひしほと
に筑波嶺のすそわの田居もすみなれにけり」とあるを

おもひて

二三七一 つくはねのすそわの田居に年をへて伊佐ましき名をあけし君かな』

慶應の末つかた高松保郎といへる人ゆゑありて親し

き人の命をすくは^(む)んかため^(む)にわか腕^(きり)を来てさる人に

見せし事のゆゑよしを記せる断腕記といへる書を見

て

二三七二 をしけなくきりて見せしは惜とおもふ人をたすくる手にこそありけれ

二三七三 二つなき人のいのちを助けんとわかた手をはきりて見せけ^(む)』五一才

源氏物語の中空蟬の巻のころを

二三七四 したくゝる心もしらて^(や)進みつのおもておこしとなにおもひけ^(む)』

女三宮

二三七五 玉たれの小簾にまつはるから猫のつな手そ結ふはしとなりぬる』

紫 上

二三七六 去年よりも今年はまさり昨日より今日めつらしき花のいろかな』

新羅義光足柄山に笙吹きたるかた

二三七七 家の風吹きたえせしとあとおひしあしから山のかひはありけり』

(以下空白)一五一ウ

妓王妓女のかた

二三七八 秋にあふ嵯峨野の尾花女郎花やつれしさまもあはれなるかな』

本多忠勝^(朝臣)ゆ^(ら)長湫の軍に駒をとゝめ水かふかた *鼈頭、朱ニテ「ゝ」アリ

二三七九 水のおもにすむ^(て)月かけの駒なれやさるの手にしも取^(ら)ぬれさりしは *鼈頭、朱ニテ「ゝ」アリ

二三八〇 なかくてにしけるはしはをふみしたきいさむ小牧放れ駒かな』

伯牙琴弾くかた

二二八一 峯のあらし流るゝみつのおとつれもこゝろすまして聞く人そきく』

王昭君

二二八二 する墨のそのはら黒き繪たくみやかきひかめけ^(む)君かおもかけ

二二八三 うき旅にやつれはてたる面影もなほうつし多にいくらまされり』

(二行分空白) 五二才

諸葛孔明城櫓の上にて琴引たるかた

二二八四 千よろつのあたも木の葉と散にけりしらへことなる峯のまつ風』

詠史

二二八五 時にあへはねつみも虎となるものを鹿とうまともいはゝいひて^(む)』

達摩^(たつま)

二二八六 いくとせかかへにむかひて世の中を夢なりけりと思ひ知りけ^(む)』

寒山拾得たちならひて二人ともに^(む)指させるかた

二二八七 およひさす影はふたつに見ゆれとも心の月はひとつなりけり』

(以下空白) 五二ウ

老人

二二八八 いたつきのいらぬかきりは花につくみを老らくの思ひ出にせ^(む)』

二二八九 今はたゝ身にいたつきのなきをのみほこるはかりも老にけるかな』

二二九〇 わかきにも我おとらしと思ふこそほけたるおいのこゝろなりけれ

二二九一 老の坂いよゝのほりゆくものを下りさかとはいかていふら^(む)』

老人

二二九二 年よりもわかしく見ゆるといはるゝか嬉しきはかり老にけるかな』

賣花翁

二二九三 世わたりも安けなりけり老らくの重荷はおはぬはなうりのこゑ』

樵夫

二二九四 繪によくも似たるさまかな薪おひて谷のかけ橋わたるやまひと』

樵夫

*コノ紙片、前行紙片ノ上ニ貼付セラル。下部ニ「六十」透ケテ見ユ

二二九五 繪にもよく似たるさまかな柴おひて谷のかは橋わたるやまひと』五三才 *鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

辻 君 *鼈頭、朱ニテ「雜」トアリ

二二九六 ふけわたる霜夜の月のさむしろに結ふもつゆのなけゝならずや *鼈頭、朱ニテ「〇」アリ

二二九七 道の邊のまつのはひ根のかりまくら千代とは誰も契らさるら

傀儡

二二九八 たはれ女か今宵は誰にあふみちやかゝみの宿にゆふけはひして

妓樓の禿といへるものを

二二九九 いつしかと里馴そめてはなにそひやなきになひく春のうくひす

仙人

二三〇〇 山人のおいす死なすのたのしさを山ひとならて知るよしもかな

仙人

二三〇一 仙人になりはてすしてやまひとのおいす死なすにあえ^(むよ)しもか

(二行分空白) 五三ウ

媒助法

二三〇二 いもと背の山田の稲にひくなはもむすふの神のこゝろならまし

外 婚

二三〇三 蟬文字のよこはしりたる妻とひはいちはやき世のすさひなるらし

衛 生

二三〇四 大名持神のみたまのふゆよりもまさるや御代のめくみなるら^(む)

髪

二三〇五 ふりつもる雪そわひしきそのかみは雲とはかりも見えける物を

(以下空白) 五四オ

(半面空白) 五四ウ

親 友

二三〇六 すなほにてひとふしあるを呉竹の世にたのもしき友としてまし

會 友

二三〇七 馬くるまつとへる門は世をうしとおもはぬどちの圓居ならまし

會友

二三〇八 あしわけの難波おきてもうちよら^(む)うらなつかしき友の圓居に
二三〇九 うちよりにて語る言葉の花かたみめならふともそうれしかりける』

白石千別か新潟奉行にてかしこに住みける頃事のつ
いてに

二三一〇 玉章もかすみにきえてゆく鷹のこゑするかたへやるこゝろかな』

飛彈國高山なる佐藤泰郷か初めてとひ来て物語など

しける時〈に〉

二三一一 おとにのみきゝつる飛彈の高山のたかきこゝろを君に見るかな』五五才
(半面空白)二五五ウ

思

二三一二 つく／＼となかむる空に立まよふ雲やおもひのけふりなるら^(む)』

幽思

二三一三 夕暮のそらたきものゝうきけふり消ゆはかりなるわか思ひかな』

夢 *籠頭、朱ニテ「」アリ

二三一四 世の中はゆめの浮はしうつゝあるものとはかけて思はさらな^(む)』

夢 *籠頭、朱ニテ「」アリ

二三一五 世の中は夢のうきはしかけてたにうつゝあるものと思さらな^(む)』

夢

二三一六 夢の中にゆめや見てましなかくにさめては物のおもはしき世に』

夢

二三一七 いひふりしことなりなから世の中は夢といふより外なかりけり』五六才

夢

二三一八 ねかはくは夢の胡蝶に身をかへてさめすも花にうかれてしかな』

暁夢

二三一九 横雲のやみをはなるゝ明方にたえ／＼かゝるゆめのうきはし』

旅泊夢

一三三二〇 なたこえてゆるむころのはりまかたわか家嶋も夢に見えつゝ』

山家夢

一三三二一 かけはなれ思ひ入りにし山にてもなほ世に通ふゆめのうきはし

一三三二二 夢にたにいまはみやこの見えぬまで住なれにけりみ山邊のさと』

(三行分空白) 一五六ウ

うたゝ寐^(ね)

一三三二三 ほそ聲に名のり「もて来る蚊に^(貼紙)↓くる蚊にさまさ」れつ^(人)まぢわふる宵のうたゝ寐』

寐 覺

一三三二四 来しかたも今ゆくすゑも忍はれてなか／＼し夜をいく寐覺しつ』

寐覺遠情

一三三二五 草まくら寐さめのころろゆく物はみよし野の花さらしなのつき』

樂未央

一三三二六 おもしろきすまひは數多見つれともほてのつかひそ猶も待るゝ * 鼈頭、朱ニテ「ゝ」アリ

一三三二七 まとゐして月まつよひの盃にさしいつるかけそうかひそめける』 * 鼈頭、朱ニテ「ゝ」アリ

(三行分空白) 一五七オ

(半面空白) 一五七ウ

述 懷

一三三二八 いつこにか遁れすむへきもろこしのよし野の山もあらし吹と^(いひ)も

一三三二九 ものゝふの恥といふことなかりせはいかに憂^(き)世の過ぎよからまし』

述 懷

一三三三〇 ともすれは人まねに世をなけくかな數ならぬ身の程もおもはて

一三三三一 ことの葉のおよはぬ身をもなけくかな月雪花を見るにつけても

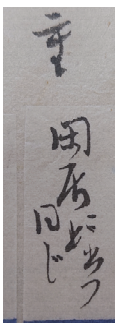
一三三三二 いまは世にひかるゝこともなき宿に聲する友のなとまたるら^(む)』

* 鼈頭原稿用紙欄外ニ、墨ニテ「重」トアリ

* 鼈頭原稿用紙欄内ニ、墨ニテ「閑居」も出つ／＼同じ」トアリ。下掲図版参照。

獨 述 懷

一三三三三 きく人のたえてなければこのころは獨ことたにいはいはれさりけり』



老後述懐

二三三四 　むかしのみ樂しかりきといひ思ふかたくなしきそ老のくせなる』

（一行分空白）五八才

寄露述懐

二三三五 　草の葉にやとるつゆたにあるものをおき所なきわか身なになり』

春述懐

二三三六 　世の中にそりあはぬ身はあつき弓はるたにとも音備（つれ）もなし』

秋述懐

二三三七 　秋の夜のな（も）か（も）の（も）かたりきく人にいとはるゝまで老にけるかな』

秋述懐

二三三八 　なからへて何のかひよとなかれけりうき世と秋の惜からぬ身は』

歳暮述懐

二三三九 　行く年もいまはをしまし我身世にふるきこよみの類とおもへは』

歳暮述懐

二三四〇 　ゆく年もいまはをしまし我身世にふるきこよみの類（む）と思ふは』

（一行分空白）五八ウ

歳暮述懐

二三四一 　人はみな暮行くとしををしむ世にありわつらふや何の身のはて

二三四二 　いたつらに世に埋み火の灰となるこゝろにさへもをしき年かな

二三四三 　いつまでか暮ゆく年を惜むら（む）おほかたは世も見はてゝし身の』

寄弓述懐

二三四四 　今は世にひく人もなくなりはてし丸木のゆ（貼紙）「め（む）み」そ身のたくひなる』

寄鹿述懐

二三四五 　世にありてなにかひよと聞ゆなり老の寐覺の小男しかのこゑ』

寄草述懐

二三四六 　おく山のいはもと小管（む）かりそめの世にかくれ住むみの笠にせ（む）

二三四七 　たちこえて人にしられ（む）節（む）もなしよもきに交るあさまし（貼紙）「き（む）み」身は

*龍頭、朱ニテ「重」トアリ

二三四八 耳なくきことなし草を身につみてこゝろのとかに世を過ぎまし』五八才

寄世述懐

二三四九 常なきをつねとおもはゝ世の中のうきをうしとも歎かさらし』

寄雪延思 (述) * 麓頭、朱ニテ「✓」アリ、詞書原状次掲図版参照

二三五〇 わか身世にふる雪なら「ん↓は」消えやらて山より高く積れとそおもふ』

思往事

二三五一 ともすれは戀しやなにと思ひ出もなくて過にてむかしなりしを

二三五二 さま／＼に見し世おもへは夢よりもはかなきものは現なりけり』

ひとりこと

二三五三 思ふこといひもしてましいは^(む)れこと聞知る人のある世なりせは』

(以下空白) 五八ウ

(一行分空白)

十年あまりかほと箱館の任にありて江戸に歸りけるへに』

蓬園大人をはしめしたしき友たちもなきかおほくな

りていと心ほそき秋の夕へに』

二三五四 秋ふかき庭の穂蓼に鳴くむしのこゑしるとももなきかかなしき』

故仲田先生の短尺數葉にそへて佐々木弘綱へか色ふかく

大人 残ること葉をそのかみの庭のをしへのかたみとも見

よ』といひおこせける返し

二三五五 鳥のあと見てこそしのへ昔わかはしりてすきしにはのをしへを』

世の中移り替りて後水戸四位の君齋に見えまゐらせ * 詞書原状次掲図版参照

て

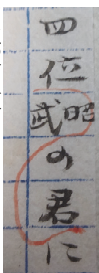
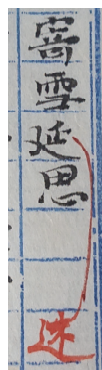
二三五六 小ひふりしことなりなから世の中は夢といふより外なかりけり * 麓頭、墨ニテ「夢ニ出づ／重」トアリ

二三五七 うれしさに今日そこほるゝ世の中のうきにはたへし涙なれとも』五九才

(半面空白) 五九ウ

春懷舊

二三五八 むかしにもかはらて花は咲くらめと見し世の春の心地こそせね



二三五九 ありし世をしのふに傳ふいと水のいとしめやかに
雨そふる
二三六〇 いとしく身にそしむなるなき人を忍ふ今年のはるのあけほの』

夏懷舊

二三六一 いにしへをこひちに「か？ふ↓おふる」あやめ草長きねに（こそなほなかれけれ）のみな（こそなほなかれけれ）なかれけるかな』

* 龍頭、朱ニテ「」アリ

秋懷舊

二三六二 秋風のうち吹くなへにおとろくは月日はやく過くるなりけり
二三六三 いかばかり昔しのへと秋の夜のつきぬなこりをそらに見すら（む）ら
二三六四 うき秋をおもひしむればなかくに過にし人そうらやまれのける』

冬懷舊

二三六五 龍「川↓津」瀬の月の光を見てそおもふいさきよかりし人の昔を』



（一行分空白）六〇オ

春懷舊

二三六六 折たきてけふりにむせふほたの火も昔をしのふつま木なりけり』
寄梅懷舊
二三六七 春ことに庭の梅さけり来て見よといひてし人よいまはいつらは』
春雨懷舊

二三六八 たきすさふかうのかをりもこまやかに春雨「今日↓けふ」るゆふくれの空』

春雨懷舊 * 歌題、朱ニテ抹消サレズ

二三六九 咲く花と見しほともなくあは雪のきえかへりてもぬらす袖かな』
寄花懷舊

二三七〇 まく花はありしむかしにかはらねと見し世の春の心地こそせね』 * 龍頭、墨ニテ「春懷旧と同趣／向同方省」トアリ、↓【二三五八】

寄花懷舊

二三七一 まく花はありしむかしにかはらねと見し世の春のまよもせせね』六〇ウ

寄花懷舊

二三七二 ともに見しむかしの春のしのはれて花にも袖をぬらす今日かな』

名所郭公懷舊

二三七三 橘の小しまかまきのほととさすむかしをしのふ音をや鳴くら（む）ら』 * 龍頭、墨ニテ「夏部郭公ノニ出づ重」トアリ、↓【八四九】

短夜月懷舊

二三七四 夢なれや難波の芦のふしのまに見るほともなきみちか夜のつき』

月下懷舊

二三七五 さらさりし人の昔をきゝてたになみたくま「れしく（紙）↓しくな」るつ（き）夜かな

二三七六 むかしたにむかしを人の忍ひけ（む）月やむかしにかはらさるら（む）』

寄草花懷舊

二三七七 あかたなに水そゝきたる草はなは野にあるよりも露けかりけり』

寄紅葉懷舊

二三七八 花よりも色こく染しもみち葉のなこりはそてのなみたなりけり』六一才

寄秋虫懷舊

二三七九 ありし世をしたふかことくうき秋をうらむるかこと鳴く虫の聲

二三八〇 さま／＼に聲こそかはれ鳴く虫のおもひは同じ秋にやあらぬ

二三八一 まつ虫のまつとしもなき秋の来てわれさへうたて音に（なか）流れけり』

時雨懷舊

二三八二 ほしあへぬ袖の時雨やをしまれし秋のわかれの名残なるら（む）』

夕時雨懷舊

二三八三 はれくもり定めなき世のあはれをもかこちよせたる夕時雨かな』

夕時雨懷舊

二三八四 聞けかしといはぬはかりに入相のかねのおとさそふ夕時雨かな』

落葉懷舊

二三八五 散りはてゝ後も落葉のおとするはあととふ人のあはれなりけり

二三八六 をしまれて散るさへ花におとらぬはあかぬ櫻のもみちなりけり』六一ウ

雪中懷舊

二三八七 年月のつもるにつけてしら雪のふりにしひとのあとそこひしき』

寄竹懷舊

二三八八 呉竹のよゝのむかしも忍はれて千ひろあるかけのなつかしきかな』

寄書懷舊

二三八九 うるはしくかき流したる水くきの跡を見るにもぬるゝそてかな
二三九〇 筆のあとを雲けふりとも見る紙のうへにもおつるわか涙かな *コノ紙片、下部余白ニ付箋ヲ貼付セリ

寄歌懷舊

二三九一 ことの葉の花の匂ひし残らすはしらぬむかしの何へにしはむ
二三九二 藻汐草かきあつめたることのはに朽せぬ名をものこしつるかな

(二行分空白) 六二二才

(半面空白) 六二二ウ

對花憶昔

二三九三 思ひいつる昔の春にかはらぬははな見てあそふころなりけり
二三九四 をとこ山むかしかさしゝ花さくらあはれ老木となりけるかな
*鼈頭、墨ニテ「二首共ノ對花思昔ノとしてノ春トニ出づ」トアリ

(二行分空白)

聞郭公「懷舊」（貼紙）「憶昔」

二三九五 ほとゝきす夢かうつゝか過し世をしのひ音に鳴く夜半の一こゑ
二三九六 遠さかりゆくもかなしなき人のむかしをかけてなくほとゝきす
二三九七 過にける人のむかしをかけたかたとひかほになくほとゝきすかな

對月憶昔

二三九八 見ぬ世さへかけてそ思ふ月やさはむかしをうつす鏡なるら（む）
二三九九 すみわたる月はむかしのなになれは見ぬ世の人の戀し（む）かるら（む） 六三三才

寄蹴鞠思昔 *底本、「足」偏ニ「菊」。便宜「鞠」字ヲ以テス。鼈頭、朱ニテ「」アリ

二四〇〇 ありとたに今は聞えぬにはまりのあかれる世こそしのはれにけれ

(以下空白) 六三三ウ

〈英昭〉皇太后宮崩御の時へに

二四〇一 しぬひことするも恐こきわれらさへ忍ひあへぬはなみたなりけり

天璋院殿の墓御の時へ（し給ひし）に *鼈頭、朱ニテ「」アリ

二四〇二 色かへぬ常磐の松のゆきをれにあらしもむせふこゑのかなしさ

蓬園大人仲田則忠のみまかりける時薫物の包紙に書

きつけて御年（顯）の許におくりける

二四〇三 拵(か)きあつめし藻くつも今はたきすゝて煙はかりを手向(む)にやせし

おなし〈大〉人の周忌に

二四〇四 梅さくら春はむかしのはるなから言葉のはなよ見るよしのなき』

明治十九年岡野伊平か身まかりけるに

二四〇五 身にしみておほゆるものは相生の友におくれしこゝろなりけり

二四〇六 おいか身の心ほそさもまさりけりおなしよはひの友におくれて

二四〇七 年ことになきか多くもなるかすに君をいれてもかそふへきかな』六四才

栗原茂蔭か身まかりける時夏哀傷を

二四〇八 山里の蚊やりにくゆるみなし栗むなしけふりとなりにけるかな』

(二行分空白)

箱館に在ける比江戸なる生の母の八月二十八日身ま

かられけるを神無月のはしめにきゝて

二四〇九 ふるさとはゝその紅葉散りしより袖にしくれの降らぬ日そなき』

福羽美静(君)ぬの家の會始に尋梅といふ題をまうけし

折しも妻の身まかりければ

二四一〇 世の中をあなうくひすの音にそ鳴く散りにし梅のあとを尋ねて』

少女の身まかりけるに惜花といふことを

二四一一 いとはれて世にふる人もあるものをあまりはかなく散る櫻かな』

(二行分空白) 六四ウ

明治二十四年六月十八日紅葉館にて三條一位公の百

日祭〈に〉春後思花〈といふことを〉

二四一二 春をゝしむ人のこゝろそかきりなき花はさかりも久しかりしを

二四一三 吹く風も「善(貼紙)よ」きよと思ひしひととの花の名残をいつかわすれ(む)』

(三行分空白)

島津従二位忠寛君の一周年祭に蓮〈といふことを〉

二四一四 みしか夜の目もさむはかり朝またきひらくる池の花はちすかな』

戸澤三位君の一年祭に初秋露〈といふことを〉

二四二五 風のおとのかはるのみかは秋たちて目にさへ見ゆる袖の上の露』
(一行分空白) 六五才

毛利一位元徳公(の)一周祭に冬懷舊(といふことを) * 鼈頭、朱ニテ「✓」アリ

二四二六 霜八たひおけとかれせぬさかき葉にかけてそ忍ふありしむかしを

二四二七 雪の中にまつ咲きかけしうめの花かくはしき名はよろつ代までに

二四二八 そこひなき大江の水のあつこほり世のかゝみともなりし君かな』

松平親貴(補入)《君の(一)》周忌(に)寄梅懷舊(といふことを)

二四一九 みな人の手向る今日のたきものも梅か香ならぬにほひたになし

二四二〇 それながら手向にをせむありし世に手つから植しはちの梅か香

二四二一 鉢植(の木)の梅の花さきぬ見に来よと去年のはるしもいひしきみはも』

(以下空白) 六五ウ

(六行分空白)

佐々木弘綱か身まかりしまたの年子信綱か會はしめ

に新年梅(といふことを)

二四二二 いちはやく若木の梅も咲きにけりふるきものなき年のはしめに』

東懷舊(補入)《明治》二十五年六月二十五日佐々木弘綱(か)一周祭(に)夏懷舊(といふことを)

二四二三 わか竹のさかえはおやにまされとも昔のかけそなほもこひしき』

東懷舊

二四二四 撫子の花の匂ひを見てそおもふおほしたてゝしひとのむかしを』六六才

(半面空白) 六六ウ

《明治》二十二年六月中山一位忠能公の(一)周忌祭に聞杜鵑懷舊(といふことを) * 鼈頭、朱ニテ「✓」アリ

二四二五 ありし世をしのひかねてや郭公くものうへにもなくこゑのする

二四二六 ほとゝきす今年も袖をぬらすかなをちかへりなく去年のふる聲』

三條西季知卿の一周祭に萩風(といふことを)

二四二七 秋は来ぬおもへは去年のこの比もかくこそふきし萩のうはかせ

二四二八 秋風をうはのそらにもきかなくにまたおとるかす軒のしたをき』

伊東祐命(か)ぬしの周忌(二)に秋露(といふことを)

二四二九 あたし野の秋の草葉のつゆ見ればあすしらぬ身も今日そ悲しき』
二四三〇 小鹿なく夢野の草におくつゆをかなしむあきになりけるかな』

〔明治廿四年十月十五日〕間島冬道ぬしの周忌祭に残月廿四年十月十五日

二四三一 あかつきの雲にあひぬる光たにをしきはつき（といふことを）のなこりなりけり』六七才

堀織部正利熙ぬしの（一）周忌に寄水懷舊といへることを

河津祐邦かよませしに

二四三二 うつり行く世のありさまを見てそ思ふかへらぬ水は心ありけり』

松平親貴（君）ぬしの母の一周忌に鷹を題にて

二四三三 松か枝にとまりもあへすふゆ雪のしらふの鷹はかせなかれして』

八田知紀（か）ぬしの一周忌に寄道懷舊といふことを

二四三四 ふみわけて今はた袖をぬらすかなありしむかしのみち芝のつゆ』

（以下空白）六七ウ

〔十七〕〔明治〕十七年十月橘とせ子（か）三年忌（に）往事如夢（といふことを）

二四三五 こしかたにのみやはかけ（む）長らへはいまゆくすゑもゆめの浮橋

二四三六 立花のなつかしかりし匂ひさへむかしのゆめとなりけるかな

二四三七 けふよりの後のうつゝも（おほつ）東なきふまでこそゆめと見てしか』

稻生頼則（補）翁の（ぬし）十年祭に寄花懷舊（といふことを）

二四三八 あかなくに散る花見てもしのふかな世に惜まれし人のむかしを』

葉若清足ぬし（か）の十年祭に閑居梅雨（といふことを）

二四三九 わくらはにとふ人ありてさみたれのふりにしことも語る今日かな』

〔明治〕二十一年五月溝口信成（か）の十年祭に夏夢（といふことを）

二四四〇 書さらす夏の日かけのうたゝねにむかしの人をゆめに見しかな』

（二行分空白）六八才

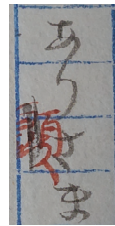
懷舊問宮永好ぬしの十「祭（貼紙）年」祭に

二四四一 高砂の尾の上の松の名におひしむかしのともそこひしかりける

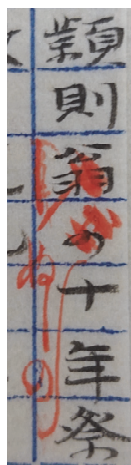
二四四二 もろともに千世の昔をかたらひしこゑの名残はたゝまつのかせ』

〔明治〕二十二年九月靜寛院宮十三回御忌に寄月懷舊（といふことを）

*詞書原状次掲図版参照



*詞書原状次掲図版参照



二四四三 望月のみちたらはしゝそのかみをしのふなみたにぬるゝ袖かな
二四四四 武蔵野のはてなく照らす秋の夜のつきやむかしの形見なるら(む)』

橘と世子(か)の十三年祭に夕時雨へといふことを

二四四五 はゝそ原残る夕日のかげきえてさほのやまへはうちしくれつゝ
二四四六 すみた川わたるゆふへの村時雨ふねこそりてもぬらすそてかな』

(以下空白)一六八ウ

前田二位慶寧卿の二十年祭に雨中郭公へといふことを

二四四七 をやみなくふるさみたれを涙にて啼く音をこほすほとゝきすかな
二四四八 いまこそはなくへき時(と)備(と)ほとゝきす聲もをしまぬ五月雨のそら

二四四九 八千聲もなかな(む)ほとゝきす『さみたれをなみたにはして』

〔明治廿四年十月一日〕大國隆正翁の二十年祭に披書知昔といふことを附

附一四

二四五〇 在し世にあひ見さりつるくやしさもかつ慰むるふてのあとかな』

(四行分空白)

舊會津藩士戦死者への二十三年への追悼『(補)』に

二四五一 ものゝふのあかき心はもみちはの散りても朽ぬ名にのこりけり』六九オ

(三行分空白)

〔明治廿四年十月八日〕井上文雄翁の二十三年忌に初冬落葉附』といふことを

二四五二 花紅葉にほひし庭もふゆの来て木すゑむなしくなるおち葉かな

二四五三 にきはひし植木のたなも冬かれておち葉のみこそ散り積りけれ

植木店は八丁堀の地名にて文雄ぬしすみし處也』

〔明治〕二十一年十月水原史郎ぬしの廿未宗濟の三十年祭に對

菊思昔といふことを

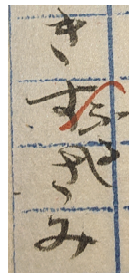
二四五四 年ごとに花咲くやとの白きくもむかしのあきやおもひいつら(む)』

(三行分空白)一六九ウ

敬向山誠齋先生の身まかられし安政三年は我か年三

十一の時なりき(天)明治二十一年三十三年の忌へを』黄

*詞書原状次掲図版参照



村ぬしのいとなまるゝまとゐにて

二四五五 けふしのふ三十あまりはわか年のみそちあまりのむかしなりけり

二四五六 なき人や草葉のかけにおもふら^(む)世になからふる人もおいぬと』

^(マ)井伊中將直弼朝臣の三十七年祭に庭前柳へといふことを』

二四五七 家の風吹きなひけたるそのかみの影こそ見ゆれにはのあをやき』

(三行分空白)

香川景樹翁の五十年祭に遅日といふ題^(大)に^(こと)』

二四五八 春の日をなかしとおもふは櫻花ちりてのちのこゝろなりけり』七〇才

豊原文秋か五十年祭に依笛思昔へといふことを』

二四五九 きくまゝにむかしおほゆる笛の音は幾世つたへし知るへなるら^(む)』

或人の百年忌に

二四六〇 百年の後のわさをもいとなみてうれしなみたをこほすけふかな』

〈またおなし^(く)百年忌に〉對花思昔^(む)昔^(む)』

二四六一 さく^(む)花にあかぬなけきは百年のむかしの春もかはらさりけ^(む)』

松平讚岐守頼重朝臣の二百年祭に朝臣の在世に仙洞

御所よみて奉れる花の歌に「花にふかくそめし心の

色よりは思ふにあさき袖の移り香」とあるによりて

二四六二 深かりし君かこゝろの色香さへあせずもほふはなさくらかな

おなし^(貼紙)く月の「影^(貼紙)↓歌」に「花山の草の庵にあたら夜の見人」^(貼紙)「も」

もなき月そふけゆく」とあるによりて

二四六三 玉くしけはこやの山に匂ひけりくさのいほりのつきのひかりは』七〇ウ

信濃國松本の城主水野忠清^(補)「朝臣」の二百五十年祭に夏懐

舊へといふことを』

二四六四 いく千世も流れたえせぬ眞清水はまつのもとより涌出てにけ^(む)』

稲葉伊豫守入道一鉄^(補)「朝臣」の三百年祭に題茗^(補)謙讀詩圖と

いふことを

二四六五 むすほれし人のこゝろのとけしよりふところみする紐かたなかな』

〔明治〕十八年七月楠公五百五十年祭に

二四六六 大君のゆめにみなみの枝かれてたのむかけなく世はなりにけり』

〔三行分空白〕

〔明治廿三年丁〕定家卿六百年祭に寄月懷舊（廿三年）ことを（廿三年） * 二十三年、朱ニテ抹消

二四六七 明らけき月のひかりは水くきの流れて世々に照りわたるかな』七一才

河原左大臣（と）への千百年祭を松浦伯（補入）のいとなまれし時河原菊（と）

※（いふことを）

二四六八 いつも咲くかはらの菊もこの秋はしるくも見ゆる千代の色かな * 龍頭、朱ニテ「✓」アリ。コノ紙片、下部余白ニ付箋ヲ貼付セリ

おなしき塩竈烟へといふことを

二四六九 しほかまのうらめつらしく見えつら（む）都の空にたてしけふりは

二四七〇 しまこのむ君かこころに塩かまのけふりさへたに靡きけらしも』

冬哀傷

二四七一 なき人の名残おもへは炭かまのけふりのすゑもむつまじきかな』

冬哀傷

二四七二 なき人のなまりのもへは炭かまのけふりの末もむつまじきかな』 * 龍頭、朱ニテ「重」トアリ

〔三行分空白〕七二ウ

三條一位公の追悼に春鴈入雲へといふことを

二四七三 色につき花になる世やいとふら（む）雲かくれゆくはるのかりか音』

水戸烈公の（追悼） 忠に秋懷舊へといふことを * 龍頭、朱ニテ「\」アリ

二四七四 虫は鳴き草木は露にしをれけりむかしをしのふ秋の夜のつき』

大田垣蓮月尼か今はのきはに「露はかり心にかゝるち

りもなし」などよみおきけることゝも思ひ出て又の年

の追悼に

二四七五 うき世には露もこゝろを残りおかて蓮のうてなに月や見るら（む）』

〔明治〕十七年への冬岩倉右府の追悼に霜殘殘菊へといふことを

二四七六 さかりのみ「阿（貼紙）あ」はれとや見（む）れうつろひて色ます霜のしらきくの花』

〔二行分空白〕七二才

本居内遠翁の追悼會に時雨（といふことを）

二四七七 　むら時雨ふりし世しのふこゝろよりいつはりもなくぬらす袖かな』

香川景恒の追悼（に）落葉（といふことを）

二四七八 　てる月のかつらの紅葉散りしよりかけさひしくもなりにけるかな』

伴信友翁の贈位祭に寄書懷舊（といふことを）

二四七九 　浅茅原つはら／＼にふみわけし千世のふるみちあとは見えけり』

〔明治廿二年八月〕契冲阿闍梨の手向に寄玉言志といふことを冊（七）』

二四八〇 　言の葉の道を照らせるひかりにはころものうらの玉もおよはし

二四八一 　難波津のよしあしわけてことの葉の玉つむ舟にのりの師そこれ』

（三行分空白）七二ウ

平戸人浅山純尹ぬしの追悼に寄杖秋祝といふことを * 鼈頭、墨ニテ「〇」アリ

伸レ此杖は尋常の杖にはあらず杖術とて武技の一

つにて棒をつかふかことき物なり此人在世の時此

技にたけたりければ追悼に題に設けたるなり

二四八二 　つるきにもまされる君か手束杖千世もつきせぬかたみなりけり』

明治（十）年西の國の戦に田原坂植木驛といへるところ

にて死せる人の追悼祭に寄劔懷舊といふことを

二四八三 　露むすふ植木のさとの秋のしもふりにしあとそさやに見えける』

上野なる彰義隊士の墓所に宮本に一ぬしか石（補入）（燈）籠を建

られける時寄松懷舊といふことを題にて

二四八四 　いろかへぬ松のみさを今さらにしのふか岡の燈火のかけ』

（二行分空白）七三ア

〔明治〕三十一年十二月十八日の鈴木重嶺翁の追悼會に

二四八五 　千世こめし翠のそのゝ呉たけのなとはかなくも雪をれはせし

二四八六 　君なくていまより後はいつかたの歌のまとあもさひしからまし』

（三行分空白）

五月十九日新井白石先生を祭りて

二四八七 かやり火に折たく柴をくゆらせてけふりにむせふ五月雨のそら
二四八八 今の世にふたゝひ君かうまれないはえみしもこの振まひはせし』

* 山紅葉鈴屋大人（の）霊祭に（といふことを） * 詞書原状次掲図版参照

二四八九 みよし野の山はもみちもさくらにてやまと錦をおり出しけり』
（二行分空白）七三ウ

夕露追悼 * 鼈頭、朱ニテ「」アリ

二四九〇 たゝならぬ今日の夕のつゆけさにぬるゝは草のたもとのみか「み↓は」』
（ある人の）風前露追悼に（といふことを） * 詞書原状次掲図版参照

二四九一 秋風のさそひさはぬ方はあらしおくれさきたつみちしはの露

二四九二 人の世もかくこそありけれ秋風に散りてあとなき野邊のしら露

二四九三 風さそふ草葉のうへの露よりもろきはおいのなみたなりけり』

（ある人の）落葉追悼（といふことを） * 詞書原状前掲図版ト同様也。鼈頭、朱ニテ「」アリ

二四九四 散りはてゝ後も落葉の聲すなりとひ来るひとのあとたえずして』

（ある人の）追悼の筈に濱（といふことを） * 題下

二四九五 なつかしき人のおものゝ濱つとを朧（か）なから今日の手向にはせれ』
（一行分空白）七四オ

酒を好みし人の追悼に極樂（か）といふことを題下

二四九六 樂しみを憂き世の外にきはむらん「よもき↓はす」の廣葉を盃（か）にして』

釋 教

二四九七 のりの舟さしてわたらは彼岸にいたらぬことはあらしと思ふ』

社頭暁

二四九八 あかつきのきねかつゝみに月よみの杜のからすも目や覺（か）すられ』
（む）

（以下空白）七四ウ

二四九九 天の戸もいまか（あ）（あ）くら（あ）早振（あ）かみ路（あ）のやまのにはどりのこ（あ）多』
（む）

社頭水

二五〇〇 ものゝふのさゝけし征矢のうはさしも神さひにけり杜の空（あ）木』
（う）

社頭水

（明治三十四年の）新年勅題社頭祈世（といふことを）



二五〇一 上下のへたてなく世をやすかれといのるは加茂の社なりけり』

日向國宮崎宮にて明治三十二年神武天皇御降誕の大祭

行はれける時* 詞書原状次掲図版参照

社頭祝へといふことを

二五〇二 大八洲まゝつすへましますへらきのもとつ宮居そ高く尊とき』

大黒天の御かたに

二五〇三 大宮のあまのにひすのすゝたりて黒きを御名におひにけらしも』七五才

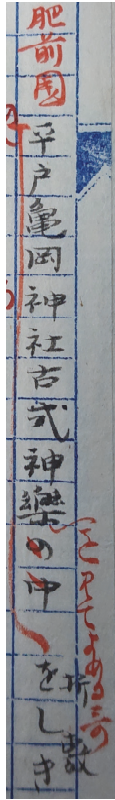
甲斐國名所の中へ酒折宮へを

二五〇四 酒折の宮居のみちあきたけてゑひのいろにも出てにけるかな』

〔肥前國〕平戸龜岡神社古式神樂へを見てよめる哥へ（補入）ゆ中* 詞書原状次掲図版参照

をしき折敷

二五〇五 百とりへ（補入）つくゑし（る）ゆにもまさされるはをしきの舞の手むけなりけり



神相撲

二五〇六 手ちからもはかり知られぬ神すまひ今日のほ（て）ゆとも見ゆるさまかな

劔舞

二五〇七 手にもとりくちにも食ひて劔太刀見るめもあやに舞ふ神樂かな』

明治三年二月廿七日靜岡にめされてかしこき仰こと

かうふりける又の日浅間の御社にまうてゝ

二五〇八 くちはてし老木に花のさくや姫こやこのかみのめくみなるら（む）』

（二行分空白）七五ウ

明治十八年故三條右大臣（續萬）へ（の）梨木神社と齋はれ給ひ

し時秋月添光といふことを

二五〇九 秋の夜の月のひかりのます鏡あきらけき代にかけてこそ見れ』

明治三十一年四月豊太閣三百年祭奉納へ（の）歌



二五二〇 廣前をもちし人もから人もをかまんものとかみやしりけ^(む)
二五二一 とよ國のかみのやしろのひかりさへむかしにまさる君か御代かな

〔明治〕三十四年十一月岐阜伊奈波神社奉納に弓を題して

二五二二 やつかたる伊奈波の神のみとしろ田案山子も弓をとりて立けり

明治三十五年天満宮一千年御祭に

二五二三 東風吹けはにほふ忌垣の梅のはな千年のはるもわすれさりけり

信濃國有明神社奉納に有明山を題して

二五二四 朝つく日さしいつるまで月影のありあけやまはやみなかりけり

〔一行分空白〕七六才

寄月神祇

二五二五 山の端にしりくめ繩をひきてましあかてかくるゝ月^(言)みのかみ

〔以下空白〕七六才

慶賀

二五二六 時しらぬ雪の富士の嶺三保のまつよろ^(つ)代つめる洲濱なるらし *鼈頭、朱ニテ「✓」アリ

二五二七 山人はたのしきをつみあまの子はかひある浦にあそぶ御代かな

二五二八 かくはかりたのしき君か御代に逢ひて蓬か島をたれか尋ね^(む)ん *鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

慶賀

二五二九 時しくの雪の富士の嶺三保の松よろつ代つめるすはまなるらし *鼈頭、朱ニテ「✓」アリ

二五三〇 かくはかりたのしき君か御代にあひてよもまか島を誰尋ね^(む)ん *鼈頭、朱ニテ「重」トアリ

祝詠

二五三一 みな人のいはふ言葉のたねさへもつきぬや御世の恵なるら^(む)ん *鼈頭、朱ニテ「宮内省入」トアリ、↓【二六五二】

明治二十九年天長節に

二五三二 たかさこの島のわらはも君か代を今年の今日やうたひそむら^(む)ん

〔明治〕二十二年十一月立坊祝賀の詠進に菊契千焮へといふことを

二五三三 世の人の八千代を契る菊の花こゝのへにこそさきそめにけれ」七七才

〔半面空白〕七七才

常宮周宮の^(補入)〔高殿下の〕高輪御殿^(補入)〔に〕御移徙を祝ひ奉り^(に)松添榮色へといふことを

二五二四 たかなわの^(八) 山松もさらにまた千代のみとりを添へてけるかな』

小田梅仙ぬしの新室壽に寄梅祝へといふことを』

二五二五 新室ののきはうめにうくひすも百よろこひの音をやなくら^(む)』

新宅の祝に庭上松へといふことを』

二五二六 家つくりも三つ葉四つ葉はなりにけり廣^(は)こる庭のまつは^(か)水りかは』

新室壽^(に)寄竹祝^(を)へといふことを』

二五二七 さきくさの三つ葉四つ葉もくれ竹のいろには千世をゆつるへきかな

二五二八 千代こもる宿はこゝかと尋ぬればそよとこたふるのきのくれ竹』

新聞社の祝に菊によせて

二五二九 よきたねをとりて植たる菊の花めつらしと見ぬひとやなから^(む)』

(一行分空白) 七八才

十八公舎主人 鈴木弘恭の初めて孫のうまれしをこと

ほきて

二五三〇 ひなつるの千世のうふ聲聞ゆなりまつの名におふ宿のさかえに

二五三一 八千と「八千とせ^(貼紙)と^(せ)ともさか」えん宿とおい松のかけに小松もおひ出けらしも』

明治十七年 冊松浦伯爵家へ(の)三の姫宮 都子 伊達伯家に

とつき給ふに乳母の文^(貼紙)庭^(の)名^(を)へを寫しものしてまゐ

らする奥にへかきつけゝる歌) * 釐頭、朱ニテ「✓」アリ

二五三二 ちもなくてめのとのふみをかきたるもをこなる老の業へしわさ) なりけり

二五三三 姫松の千代さか「? ↓ ゆ」へきおひさきをかけても祝ふにはのをしへに』

松浦「詮」四「位」^(貼紙)位^(貼紙)松平家^(貼紙)の女^(貼紙) (姫君) 冊の松平家^(貼紙) 高松藩^(貼紙) によめい * 釐頭、朱ニテ「\」アリ。 詞書原状次掲図版参照

りしけるを祝ひて



二五三四 立ならふ松とまつとの千とせとち世にあひ生のちきりならまし』

(一行分空白) 七八ウ

松浦四位の従三位にのほり給ふをことほきて

二五三五 位山たかくのほりて十かへりの松のはなをもさかせけるかな』

近衛家の舊老女村岡の贈位を祝して

二五三六 あらかりし野分の後の女郎花くらゐやまにそはなは咲きける』

〔明治二十一年〕近衛一位忠熙公靈壽杖賜はられるをことほきて

十一冊

二五三七 百敷のおほみやの内につく杖の千世（代）のためしをきみに見るかな』

（三行分空白）

生徒の卒業をことほきて窓梅へといふことを

二五三八 ともし火にかへしみふゆの雪消えて文よむまとはうめのはつ花』七九才

征清皇軍の全勝を祝ひて

二五三九 たらし姫神のむかしにまされるはわかおほ君のみいつなりけり』

征清の軍の時皇軍の全勝を祝ひてといふことを

二五四〇 たらし姫神のむかしにまされるはわかおほ君の御稜威なりけり』

二五四一 から國の虎よりたけきますら男はもろこしまてもふみならしけり』

福祿壽讚

二五四二 さきはひをみなみのかきり集めてはまたほしと思ふ物やなからん』

民爲重といふ心を人の乞ふまゝに

二五四三 かるくする民のみつきはうこきなき國の力をますにそありける』

（以下空白）七九ウ

綸言如汗

二五四四 うす墨にかき流したるかみや川ゆく瀬のみつはかへらさりけり』

二五四五 みこゝろの駒のゆくへはかはるとも乗り放ちてはいかゝ（と）止め（む）れ』

君恩如雨露

二五四六 君か代のめくみの露のうるほひは十日のあめもおよはさりけり』

君恩如雨露

二五四七 君か代の（貼紙）「こまきくしめくみ」の露のうるほひは十日のあめもおよはさりけり』

（以下空白）一八〇才

(二行分空白)

〔明治〕十六年勅題四海清へといふことを

二五四八 浦浪のたちもさはかす四方の國わたのはらからむつひあふ世は * 鼈頭、朱ニテ「、」アリ

二五四九 あをうな原ふりさけ見ても思ふかな御代の光はあまねかりけり

四海清

二五五〇 あつさ弓やしまの外の海までも世にたちさわくあたまみそなき

二五五一 のほる日のもつ御國のひかりにそ氷れる海もいまはとくら * 鼈頭、墨ニテ「前の哥と／同趣省」トアリ

二五五二 立まわく波風もなしわたのはらすみよしといふかみしまもれば

二五五三 天の下わたりわつらふ海もなし阿波のなるとはにはのいけみつ

幸逢太平代

二五五四 ものゝふの八十氏人もいとまありて月ゆき花にあそふ御代かな

(一行分空白) 八〇ウ

四十賀

二五五五 千世の坂のほら (む) 道もことしよりまとはぬ君かよはひならまし

美作の人直頼齋 (補) へ高 (補) へか 初老 四十の賀に

二五五六 今年よりかそへそむら (む) 貞竹のよそちを千代のひとふしにして

(以下空白) 八一オ

〔明治〕二十一年五月井上頼圀ぬしか五十賀に寄地儀祝へといふことを

二五五七 かさぬら (む) 君かよはひは千年ともいさしら鳥のさきさかのやま

守田宝丹 (補) へか (補) へ五十賀に

二五五八 世の人の死なぬ薬を煉りいたすきみかよはひやかきりなから (む)

六十賀

二五五九 さらにまたわかやく春やむかふら (む) 六十を老の限りにはして

大久保北隠 (か) 翁の六十賀に寄松祝へといふことを

二五六〇 釜の湯のわきても千世やよはふら (む) ちきり久しき岡のまつかせ

六十一賀

二五六一 世にふりし (む) 暦はかへてさらにまた後のむそちやよみはしめて (む)

* 鼈頭、朱ニテ「、」アリ

〔三行分空白〕八二ウ

木十賀

二五六二 年月をはかるこよみのはかせたにかそへ盡せぬきみかよはひは』

市河万庵（か）の六十一賀に

二五六三 かく文字の教へののりをためしにて永きや君かよはひならまし

二五六四 くとあくど君か手にとる筆にしも千世の齡はかきもつきせし』

淡路國人の六十一賀に寄島祝へといふことを

二五六五 淡路島かよふ千鳥も聲々にきみかよはひを千世となくなり』

〔四行分空白〕

松の門三艸子か六十一賀に寄松祝へといふことを

二五六六 老ぬれとわかきむかしにかはらぬは松のときは色にさりける』八二オ

岡野敬次郎（補）の母への子六十一賀に早蕨のかたかける

服紗に歌乞へりければ

二五六七 かきりなくよはひをへの早蕨は千代のかすとの手に似たるかな』

河邊雪子か六十一賀に河邊菊へといふことを

二五六八 老の波せくしからみか千世かけて河邊に咲けるしらきくのはな』

〔二行分空白〕

還曆賀

二五六九 年月をはかるこよみの博士たにかそへ盡せしきみかよはひは』 *↓【二五六二】

還曆賀に寄山祝へといふことを

二五七〇 ふるこよみかへてわかやく面影をかゝみの山にうつしてやみる』

〔一行分空白〕八二ウ

〔二行分空白〕

七十賀

二五七一 よそなからきくたにうれし世（昔より）の中に稀なりといふ人のよはひは』 *龍頭、朱ニテ「」アリ

〔明治〕十八年一月山階宮（補）の七十御賀に寄竹祝へといふことを

二五七二 千世こもる竹の園生の中にしもこの君の代（む）そまれにはあるら』

明治二十年松浦竹四郎の七十賀に古机によせて祝の
心を(か)

二五七三 世の中に今はまれなるふにつくゑ君かよはひにたくへてや見(む)』

〈明治二十一年〉加藤安彦(か)の七十賀に(む)』

二五七四 よはひさへあえさらめやは千年ふる松といふ名をおへるはも』

〈明治〉二十四年五月二十七日小中村清矩(む)の七十賀に寄

書祝へといふことを

二五七五 年をへてよみたる千々の書より(補)』立まさるへきよはひならまし』八三才

重野城齋木(ぬ)の七十賀に *鼈頭、朱ニテ「✓」アリ

二五七六 なる神のおとに聞えし名のみかは高きよはひも世にひゞきけり』

〈明治十八年五月〉永井介堂(む)の七十賀にぬしかかける竹の画に(む)』

附

二五七七 かりそめにかき流したる川竹も君か世なかきふしは見えけり』

植松氏の七十賀に

二五七八 八千代へ(む)君かよはひのかすとり(む)に植たるやとの松(む)にやあるら(む)』

大川のふ子(か)の七十賀へに寄川祝へといふことを

二五七九 大川のなみくならずのふといふ名にはたかはぬ齡ならまし』

(二行分空白) 八三ウ

出羽國月山のほとりにすめる人の夫婦ともに七十に

あまりたるをことほきて寄山祝といふことを人々「に(貼紙)と」

ともに

二五八〇 契りおく千年の秋のつき「や(貼紙)の」やま手たつきはりてともにのほら(む)』

七十七賀

二五八一 百つたふ八十もいまはちかつきていよく稀になるよはひかな』

(二行分空白)

八十賀

二五八二 さゝ波や八十のみなと(補)』寄る舟も積みあますへきよはひならまし』

庭上松へといふことを」（ある人の）八十賀へに」

* 詞書原状次掲図版参照

二五八三 庭松とやとおきな千世くらへまさり（お）とりはあらしと思ふ
二五八四 庭松のかけにも千世の見ゆるかなあるしととも（お）に翁さひして』八四才



（ある人の）八十賀に寄杉祝へといふことを」

二五八五 稀なりといへるよはひもひとむかし（す）過ぎの木末は高くなり（す）にき』

山階宮嵜親王（稱）（閣下）八十賀に寄松祝へといふことを」

二五八六 あふきてもたれか見さら（む）雲の上に年さへ高きまつ（む）のひとともと

二五八七 おひしける竹のその生に老まつ（む）の千代のいろをも重ねつるかな』

明治十九年五月文部大臣森有禮君の父鶴陰翁の八十

の賀に

二五八八 千世よはふたつか音そする玉の緒の永田の町のもりの木かけに

二五八九 つるの子は雲井にたかく（む）のほりけりよるの思ひも今やなから（む）』

中山愛子の君の八十賀に寄松祝へといふことを」

二五九〇 千世までもかはらぬ色を津の國の御かけの松にかけていは（む）ぬ

二五九一 石つたふ八十すみ坂はこえたれと千世ははるけき峯のまつか枝』

（一行分空白）八四ウ

志自岐閑齋翁の八十賀に寄山祝へといふことを」

二五九二 いや高くのほら（む）君かよはひをは志自岐の山にかけてこそ見め』

長崎なる中島廣行（か）八十賀へに」春賀へといふことを」

二五九三 年ふれと昔のはるにかはらぬはおい木のはなのほひなりけり』

尾張人の八十賀に

二五九四 山鳥のをはりといへはされこそはなかくし世を君はへぬらめ』

（三行分空白）

八十八賀

二五九五 奥山の八つ尾のつはき八千たひもはなさく春にきみやあふら（む）八五才

近衛翠山公八十八賀に鶯有慶音へといふことを

二五九六 馬くるま道もさりあへすよるこひの人來くとうくひすのなく

二五九七 吳竹の世のなか人のやとに来てうれしきふしをうくひすの鳴く

二五九八 なれし老木の梅の花に来てほゝゑみかはすうくひすのこゑ

二五九九 鶯のうづる聲やさハ君のよはひをいはふなるらむ

木十ハ *コノ行左欄外ニ書カル

(二行分空白)

九十賀

二六〇〇 百とせはちかつきぬれと君かへ千世の残りなほそはるけき

母の君の九十になりけるをことほきて寄花祝といふ *鼈頭、朱ニテ「✓」アリ

ことを人々のよみて繕りけるをよろこひて

二六〇一 みな人のこと葉の花をかさしてや老の名も世にかくれさるらむ

(二行分空白) 八五ウ

〔明治〕二十二年伊達宗紀君の百歳の賀に寄筆祝へといふことを

二六〇二 千「年」世」といふ文字をもあまたかくれけ命も長きふてのすさひに

(二行分空白)

昔の長壽の人々のかたかける服紗を古川爲子におく

りけるに

二六〇三 老らくゆいはひて君かくれ竹の世のなかひとにあえなましかは

*鼈頭、朱ニテ「、」アリ。コノ紙片、下部余白ニ付箋ヲ貼付セリ

母君の九十二まで着ならし給へる鶴の毛にて織たる

胴服を松浦の老女小石味濱江におくるとて

二六〇四 千とせをは君にゆつるの毛ころもとわかたらちねや残し置け

夫婦ともに長壽なるをことほきて

二六〇五 たけくまの松のためしも引つへしふた木ならへる千代の姿は

未婦ともに長壽を祝ひず

二六〇六 たちならふ松と竹との千世くらへかはらぬ色や見えかはすら

心靜延齡

二六〇七 なにことも世に「長閑なる」のとめな心からえたるや老ぬくすりなるら

(以下空白)一八六ウ

春 祝

二六〇八 君か代の苗代みつにまかせなはあまのかは原もあせやしなまし』

春 祝

二六〇九 花は多みやなきのまゆもひらけつゝ百よろこひのうくひすの聲』

秋 祝

二六一〇 里人のたのしき世をもわたらひや山田のをしねかりをさめつゝ』

冬 祝

二六一一 時しくにごと葉の花を匂はせて世のふゆかれも知らぬやとかな』

冬 祝

二六一二 のこりなく秋のたのみもとりいれしかたそ冬も長閑かりける』

冬 祝

二六一三 かた／＼に裳着髪あけといはふなるしも月比そふゆはうれしき』

(二行分空白)一八七オ

加藤千浪の納會に冬祝(か)といふことを

二六一四 ことの葉の絶えず花さくやとからか冬もひと目のかれす見ゆるは』

閑居 祝

二六一五 松の門竹のあみ戸の奥ふかく千代をしめても見ゆるやとかな』

(以下空白)一八七ウ

寄雪 祝

二六一六 雨風もをりをたかへぬ御代なればよきほとにこそ雪もふりけれ』

おなしく寄雪 祝

二六一七 いや高く年をかさねて老らくのかしらのゆきもつもれとぞ思ふ』

(二行分空白)

寄石 祝

二六一八 年ふりて苔むす庭のたて石を千世のともとや君は見るら(む)』

寄岩 祝

二六一九 おひたてる松にも千世は見えぬなりした根のいはほよろつ世やへし』
(以下空白) 八八才

寄田祝

二六二〇 小山田のひたのかけ纏うちはへて長きはきみかよはひなりけり
二六二一 つみあくる年をいはひの筵田にすゝめもむれて千代と鳴くなり』
(二行分空白)

松平親貴家の會に寄梅祝(といふことを)

二六二二 このうへの千代のかさしやなかるら^(む)菊の兄てふ梅のはつはな
二六二三 さきいつる軒端の梅やひとゝせの人のにきはふはしめなるら^(む)』

寄花祝

二六二四 土と國の人にさくらの花見せてほこる御代ともなりにけるかな』
(二行分空白) 八八ウ

*龍頭、墨ニテ「春部に出づ／重」トアリ、↓【四七六】

寄花祝

二六二五 まどくしの人にさくらの花見せてほこる御代ともなりにけるかな』

*龍頭、朱ニテ「重」トアリ、↓【四七六・二六二四】

寄花祝

二六二六 花くはしさくらのめては萬代のはるもかはらぬものにさりける』

寄菊祝

二六二七 千世かけて君や契りをむすひけ^(む)らよはひをのふときくの下みつ』
(二行分空白)

寄竹祝

二六二八 呉竹のこの君の世を千世までといはふこゝろの空しからめや』

寄竹祝

二六二九 なからへてなほいく千世かいくみ竹うれしきふしの數添はるら^(む)』
(一行分空白) 八九才

寄竹祝

二六三〇 千世の坂こゆる杖ともなりなまし君かともなるまとのくれたけ』
(一行分空白)

寄松祝

二六三一 十か卜りの花さくやとのまつ風やうれしきことの音に通ふら^(む) * 鼈頭 墨ニテ「松有歡聲ニ／出づ」トアリ、↓【二〇九六】
二六三二 忬かしより千世のためしに引かるゝも久しきものと松や思は^(む) * 鼈頭 墨ニテ「松不改色／ニ出づ」トアリ、↓【二〇七八】

寄松祝

二六三三 いく世ともかそへつきせし千早振神代なからのすみよしのまつ』

寄松祝

二六三四 ゆるされて庭に杖つくおいまつは君か千とせの友にやあるら^(む)』
(二行分空白) 八九ウ

肥前國平戸なる龜岡神社の新に建ける時寄松祝へといふことを

二六三五 ことしよりかそへそめて^(む)萬代の龜かをかなるまつのよはひも』

(二行分空白)

寄書祝

二六三六 ふみ殿のむな木にみてるまき／＼のよみ盡されぬ君か御代かな
二六三七 ひらけゆく文のはやしにうゝる文字の數限りなき君か御代かな
二六三八 千代となく千鳥のあとよ見ゆるかな濱の眞砂のかきりなき世は』

寄歌祝

二六三九 年を経てよめとも盡ぬことの葉にかけてそ祝ふきみかよはひを』

寄盃祝

二六四〇 君をいはひ身もためしみていくたひかくむ盃のかすかさぬら^(む)』九〇才

(寄) 黄金卍寄卍祝

二六四一 民やすく世をゆたかにもをさむへきたからの君は黄金なりけり
二六四二 人の世のねかひを三つか二つまでかなふるものは黄金なりけり
二六四三 うきふしもしらて樂しき世をふるもけたしこかねの光なるら^(む)
二六四四 久かたの日月とゝもに人の世をてらすひかりやかかねしろかね』

寄鳥祝

二六四五 たれもみなおなし心か君か代をいはふ言葉のあうむかへしは』

寄獸祝

二六四六 おちたるも捨はぬ御代は道のへにぬしなき犬のなくこゑもせず』 * 龍頭、墨ニテ「犬ニアリ／重」トアリ、↓【二二四四】

寄用祝民

二六四七 比ひしほり汲みつゝ遊ふ里ひとのこゑにきはしきあきの夜の月』 * 龍頭、墨ニテ「秋ノ月ニ／出つ／重」トアリ、↓【一四三三】

(一行分空白) 九〇ウ

明治十六年《徳大寺宮内卿より》《御内命のよしをもて宮内卿より傳達のま

まにまに出せる三十首歌の中雜題五首

山家水

《内命の中雜五首》《十首の中雜五首》《おほせことをかうふりければ短冊にしたゝめ奉りたる三》

二六四八 山ふか「み↓く」すみてこそしれ世の人にくまれぬ水はにこらさりけり * ↓【二〇四六】

海上眺《望》

二六四九 夕なきにくしら汐吹くけふりのみ白くもたてるなみのうへかな * ↓【一八九五】

頼朝卿

二六五〇 あしたゝぬひるの小島に年をへてあなから人をなひけつるかな * ↓【二二六一】

楠正成卿

二六五一 石よりもかたきこゝろはくすの木のたふれてそ世に顯はれにける * ↓【二二六八】

祝言

二六五二 みな人のいはふ言葉のたねさへも盡ぬや御代のめくみなるら^(む)』九一才 * ↓【二六五二】

(半面空白) 九一ウ

俳諧歌

(一行空白) 』

除夜戀^{俳諧}

二六五三 われとわか心のおにのやはられてみそかに家をいつる夜半かな』

おたしく^{俳諧}

二六五四 しかはかり人をたのめていひなしのうまくも人をはかる君かな』

寄生徒戀^{俳諧}

二六五五 こくねちのさうやくの香もいとほしな君とほくとの中の契りは』

戀の歌の中に^{俳諧}

二六五六 おもかけの寐ても覺ても《は》^(補入)なれぬは戀といふ物の氣や^(にやあるらむ)ゆ^(む)ゆ^(む)』九二才 * 龍頭、朱ニテ「〇」アリ

夏 俳諧 * 鼈頭、朱ニテ「✓」アリ

二六五七 はくといふ (けもの) 毛物にはあらて夏の日の晝寝の夢は蚊にくはれけり』

鳴の面に戯れ歌 俳諧

二六五八 水鶏かと思はれ鷺にも似たりけりこれはふしきと誰もいふら (む) 』

(以下空白) 九二ウ

(二行分空白)

旋頭歌

(一行空白)

遠 砧 旋頭歌

二六五九 ほど近き賤か砧はあなかま／＼風の音のとほとに聞か哀れなりけり』

感思在秋天 旋頭歌

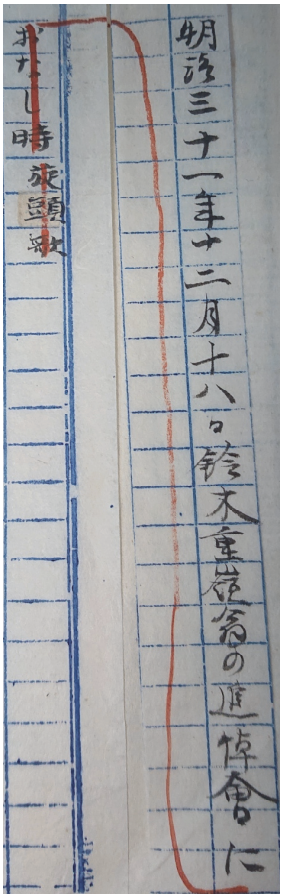
二六六〇 うき秋のそらなめせぬ人はあらしさはかりは物おもふことありもあらずも』

(以下空白) 九三オ

明治三十一年十二月十八日鈴木重嶺翁の追悼會に * 詞書原状次掲図版参照

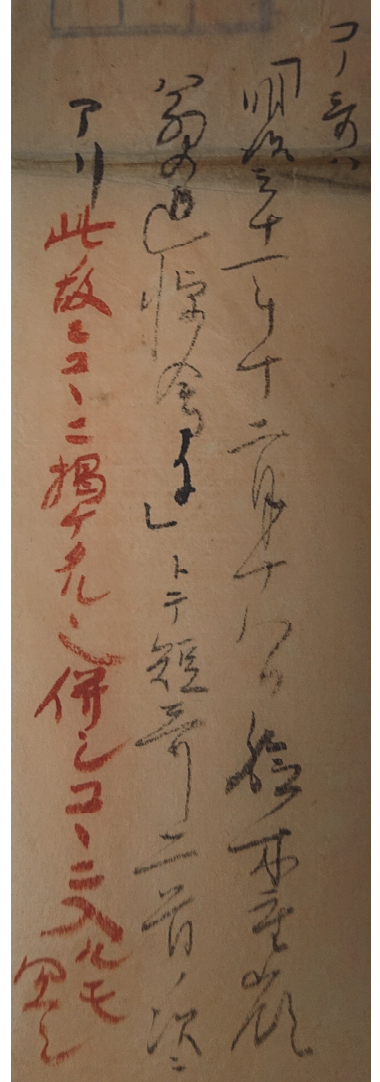
(一行空白)

拵 し 時 旋 「歌」 旋 歌 * 鼈頭、朱ニテ「✓」アリ



二六六一 およつれのたはことかとも思ひしをあはれまことにもかへ

らぬ道に君はゆきけり』 * コノ紙片、下部ニ貼紙アリ。次掲図版・積文参照



コノ歌ハ

「明治三十一年十二月十八日鈴木重嶺

翁の追悼會に」トテ短哥二首ノ次ニ

アリ（此ノ故ニコ、ニ掲ケタル也併シニコ、ニ入ルモ

宜シ）

（以下空白）九三ウ

（一行空白）

長 歌』

（一行空白）

尋花といふことをよめる長歌短歌

二六六二

鳥がなく あつまの橋ゆ すみた川 なかき堤を 見わたせは
 うすくなるゐに 横霞 棚ひくなして なみたてる 木すゑお
 しなへ けふはしも いろつきにけり 水上は さきやしつら
 牛島の みさきやいかに かの見ゆる もりの一村 神垣
 の 御名にかよへる 白髭の 翁にはあれと 呉竹の 杖にす
 かりて うちなひく 柳の糸に ひかれつゝ むかしをしのふ
 ふる塚の あたりまでたに 尋ねてを見

反 誦

二六六三

すみた河うかふかもめに問ひてましつゝみの櫻咲きそめつやと』九四才

明治二十九年御歌始勅題（に）

詠寄山祝^{（註）}短歌（といふことをよめる）平朝臣藤光

二六六四

千はやふる 神代のむかし たくふすま しらきの国の あま
りある ところをきりて 八雲たつ 出雲の国に 引よせし

ためしこそあれ 人の世と なりてしのちは あきつしま や

まとの國は おのつから かきりそありし かし「き^{（貼紙）}↓こ」きや わか

大君の み^{（い）}水さをは 神わざにしも いかはかり まさりまし

け^{（む）}しらきゆも はるかにとほく 五百重浪 千重浪へなる

おほきみの 中にありとふ たかさこの 嶋山さへに うち

なひき よりてつかふる 君か御世かも

「もろこしの^{（貼紙）}↓ 反」歌

二六六五

もろこしの海の沖なるたかさこの山さへなひくきみか御代かも
二六六六 高砂とよそにきゝしも君か代のたからのやまとなりにけるかな』九四ウ

（半面空白） 九五オ

（半面空白） 九五ウ

（半面空白） 九六オ

（半面空白） 九六ウ

三田葆光『櫛紅葉』攷—解題にかへて—

一、はじめに

三田葆光さんだかねつといつても、こんにち、知る人は少なからうと思ふ。そこでまづ、『国書人名辞典』の当該項を抄記しておくこととする。

幕臣・歌人。「生没」文政八年（一八二五）六月二十一日生、明治四十年（一九〇七）十月十七日没。八十三歳。「名号」名、初め礼本、のち喜六・葆光。通称、伊右衛門・伊兵衛。号、櫛園。「経歴」箱館奉行支配組頭として蝦夷開拓に従事。文久元年（一八六一）向山黄村に随行し欧米を巡る。維新後は一時女学校に奉職したが辞職。小林歌城・黒川真頼に師事し、和歌・茶道に余生を送り、『和学入門』『櫛紅葉』を遺した。

〔著作〕おほぬさ辨妄

この他注意すべき著作として、『白石先生年譜』（一八八二）『玉乃緒變格辨』（一八八三）などがある。なほ、葆光のより詳しい事蹟は、『国学者伝記集成続編』及び山崎栄作『箱館日記』（私家版、一九九七・一〇）所掲「三田葆光（礼本喜六・伊右衛門）略年譜」を参考されたい。

さて近時、小論の筆者は、葆光の家集『櫛紅葉』の刊本を感得し、引き続きはからざる機縁により、稿本（ただし、葆光自身の筆になるものではなく、息・侘ただし（一八五三〜一九二三）の筆になるもの。後述）をも感得した。そこであらあらこの両者をつきあはせて比較するに、典籍としての家集、それ自体の問題としても頗る興味深いものがそこに存するのはいふまでもないとして、より進んで、家集なるもの一般の成立背景につき、甚だ示唆的なことがらを内包してゐると思へたのである。そこで、まづは、両者の関係を具体的に考察し、最後に、家集成立の一般論に話を及ぼしてみたいと考へる。

二、刊本『櫛紅葉』

架蔵本の書誌は以下の如し。

紙帙入（原帙ナラム）。黄土色地に、草花繫空押文様。中央上寄りに題簽（16×3・1cm）が貼付せられ、「櫛紅葉」とあり（印刷、図版参照）。

《帙題簽》



袋綴装七冊（四ツ目綴、若草色の綴糸）。二二・八×一六cm。表紙は、黄土色地に草花繫白雲母刷文様（文様は、題簽のものと同）。

題簽（一五・二×二・八cm、单郭）が各冊左に貼られ、「櫛紅葉 一（二〜七）」と刻される（図版参照）。墨付は以下の通り。

《第一冊・題簽》

- 第一冊 「序」五丁「本文（春）」四六丁
- 第二冊 「本文（夏）」二二丁「（秋）」二八丁
- 第三冊 「本文（冬）」二二丁「（恋）」七丁
- 第四冊 「本文（雜）」三八丁
- 第五冊 「本文（雜）」三〇丁「跋」三丁 ※ココマデガ家集
- 第六冊 「本文（文稿）」四五丁
- 第七冊 「本文（文稿？）」三九丁「刊記」一丁

第七冊末尾に以下の刊記あり。

明治四十五年六月一日印刷

（非賣品）

明治四十五年六月四日發行

編輯兼 三田 侷

發行者 東京市小石川區江戸川町十九番地

木版印 木村徳太郎



刷者 東京市神田區旅籠町一丁目七番地

石版印 磯村登飛知

刷者 東京市麹町區内幸町一丁目五番

架蔵本には、幸ひにも、三田侖による添状（18・2×20・2 cm、活版）が存し、刊行最終段階での遅延の事情がわかる。

拜啓益御清穆奉謹賀候陳者亡父葆光

遺稿疾くに刊行可仕心組に御座

候處木版職工の減少其他種々の

支障有之候爲め甚敷延引今般漸

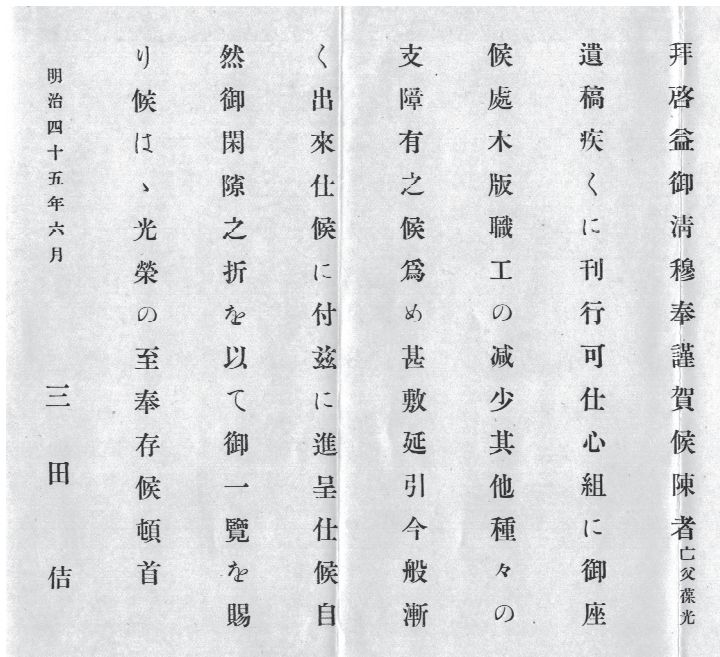
く出來仕候に付茲に進呈仕候自

然御閑隙之折を以て御一覽を賜

り候は、光榮の至奉存候頓首

明治四十五年六月 三田 侖

《三田侖・添状》



第一冊巻頭に、「明治四十二年十月田邊太一」及び「明治四十四年十月 男 三田侖謹識」の識語を持つ序二点がある。

田邊序の全文引用はひかへるが、本書成立にかかはる箇所のみを引いておくと、冒頭「三田櫛園翁歿後一年令嗣侖持其遺稿來請予序」とあるのは注意される。葆光が没したのは明治四〇年（一九〇七）十月十七日、その一年後には既に、「遺稿」といふ形で家集（といふ形にまで整へられてゐたかどうかは分からぬにせよ）が成立してゐたことが分かる。ただし厳密にいへば、この「遺稿」即現稿本『櫛紅葉』と断ずることは出来ない。「遺稿」から稿本へ至る過程で、新たに中書（例へば、侖による一応の清書）がなされてゐる可能性があるからだ。

侖序は、本書成立を考へる上で極めて重要な証言を含む。全文は以下の如し（引用に際しては句読点・括弧を私に付した。以下同様）。

本書は、先人の小祥に刊行すへかりしを、遷延して今日に至りしは、種々の事情ありしに由れり。

先人は、歌道に於ては殊に村田春海大人を景慕し、また、最其歌集を愛せしかは、本書の體裁は、一に彼の琴後集に倣へり。

先人常に余に請て曰く、「琴後集の序に葛

西因是の漢文のみを掲けたるは、洵に善し。

況や其名文なるをや。抑、筆に依て成れる

ものは、漢文を第一とし、漢詩を第二とし、「四才

和歌はこれに次くへし。固より各其特長あ

りと雖も、大體に於て然り」と。又曰く、「詩文の

大家にして善く予を知れるものは、黄村、

鋤雲、蓮舟の三翁なれとも、今や黄鋤二翁

は既に逝き、獨り蓮舟翁の存するあるの

み」と。是、田邊先生に序文を煩はし、所

以なり。

余不肖にして和歌を解せず。適、友人黒川

真道君は、故黒川真頼博士の令嗣にし

て、善く箕裘を継かるゝを以て、校正刊行等

一切請托せしに、精勵従事せられて、茲に成「四ウ

刊を見るを得たり。因て、君の厚誼、及び佐藤

仁之助君の淨寫の勞を感謝す。

本書第七卷及び第八卷の文章は、先人

稿本のまゝを石版に附せり。是、聊筆蹟

を存せむか為めにして、添削などの讀み

難きところあらむも、敢て一字を改めず、原

本に従へり。

明治四十四年十月 男 三田 侷謹識

(三行分空白)「五才

さらに重要だと思はれるのが、第五冊末に置かれてゐる黒川真道（一八六六—一九二五、葆光師黒川真頼の男）による跋文である。やや長文にわたるが、以下全文を引用しておく。

ひと日、三田侷ぬしのわか家に訪らひきていは

るゝやう、「これの櫃紅葉は、わかなきちゝのよみ

おける歌の集なり。いかてこれを摺巻にものし

て、亡夫の記念とも見む。また親しく交はりたりし

人にもおくりて、なき人の功德ともせはやとなむ

おもふ。されど、こはよみいつるまに／＼かき集めたる

ものなれハ、すこししとけなけなるふし／＼も見ゆめ

るか、いとくちをしけれハ、ねかはくは、よく考へたゝ

されむ。こはをまた亡夫は常に村田春海大人に

私淑して、かの琴後集のすかたを慕ひゐたり

しかは、すへてかの集のさまにならひてむ。いかてこの「跋一才

あらましとけなむやうに、うまくはからひ給ひてよ」と

いふ。おのれうちきゝて、いみしうよろこひつゝ、おもひけ

らく、こはよにめてたき心もちゐにこそありけれ。いて

や今の世にある人を見るに、その家とミ榮えて時

めけるもすくなからねと、よく礼を好めるものあるを

きかず。まして、その親に孝ある人は、よにいくはくか

あらむさるを、わか三田ぬしハ、家もとミ榮えて

世にあらはれ給へれと、つゆ驕れる風のあらさ

るのミか、孝養の志の深きことは、また世の人の

かゝミとこそあふかるれ。さるを、今はたかゝるいミ
しき功德の事をさへおもひたゝれたるは、けに「跋一ウ
こよなうめてたき極みになむ。さても故葆光翁
ハ、わか亡夫とはいと交はりあつくして、歌文はさら
にもいはす、語学音韻の学ひを深く究め、さる方
の書ともさへ著はされたれは、亡夫もまた、なき友
と睦ひたりしまゝに、故翁は、おのれをも幼きほ
とより、うみの子のこたく教へいつくしミ給ひし
かは、おのれもまた、故翁をは亜父とあふきてあ
かめ敬ひてなむありし。かゝれは、わか父の集を
ものせむちちして、一しほうれしくおほゆるまゝ
に、こゝろよくうけかひて、つはらかによミ考へ
つゝ、やかて六巻をそえらみはてぬる。さてこの「跋二オ
版下は誰かよけむと、三田ぬしにはかりけれハ、今
の世に名高き手かき達もあまたきこえためれと、
いつれかよく亡夫の心になふらむともしらす。お
なしくは、故真頼大人か教へ子の中にてものせは、
なき人の心にもまたよしとやおもはましさらハ、佐藤
仁之助ぬしこそしかるへけれとて、そのよしを語り
けるに、固くいなひけれは、ぬしこそは故翁とのよし
みも浅からねは、かきてえさせよかしと切にすゝめ
たれは、筆とりつゝいそしミしほとに、一年はかり
にして、皆からかきはてぬ。かくて、彫刻師木村徳
太郎におほせて、すみやかにその功を終へぬるも、い「跋二ウ
とうれしおもへは、けにこの集に三田ぬしかまめなる心
におもひたゝれてより、やうく三とせの永き春秋を
経てなりぬるは、世にありかたきわさなれは、故翁

の御こゝろにもまたいかばかりかうれしとおほす
らむかし。あはれ、今の 大御代には、例の活版石版など
いふ印刷の術あるは、外国風の製本の法さへ備はり
にたれば、さるかたによらむにはいとたやすくも仕
てぬへからむを、ぬしハ、かゝる今めかしきかたには
つかて、ひたすらなき父君の遺志にかなへむのこゝ
ろさしにて、かくはものしつれハ、いとくうれしうなむ。
亡に事ふること、存に事ふるかときハ、孝の至りなりと」跋三才
古の聖の宣へりしは、今わか三田ぬしにおきてま
さにそのまことなるを知れり。さはれ、をちなきお
のれかうけはりてものせる集を、故翁の見給は、あ
なつたなきことも仕出つるよとおもひたまふらむ。さて、
この集を櫛紅葉といふは、故翁の櫛園と號せし
によられたりとぞ。

明治四十四年五月

黒川真道

(以下空白)「跋三ウ

原稿から刊行に至ること細かな経緯を、この跋はあますところなく書き記してゐて、頗る興味深い証言となつてゐる。

さて、田邊序でいふところの「遺稿」、佶序でいふところの真道が「校正」した原稿、真道跋でいふ「わかなきちのよみおける歌の集」、これは一体どのやうなものであり、真道はどのやうに「よく考へた」したのであらうか。もとより、刊本からこれをうかがふことはかなはない。

三、稿本『櫛紅葉』

『平成二二年度古典籍展観大入札会目録』（東京古典会）に、以下の典籍が掲出された。

一八三六 櫛紅葉／三田葆光歌集 黒川真道編并校 黒川真前旧蔵朱印有 六冊

一見して、刊本『櫛紅葉』の稿本、即ち、真道が「よく考へた」とした、まさにそのものではないかと思われた。その後幸ひにして入手することが出来、あらあらながらも検討した結果、まさしく、真道が最終的にまとめた稿本であることがわかった。また、真道の「校正」のあとがまさまざと残されてみて、佶が真道に託した原本がどのやうな編集過程を経て刊本に至ったかを、つぶさにかがふことが出来る、括目すべき典籍であつたのである。転写本の存在を聞かない。まづ、架蔵本の書誌を記しておく。

写本。仮綴六冊。二八・一×一九・五cm。外題等が打付書で各冊に以下の通りある（〜）は朱書、それ以外は墨書。

「説了真道／六百四十五首」／櫛紅葉春 一

「説了真道／三百八十八首」／櫛紅葉夏 二

「説了」／櫛紅葉秋 三

「説了／二百九十七首」／櫛紅葉冬 四

「説了／八十四首」／櫛紅葉戀 五

「櫛紅葉雜 六」。

朱書（ただし、やや暗い朱〔後掲図版でいへば「六百四十五首」と、明るい朱〔説了真道〕とがある（後掲図版参照）。本文朱書もこの二種が混在する）・外題ともに真道筆と思はれる（後掲第一冊表紙図版参照）。このことから、真道による朱筆手入れは、少なくとも二度にわたつてなされたことが分かる。

第一冊表紙見返しに「三田葆光集 黒川真道編」と墨書される。後人（真前？）の筆によるものか（後掲図版参照）。

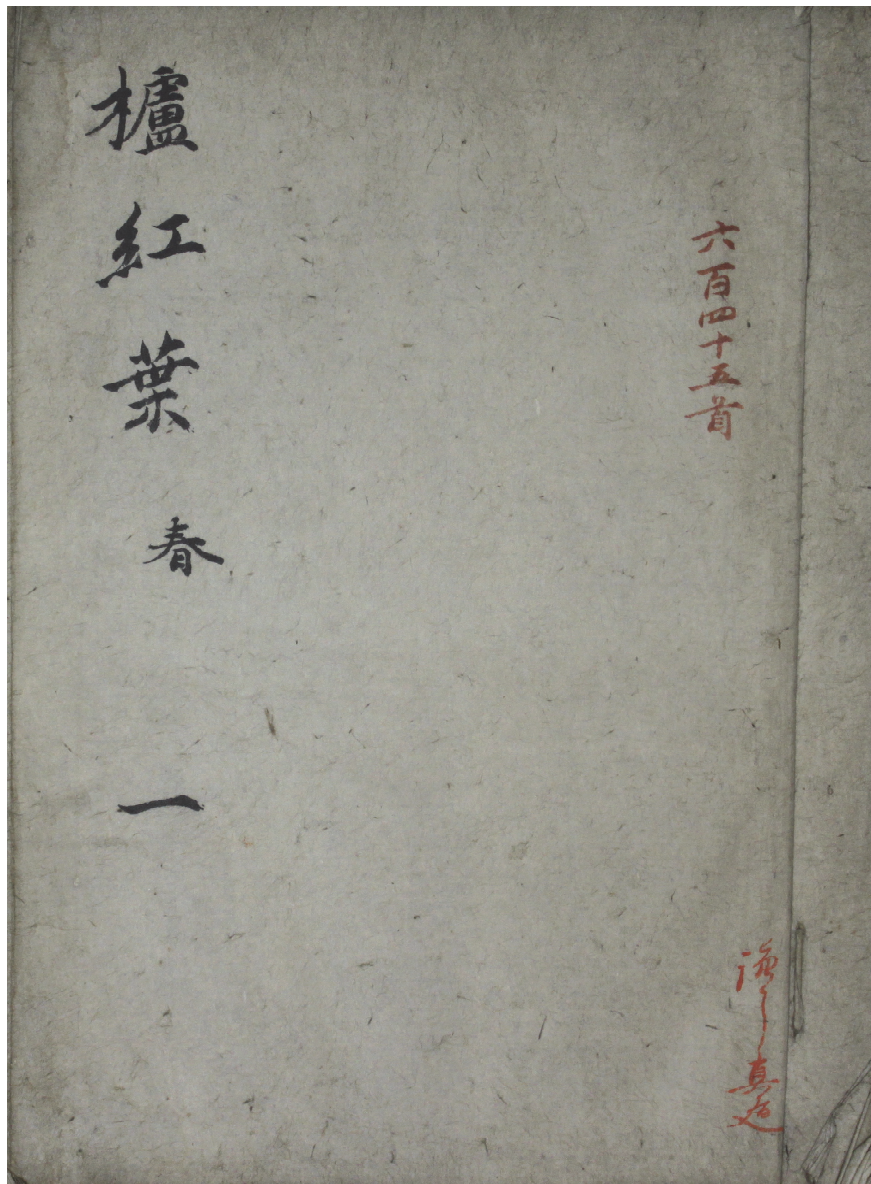
墨付丁数、第一冊Ⅱ六一丁・第二冊Ⅱ二九丁・第三冊Ⅱ三五丁・第四冊Ⅱ二七丁・第五冊Ⅱ一一丁・第六冊Ⅱ九四丁。

歌数記載（表紙朱書・貼紙〔第三冊のみ〕による）、第一冊Ⅱ六四五・第二冊Ⅱ三八八・第三冊Ⅱ三五九・第四冊Ⅱ二九九・第五冊Ⅱ八四・第六冊Ⅱ未記載。

蔵書印「黒川真前蔵書」（各冊第一丁表右下、陽刻単郭朱印、宮内庁書陵部蔵『廻国雜記標註』（黒・一九五）に捺されるもの、『圖書寮叢刊 書陵部蔵書印譜』下巻・一八九頁所掲）と同じ。実践女子大学図書館・実践女子大学文芸資料研究所編『実践女子大学図書館所蔵黒川文庫目録【新版】』（二〇一一・三）「黒川文庫印譜（抄）」にも所掲。なほ、架蔵本には黒川真道の住所印が捺される「郵便はがき」が、挟み込まれてゐる（後掲図版参照）。

黒川文庫全体の典籍の具体相、その流传については、永田精一「黒川文庫」『実践女子大学文学部紀要』二三（一九八一・三）↓『実践女子大学図書館所蔵黒川文庫目録【新版】』がその早い研究であり、近時、柴田光彦「黒川文庫の変遷について」（柴田編『日本書誌学大系八六（二）黒川文庫目録 索引編』〔青裳

堂文庫、二〇〇一・九」所収）が出で、ここに至り黒川文庫全体を知ることが出来るやうになった。その上で、本書をどのやうに位置付けるかは、問題として残される。『ノートルダム清心女子大学付属図書館所蔵特殊文庫目録』（一九七五）、及び、柴田前掲書によると、かつて、黒川家には七冊本の『櫛紅葉』が蔵されてをり、現在ノートルダム清心女子大学付属図書館黒川文庫に蔵されてゐることが分かるが（未見）、七冊本であることから推してそれは刊本であることは疑ひない。従つて、黒川家側の記録に本書の名は見えないといふことになる。あるいは、近年まで、黒川家にとどめおかれたものかとも想像するが、確言は憚られる。

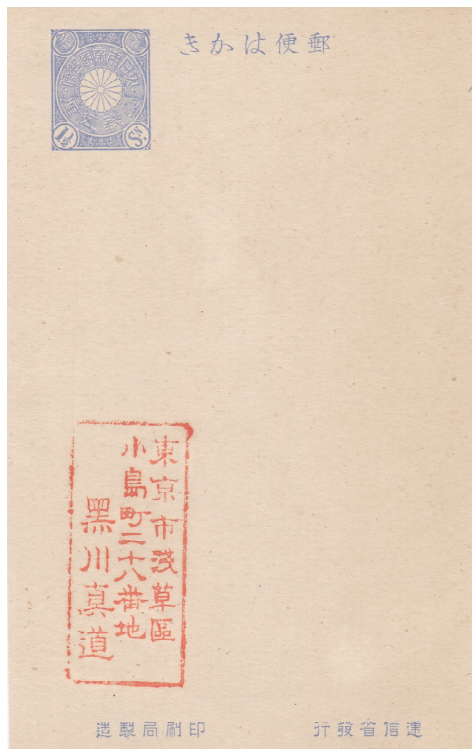


《第一冊・前表紙見返し題》

三田蓀光集

黒川真道編

《第一冊・前表紙》

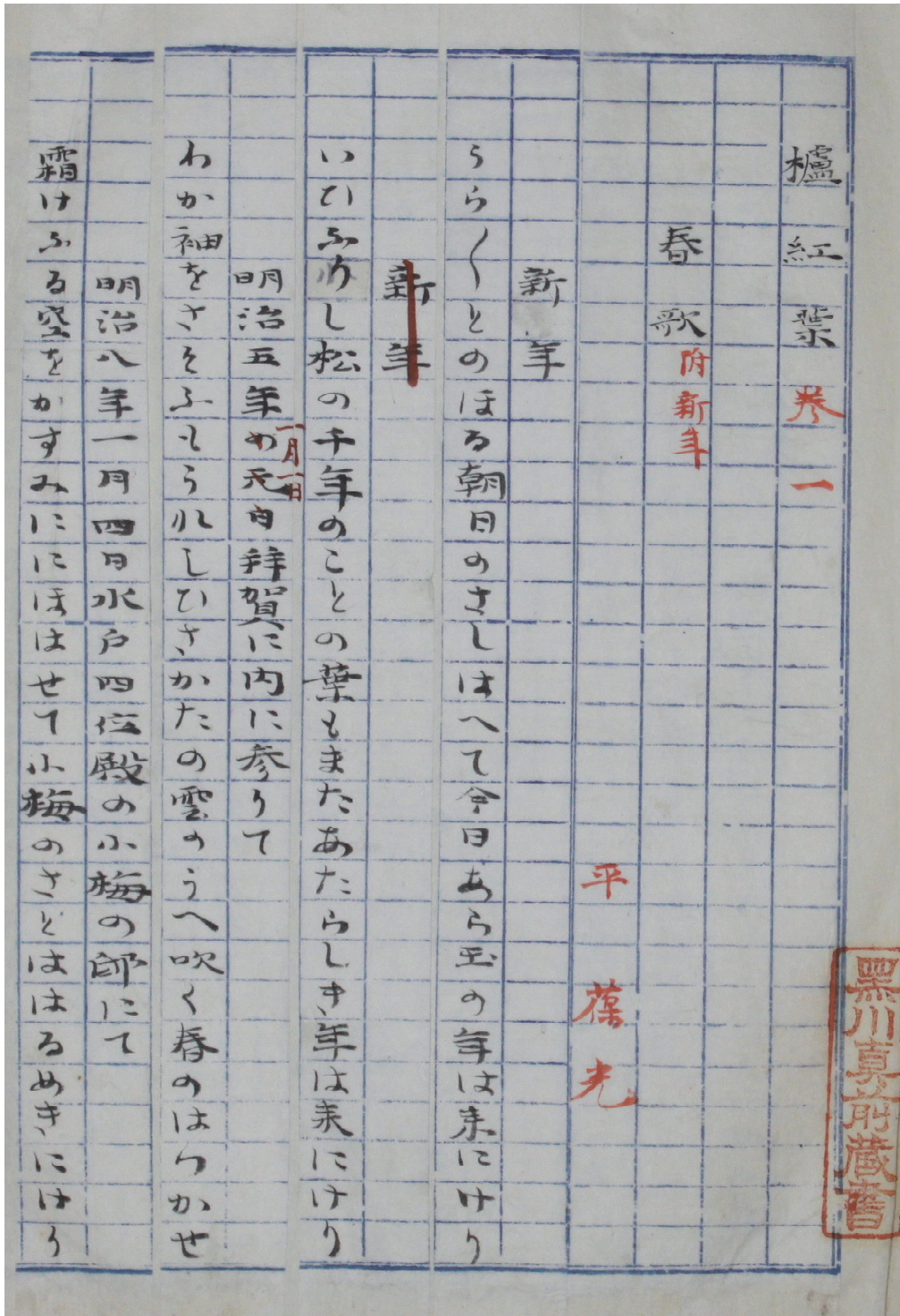


《真道住所印付郵便はがき》

四、稿本から刊本へ

◇稿本と筆者

稿本のありやうをうかがふ一助として、第一冊・春・冒頭部分の図版を掲出してみよう。前表紙と同様、明暗二種の朱筆があることに注意されたい。

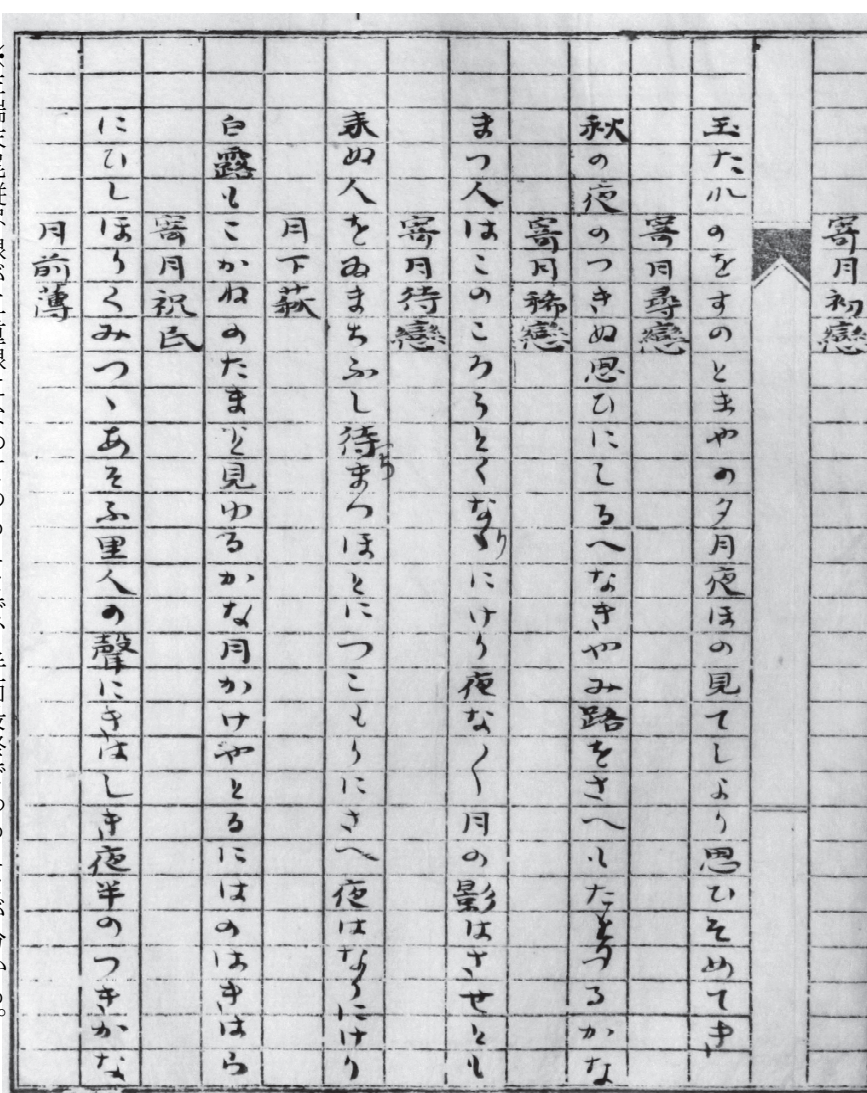


《第一冊・冒頭部分》

この形態に至る過程（朱筆「濃淡二種」・墨筆「前掲図版には見られない」による訂正が施されるまで）を推測するに、

(1)（恐らくは歌題・歌会等ごと）原稿用紙に墨で本文を書く。原本となつたものは、葆光の個々の詠草（懐紙・短冊を含む）か、あるいはある程度葆光によつて整理されてゐた稿本かは、あるいはその両者が混在したものか、いまとなつては分からない。ただ、蓋然性だけをいへば、次掲した如く、ある程度は部類されてゐたものが存したことは確実なので、葆光筆部類稿本（乃至部類本を構成すると見做しうる草稿、懐紙等の一次資料）が存してゐたと見るのが自然である。さらに進んで推すに、恐らく、四季・恋・雑の部類も、あらあら葆光によつてなされてゐた可能性を残す。

この原稿用紙は、第三冊・秋部・墨付三四丁裏に、半面全体が保存されてをり（【一四一八】～【一四二四】〔詞書〕、三〇字×二行×二面（木版刷）、といふ体裁であつたことが分かる。次掲図版参照。



《第三冊・墨付三四丁裏・【一四一八】～【一四二四】〔詞書〕》

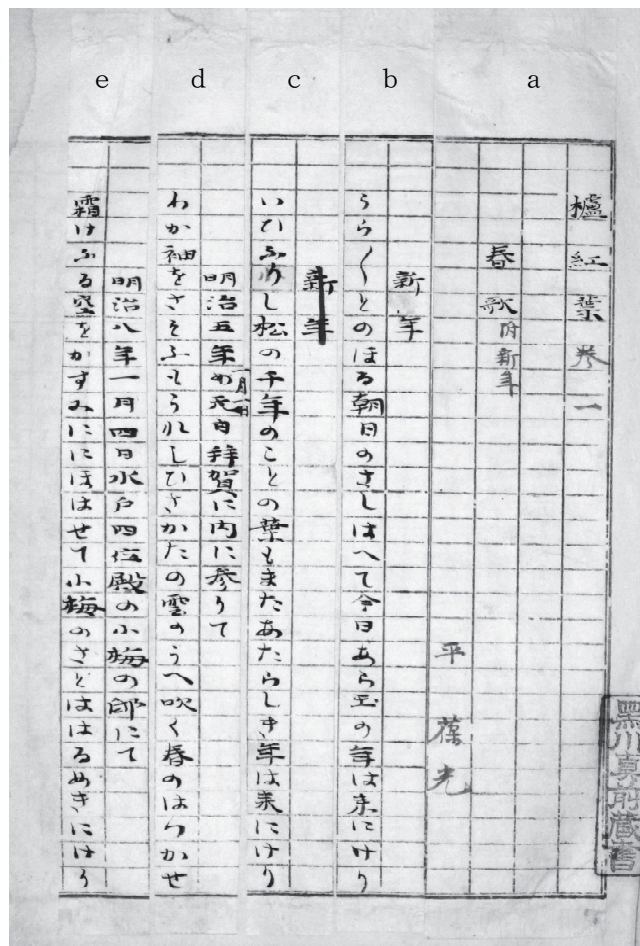
十二行

※左端末尾縦罫線が二重線になつてゐることで、半面最終であることが分かる。

(2)それを、同一（乃至類似）歌題単位（詞書等を含む）で切り取る。

(3) 四季・恋・雑に略々部類しつつ、配列を整備して、一紙片づつ台紙に貼りつける（このことは、切り取られた同一歌題単位の紙片の原稿用紙の色合ひが、ままた微妙に異なることで、きりとつたものをそのまま並べたものではないことが分かる。そしてこのことにより、ここで初めて本格的な部類がなされたであらうことが分かる）。その一例として、春部巻頭の図版を掲出して置く。

なほ、六卷（六冊）仕立てにしたのは、真道序に「やかて六卷をそえらみはてぬる」とあるところから見て、真道自身と考へるのが自然である。



切断原稿用紙 a
切断原稿用紙 b
切断原稿用紙 c
切断原稿用紙 d
切断原稿用紙 e

問題は、(1)(2)(3)を誰が行ったのか、といふことである。しかるべしさとといふ点から考へれば、

(1) ↓ 著者・三田葆光 または 三田侘

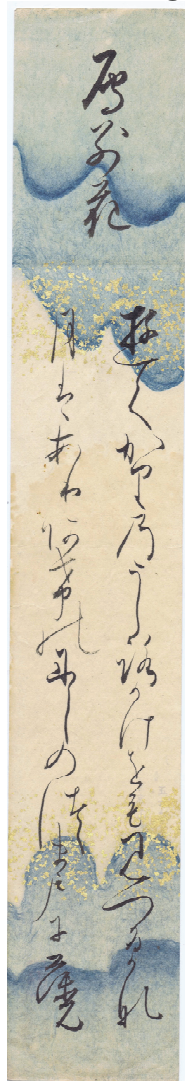
(2) ↓ (3) から類推して、黒川真道

(3) ↓ 前述の通り、黒川真道の手によるものと思へるのが妥当であらう。

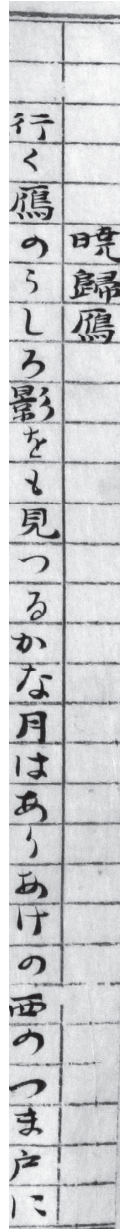
といふところであらうか。

この内(1)に関しては、葆光・侘の自筆資料と本書を比較すれば、ことの決着は容易である。近時、葆光の自筆短冊何点を入手することが出来、内二首は本書に同一歌が見られるので、比較の材料が得られる。

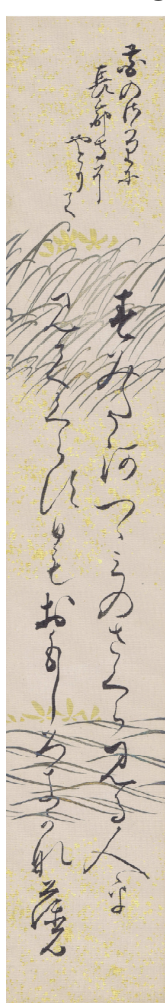
Ⓐ



《第一冊・【四六〇】》



Ⓑ



《第一冊・【六一六】》



もとより筆跡を比較した上での感触以外のなものでもないが、ひとまづこの両者は別筆と見ておくのが自然であると考へる。従つて(1)の所為を佶と見たい。即ち、佶は、父葆光の詠草を「清書」したのである。

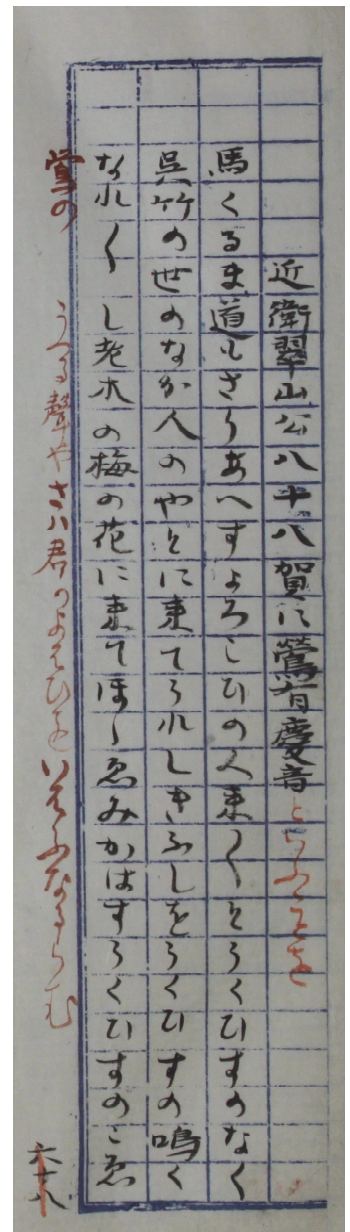
この見通しは、貼紙を仔細に見ることによつて、間接的ながらも証される。

《第六冊・【二三六八】第四句》



稿本・第六冊・雜・【二三六八】、「春雨懐舊」題歌・第四句の図版を掲出してみた。この図版からも見て取れるやうに、「春雨今日」と一旦書写し、「今日」が「けふ(る)」の誤写であることに即時に気付いた佶が、「今日」を貼紙によつて抹消し、「けふ」と上書した経緯が明確に見て取れる。葆光自身がこれを書写したならば、よもや「春雨今日」などと転写することはあるまい。「余不肖にして和歌を解せず」と自らいふ(それが言葉のアヤであつたとしても)佶なればこそこの誤読・誤写であると見るのが自然である。

(2)(3)に関しては、以下掲出する雑部の本文によつて、改めて、真道の手になるものと断ずることが出来る。



この原稿用紙の断簡は、さまざまの意味で実に興味深い「事実」を我々に知らしめることとなる。

この断簡は、原稿用紙の左端四行分を切り出したものである。そして、欄外にいま一首、歌が朱筆によつて追記されてゐる。筆跡から、この朱筆が真道のものであることは確実である（「を」字にやや筆跡の特徴を見出しうる）。真道は、何らかの抛り所をもつて、四首目の和歌を欄外に追記したのだが、第二句冒頭四文字を空白のままにしてゐる。これは、抛り所になつた詠草に闕脱があつたのか、不読であつたのか、理由は定かにし難い。ちなみに、刊本では「たかきにうつる」となつてをり、この稿本をもとに作成されたであらう真道浄書本において、四文字が補はれたのであらう。

さて、かりに、原稿用紙の切断を佞がなしたとしてみよう。とすると、他の事例と同様に、「なれ〜し」歌の次の罫線を以て切断したはずである。しかし実際には、このやうに、その左側欄外に、真道による補筆がなされてゐて、その部分を残す形で（欄外に補筆すべく）切断されてゐるのである。即ち、切断といふ行為は、真道その人でなければ出来なかつたことになる。

なほ、欄外下部に「六十八」とあり、原稿用紙がナンバリングされてゐたことがうかがへる。ナンバリングの事例は他にも二、三見出すことが出来る。この問題は、朱書との関連にて再度触れることとならう。

◇黒川真道の修訂

朱筆・墨筆による複数回かと推される真道の修訂行為は、いくつかに分類出来る。そこでまづ、どのやうな修訂がなされたのか、その概要を示しておくこととする。

①重複する歌題の整除

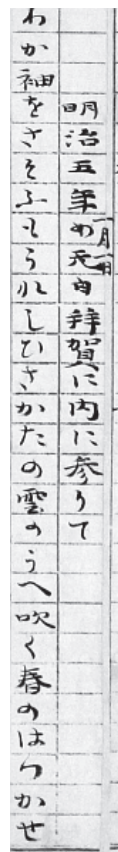
	新筆				
	うら／＼とのほろ朝日さしはへて今日あら玉の等は来にけり				
	新筆				
	いひふかし松の十年のことの葉もまたあたらしき等は来にけり				

《第一冊・【一】〜【二】》

重複する詞書「新年」を一つに整理。このケースが真道による修訂作業の大きな柱の一つである。

なほ、前掲図版二首目、初句「り」字は、もともと「れ」と書かれていたものの上に貼紙をし、「り」と重書きしたものであることが見て取れる。「り」字は、前文にて述べたやうに、侘の筆跡と見做すべきである。即ち、侘の原本書写においても、相当に厳格な校正・修訂がなされたことが推される。

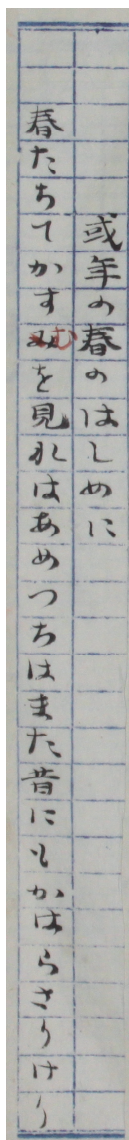
⑤字句の訂正・統一



《第一冊・【三】》

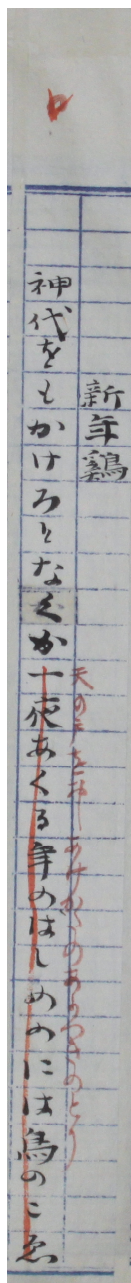
「の元日」を「一月一日」に訂正。この他、全巻にわたつて助動詞「ん」の表記を「む」に統一してある。

⑥表現の添削



《第一冊・【七六】》

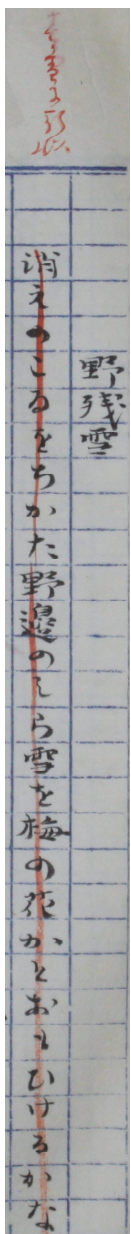
「かすみを見れば」を「かすむを見れば」に訂してある。このやうに、添削と推される例はさほど多くはないし、字句の添削にとどめてある場合が大半なのであるが、次例の如く、三句まるまる改訂してある場合もある。



《第一冊・【三九】》

「一夜あくる年ののはしめには鳥のこゑ」なる朴訥な表現を、「天の戸をおしあけかたのあかつきのとり」なる典雅な表現によく改めうるのは真道しかをらず、従つて、この筆跡は真道、かかる添削も真道といふことになる。この例から推して、本書全巻にわたる推敲も、真道その人になるものと、ひとまづは考へておきたい。なほ、鼈頭、朱筆で○と✓が書かれてをり、改訂時における真道のある種の逡巡（乃至意向の変更）をあらはすものか。

⑦等類歌の削除



《第一冊・【二八一】》

となつてゐて、【一九六五】【一〇六六】は、ここにしか見えない。この二首は、恐らくは、短冊歌を奉る際に新たに詠まれたものであらう。確認のため、同様の例をいま一つ秋部より掲出しておく。

明治十六年御内命によりて富内卿へ差出條五十首の

中秋五首 〈徳大寺宮内卿より 御内命のよしをもておほせことをかうふ

初秋月 りければ短冊にしたゝめ奉りたる三十首の中秋五首〉

一四二九 秋来ぬと今宵しるしも久かたのつきにかゝれるくものふるさと

夕草花

一四三〇 水そゝくゆふへよりこそまたれ咲くら^(む)明日の朝顔のはな

雨中鴈

一四三一 ふる雨中にしめる文字のこゝちしてよみもとかれぬ鴈の玉章

夜擣衣

一四三二 みとり子の乳房はなれてぬる夜半を待ちてや賤かころも打ら^(む)ら

山中秋深

一四三三 山松の落葉にまじるたけの香のふかくもあきはなりにけるかな』三六才

*↓【一三八八】

【一四三〇】が他出を見ない歌である。

五、稿本それ自体の書誌にかかはる諸問題

稿本には、細かく見て行くと、解かるべきさまざまな書誌的諸問題がまた潜んでゐることが分かる。以下、順不同ではあるが、私見を述べておきたい。

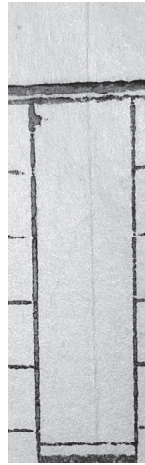
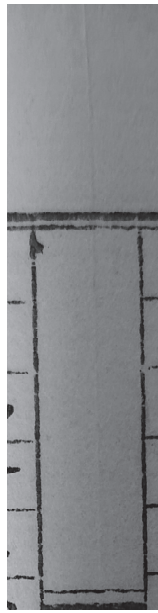
◇原稿用紙はどのやうな「形状」で保管されてゐたか

やや分かりにくい問題設定に映るかもしれないが、要は、

・ 原稿用紙のまま広げられて保存されてゐたか

・ 二つ折り（従つて、魚尾の所に折れ目が付く）で保存されてゐたか（線装されてゐたかどうかまでは分からないとしても）
このどちらであつたか、といふことである。

これは容易に決着がつく。二例、画像にて示す。

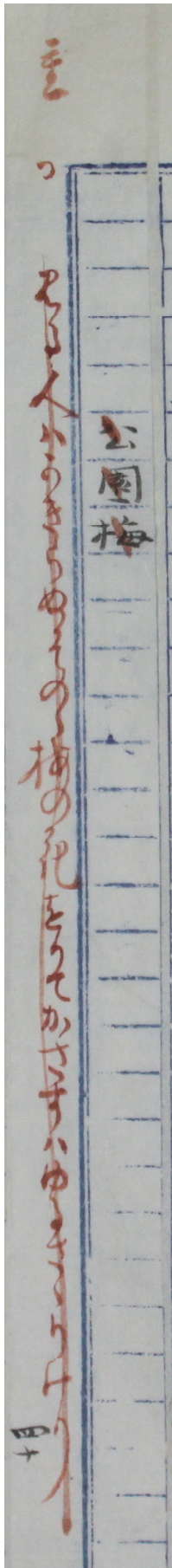


このやうに、魚尾の所に折れ目が明確に見てとれる。従つて、原稿用紙を二つ折りにして保管されてゐたことは確實である。なほ、恐らく、本文書写後に二つ折りにしたのであらう。二つ折りしたままで書写することも出来ようが、墨の滲みを考へると、可能性は低い。

◇ナンバリング（丁付け）から見えること

釈文中でも示したやうに、本書には、原稿用紙の束としてまとめられてゐた時に付されたと思はれるナンバリング（丁付け）が、何箇所か残存してゐる。この事実から様々なことが類推されるが、一例を以て一点言及しておきたい（朱書は真道筆）。

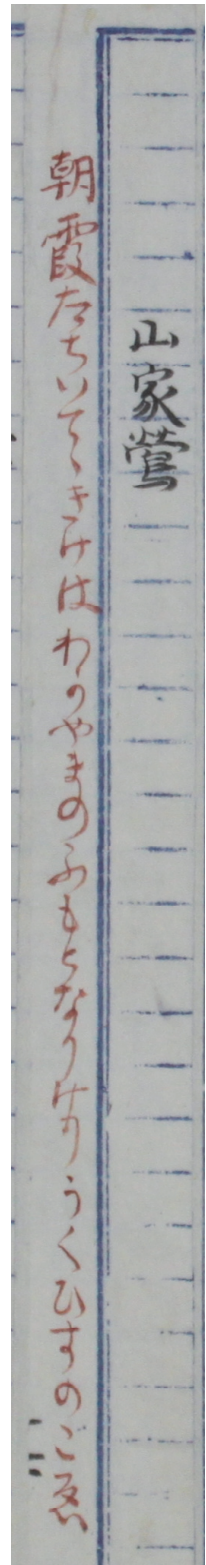
《第一冊・【三三九】》



第一冊・春・【三三九】の現状を示した。「四十」がナンバリング（丁付け）と目される数字である。

また、第一冊・春・【二二二】には次のやうに見える。

《第一冊・【二二二】》



数字は左側が切れてみて判読しづらいが、「二七」が最も蓋然性が高いと判断する。先程述べたやうに、原稿用紙の書式は三〇字×一二行×二面。すべての行に歌が書かれてゐないとしても、一紙二面に十首程度は書かれてゐたと見て良いだらう。とすると、「二七」枚から「四十」枚の間には、少なくとも二〇〇首程度の和歌が書かれてゐたはずである。しかし、稿本においては、両歌の歌番号は二二二・三三九、一〇〇番強の違ひに過ぎない。

このことから、紙片として切り出して、再度台紙に貼り付ける際、相当程度の配置換（要するに部類）がなされたと覚しく、やはり、先に示した検討課題(2)(3)は、真道の所為と考へる他ないことになる。

なほ、【三三九】の朱書書入れをもとに、書入れの過程を仔細に推定してみたい。

「見る人ハ」歌は、恐らく次の原稿用紙の第一行目に書かれてゐたのであらうが、何らかの事情でその行を切り出すことが出来ず、その代替として、原稿用紙欄外に朱書にて追記されたものであらう。この和歌の筆跡は、流麗な変体仮名を交へてゐることから見ても、前述の通り、真道筆と断じて良い。さうすると、鼈頭の「重」の意味するところは、原稿用紙を紙片に切断、台紙に貼り付けて部類した後、【三三九】の一つ前の歌である【三三八】が同一歌であることに気付き、鼈頭に「重」と注記した上で、抹消されたもの解することが出来る（「〇」は未勘）

即ち、この一連の作業は、真道によつてなされたことが、ここに確かめられるのである。

◇原稿用紙鼈頭の記号について

釈文にも示したやうに、原稿用紙鼈頭に、朱筆（稀に墨筆でも）にていくつかの記号が記載されてゐる。

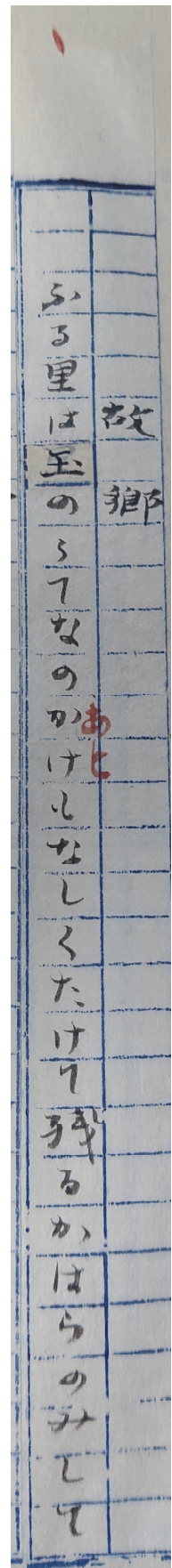
・朱筆「△」……これは、「越後」に貼紙をして抹消したことの注意喚起か

《第六冊・【一九〇六】》



・朱筆「、」……これは、「かけ」「あと」、いづれを選択すべきか、未決定であることの謂か

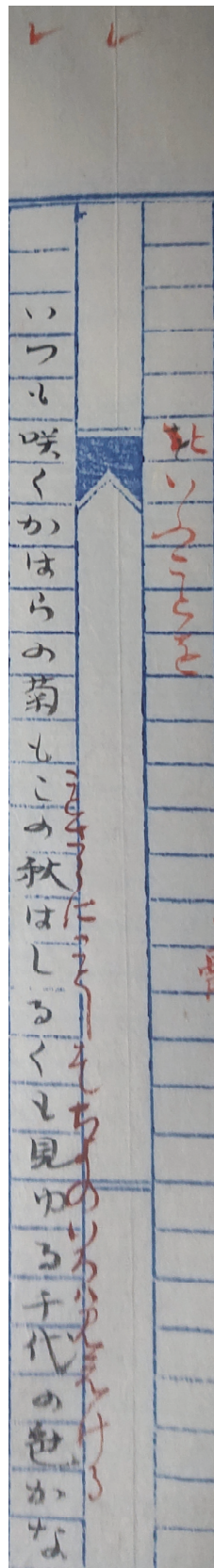
。 《第六冊・【二九四八】》



・朱筆「✓」……後者の「✓」は、どちらの本文を採るべきか、留保状態であることの謂であらう。前者は、魚尾の上に記載されてみて、不審・未勘。

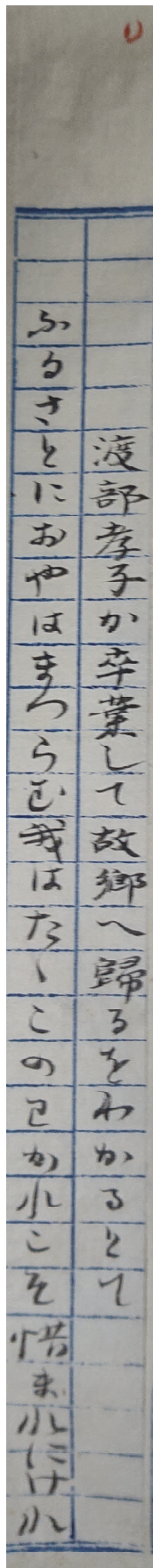
ただしこのことにより、この朱筆による記号は、二つ折り状態を解かれ、一枚ものの原稿用紙に復して以降の所為であることが分かる。真道の手によるものと断じて良いだらう。なほ、「○」と「✓」が重ねて記載されてゐる箇所が多数見受けられる。恐らく、「○」↓「✓」の順で書かれたものであらう

。 《第六冊・【二四六八（部分）】》

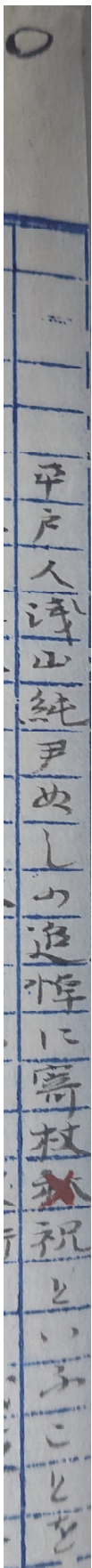


・朱筆「○」……この「○」に関しては未勘

。 《第六冊・【一九五五】》



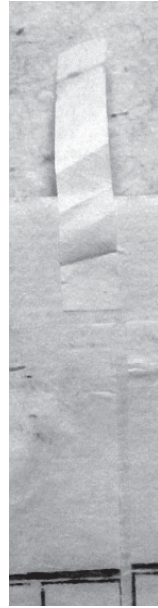
・墨筆「○」……未勘。朱筆抹消に関するものであるとするならば、この墨筆注記は、朱筆注記に遅れてなされたことになる。《第六冊・【二四八二（部分）】》



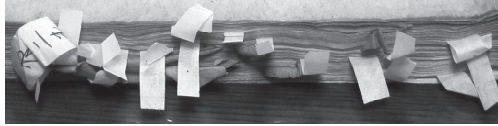
◇貼紙の問題①

稿本には多数の貼紙が存する。またその様態も聊か特異である。一例を図版で掲げよう。

①付箋の一事例



②第一冊（春部）を上から見たところ



この貼紙の“機能”について推定することはなかなか難しい。何故ならば、その大多数が白紙のまま残され、ごくまれに存する真道の手によると思はれる書き込みも、貼紙自体が縫れてしまつてゐて、判読が出来兼ねる場合が多く、推定の根拠が得難いからである。

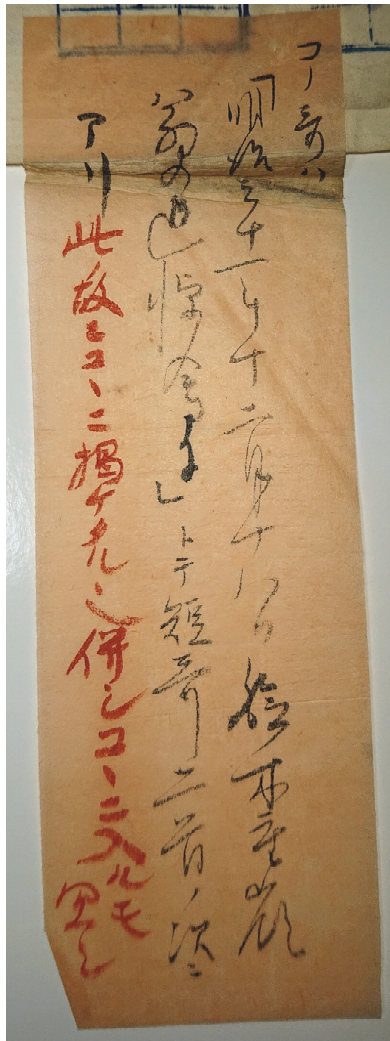
ただ一つ明確な“現象”として指摘出来るのは、貼紙の“偏在”である。

第一冊・春部には、極めて多量の貼紙が存するものの、後述する聊か性格を異にする貼紙がそれ以外の巻には第六冊・雑部を除いて、前表紙裏天部に貼られてゐるのみで、原則として存しない。その例外たる第六冊（雑）における貼紙であるが、それは、原稿用紙下部に貼り付けられてゐる。その一例。



さて、これらのことは何を意味するか、簡単にこのことを考へておきたい。恐らく、真道が原稿用紙を裁断し、部類・配列して行く際、何らかの疑念・要検討点を得た場合、後考のためにかかる貼紙仕様のものを作成しておいたのだらう。しかしこの検討は、春部を以て完了したと見えて、夏部以降では不必要になり、実際、貼紙仕様のものが存してゐないのだと思はれる。つまり、真道は、試行的にともかく春部を他部に先んじて完成させた、と見て過つまい。ただし、この見立てでは、雑部における貼紙の“復活”を説明することが出来ない。雑部・貼紙に関しては、今のところ未勘とする他ない。

◇貼紙の問題②

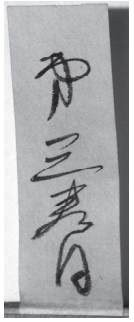


《第六冊・【二二六一】下部ニ貼付セラルル貼紙》

墨筆・朱筆(同筆と見る)によつて書かれたこの書き付けは、真道が部類に際して、如何に揺れ動いてゐたか(乃至、如何に誠実にことをなさうとしてゐたか)、といふことを如実に物語る証言として、貴重である。

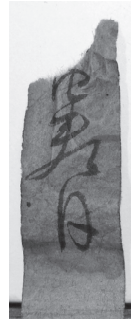
いま一つ別種の貼紙も存する。それは、第一冊・春部と第六冊・雑部以外の四冊にあるもので、前表紙料紙と見返し料紙との間、前表紙裏天部に貼られてゐるものである。

○第二冊・夏部



才三巻同

○第三冊・秋部



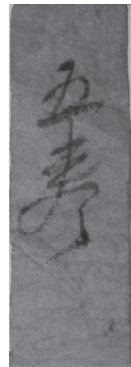
「前闕」四巻同

○第四冊・冬部



五巻

○第五冊・恋部



五巻

一部読みにくい文字は存するが、どうやら、巻数の指示であるらしいことは想像がつく。しかしこの巻の割り当ては、刊本のそれと異なる（第二節参照）。従って、現在の所、その意味を正しく把握するに至らない。博雅の教示を乞ふ次第である。

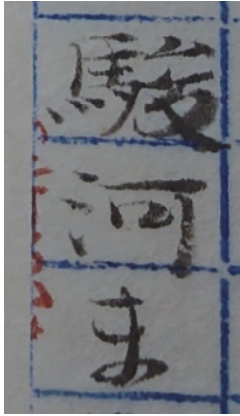
◇朱筆が加へられた時期の問題

朱筆による書込みの時期に関しては、二通りの考へ方がありえよう。即ち、

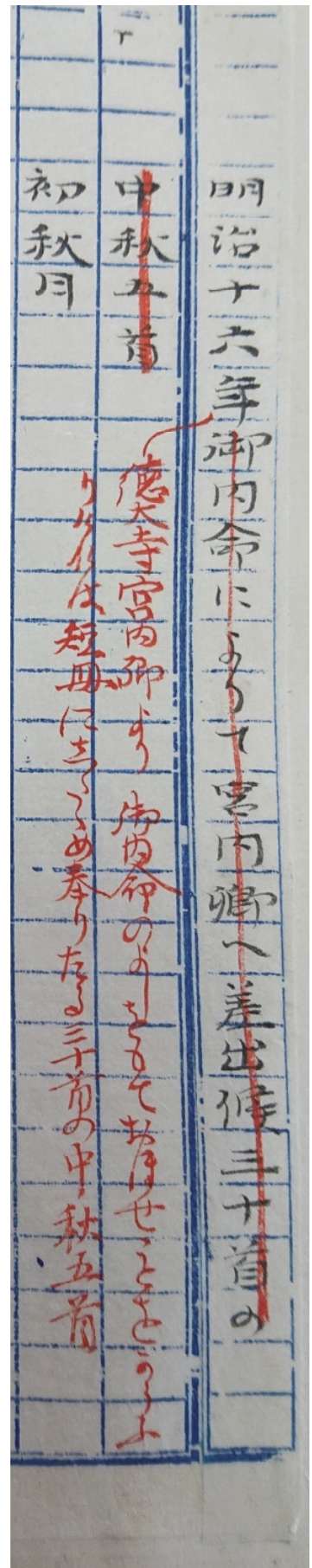
- ・ 原稿用紙の段階で既に一部の朱書きがなされた
- ・ 原稿用紙を切断し、現稿本の形状になつてから朱書きがなされた

この問題は、確たる徴証があり、前者が正しいと断じうる。即ち、第四冊・冬部、第一九丁裏、【一六五四】の紙片に、次の如く見えるからである。

《第四冊・【一六五四】（部分）》



「駿河ま」の左傍に、朱筆による注記の痕跡が明確に見て取れる。この一例を以て、「原稿用紙の段階で既に一部の朱書きがなされた」ことは明らかである。ただし、切断・貼り付け後にも、朱書きがなされたことも明らかである。その一徴証を示すと、

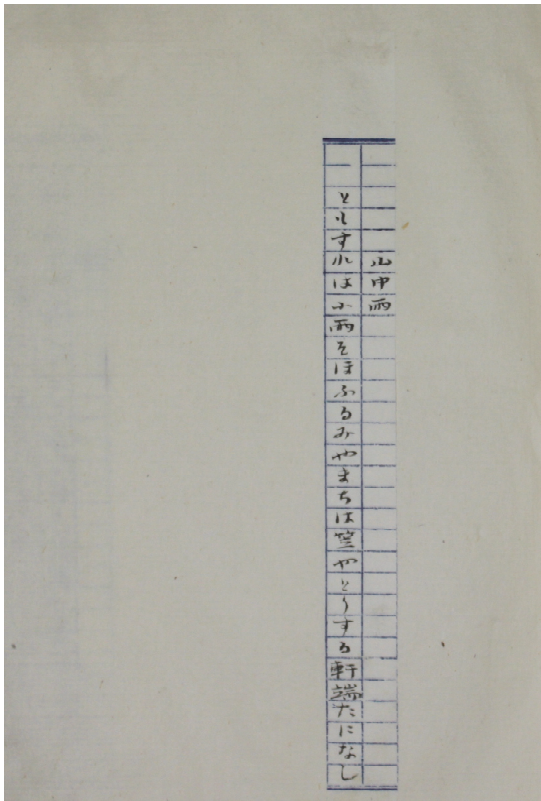


図版からは分かりにくいかもしれないが、第一行目は単独で切れ出されたもの。この紙片を、第二行目以下の紙片に上から貼り付けてある。注意したいのは、「徳大寺宮内卿」の上の朱筆罫線が、一行目・二行目をまたいでかけられてある点である。以て、この朱筆罫線が、紙片貼り付け後にかけられたことは、論を俟たない。ちなみに、「徳大寺」以下の朱筆は、真道の手によるもの。

◇稿本における「空白」の問題

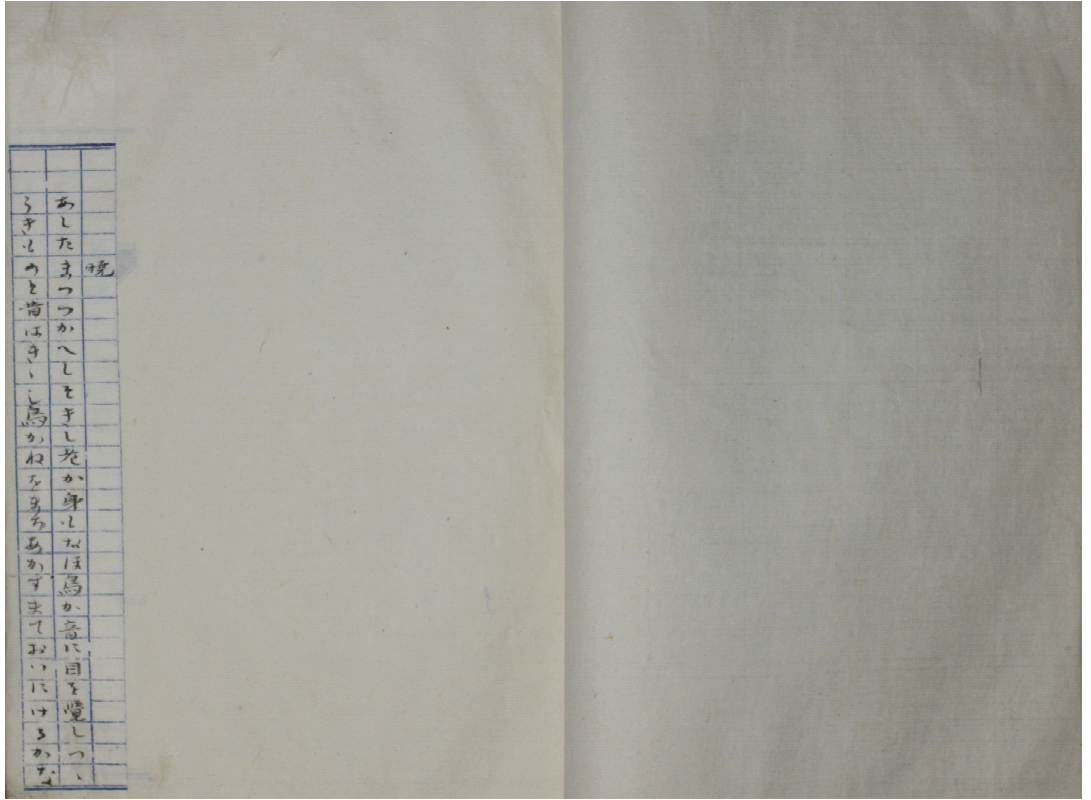
稿本は、概ねすき間無く紙片が貼付されてゐるが、まま、大幅な空白が置かれることがある。一つの事例から考へてみたい。

《第六冊・第二丁表》



山中雨

一八四三 ともすれは小雨そほふるみやまちは笠やとりする軒端たになし』



暁

一八四四 あしたまつつかへしそきし老か身もなほ鳥か音に目を覺しつゝ

一八四五 うきものと昔はきゝし鳥かねをまちあかすまておいにけるかな』三才

かかる場合の空白は、後日の増補に備へんがためのもの、と考へるのがまづはスズであらう。たださうするとこの場合、ここまでの空白が必要か、といふ疑念を払拭し切れない。

「山中雨」題以前の歌題を、雑部冒頭より列举してみると、「日」(一八三五・一八三六)、「星」(一八三七)、「山路雲」(一八三八)、「暮山雲」(一八三九)、「海上雲」(一八四〇)、「山家雲」(一八四一)、「雲無心出岫」(一八四二)となつてゐて、その後五行分の空白が置かれ、第一丁裏が終はり、上掲の如き第

二丁表が続いてゐる。

このあたりは、「山」と「雲」の結題歌が部類されてゐるので、次なる歌群として「山」と「雨」との結題歌の部類を企図したものの、【一八四三】一首しか見出せなかつたので、とりあへず、ありうべき増補をにらみつつ、前後に空白を設けて貼付した、と考へれば、まあ得心が行く。しかしさうだとしても、第二丁裏まで空白を設ける必然性はなからう。

また、「暁」題の前の広い空白も、不可解といふ他ない。

ここで、葆光が生涯思慕したといふ村田春海の『琴後集』の部類をあはせ見る必要が出てこよう。いま、和歌文学大系本（底本は文化十年刊本）により、雑部冒頭より歌題のみを摘記してみると、以下のやうになる。

天・雑地儀・風・古寺嵐・雲・夕暮に雲の漂ふを見て・雲埋山路・深山雲・雨中待友・夕闇・山・名所山・天香山……

となつてゐる。冒頭の天象、それに続く「山」「雲」、「雨」の結題、といふ大枠が守られてゐることは明らかである。その意味で、真道の部類は、葆光の意に充分こたへてゐるといへよう。然しより仔細に見れば、『琴後集』にはそれ以外の歌群も存在してをり、『櫛紅葉』における大量の空白は、いはば今後の「琴後集対策としての増補」のため、意図的に設けられたものと見てみたい。ただこのことは、あくまでも「ここだけ」の話であつて、『櫛紅葉』総体においてもこの説明が成り立つかどうかは分からない。以て今後の課題としたい。

◇稿本と版下との関係

最後にこの問題について、見通しを述べてみたい。ここで考へるべき要素は以下の通り。

(a) 稿本は黒川家に残されたか。

↓ 版下筆者・佐藤仁之助から戻されたとも考へうるが、蓋然性は低いと判断。

(b) 稿本から直ちに版下本文が清書出来るかどうか。

↓ 不可能ではなからうが、蓋然性は相当に低い。

この二点から推すに、稿本をもとに、真道が最終確定本文を作成し、それを佐藤仁之助に渡したと考へるのが、最も自然であらう。

なほ、いま述べた「最終確定本文」であるが、物的証拠があるわけではないものの、「確定本文」|| 刊本本文であらうと考へる。さするに、あらあらの調査による限り、ではあるが、刊本本文は、稿本における朱墨の訂正を厳格に反映してゐて、そこから逸脱した事例は見出し難いことを、付記しておく。

六、をはりに一家集の編纂と本文をめぐる臆断―

小論が、いささかなりとも実証的に論じうることは、前節までである。以下は、半ば感慨とでもいひつべき臆断に過ぎないことを、あらかじめ断つておく。一つは、部類本家集の生成過程を、まざまざと確認することが出来たといふことである。いふまでもないことだが、かかる資料、極めてレアといふほどのものではない。例へば、橋本不美男が『原典をめざして』（笠間書院、一九七四・七）で示した、烏丸資慶の家集『秀葉集』を編むために、曾孫の光栄がものした草稿本・清書本（前掲書・一六八―一七一頁）の如きは、本書の正しき意味での（ある意味ではより生々しき）魁といふべきものである。否、先例の有無云々よりも、小論の筆者にとつて何より興味深いことがある。それは、この両本（『秀葉集』『櫛紅葉』）が、いづれも他撰本部類家集であるといふことにつきる。

もとより古来より、自撰本部類家集は数多い。問題はその編纂時における心用ぬであらう。確たる外部徴証があるわけではないものの、己が家集を部類せんとする際には、相当の心配りがあつたらうことは、容易に想像がつく。これはある意味必然の所為。

しかし、光栄しかり、真道しかり、いかに縁深き者の家集とはいへ、自らの家集でないものを部類する場合においても、作者自身と何ら変はるところのない、いな、語弊たらんことを忌避せず吐露してしまへば、むしろ作者自身のそれよりもなほ繊細かつ徹底した心用ぬを以てことがなされんとして、かつそのことがなし遂げられたいふ事實は、少なくとも小論の筆者をして、他撰本家集に対する見方を一変せしめたといふを憚らぬ。

いま一つは、本文それ自体に対する研究者としての迫り方を、再思三考するを迫られたと痛感したことである。いまかりに、たとへば平安期、稿本『櫛紅葉』の如き典籍がただ一つ伝来してゐたと仮定してみよう。即ち、すべての伝本は、この一本から派生し関与しあひ、流伝して行くこととなる。そして、稿本『櫛紅葉』の如きものを直接書写した場合であつても（それは転写者に限らず、作者その人であつたとしてもさままでの逕庭はない）、出来上つた本文が同一であるとは限らない。むしろ、この時点で（相互の関係を論じにくい）さまざま異本が発生することになつたらう、と想像する。朱墨さまざまに手入れがなされてゐる本文（ある場合には、貼紙にまで思慮を及ぼす必要がある）、そのいづれを採りいづれを捨てるか、それは、書写者の思念の埒内といふ他ないからである。

平安期の私家集の伝本は、概して複数系統に分かれたれ、その関係も説明が難しい場合が多い（小論の筆者は、かういふ時、『実方集』のことを思ふ）。かかる場、わが稿本『櫛紅葉』の如きものを置けば、現存する異本群を、あたかも糸がほぐされるかの如く立ち現れて行つたその結果として見ることは、ことの当否はさて置き、許されるべきだと考へる。

仮定の上の仮定にすぎないが、以上の推定を「真」として、その上でここに、異本間における本文異同を据ゑてみよう。するとただちに、これら異本同士を対校・校勘することによつて、稿本『櫛紅葉』の如きものに遡及しうるか、といふ問題が立ち現れることとなる。小論の筆者の率直な見通しを述べれば、それは、文字通り絶望的であるといはざるをえない。しかしいまだ、絶望的なのであつて、絶望ではない。

もしかりに、刊本『櫛紅葉』の如きもののみが残り、稿本『櫛紅葉』の如きものは佚亡して何人の目にも触れえなかつたと考へてみよう。もはやわれわれに、真道の真情あふるる編纂のところに迫るすべは残されてゐず、刊本の如きものを転写した伝本をいくら対校・校勘したところで、どのみち、刊本に至りつくのが精々、

現実にはそれとてもおよそ望めぬ場合が大半であらう。ここを以て初めて絶望と称しうるのである。

○

再度ここで告白しておく。いままで小論の筆者は、家集に自撰と他撰が存する場合、ほぼ何も考へずに、自撰をこそより愛し、他撰に対して同様の愛情をつひに持ち得なかつた。しかし、真道のこの真情を目の当たりにするに及び、むしろ、他撰にこそ、人が「作品」に対してなしうる最善のものが存するかもしれない、といふことに、いまやつと思ひ至つたのである。

葆光、侘、真道、これらみだりの先達に、心から学恩を謝したい。

【備考】

小論は、日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究（B）による共同研究「古典籍の書写と書写環境の相関性に関する総合的研究」（平成二二〜二三年度、二二・三二〇〇四六、研究代表者＝武井）の一環として、二〇一一年三月一日（於・埼玉大学東京駅ステーションカレッジ）、口頭発表した内容（「家集前史資料二点」の一部を再構成したものである（なほその日は、震災直後であつて、社会的不安と混乱の中での発表であつたことに、いささかの感慨を禁じ得ない）。当日の質疑応答の内容をすべて取り込めてゐないこと、ここにお詫びする次第である。

なほ、小論の骨子は、「家集が出来るまで―三田葆光著・黒川真道編『櫛紅葉』を通して―」（皇學館大学国文学会講演会、二〇一四・一一・二〇、於・皇學館大学）と題して講演した折の内容の一部も包括せしめてある。なほその折、同大学の高倉一紀氏より、稿本と版下の方に浄書本を想定すべきだとのご意見を頂いた。小論第四節で「確定本文」なる仮想本を推定したが、はからずも先学より同意が頂けたことになる。

最後に、いささか私事にわたることではあるが、付言しておく。小論の筆者が、三田葆光、櫛紅葉に逢着したのは、ひとへに、十市遠忠のはからざる導きによる。かつて小論「遠忠歌の一背景」をものすべく、資料を集めつつあつた折、歌語「櫛紅葉」に改めて向き合ふ機会を得た。論旨とは直接かかはらぬことは承知しつつも、「櫛紅葉」に関連するさまざまな文献資料を蒐集してゆく過程で、葆光の刊本『櫛紅葉』に出会ひ、そして、さほどの時日を経ずして、僥倖にも稿本を入手した、といふ次第である。

そしてはからずも、ここにおいてしかもまた、遠忠典籍に通底する問題を考へることになつた。機縁とはいへまことに玄妙といふ他ない。

【初出】「三田葆光『櫛紅葉』攷一刊本と稿本」（『研究と資料』六五、二〇一一・七）

【再録】武井『中世古典籍之研究』（新典社、二〇一五・九）※初出稿を大幅に増訂した。

【依拠】再録稿によつたが、再度、大幅に増訂した。その結果、初出稿に比するに面目を一新したと覺しい。